



2009年度「大学評価」申請用 大学基礎データ

成蹊大学

目 次

I 教育研究組織

1	全学の設置学部・学科・大学院研究科等（2008年5月1日現在）（表1）	1
2	全学の設置学部・学科・大学院研究科等（2009年4月1日現在）（表2）	4

II 教育内容・方法等

1	開設授業科目における専兼比率（表3）	6
2	単位互換協定に基づく単位認定の状況（表4）	9
3	単位互換協定以外で大学独自に行っている単位認定の状況（表5）	11
4	卒業判定（表6）	13
5	大学院における学位授与状況（表7）	15
6	就職・大学院進学状況（表8）	17
7	国家試験合格率（表9）	19
8	公開講座の開設状況（表10）	20
9	学生の国別国際交流（表11）	21
10	教員・研究者の国際学術研究交流（表12）	22

III 学生の受け入れ

1	学部・学科の志願者・合格者・入学者の推移（表13）	23
2	学部・学科の学生定員及び在籍学生数（表14）	39
3	学部の入学者の構成（表15）	41
4	学部・学科の退学者数（表17）	43
5	大学院研究科の学生定員及び在籍学生数（表18）	44
6	法科大学院の学生定員及び在籍学生数（表18-2）	45
7	大学院研究科の志願者・合格者・入学者数の推移（表18-3）	46
8	法科大学院の志願者・合格者・入学者数の推移（表18-4）	52

IV 教員組織

1-1	全学の教員組織（表19）	53
1-2	学部の教員組織（表19-2）	55
1-3	大学院研究科の教員組織（専門職大学院を除く）（表19-3）	57
1-4	専門職大学院の教員組織（表19-4）	59
1-5	事務組織（表19-5）	60
2	専任教員個別表（表20）	62
3	専任教員年齢構成（表21）	113
4	専任教員の担当授業時間（表22）	115
5	専任教員の給与（表23）	117

V 研究活動と研究環境

1	専任教員の教育・研究業績（表24）	118
2	専任教員の教育・研究業績（芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員）（表25）	119
3	専任教員の研究費（実績）（表29）	120
4	専任教員の研究旅費（表30）	121
5	学内共同研究費（表31）	122
6	教員研究費内訳（表32）	123
7	科学研究費の採択状況（表33）	126
8	学外からの研究費（表34）	127
9	教員研究室（表35）	128

VI 施設・設備等		
1	校地、校舎、講義室・演習室等の面積（表36）	129
2	主要施設の概況（表36-2）	130
3	学部・研究科ごとの講義室、演習室等の面積・規模（表37）	132
4	学部・研究科ごとの学生用実験・実習室の面積・規模（表38）	134
5	学部・研究科ごとの規模別講義室・演習室使用状況一覧表（表40）	140
VII 図書館及び図書・電子媒体		
1	図書、資料の所蔵数及び受け入れ状況（表41）	142
2	図書館利用状況（表42）	143
3	学生閲覧室等（表43）	144
VIII 学生生活		
1	奨学金給付・貸与状況（表44）	145
2	学生相談室利用状況（表45）	147
IX 財務（私立大学のみ）		
1-1	消費収支計算書関係比率（法人全体のもの）（表46）	148
1-2	消費収支計算書関係比率（大学単独のもの）（表46-2）	149
2	貸借対照表関係比率（表47）	150
X 情報公開・説明責任		
1	財政公開状況（私立大学のみ）（表48）	151

I 教育研究組織

1 全学の設置学部・学科・大学院研究科等（2008年5月1日現在）

(表1)

名 称	開設年月日	所 在 地	備 考
経済学部	昭和43年2月3日	東京都武蔵野市吉祥寺北町3丁目3-1	
経済経営学科	平成15年6月26日	同上	
経済学科	昭和43年2月3日	同上	2004年4月から学生募集停止（経済経営学科開設のため）
経営学科	昭和43年2月3日	同上	2004年4月から学生募集停止（経済経営学科開設のため）
工学部	昭和37年1月20日	同上	2005年4月から学生募集停止（理工学部開設のため）
機械工学科	昭和37年1月20日	同上	2005年4月から学生募集停止（理工学部開設のため）
電気電子工学科	昭和37年1月20日	同上	2005年4月から学生募集停止（理工学部開設のため）
経営・情報工学科	昭和37年1月20日	同上	2005年4月から学生募集停止（理工学部開設のため）
理工学部	平成16年7月23日	同上	
物質生命理工学科	平成16年7月23日	同上	
情報科学科	平成16年7月23日	同上	
エレクトロメカニクス学科	平成16年7月23日	同上	
文学部	昭和40年1月25日	同上	
英米文学科	昭和40年1月25日	同上	
日本文学科	昭和40年1月25日	同上	
国際文化学科	平成11年7月28日	同上	
現代社会学科	平成11年7月28日	同上	

(表1)

名 称	開設年月日	所 在 地	備 考
法学部	昭和43年2月3日	同上	
法律学科	昭和43年2月3日	同上	
政治学科	昭和43年2月3日	同上	
大学院工学研究科	昭和41年3月18日	同上	
電気電子工学専攻 博士前期課程	昭和41年3月18日	同上	
電気電子工学専攻 博士後期課程	昭和43年3月30日	同上	
応用化学専攻 博士前期課程	昭和41年3月18日	同上	
応用化学専攻 博士後期課程	昭和43年3月30日	同上	
機械工学専攻 博士前期課程	昭和41年3月18日	同上	
機械工学専攻 博士後期課程	昭和43年3月30日	同上	
情報処理専攻 博士前期課程	昭和47年3月30日	同上	
情報処理専攻 博士後期課程	昭和48年3月28日	同上	
物理情報工学専攻 博士前期課程	平成5年3月19日	同上	
物理情報工学専攻 博士後期課程	平成8年12月19日	同上	
大学院経済経営研究科	平成18年7月28日	同上	
経済学専攻 博士前期課程	平成18年7月28日	同上	
経済学専攻 博士後期課程	平成18年7月28日	同上	
経営学専攻 博士前期課程	平成18年7月28日	同上	
経営学専攻 博士後期課程	平成18年7月28日	同上	

(表1)

名 称	開設年月日	所 在 地	備 考
大学院法学政治学研究科	昭和45年3月26日	同上	
法律学専攻 博士前期課程	昭和45年3月26日	同上	
法律学専攻 博士後期課程	昭和47年3月30日	同上	
政治学専攻 博士前期課程	昭和47年3月30日	同上	
政治学専攻 博士後期課程	昭和48年3月28日	同上	
大学院文学研究科	昭和46年3月31日	同上	
英米文学専攻 博士前期課程	昭和46年3月31日	同上	
英米文学専攻 博士後期課程	平成9年12月19日	同上	
日本文学専攻 博士前期課程	昭和46年3月31日	同上	
日本文学専攻 博士後期課程	平成3年3月20日	同上	
社会文化論専攻 博士前期課程	平成3年3月20日	同上	西洋文化専攻（昭和47年3月30日認可、学生募集停止）
社会文化論専攻 博士後期課程	平成3年3月20日	同上	
大学院経営学研究科	昭和47年3月30日	同上	2007年4月から学生募集停止（経済経営研究科開設のため）
経営学専攻 博士前期課程	昭和47年3月30日	同上	2007年4月から学生募集停止（経済経営研究科開設のため）
経営学専攻 博士後期課程	昭和48年3月28日	同上	2007年4月から学生募集停止（経済経営研究科開設のため）
大学院法務研究科	平成15年11月27日	同上	専門職大学院（法科大学院）
法務専攻	平成15年11月27日	同上	専門職大学院（法科大学院）

- [注] 1 学部・学科，大学院研究科・専攻，研究所等ごとに記載してください。
- 2 当該学部，研究科の開設が届出による場合は，備考欄にその旨記載してください。
- 3 当該研究科若しくは専攻が専門職大学院である場合は，備考欄にその旨記載してください。
- 4 教養教育科目，外国語科目，保健体育科目，教職科目等を担当する独立の組織がある場合には，学部にならない記載してください。
- 5 通信教育課程，専攻科，別科等があれば，これも記載してください。

2 全学の設置学部・学科・大学院研究科等（2009年4月1日現在）

(表2)

学部, 大学院研究科等	学科, 専攻の名称	収容定員(名)	所在地	備考
学 部				
経済学部	経済経営学科	1,740	東京都武蔵野市吉祥寺北町3丁目3-1	
同上	経済学科	-	同上	2004年4月募集停止
同上	経営学科	-	同上	2004年4月募集停止
工学部	機械工学科	-	同上	2005年4月募集停止
理工学部	物質生命理工学科	480	同上	
同上	情報科学科	470	同上	
同上	エレクトロニクス学科	490	同上	
文学部	英米文学科	480	同上	
同上	日本文学科	332	同上	
同上	国際文化学科	400	同上	
同上	現代社会学科	400	同上	
法学部	法律学科	1,000	同上	
同上	政治学科	560	同上	
大学院研究科（博士前期課程）				
工学研究科	電気電子工学専攻	12	東京都武蔵野市吉祥寺北町3丁目3-1	2009年4月募集停止
同上	応用化学専攻	16	同上	同上
同上	機械工学専攻	16	同上	同上
同上	情報処理専攻	12	同上	同上
同上	物理情報工学専攻	8	同上	同上
理工学研究科	理工学専攻	70	同上	2009年4月受け入れ開始
経済経営研究科（※2）	経済学専攻	12	同上	2007年4月受け入れ開始
同上	経営学専攻	20	同上	同上
法学政治学研究科	法律学専攻	16	同上	
同上	政治学専攻	8	同上	

(表2)

学部, 大学院研究科等	学科, 専攻の名称	収容定員(名)	所在地	備考
文学研究科	英米文学専攻	16	同上	
同上	日本文学専攻	16	同上	
同上	社会文化論専攻	16	同上	
大学院研究科 (博士後期課程)				
工学研究科	電気電子工学専攻	8	東京都武蔵野市吉祥寺北町3丁目3-1	2009年4月募集停止
同上	応用化学専攻	8	同上	同上
同上	機械工学専攻	8	同上	同上
同上	情報処理専攻	8	同上	同上
同上	物理情報工学専攻	4	同上	同上
理工学研究科	理工学専攻	10	同上	2009年4月受け入れ開始
経済経営研究科 (※2)	経済学専攻	9	同上	2007年4月受け入れ開始
同上	経営学専攻	9	同上	同上
法学政治学研究科	法律学専攻	12	同上	
同上	政治学専攻	6	同上	
文学研究科	英米文学専攻	12	同上	
同上	日本文学専攻	12	同上	
同上	社会文化論専攻	12	同上	
大学院研究科 (専門職学位課程)				
法務研究科	法務専攻	150	東京都武蔵野市吉祥寺北町3丁目3-1	
		6,858		

- [注] 1 申請年(2009年)4月1日付で設置している学部・学科, 研究科・専攻を記入してください(募集停止しているものを含まず)。
2 通信教育課程があれば, これも記載してください。
3 申請年度(2009年度)から学生受け入れを開始, 名称を変更した学部・学科, 研究科・専攻名には, 備考欄にその旨を付記してください。
4 学生募集を停止している学部・学科, 研究科・専攻名には, 備考欄にその旨を付記してください。
5 専門職大学院は, 該当する研究科・専攻名に()でその旨を明記してください。
6 申請年4月時に完成年度に達していない学部・学科, 研究科・専攻には(※1)を, 申請資格充足年度(完成年度+1年)を経ている学部・学科, 研究科・専攻には(※2)を付記し, 備考欄に学生受入れ年月を記入してください。
7 収容定員は, 入学定員を変更している場合, 編入学を実施している場合, 完成年度に達していない場合, 学生募集を停止している場合など, 「現在の入学定員×標準修業年限」では算出できませんので注意してください。
8 現在, 文部科学省に設置申請中の学部・学科, 大学院研究科・専攻・課程(修士・博士)がある場合は, 記載してください。

II 教育研究の内容・方法等

1 開設授業科目における専兼比率

(表3)

学部・学科			必修科目	選択必修科目	全開設授業科目	
経済学部	経済経営学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	8.0	-	115.7
			兼任担当科目数 (B)	0.0	-	32.3
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	100.0%	-	78.2%
	学部共通	教養教育	専任担当科目数 (A)	6.3	-	66.4
			兼任担当科目数 (B)	19.7	-	90.6
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	24.3%	-	42.3%
理工学部	物質生命理工学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	10.4	8.2	65.7
			兼任担当科目数 (B)	6.6	0.8	34.3
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	61.2%	91.1%	65.7%
	情報科学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	5.2	10.0	49.0
			兼任担当科目数 (B)	5.8	0.0	28.0
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	47.3%	100.0%	63.6%
	エレクトロメカニクス学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	13.8	5.0	58.3
			兼任担当科目数 (B)	5.2	1.0	35.7
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	72.6%	83.3%	62.0%
	学部共通	教養教育	専任担当科目数 (A)	-	-	22.3
			兼任担当科目数 (B)	-	-	58.7
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	-	-	27.5%

(表3)

学部・学科			必修科目	選択必修科目	全開設授業科目	
文学部	英米文学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	17.8	-	66.7
			兼任担当科目数 (B)	4.2	-	70.3
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	80.9%	-	48.7%
	日本文学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	8.6	-	59.9
			兼任担当科目数 (B)	1.4	-	68.1
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	86.0%	-	46.8%
	国際文化学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	8.4	-	68.3
			兼任担当科目数 (B)	1.6	-	125.7
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	84.0%	-	35.2%
	現代社会学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	14.2	-	69.1
			兼任担当科目数 (B)	0.8	-	65.9
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	94.7%	-	51.2%
	学部共通	教養教育	専任担当科目数 (A)	-	-	33.7
			兼任担当科目数 (B)	-	-	125.3
			専兼比率 % (A / (A+B) *100)	-	-	21.2%

(表3)

学部・学科			必修科目	選択必修科目	全開設授業科目	
法学部	法律学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	1.0	6.0	92.2
		兼任担当科目数 (B)	0.0	1.0	36.8	
		専兼比率 % (A / (A+B) *100)	100.0%	85.7%	71.5%	
	政治学科	専門教育	専任担当科目数 (A)	2.2	7.0	79.5
		兼任担当科目数 (B)	1.8	0.0	28.5	
		専兼比率 % (A / (A+B) *100)	55.0%	100.0%	73.6%	
	学部共通	教養教育	専任担当科目数 (A)	-	10.3	22.4
		兼任担当科目数 (B)	-	-	36.7	89.7
		専兼比率 % (A / (A+B) *100)	-	-	21.9%	20.0%

- [注] 1 この表は、大学設置基準第10条にいう「教育上主要と認める授業科目」についての専任教員の担当状況を示すものです。
- 2 ここでいう「専任担当科目数」には、他学部・大学院研究科・研究所等の専任教員による兼任科目も含めてください。
- 3 「専門教育」欄および「教養教育」欄は、大学の設定する区分に応じて名称を付してください。その場合であっても、おおよそ専門教育的な教育と教養教育的な教育に分けて記入してください。
- 4 「全開設授業科目」欄には、「必修科目」「選択必修科目」のほか、「選択科目」「自由科目」など、すべての授業科目数の合計を記入してください。「必修科目」と「選択必修科目」の合計ではありません。
- 5 セメスター制を採用しており、各学期ごとの状況に差がある場合はそれぞれの学期について作表してください。
- 6 同一科目を週2回実施している場合の計算方法は下記の通りです。
- ①同一講師による場合→専任教員が担当した場合は専任担当科目数1，兼任教員が担当した場合は兼任担当科目数1となります。
- ②複数教員による場合→専任教員が担当した場合は専任担当科目数1，専任教員と兼任教員がそれぞれ担当した場合は、専任担当科目数0.5，兼任担当科目数0.5となります。
- 7 実験・実習等において兼任教員を含む複数の教員が担当する場合は、人数比による数値を記載してください（例：専任4人，兼任1人で担当の場合は，専任0.8，兼任0.2となります）。

2 単位互換協定に基づく単位認定の状況

(表4)

学部・学科		認定者数 (A)	他大学		短期大学		1人当たり 平均認定 単位数 (B+C) / A
			認定単位数 (B)		認定単位数 (C)		
			専門科目	専門以外	専門科目	専門以外	
経済学部	経済学科	-	-	-	-	-	-
	経営学科	-	-	-	-	-	-
	経済経営学科	1	2	-	-	-	2.0
計		1	2	-	-	-	2.0
工学部	機械工学科	-	-	-	-	-	-
	電気電子工学科	-	-	-	-	-	-
	応用化学科	-	-	-	-	-	-
	経営・情報工学科	-	-	-	-	-	-
	物理情報工学科	-	-	-	-	-	-
計		-	-	-	-	-	-
理工学部	物質生命理工学科	-	-	-	-	-	-
	情報科学科	-	-	-	-	-	-
	エレクトロメカニクス学科	-	-	-	-	-	-
計		-	-	-	-	-	-

(表4)

学部・学科		認定者数 (A)	他大学		短期大学		1人当たり 平均認定 単位数 (B+C) / A
			認定単位数 (B)		認定単位数 (C)		
			専門科目	専門以外	専門科目	専門以外	
文学部	英米文学科	2	-	3	-	-	1.5
	日本文学科	3	-	6	-	-	2.0
	国際文化学科	3	-	3	-	-	1.0
	現代社会学科	2	-	2	-	-	1.0
計		10	-	14	-	-	1.4
法学部	法律学科	3	3	6	-	-	3.0
	政治学科	5	2	14	-	-	3.2
計		8	5	20	-	-	3.1
合計		19	7	34	-	-	2.2

[注] 1 他大学または短期大学との単位互換協定に基づき単位認定を行っているものを記載してください。
2 2007年度の実績を記入してください。

3 単位互換協定以外で大学独自に行っている単位認定の状況

(表5)

学部・学科		認定者数 (A)	大学・短大・高専等		その他		1人当たり平均 認定単位数 (B+C) / A
			認定単位数 (B)		認定単位数 (C)		
			専門科目	専門以外	専門科目	専門以外	
経済学部	経済学科	2	2	-	8	-	5.0
	経営学科	-	-	-	-	-	-
	経済経営学科	171	70	71	290	105	3.1
計		173	72	71	298	105	3.2
工学部	機械工学科	-	-	-	-	-	-
	電気電子工学科	1	-	4	-	-	4.0
	応用化学科	1	-	2	-	-	2.0
	経営・情報工学科	-	-	-	-	-	-
	物理情報工学科	-	-	-	-	-	-
計		2	-	6	-	-	3.0
理工学部	物質生命理工学科	-	-	-	-	-	-
	情報科学科	1	-	2	-	-	2.0
	エレクトロメカニクス学科	2	-	2	-	-	1.0
計		3	-	4	-	-	1.3

(表5)

学部・学科		認定者数 (A)	大学・短大・高専等		その他		1人当たり平均 認定単位数 (B+C) / A
			認定単位数 (B)		認定単位数 (C)		
			専門科目	専門以外	専門科目	専門以外	
文学部	英米文学科	26	168	68	-	-	9.1
	日本文学科	3	8	20	-	2	10.0
	国際文化学科	27	153	104	-	-	9.5
	現代社会学科	3	16	12	-	-	9.3
計		59	345	204	-	2	9.3
法学部	法律学科	29	30	75	-	54	5.5
	政治学科	19	18	30	-	26	3.9
計		48	48	105	-	80	4.9
合計		285	465	390	298	187	4.7

[注]1 原則として、大学設置基準第29条及び第30条で規定された「大学以外の教育施設等における学修」と「入学前の既修得単位等の認定」に該当するものを記載してください。

ただし、上記には該当しないものの、単位互換協定以外で学生が国内外の大学において履修した授業科目の単位を自大学の単位として認定している場合は、本表の「大学・短大・高専等」欄に含めてください。

- 「大学・短大・高専等」欄には、大学、短期大学または高等専門学校の専攻科における学修を、「その他」欄には、「大学設置基準第29条第1項の規定により、大学が単位を与えることのできる学修を定める件」（平成12年文部科学省告示第181号）に定められた学修を記載してください。
- 2007年度の実績を記入してください。
- 編入学生はここには含めないでください。

4 卒業判定

(表6)

学部・学科		2005年度			2006年度			2007年度		
		卒業予定者 (A)	合格者 (B)	合格率(%) B/A*100	卒業予定者 (A)	合格者 (B)	合格率(%) B/A*100	卒業予定者 (A)	合格者 (B)	合格率(%) B/A*100
経済学部	経済学科	326	279	85.6%	306	267	87.3%	41	26	63.4%
	経営学科	241	216	89.6%	264	240	90.9%	28	15	53.6%
	経済経営学科	—	—	—	—	2	—	454	400	88.1%
計		567	495	87.3%	570	509	89.3%	523	441	84.3%
工学部	機械工学科	79	70	88.6%	82	73	89.0%	92	83	90.2%
	電気電子工学科	108	94	87.0%	87	79	90.8%	64	57	89.1%
	応用化学科	83	76	91.6%	69	67	97.1%	77	76	98.7%
	経営・情報工学科	88	74	84.1%	82	73	89.0%	82	77	93.9%
	物理情報工学科	74	65	87.8%	63	58	92.1%	49	49	100.0%
計		432	379	87.7%	383	350	91.4%	364	342	94.0%

4 卒業判定

(表6)

学部・学科		2005年度			2006年度			2007年度		
		卒業予定者 (A)	合格者 (B)	合格率(%) B/A*100	卒業予定者 (A)	合格者 (B)	合格率(%) B/A*100	卒業予定者 (A)	合格者 (B)	合格率(%) B/A*100
文学部	英米文学科	152	148	97.4%	116	109	94.0%	140	133	95.0%
	日本文学科	102	88	86.3%	108	96	88.9%	104	98	94.2%
	文化学科	2	2	100.0%	—	—	0.0%	—	—	0.0%
	国際文化学科	133	128	96.2%	123	116	94.3%	117	109	93.2%
	現代社会学科	126	120	95.2%	114	112	98.2%	118	116	98.3%
計		515	486	94.4%	461	433	93.9%	479	456	95.2%
法学部	法律学科	434	368	84.8%	337	275	81.6%	355	292	82.3%
	政治学科	222	193	86.9%	176	145	82.4%	191	160	83.8%
計		656	561	85.5%	513	420	81.9%	546	452	82.8%

[注] 「卒業予定者」とは、毎年度5月1日における当該学部の最終学年に在籍する学生を指します。

5 大学院における学位授与状況

(表7)

研究科・専攻			2003年度		2004年度		2005年度		2006年度		2007年度		備考
			修了予定者数	学位授与者数									
工学研究科	電気電子工学専攻	修士	12	10	22	21	22	22	17	16	24	21	
		博士(課程)	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	
		博士(論文)	-	0	-	0	-	0	-	1	-	0	
	応用化学専攻	修士	21	21	17	17	18	17	13	13	16	16	
		博士(課程)	1	1	1	0	1	0	1	1	5	4	
		博士(論文)	-	1	-	1	-	1	-	1	-	3	
	機械工学専攻	修士	14	14	19	19	9	9	14	14	12	12	
		博士(課程)	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1	
		博士(論文)	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	
	情報処理専攻	修士	7	6	13	13	9	9	10	9	9	8	
		博士(課程)	0	0	1	0	1	0	2	1	1	0	
		博士(論文)	-	0	-	0	-	0	-	0	-	1	
	物理情報工学専攻	修士	8	7	11	11	12	10	11	11	22	21	
		博士(課程)	1	0	2	2	0	0	0	0	1	1	
		博士(論文)	-	1	-	0	-	0	-	1	-	0	
経済学研究科	経済学専攻	修士	4	2	5	4	3	3	4	2	5	4	
		博士(課程)	1	1	1	0	1	0	2	0	1	1	
		博士(論文)	-	0	-	1	-	0	-	0	-	0	
経済経営研究科	経済学専攻	修士	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	平成19年4月1日開設
		博士(課程)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	平成19年4月1日開設
		博士(論文)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	平成19年4月1日開設
	経営学専攻	修士	-	-	-	-	-	-	-	-	※1	※1	平成19年4月1日開設
		博士(課程)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	平成19年4月1日開設
		博士(論文)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	平成19年4月1日開設

(表7)

研究科・専攻			2003年度		2004年度		2005年度		2006年度		2007年度		備考
			修了予定者数	学位授与者数									
法学政治学 研究科	法律学専攻	修士	7	5	3	3	2	2	2	1	2	1	
		博士(課程)	4	1	1	0	2	0	1	1	0	0	
		博士(論文)	-	0	-	1	-	0	-	0	-	1	
	政治学専攻	修士	1	1	3	1	5	4	3	2	2	2	
		博士(課程)	5	1	2	0	2	0	2	0	2	0	
		博士(論文)	-	1	-	1	-	0	-	0	-	0	
文学研究科	英米文学専攻	修士	2	1	2	2	3	3	3	2	6	4	
		博士(課程)	5	0	8	0	7	0	4	0	5	0	
		博士(論文)	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	
	日本文学専攻	修士	5	3	5	4	2	2	5	4	4	4	
		博士(課程)	4	1	3	0	4	1	3	0	2	0	
		博士(論文)	-	1	-	0	-	0	-	0	-	0	
	社会文化論専攻	修士	4	1	4	1	11	5	8	5	10	6	
		博士(課程)	4	0	3	0	2	0	2	0	1	0	
		博士(論文)	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	
経営学研究科	経営学専攻	修士	10	9	18	17	15	13	21	16	14	13	
		博士(課程)	1	0	3	0	2	0	3	1	1	0	
		博士(論文)	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	
法務研究科	法務専攻	専門職学位	-	-	-	-	27	25	56	47	42	38	平成16年4月1日開設

[注] 1 「修了予定者」欄には、留年者も含め、当該年度修了予定の在籍学生数を記入してください。

2 当該研究科若しくは専攻、課程が最近開設され、そのために学位授与該当者がいない場合は、備考欄にその開設年月日を記載してください。

※ 経済経営研究科経営学専攻の2007年度の修了予定者及び学位授与者の各1名(同一人物)は、経済・マネジメントコース「社会人プログラム」(社会人1年制コース)所属の者。

6 就職・大学院進学状況

(表8)

学 部	進 路		2005年度	2006年度	2007年度
経済学部	就職	民間企業	377	411	370
		官公庁	7	4	4
		教員	0	1	3
		上記以外	0	0	0
	進学	自大学院	4	2	2
		他大学院	0	2	4
	そ の 他		107	89	58
合 計		495	509	441	
工学部	就職	民間企業	263	260	249
		官公庁	5	5	4
		教員	0	1	0
		上記以外	3	0	0
	進学	自大学院	78	63	63
		他大学院	7	3	8
	そ の 他		23	18	18
合 計		379	350	342	
文学部	就職	民間企業	392	342	385
		官公庁	2	5	3
		教員	7	5	6
		上記以外	1	0	0
	進学	自大学院	5	2	2
		他大学院	2	0	4
	そ の 他		77	79	56
合 計		486	433	456	

(表8)

学 部	進 路	2005年度	2006年度	2007年度	
法学部	就職	民間企業	359	315	353
		官公庁	21	13	16
		教員	0	1	1
		上記以外	0	0	0
	進学	自大学院	6	2	2
		他大学院	5	4	6
	そ の 他	170	85	74	
	合 計	561	420	452	

[注] 1 「その他」欄には、当該学部の各年度の卒業者のうち、就職、進学のいずれにも該当しないもののすべての数を記入してください。

2 専門学校教員、日本語教師、NGO団体、国際機関等への就職については、「就職（上記以外）」の欄に記入してください。

3 専門学校への進学は、「進学（その他）」欄に記入してください。

「表9：該当なし」

8 公開講座の開設状況

(表10)

大学 研究	学部 科	年間開設講座数(A)			募集人員(延べ数)			参加者(延べ数)(B)			1講座当たりの 平均受講者数 B/A			備考
		2005年度	2006年度	2007年度	2005年度	2006年度	2007年度	2005年度	2006年度	2007年度	2005年度	2006年度	2007年度	
成蹊大学		2	2	2	募集制限なし	募集制限なし	募集制限なし	1,266	1,190	1,274	633	595	637	

[注] ここでいう公開講座とは、大学が社会人などを対象に開講する授業や、授業に匹敵する内容の講座です。シンポジウム、講演会は含めないでください。

9 学生の国別国際交流

(表11)

国名 学部・研究科	アメリカ			イギリス			フランス			ドイツ			オーストラリア			その他			合計		
	派遣	受け入れ		派遣	受け入れ		派遣	受け入れ		派遣	受け入れ		派遣	受け入れ		派遣	受け入れ		派遣	受け入れ	
経済学部	-	-		-	-		1	-		-	-		1	-		-	-		2	-	
文学部	1	-		2	-		-	-		-	-		-	-		-	-		3	-	
法学部	-	-		-	-		-	-		-	-		-	-		1	-		1	-	
国際教育センター	-	-		-	1		-	1		-	1		-	4		-	1		-		8
計	1	-		2	1		1	1		-	1		1	4		1	1		6		8

- [注]1 交流協定を締結している海外の大学との状況を中心に、主だった5カ国とその他に分けて記載してください。
 2 学部・大学院研究科ごとに国別に派遣・受け入れ学生数を記入してください。
 3 2008年5月1日現在で、6カ月以上の期間を要する学生数とします。

10 教員・研究者の国際学術研究交流

(表12)

学部・研究科等		派 遣						受 け 入 れ					
		2005年度		2006年度		2007年度		2005年度		2006年度		2007年度	
		短 期	長 期	短 期	長 期	短 期	長 期	短 期	長 期	短 期	長 期	短 期	長 期
経済学部	新規	22	-	25	2	19	2	1	-	1	-	1	-
	継続	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
理工学部	新規	82	-	81	-	65	-	7	2	3	1	6	1
	継続	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1
文学部	新規	28	2	32	2	23	1	3	-	1	-	1	-
	継続	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
法学部	新規	33	1	22	1	31	-	4	2	6	1	3	1
	継続	-	1	-	2	-	2	1	1	-	-	-	-
法務研究科	新規	10	-	16	-	14	-	-	-	-	1	-	1
	継続	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アジア太平洋 研究センター	新規	-	-	18	-	7	-	13	-	8	-	6	-
	継続	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	新規	175	3	194	5	159	3	28	4	19	3	17	3
	継続	-	2	-	2	-	4	1	2	-	1	1	1

[注]1 派遣、受け入れとも1年未満のものを「短期」とし、それ以上を「長期」としてください。

2 各派遣者及び受け入れ者について、派遣及び受け入れが複数年度にわたる場合、初年度については「新規」欄に、次年度以降は「継続」欄に人数を記入してください。

3 旅費・滞在費等の経費負担が私費によるものも含め、全ての派遣者及び受け入れ者について記入してください。

Ⅲ 学生の受け入れ

1 学部・学科の志願者・合格者・入学者数の推移

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
経済学部	経済経営学科	一般入試	志願者	9,355	7,176	7,308	6,599	6,558	
			合格者	812	939	887	711	973	
			入学者(A)	173	233	235	174	279	
			入学定員(B)	395	395	245	240	255	
			A/B*100	43.8%	59.0%	95.9%	72.5%	109.4%	76.1%
		A0入試	志願者	267	190	202	174	160	
			合格者	51	49	41	37	27	
			入学者(A)	45	45	40	33	24	
			入学定員(B)	40	40	35	35	25	
			A/B*100	112.5%	112.5%	114.3%	94.3%	96.0%	105.9%
		附属校推薦	志願者	45	49	54	79	65	
			合格者	45	49	54	79	65	
			入学者(A)	45	49	54	79	65	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	204	198	184	176	158	
			合格者	204	198	184	176	158	
			入学者(A)	204	198	184	176	158	
			入学定員(B)	-	-	155	160	155	
			A/B*100	0.0%	0.0%	118.7%	110.0%	94.3%	64.6%
		その他	志願者	20	19	21	26	20	
			合格者	5	6	5	6	1	
			入学者(A)	4	2	3	5	1	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		合計	志願者	9,891	7,632	7,769	7,054	6,961	
			合格者	1,117	1,241	1,171	1,009	1,224	
			入学者(A)	471	527	516	467	527	
入学定員(B)	*435		*435	435	435	435			
A/B*100	108.3%		121.1%	118.6%	107.4%	121.1%	115.3%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
工学部	機械工学科	一般入試	志願者	1,088	-	-	-	-	
			合格者	163	-	-	-	-	
			入学者(A)	43	-	-	-	-	
			入学定員(B)	67	-	-	-	-	
			A/B*100	64.2%	-	-	-	-	64.2%
		AO入試	志願者	25	-	-	-	-	
			合格者	11	-	-	-	-	
			入学者(A)	9	-	-	-	-	
			入学定員(B)	8	-	-	-	-	
			A/B*100	112.5%	-	-	-	-	112.5%
		附属校推薦	志願者	4	-	-	-	-	
			合格者	4	-	-	-	-	
			入学者(A)	4	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		指定校推薦	志願者	28	-	-	-	-	
			合格者	28	-	-	-	-	
			入学者(A)	28	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		その他	志願者	0	-	-	-	-	
			合格者	0	-	-	-	-	
			入学者(A)	0	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
A/B*100	0.0%		-	-	-	-	0.0%		
合計	志願者	1,145	-	-	-	-			
	合格者	206	-	-	-	-			
	入学者(A)	84	-	-	-	-			
	入学定員(B)	※ 75	-	-	-	-			
	A/B*100	112.0%	-	-	-	-	112.0%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
工学部	電気電子工学科	一般入試	志願者	896	-	-	-	-	
			合格者	195	-	-	-	-	
			入学者(A)	40	-	-	-	-	
			入学定員(B)	67	-	-	-	-	
			A/B*100	59.7%	-	-	-	-	59.7%
		AO入試	志願者	16	-	-	-	-	
			合格者	9	-	-	-	-	
			入学者(A)	7	-	-	-	-	
			入学定員(B)	8	-	-	-	-	
			A/B*100	87.5%	-	-	-	-	87.5%
		附属校推薦	志願者	0	-	-	-	-	
			合格者	0	-	-	-	-	
			入学者(A)	0	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		指定校推薦	志願者	13	-	-	-	-	
			合格者	13	-	-	-	-	
			入学者(A)	13	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		その他	志願者	3	-	-	-	-	
			合格者	3	-	-	-	-	
			入学者(A)	1	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
A/B*100	0.0%		-	-	-	-	0.0%		
合計	志願者	928	-	-	-	-			
	合格者	220	-	-	-	-			
	入学者(A)	61	-	-	-	-			
	入学定員(B)	* 75	-	-	-	-			
	A/B*100	81.3%	-	-	-	-	81.3%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
工学部	応用化学科	一般入試	志願者	1,164	-	-	-	-	
			合格者	220	-	-	-	-	
			入学者(A)	35	-	-	-	-	
			入学定員(B)	67	-	-	-	-	
			A/B*100	52.2%	-	-	-	-	52.2%
		AO入試	志願者	37	-	-	-	-	
			合格者	16	-	-	-	-	
			入学者(A)	15	-	-	-	-	
			入学定員(B)	8	-	-	-	-	
			A/B*100	187.5%	-	-	-	-	187.5%
		附属校推薦	志願者	3	-	-	-	-	
			合格者	3	-	-	-	-	
			入学者(A)	3	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		指定校推薦	志願者	27	-	-	-	-	
			合格者	27	-	-	-	-	
			入学者(A)	27	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		その他	志願者	0	-	-	-	-	
			合格者	0	-	-	-	-	
			入学者(A)	0	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
A/B*100	0.0%		-	-	-	-	0.0%		
合計	志願者	1,231	-	-	-	-			
	合格者	266	-	-	-	-			
	入学者(A)	80	-	-	-	-			
	入学定員(B)	* 75	-	-	-	-			
	A/B*100	106.7%	-	-	-	-	106.7%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
工学部	経営・情報工学科	一般入試	志願者	1,219	-	-	-	-	
			合格者	154	-	-	-	-	
			入学者(A)	26	-	-	-	-	
			入学定員(B)	67	-	-	-	-	
			A/B*100	38.8%	-	-	-	-	38.8%
		AO入試	志願者	29	-	-	-	-	
			合格者	11	-	-	-	-	
			入学者(A)	11	-	-	-	-	
			入学定員(B)	8	-	-	-	-	
			A/B*100	137.5%	-	-	-	-	137.5%
		附属校推薦	志願者	5	-	-	-	-	
			合格者	5	-	-	-	-	
			入学者(A)	5	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		指定校推薦	志願者	38	-	-	-	-	
			合格者	38	-	-	-	-	
			入学者(A)	38	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		その他	志願者	1	-	-	-	-	
			合格者	1	-	-	-	-	
			入学者(A)	1	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
A/B*100	0.0%		-	-	-	-	0.0%		
合計	志願者	1,292	-	-	-	-			
	合格者	209	-	-	-	-			
	入学者(A)	81	-	-	-	-			
	入学定員(B)	* 75	-	-	-	-			
	A/B*100	108.0%	-	-	-	-	108.0%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
工学部	物理情報工学科	一般入試	志願者	449	-	-	-	-	
			合格者	113	-	-	-	-	
			入学者(A)	34	-	-	-	-	
			入学定員(B)	52	-	-	-	-	
			A/B*100	65.4%	-	-	-	-	65.4%
		A0入試	志願者	5	-	-	-	-	
			合格者	4	-	-	-	-	
			入学者(A)	3	-	-	-	-	
			入学定員(B)	8	-	-	-	-	
			A/B*100	37.5%	-	-	-	-	37.5%
		附属校推薦	志願者	0	-	-	-	-	
			合格者	0	-	-	-	-	
			入学者(A)	0	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		指定校推薦	志願者	21	-	-	-	-	
			合格者	21	-	-	-	-	
			入学者(A)	21	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		その他	志願者	1	-	-	-	-	
			合格者	1	-	-	-	-	
			入学者(A)	0	-	-	-	-	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	-	-	-	-	0.0%
		合計	志願者	476	-	-	-	-	
			合格者	139	-	-	-	-	
			入学者(A)	58	-	-	-	-	
入学定員(B)	* 60		-	-	-	-			
A/B*100	96.7%		-	-	-	-	96.7%		
学部合計	志願者	5,072	-	-	-	-			
	合格者	1,040	-	-	-	-			
	入学者(A)	364	-	-	-	-			
	入学定員(B)	360	-	-	-	-			
	A/B*100	101.1%	-	-	-	-	101.1%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
理 工 学 部	物 質 生 命 理 工 学 科	一般入試	志願者	-	1,626	1,153	1,266	1,410	
			合格者	-	378	357	380	425	
			入学者(A)	-	52	63	82	103	
			入学定員(B)	-	110	70	70	75	
			A/B*100	-	47.3%	90.0%	117.1%	137.3%	78.3%
		A0入試	志願者	-	43	34	33	23	
			合格者	-	21	14	14	11	
			入学者(A)	-	21	13	14	10	
			入学定員(B)	-	10	10	10	10	
			A/B*100	-	210.0%	130.0%	140.0%	100.0%	116.0%
		附属校推薦	志願者	-	1	9	1	1	
			合格者	-	1	9	1	1	
			入学者(A)	-	1	9	1	1	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	-	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	-	65	68	42	44	
			合格者	-	65	68	42	44	
			入学者(A)	-	65	68	42	44	
			入学定員(B)	-	-	40	40	35	
			A/B*100	-	0.0%	170.0%	105.0%	125.7%	80.1%
		その他	志願者	-	1	0	0	3	
			合格者	-	1	0	0	3	
			入学者(A)	-	1	0	0	3	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
A/B*100	-		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
合 計	志願者	-	1,736	1,264	1,342	1,481			
	合格者	-	466	448	437	484			
	入学者(A)	-	140	153	139	161			
	入学定員(B)	-	※ 120	120	120	120			
	A/B*100	-	116.7%	127.5%	115.8%	134.2%	98.8%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
理工学部	情報科学科	一般入試	志願者	-	1,559	1,383	1,046	1,574	
			合格者	-	350	334	363	364	
			入学者(A)	-	65	52	117	98	
			入学定員(B)	-	100	70	75	78	
			A/B*100	-	65.0%	74.3%	156.0%	125.6%	84.2%
		AO入試	志願者	-	29	39	41	34	
			合格者	-	14	16	16	15	
			入学者(A)	-	14	15	16	15	
			入学定員(B)	-	10	10	10	10	
			A/B*100	-	140.0%	150.0%	160.0%	150.0%	120.0%
		附属校推薦	志願者	-	0	1	2	2	
			合格者	-	0	1	2	2	
			入学者(A)	-	0	1	2	2	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
			A/B*100	-	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	-	49	45	34	39	
			合格者	-	49	45	34	39	
			入学者(A)	-	49	45	34	39	
			入学定員(B)	-	-	30	35	32	
			A/B*100	-	0.0%	150.0%	97.1%	121.9%	73.8%
		その他	志願者	-	0	0	3	2	
			合格者	-	0	0	2	0	
			入学者(A)	-	0	0	1	0	
			入学定員(B)	-	-	-	-	-	
A/B*100	-		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
合計	志願者	-	1,637	1,468	1,126	1,651			
	合格者	-	413	396	417	420			
	入学者(A)	-	128	113	170	154			
	入学定員(B)	-	* 110	110	120	120			
	A/B*100	-	116.4%	102.7%	141.7%	128.3%	97.8%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
理工学部	エレクトロメカニクス学科	一般入試	志願者	-	1,705	1,042	1,007	1,338	
			合格者	-	374	323	301	347	
			入学者	-	84	78	70	109	
			入学定員	-	120	80	75	78	
			A/B*100	-	70.0%	97.5%	93.3%	139.7%	80.1%
		A0入試	志願者	-	32	32	29	17	
			合格者	-	17	14	12	10	
			入学者	-	17	13	12	10	
			入学定員	-	10	10	10	10	
			A/B*100	-	170.0%	130.0%	120.0%	100.0%	104.0%
		附属校推薦	志願者	-	9	6	1	2	
			合格者	-	9	6	1	2	
			入学者	-	9	6	1	2	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	-	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	-	53	36	40	34	
			合格者	-	53	36	40	34	
			入学者	-	53	36	40	34	
			入学定員	-	-	40	35	32	
			A/B*100	-	0.0%	90.0%	114.3%	106.3%	62.1%
		その他	志願者	-	2	6	2	1	
			合格者	-	1	4	2	1	
			入学者	-	0	2	1	0	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	-	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		合 計	志願者	-	1,801	1,122	1,079	1,392	
			合格者	-	454	383	356	394	
			入学者	-	163	135	124	155	
入学定員	-		* 130	130	120	120			
A/B*100	-		125.4%	103.8%	103.3%	129.2%	92.3%		
学部合計	志願者	-	5,174	3,854	3,547	4,524			
	合格者	-	1,333	1,227	1,210	1,298			
	入学者	-	431	401	433	470			
	入学定員	-	360	360	360	360			
	A/B*100	-	119.7%	111.4%	120.3%	130.6%	96.4%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
文学部	英米文学科	一般入試	志願者	1,296	1,374	1,427	1,216	1,684	
			合格者	251	304	288	292	365	
			入学者	50	82	58	82	84	
			入学定員	108	108	74	72	76	
			A/B*100	46.3%	75.9%	78.4%	113.9%	110.5%	85.0%
		A0入試	志願者	66	59	55	50	44	
			合格者	17	14	10	8	6	
			入学者	14	13	9	6	5	
			入学定員	12	12	10	8	6	
			A/B*100	116.7%	108.3%	90.0%	75.0%	83.3%	94.7%
		附属校推薦	志願者	1	1	5	4	2	
			合格者	1	1	5	4	2	
			入学者	1	1	5	4	2	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	68	67	74	58	43	
			合格者	68	67	74	58	43	
			入学者	68	67	74	58	43	
			入学定員	-	-	36	40	38	
			A/B*100	0.0%	0.0%	205.6%	145.0%	113.2%	92.7%
		その他	志願者	2	4	6	11	0	
			合格者	0	1	2	1	0	
			入学者	0	1	1	1	0	
			入学定員	-	-	-	-	-	
A/B*100	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
合計	志願者	1,433	1,505	1,567	1,339	1,773			
	合格者	337	387	379	363	416			
	入学者	133	164	147	151	134			
	入学定員	*120	*120	120	120	120			
	A/B*100	110.8%	136.7%	122.5%	125.8%	111.7%	121.5%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
文学部	日本文学科	一般入試	志願者	1,266	1,243	1,023	1,077	1,486	
			合格者	200	208	185	193	233	
			入学者	46	50	50	55	67	
			入学定員	75	75	54	55	59	
			A/B*100	61.3%	66.7%	92.6%	100.0%	113.6%	86.8%
		A0入試	志願者	35	17	41	30	19	
			合格者	9	9	6	5	3	
			入学者	9	9	5	4	3	
			入学定員	8	8	5	4	2	
			A/B*100	112.5%	112.5%	100.0%	100.0%	150.0%	115.0%
		附属校推薦	志願者	1	0	2	5	2	
			合格者	1	0	2	5	2	
			入学者	1	0	2	5	2	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	38	73	32	36	29	
			合格者	38	73	32	36	29	
			入学者	38	73	32	36	29	
			入学定員	-	-	24	24	22	
			A/B*100	0.0%	0.0%	133.3%	150.0%	131.8%	83.0%
		その他	志願者	3	2	2	1	1	
			合格者	1	0	2	0	0	
			入学者	1	0	1	0	0	
			入学定員	-	-	-	-	-	
A/B*100	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
合 計	志願者	1,343	1,335	1,100	1,149	1,537			
	合格者	249	290	227	239	267			
	入学者	95	132	90	100	101			
	入学定員	* 83	* 83	83	83	83			
	A/B*100	114.5%	159.0%	108.4%	120.5%	121.7%	124.8%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
文学部	国際文化学科	一般入試	志願者	2,028	1,778	1,321	1,364	1,942	
			合格者	248	247	279	324	337	
			入学者	49	49	64	73	67	
			入学定員	90	90	63	64	67	
			A/B*100	54.4%	54.4%	101.6%	114.1%	100.0%	84.9%
		A0入試	志願者	82	58	81	55	61	
			合格者	10	10	7	8	8	
			入学者	9	9	6	6	6	
			入学定員	10	10	7	6	5	
			A/B*100	90.0%	90.0%	85.7%	100.0%	120.0%	97.1%
		附属校推薦	志願者	6	4	1	3	6	
			合格者	6	4	1	3	6	
			入学者	6	4	1	3	6	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	43	67	51	40	40	
			合格者	43	67	51	40	40	
			入学者	43	67	51	40	40	
			入学定員	-	-	30	30	28	
			A/B*100	0.0%	0.0%	170.0%	133.3%	142.9%	89.2%
		その他	志願者	4	9	8	4	5	
			合格者	2	1	1	2	0	
			入学者	1	0	1	1	0	
			入学定員	-	-	-	-	-	
A/B*100	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
合計	志願者	2,163	1,916	1,462	1,466	2,054			
	合格者	309	329	339	377	391			
	入学者	108	129	123	123	119			
	入学定員	*100	*100	100	100	100			
	A/B*100	108.0%	129.0%	123.0%	123.0%	119.0%	120.4%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
文学部	現代 社会 学科	一般入試	志願者	1,723	1,547	1,122	1,092	1,837	
			合格者	259	247	247	242	268	
			入学者	54	45	52	77	70	
			入学定員	90	90	60	60	64	
			A/B*100	60.0%	50.0%	86.7%	128.3%	109.4%	86.9%
		A0入試	志願者	56	43	40	53	35	
			合格者	10	10	8	8	6	
			入学者	9	8	8	8	5	
			入学定員	10	10	8	8	6	
			A/B*100	90.0%	80.0%	100.0%	100.0%	83.3%	90.7%
		附属校推薦	志願者	7	10	11	4	5	
			合格者	7	10	11	4	5	
			入学者	7	10	11	4	5	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	46	69	44	41	41	
			合格者	46	69	44	41	41	
			入学者	46	69	44	41	41	
			入学定員	-	-	32	32	30	
			A/B*100	0.0%	0.0%	137.5%	128.1%	136.7%	80.5%
		その他	志願者	2	2	4	8	2	
			合格者	0	1	0	2	1	
			入学者	0	0	0	2	0	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		合 計	志願者	1,834	1,671	1,221	1,198	1,920	
			合格者	322	337	310	297	321	
			入学者	116	132	115	132	121	
入学定員	*100		*100	100	100	100			
A/B*100	116.0%		132.0%	115.0%	132.0%	121.0%	123.2%		
学部合計	志願者	6,773	6,427	5,350	5,152	7,284			
	合格者	1,217	1,343	1,255	1,276	1,395			
	入学者	452	557	475	506	475			
	入学定員	403	403	403	403	403			
	A/B*100	112.2%	138.2%	117.9%	125.6%	117.9%	122.3%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
法学部	法律学科	一般入試	志願者	4,442	3,404	3,440	3,795	3,637	
			合格者	506	546	566	552	686	
			入学者	120	133	159	131	217	
			入学定員	224	224	140	146	160	
			A/B*100	53.6%	59.4%	113.6%	89.7%	135.6%	90.4%
		A0入試	志願者	184	151	90	125	79	
			合格者	46	27	24	21	11	
			入学者	43	26	23	21	10	
			入学定員	26	26	26	20	6	
			A/B*100	165.4%	100.0%	88.5%	105.0%	166.7%	125.1%
		附属校推薦	志願者	13	25	29	30	25	
			合格者	13	25	29	30	25	
			入学者	13	25	29	30	25	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	134	135	121	99	103	
			合格者	134	135	121	99	103	
			入学者	134	135	121	99	103	
			入学定員	-	-	84	84	84	
			A/B*100	0.0%	0.0%	144.0%	117.9%	122.6%	76.9%
		その他	志願者	18	8	9	4	9	
			合格者	9	5	2	0	2	
			入学者	5	4	1	0	1	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		合 計	志願者	4,791	3,723	3,689	4,053	3,853	
			合格者	708	738	742	702	827	
			入学者	315	323	333	281	356	
入学定員	* 250		* 250	250	250	250			
A/B*100	126.0%		129.2%	133.2%	112.4%	142.4%	128.6%		

(表13)

		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
法学部	政治学科	一般入試	志願者	1,966	2,228	1,633	2,176	2,153	
			合格者	332	361	335	405	480	
			入学者	91	79	89	79	169	
			入学定員	126	126	76	80	86	
			A/B*100	72.2%	62.7%	117.1%	98.8%	196.5%	109.5%
		AO入試	志願者	88	57	62	50	44	
			合格者	21	16	17	10	8	
			入学者	20	13	15	10	7	
			入学定員	14	14	14	10	4	
			A/B*100	142.9%	92.9%	107.1%	100.0%	175.0%	123.6%
		附属校推薦	志願者	3	4	11	11	6	
			合格者	3	4	11	11	6	
			入学者	3	4	11	11	6	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		指定校推薦	志願者	56	53	56	45	45	
			合格者	56	53	56	45	45	
			入学者	56	53	56	45	45	
			入学定員	-	-	50	50	50	
			A/B*100	0.0%	0.0%	112.0%	90.0%	90.0%	58.4%
		その他	志願者	5	3	6	2	0	
			合格者	0	0	0	0	0	
			入学者	0	0	1	0	0	
			入学定員	-	-	-	-	-	
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		合 計	志願者	2,118	2,345	1,768	2,284	2,248	
			合格者	412	434	421	471	539	
			入学者	170	149	172	145	227	
入学定員	* 140		* 140	140	140	140			
A/B*100	121.4%		106.4%	122.9%	103.6%	162.1%	123.3%		
学部合計	志願者	6,909	6,068	5,457	6,337	6,101			
	合格者	1,120	1,172	1,163	1,173	1,366			
	入学者	485	472	505	426	583			
	入学定員	390	390	390	390	390			
	A/B*100	124.4%	121.0%	129.5%	109.2%	149.5%	126.7%		

(表13)

	入試の種類	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)
大学合計	志願者	28,645	25,301	22,430	22,090	24,870	
	合格者	4,494	5,089	4,816	4,668	5,283	
	入学者	1,772	1,987	1,897	1,832	2,055	
	入学定員	1,588	1,588	1,588	1,588	1,588	
	A/B*100	111.6%	125.1%	119.5%	115.4%	129.4%	120.2%

[注]1 「一般入試」欄には大学入試センター試験を含めてください。

- 2 「その他」欄には上記の表に該当しない入試の状況を記入してください。その際、該当する入試の名称を()内に記入してください。ただし、相当数の学生(約一割以上)を入学させている入試方法がある場合は、「その他」に含めず適宜欄を設けて記入してください。なお、該当しない入試方法の欄は削除してください。
- 3 セメスター制の採用により、秋学期入学など、年に複数回の入学時期を設定している場合は、それぞれの学期について作表してください。
- 4 学部が複数学科で構成されている場合は、「学部合計」欄を設けて各学科の「計」欄の総数を「志願者」「合格者」「入学者」「入学定員」ごとに記入してください。また、学科内に専攻等を設け、その専攻等ごとに入学定員を設定している場合は、専攻等ごとに作表してください。複数学部を設置している大学の場合は、「大学合計」欄を設け、「学部合計」と同様に記入してください。
- 5 入試の種類ごとに「入学定員に対する入学者」の割合を算出してください。
- 6 5カ年の「入学定員に対する入学者」の割合を合計し、5で除した数値を「入学定員に対する入学者数の比率(2004～2008年平均)」欄に記入してください。
- 7 「留学生入試」に交換留学生は含めないでください。
- 8 各入学(募集)定員が若干名の場合は「0」として記入してください。

※ 2004年度及び2005年度の各学部・学科の入学定員には、推薦入学として次の人数が含まれます。

(1) 2004年度

経済学部(経済経営学科=約145名)

工学部(機械工学科=約20名, 電気電子工学科=約20名, 応用化学科=約20名, 経営・情報工学科=約20名, 物理情報工学科=約15名)

文学部(英米文学科=約30名, 日本文学科=約20名, 国際文化学科=約25名, 現代社会学科=約25名)

法学部(法律学科=約80名, 政治学科=約50名)

(2) 2005年度

経済学部(経済経営学科=約150名)

理工学部(物質生命理工学科=約30名, 情報科学科=約30名, エレクトロメカニクス学科=約35名)

文学部(英米文学科=約30名, 日本文学科=約20名, 国際文化学科=約25名, 現代社会学科=約25名)

法学部(法律学科=約80名, 政治学科=約50名)

2 学部・学科の学生定員及び在籍学生数

(表14)

学 部	学 科	入 定 学 員	編 入 員	収容定員		在籍学生数		B/A	D/C	在 籍 学 生 数								備 考
				総 数 (A)	う ち 編 入 学生数 (C)	総 数 (B)	う ち 編 入 学生数 (D)			第1年次		第2年次		第3年次		第4年次		
										学生数	留年者数 (内数)	学生数	留年者数 (内数)	学生数	留年者数 (内数)	学生数	留年者数 (内数)	
経済学部	経済学科	-	-	-	-	14	-	0.00	-	-	-	-	-	-	-	14	14	
	経営学科	-	-	-	-	10	-	0.00	-	-	-	-	-	-	-	10	10	
	経済経営学科	435	-	1,740	-	2,072	-	1.19	-	527	-	465	2	514	5	566	57	
計		435	-	1,740	-	2,096	-	1.20	-	527	-	465	2	514	5	590	81	
工学部	機械工学科	-	-	-	-	8	-	0.00	-	-	-	-	-	-	-	8	8	
	電気電子工学科	-	-	-	-	6	-	0.00	-	-	-	-	-	-	-	6	6	
	経営・情報工学科	-	-	-	-	5	-	0.00	-	-	-	-	-	-	-	5	5	
計		-	-	-	-	19	-	0.00	-	-	-	-	-	-	-	19	19	
理工学部	物質生命理工学科	120	-	480	-	585	-	1.22	-	166	5	142	8	146	9	131	-	
	情報科学科	120	-	460	-	545	-	1.18	-	161	9	175	17	104	10	105	-	
	エレクトロニクス学科	120	-	500	-	569	-	1.14	-	164	9	128	12	133	8	144	-	
計		360	-	1,440	-	1,699	-	1.18	-	491	23	445	37	383	27	380	-	

(表14)

学 部	学 科	入 学 員 定 員	編 入 定 員	収容定員		在籍学生数		B/A	D/C	在 籍 学 生 数								備 考
				総 数 (A)	う ち 編 入 学 生 数 (C)	総 数 (B)	う ち 編 入 学 生 数 (D)			第1年次		第2年次		第3年次		第4年次		
										学 生 数	留 年 者 数 (内 数)	学 生 数	留 年 者 数 (内 数)	学 生 数	留 年 者 数 (内 数)	学 生 数	留 年 者 数 (内 数)	
文学部	英米文学科	120	-	480	-	603	-	1.26	-	134	-	156	8	149	9	164	12	
	日本文学科	83	-	332	-	425	-	1.28	-	101	-	109	9	92	9	123	9	
	国際文化学科	100	-	400	-	504	-	1.26	-	119	-	122	1	135	12	128	10	
	現代社会学科	100	-	400	-	498	-	1.25	-	122	1	137	7	113	4	126	5	
計		403	-	1,612	-	2,030	-	1.26	-	476	1	524	25	489	34	541	36	
法学部	法律学科	250	-	1,000	-	1,352	-	1.35	-	356	-	308	30	325	16	363	64	
	政治学科	140	-	560	-	722	-	1.29	-	228	1	157	14	165	7	172	35	
計		390	-	1,560	-	2,074	-	1.33	-	584	1	465	44	490	23	535	99	
合 計		1,588	-	6,352	-	7,918	-	1.25	-	2,078	25	1,899	108	1,876	89	2,065	235	

[注]1 昼夜開講制をとっている学部については、昼間主コースと夜間主コースにそれぞれ分けて記入してください。

2 収容定員は、定員変更などにより、現在の入学定員の4倍（6年制の学部は6倍）ではない場合がありますので、該当する年度ごとの入学定員、編入定員に注意してください。

3 現在の在籍学生に関わる入学定員及び編入定員に変更があった場合には、「備考」欄に注記してください。

4 修業年限を6年とする学部・学科の場合には、第6年次まで作表してください。

5 編入定員を設定している場合は、備考欄にその受け入れ年次を記入してください。

6 「B/A」及び「D/C」欄については、小数点以下第3位を四捨五入し、小数点以下第2位まで表示してください。

7 通信教育課程、専攻科、別科等についても学部の表に準じて作成してください。

3 学部の入学者の構成

(表15)

学 部	学 科		入 学 者 数					備 考	
			一般入試	A0入試	附属校 推薦	指定校 推薦	その他		計
経済学部	経済経営学科	募集定員	255	25	0	155	0	435	募集定員のうち指 定校推薦は、附属 校推薦との合計 (以下同じ)
		入学者数	279	24	65	158	1	527	
		計に対する割合	52.9%	4.6%	12.3%	30.0%	0.2%	100.0%	
合 計		募集定員	255	25	0	155	0	435	
		入学者数	279	24	65	158	1	527	
		計に対する割合	52.9%	4.6%	12.3%	30.0%	0.2%	100.0%	
理工学部	物質生命理工学科	募集定員	75	10	0	35	0	120	
		入学者数	103	10	1	44	3	161	
		計に対する割合	64.0%	6.2%	0.6%	27.3%	1.9%	100.0%	
	情報科学科	募集定員	78	10	0	32	0	120	
		入学者数	98	15	2	39	0	154	
		計に対する割合	63.6%	9.7%	1.3%	25.3%	0.0%	100.0%	
	エレクトロメカ ニクス学科	募集定員	78	10	0	32	0	120	
		入学者数	109	10	2	34	0	155	
		計に対する割合	70.3%	6.5%	1.3%	21.9%	0.0%	100.0%	
合 計		募集定員	231	30	0	99	0	360	
		入学者数	310	35	5	117	3	470	
		計に対する割合	66.0%	7.4%	1.1%	24.9%	0.6%	100.0%	

3 学部の入学者の構成

(表15)

学 部	学 科		入 学 者 数					備 考	
			一般入試	A0入試	附属校 推薦	指定校 推薦	その他		計
文学部	英米文学科	募集定員	76	6	0	38	0	120	
		入学者数	84	5	2	43	0	134	
		計に対する割合	62.7%	3.7%	1.5%	32.1%	0.0%	100.0%	
	日本文学科	募集定員	59	2	0	22	0	83	
		入学者数	67	3	2	29	0	101	
		計に対する割合	66.3%	3.0%	2.0%	28.7%	0.0%	100.0%	
	国際文化学科	募集定員	67	5	0	28	0	100	
		入学者数	67	6	6	40	0	119	
		計に対する割合	56.3%	5.0%	5.0%	33.6%	0.0%	100.0%	
	現代社会学科	募集定員	64	6	0	30	0	100	
		入学者数	70	5	5	41	0	121	
		計に対する割合	57.9%	4.1%	4.1%	33.9%	0.0%	100.0%	
合 計	募集定員	266	19	0	118	0	403		
	入学者数	288	19	15	153	0	475		
	計に対する割合	60.6%	4.0%	3.2%	32.2%	0.0%	100.0%		
法学部	法律学科	募集定員	160	6	0	84	0	250	
		入学者数	217	10	25	103	1	356	
		計に対する割合	61.0%	2.8%	7.0%	28.9%	0.3%	100.0%	
	政治学科	募集定員	86	4	0	50	0	140	
		入学者数	169	7	6	45	0	227	
		計に対する割合	74.4%	3.1%	2.6%	19.8%	0.0%	100.0%	
合 計	募集定員	246	10	0	134	0	390		
	入学者数	386	17	31	148	1	583		
	計に対する割合	66.2%	2.9%	5.3%	25.4%	0.2%	100.0%		

- [注]1 入試の種類については、「Ⅲ 1 学部・学科の志願者・合格者・入学者数の推移」(表13)と同様の区分で作成してください。
 2 各学科および合計欄の下端には全入学者数に対する入試の種類ごとの割合を記入してください。
 3 「一般入試」欄には大学入試センター試験を含めてください。
 4 「その他」の入試による内訳を、備考欄に記載してください。
 5 セメスター制の採用により、秋学期入学など、年に複数回の入学時期を設定している場合は、それぞれの学期について作表してください。
 6 各募集定員が若干名の場合は「0」として記入してください。

4 学部・学科の退学者数

(表17)

学部	学科	2005年度					2006年度					2007年度				
		1年次	2年次	3年次	4年次	合計	1年次	2年次	3年次	4年次	合計	1年次	2年次	3年次	4年次	合計
経済学部	経済学科	-	3	-	5	8	-	3	-	3	6	-	-	1	2	3
	経営学科	-	1	2	-	3	-	2	-	-	2	-	-	-	2	2
	経済経営学科	1	3	-	-	4	5	3	2	-	10	5	1	4	6	16
計		1	7	2	5	15	5	8	2	3	18	5	1	5	10	21
工学部	機械工学科	-	3	1	1	5	-	-	-	1	1	-	-	-	2	2
	電気電子工学科	-	2	-	-	2	-	-	1	1	2	-	-	-	-	-
	応用化学科	-	-	2	1	3	-	-	-	2	2	-	-	-	1	1
	経営・情報工学科	-	-	3	3	6	-	-	3	1	4	-	-	-	-	-
	物理情報工学科	-	-	1	1	2	-	-	2	1	3	-	-	-	-	-
計		-	5	7	6	18	-	-	6	6	12	-	-	-	3	3
理工学部	物質生命理工学科	4	-	-	-	4	7	-	-	-	7	3	5	7	-	15
	情報科学科	8	-	-	-	8	5	6	-	-	11	4	4	1	-	9
	エレクトロニクス学科	8	-	-	-	8	4	-	-	-	4	2	2	2	-	6
計		20	-	-	-	20	16	6	-	-	22	9	11	10	-	30
文学部	英米文学科	-	-	3	2	5	-	4	1	-	5	3	3	-	-	6
	日本文学科	2	2	1	-	5	1	-	1	1	3	-	7	1	1	9
	文化学科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	国際文化学科	3	2	1	2	8	-	1	1	1	3	2	1	1	-	4
	現代社会学科	3	1	1	1	6	-	-	-	-	-	2	3	2	-	7
計		8	5	6	5	24	1	5	3	2	11	7	14	4	1	26
法学部	法律学科	2	5	2	4	13	5	2	1	9	17	4	8	1	6	19
	政治学科	3	3	1	1	8	2	2	-	2	6	1	4	1	3	9
計		5	8	3	5	21	7	4	1	11	23	5	12	2	9	28
合計		34	25	18	21	98	29	23	12	22	86	26	38	21	23	108

[注]1 退学者数には、除籍者も含めてください。

2 修業年限を6年とする学部・学科の場合には、第6年次まで作表してください。

5 大学院研究科の学生定員及び在籍学生数

(表18)

研究科	専攻	入学定員		収容定員		在籍学生数											
		修士課程	博士課程	修士課程(A)	博士課程(B)	修士課程						博士課程					
						一般	社会人	留学生	その他	計(C)	C/A	一般	社会人	留学生	その他	計(D)	D/B
工学研究科	電気電子工学専攻	12	4	24	12	33	0	0	0	33	1.38	0	0	0	0	0	0.00
	応用化学専攻	16	4	32	12	31	0	0	0	31	0.97	4	0	0	0	4	0.33
	機械工学専攻	16	4	32	12	25	0	0	0	25	0.78	1	0	0	0	1	0.08
	情報処理専攻	12	4	24	12	24	0	0	0	24	1.00	4	0	0	0	4	0.33
	物理情報工学専攻	8	2	16	6	23	0	0	0	23	1.44	0	0	0	0	0	0.00
計		64	18	128	54	136	0	0	0	136	1.06	9	0	0	0	9	0.17
経済経営研究科	経済学専攻	6	3	12	6	2	0	0	0	2	0.17	0	0	0	0	0	0.00
	経営学専攻	10	3	20	6	12	0	0	0	12	0.60	1	0	0	0	1	0.17
計		16	6	32	12	14	0	0	0	14	0.44	1	0	0	0	1	0.08
法学政治学研究科	法律学専攻	8	4	16	12	0	0	0	0	0	0.00	1	0	0	0	1	0.08
	政治学専攻	4	2	8	6	2	0	0	0	2	0.25	6	0	0	0	6	1.00
計		12	6	24	18	2	0	0	0	2	0.08	7	0	0	0	7	0.39
文学研究科	英米文学専攻	8	4	16	12	5	0	0	0	5	0.31	3	0	0	0	3	0.25
	日本文学専攻	8	4	16	12	3	0	0	0	3	0.19	8	0	0	0	8	0.67
	社会文化論専攻	8	4	16	12	11	0	0	0	11	0.69	4	0	0	0	4	0.33
計		24	12	48	36	19	0	0	0	19	0.40	15	0	0	0	15	0.42
経営学研究科	経営学専攻	0	0	0	3	1	0	0	0	1	0.00	0	0	0	0	0	0.00
計		0	0	0	3	1	0	0	0	1	0.00	0	0	0	0	0	0.00
法務研究科(専門職)	法務専攻(専門職)	-	50	-	150	-	-	-	-	-	-	58	96	0	0	154	1.03
計		-	50	-	150	-	-	-	-	-	-	58	96	0	0	154	1.03
合計		100	86	200	261	158	0	0	0	158	0.79	89	96	0	0	185	0.71

[注]1 博士課程を前期と後期に区分している場合は、前期課程は修士課程の欄に後期課程は博士課程の欄に記載してください。

また、5年一貫制の博士課程は博士課程の欄に記載してください。

2 専門職学位課程については、該当する研究科・専攻名の後に「(専門職)」と付記し、付与する学位の種類に対応する欄に記載してください。

3 科目等履修生、聴講生、研究生は、在籍学生数には含めないでください。

4 「収容定員に対する在籍学生数比率」(C/A及びD/B)欄については、小数点以下第3位を四捨五入し、小数点以下第2位まで表示してください。

6 法科大学院の学生定員及び在籍学生数

(表18-2)

収容定員 (A)	未修者 総数	既修者 総数	在籍学生 総数(B)	B/A	在籍学生数内訳															備 考
					第1年次			第2年次			第3年次			第4年次			第5年次			
					学生数		学生 数計	学生数		学生 数計	学生数		学生 数計	学生数		学生 数計	学生数		学生 数計	
					未修者	既修者		未修者	既修者		未修者	既修者		未修者	既修者		未修者	既修者		
150	102	52	154	1.03	30	24	54	31	28	59	37	/	37	3	/	3	1	/	1	第4年次の3名 及び第5年次 の1名は、長 期履修学生
	< 1 >	< 2 >	< - >		< - >	< - >	< - >	< - >	< 2 >	< 2 >	< - >	/	< - >	< 1 >	/	< 1 >	< - >	/	< - >	
	《 - 》	《 - 》	《 - 》		《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	《 - 》	

留年者数 < > 休学者数 《 》

- [注]1 各年次に留年者がいる場合は人数を < > に内数で記入してください。ただし、休学や留学によって進級の遅れた者は留年に含めないでください。
 2 各年次に休学者がいる場合も同様に人数を 《 》 に内数で記入してください。
 3 昼夜開講制をとっている場合は、昼間主コースと夜間主コースにそれぞれ分けて記入してください。
 4 「収容定員(A)」は、既修者入試を実施している場合、未修者入試定員×3+既修者入試定員×2で算出される数値となります。
 5 「B/A」欄については、小数点以下第3位を四捨五入し、小数点以下第2位まで表示してください。
 6 現在の在籍学生に関わる入学定員に変更があった場合には、「備考」欄に注記してください。

7 大学院研究科の志願者・合格者・入学者数の推移

(表18-3)

研究科名	専攻名		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)	
工学研究科	電気電子工学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	30	22	24	18	16	171.7%	
				合格者	22	18	23	17	14		
				入学者(A)	22	17	23	16	14		
				入学定員(B)	8	12	12	12	12		
				A/B*100	275.0%	141.7%	191.7%	133.3%	116.7%		
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	1	0	0	0	0		5.0%
				合格者	1	0	0	0	0		
				入学者(A)	1	0	0	0	0		
				入学定員(B)	4	4	4	4	4		
				A/B*100	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
	専攻計				志願者	31	22	24	18	16	125.8%
					合格者	23	18	23	17	14	
					入学者(A)	23	17	23	16	14	
					入学定員(B)	12	16	16	16	16	
					A/B*100	191.7%	106.3%	143.8%	100.0%	87.5%	
	応用化学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	21	16	17	17	17	97.5%	
				合格者	20	14	17	17	17		
				入学者(A)	18	13	16	14	17		
				入学定員(B)	16	16	16	16	16		
				A/B*100	112.5%	81.3%	100.0%	87.5%	106.3%		
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	1	5	3	0	2		50.0%
				合格者	1	5	3	0	2		
				入学者(A)	1	5	2	0	2		
				入学定員(B)	4	4	4	4	4		
				A/B*100	25.0%	125.0%	50.0%	0.0%	50.0%		
	専攻計				志願者	22	21	20	17	19	88.0%
					合格者	21	19	20	17	19	
					入学者(A)	19	18	18	14	19	
				入学定員(B)	20	20	20	20	20		
				A/B*100	95.0%	90.0%	90.0%	70.0%	95.0%		
機械工学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	12	17	14	14	15	75.0%		
			合格者	11	14	12	11	14			
			入学者(A)	9	14	12	11	14			
			入学定員(B)	16	16	16	16	16			
			A/B*100	56.3%	87.5%	75.0%	68.8%	87.5%			
	博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	0	1	0	0	1		10.0%	
			合格者	0	1	0	0	1			
			入学者(A)	0	1	0	0	1			
			入学定員(B)	4	4	4	4	4			
			A/B*100	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	25.0%			
専攻計				志願者	12	18	14	14	16	62.0%	
				合格者	11	15	12	11	15		
				入学者(A)	9	15	12	11	15		
				入学定員(B)	20	20	20	20	20		
				A/B*100	45.0%	75.0%	60.0%	55.0%	75.0%		

(表18-3)

研究科名	専攻名		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学定員の比率 (2004～2008年平均)		
	情報処理専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	13	10	10	12	14	90.8%		
				合格者	9	10	9	12	12			
				入学者(A)	9	10	8	11	12			
				入学定員(B)	8	12	12	12	12			
				A/B*100	112.5%	83.3%	66.7%	91.7%	100.0%			
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	1	1	0	0	2		20.0%	
				合格者	1	1	0	0	2			
				入学者(A)	1	1	0	0	2			
				入学定員(B)	4	4	4	4	4			
				A/B*100	25.0%	25.0%	0.0%	0.0%	50.0%			
	専攻計				志願者	14	11	10	12	16		71.7%
					合格者	10	11	9	12	14		
					入学者(A)	10	11	8	11	14		
					入学定員(B)	12	16	16	16	16		
					A/B*100	83.3%	68.8%	50.0%	68.8%	87.5%		
	物理情報工学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	13	10	26	12	14	165.0%		
				合格者	13	10	22	12	10			
				入学者(A)	12	10	22	12	10			
				入学定員(B)	8	8	8	8	8			
				A/B*100	150.0%	125.0%	275.0%	150.0%	125.0%			
博士後期 (博士)課程		一般入試	志願者	0	1	0	0	0	10.0%			
			合格者	0	1	0	0	0				
			入学者(A)	0	1	0	0	0				
			入学定員(B)	2	2	2	2	2				
			A/B*100	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%				
専攻計				志願者	13	11	26	12		14	134.0%	
				合格者	13	11	22	12		10		
				入学者(A)	12	11	22	12		10		
				入学定員(B)	10	10	10	10		10		
				A/B*100	120.0%	110.0%	220.0%	120.0%		100.0%		
研究科合計				志願者	92	83	94	73	81	90.7%		
				合格者	78	74	86	69	72			
				入学者(A)	73	72	83	64	72			
				入学定員(B)	74	82	82	82	82			
				A/B*100	98.6%	87.8%	101.2%	78.0%	87.8%			

(表18-3)

研究科名	専攻名		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学定員の比率 (2004～2008年平均)		
経済学研究科	経済学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	9	6	11	-	-	50.0%		
				合格者	5	4	7	-	-			
				入学定員(B)	3	3	3	-	-			
		A/B*100	50.0%	50.0%	50.0%	-	-					
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	1	0	0	-	-		11.1%	
				合格者	1	0	0	-	-			
	入学定員(B)			3	3	3	-	-				
	A/B*100	33.3%	0.0%	0.0%	-	-						
	専攻計				志願者	10	6	11	-	-		37.0%
					合格者	6	4	7	-	-		
					入学定員(A)	4	3	3	-	-		
					入学定員(B)	9	9	9	-	-		
				A/B*100	44.4%	33.3%	33.3%	-	-			
				A/B*100	44.4%	33.3%	33.3%	-	-			
研究科合計				志願者	10	6	11	-	-	37.0%		
				合格者	6	4	7	-	-			
				入学定員(A)	4	3	3	-	-			
				入学定員(B)	9	9	9	-	-			
				A/B*100	44.4%	33.3%	33.3%	-	-			
				A/B*100	44.4%	33.3%	33.3%	-	-			
経済経営研究科	経済学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	-	-	-	1	4	16.7%		
				合格者	-	-	-	0	4			
				入学定員(B)	-	-	-	6	6			
		A/B*100	-	-	-	0.0%	33.3%					
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	-	-	-	0	0		0.0%	
				合格者	-	-	-	0	0			
	入学定員(B)			-	-	-	3	3				
	A/B*100	-	-	-	0.0%	0.0%						
	専攻計				志願者	-	-	-	1	4		11.1%
					合格者	-	-	-	0	4		
					入学定員(A)	-	-	-	0	2		
					入学定員(B)	-	-	-	9	9		
					A/B*100	-	-	-	0.0%	22.2%		
					A/B*100	-	-	-	0.0%	22.2%		
	経営学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	-	-	-	26	17	65.0%		
				合格者	-	-	-	10	7			
				入学定員(B)	-	-	-	10	10			
			A/B*100	-	-	-	70.0%	60.0%				
博士後期 (博士)課程			一般入試	志願者	-	-	-	1	1		16.7%	
				合格者	-	-	-	0	1			
		入学定員(B)		-	-	-	3	3				
A/B*100		-	-	-	0.0%	33.3%						
専攻計				志願者	-	-	-	27	18	53.8%		
				合格者	-	-	-	10	8			
				入学定員(A)	-	-	-	7	7			
				入学定員(B)	-	-	-	13	13			
				A/B*100	-	-	-	53.8%	53.8%			
				A/B*100	-	-	-	53.8%	53.8%			
研究科合計				志願者	-	-	-	28	22	36.4%		
				合格者	-	-	-	10	12			
				入学定員(A)	-	-	-	7	9			
				入学定員(B)	-	-	-	22	22			
				A/B*100	-	-	-	31.8%	40.9%			
				A/B*100	-	-	-	31.8%	40.9%			

(表18-3)

研究科名	専攻名		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学定員数の比率 (2004～2008年平均)
法学政治学研究所	法律学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	3	2	1	3	2	12.5%
				合格者	2	2	1	0	0	
				入学定員(A)	2	2	1	0	0	
		入学定員(B)	8	8	8	8	8			
		A/B*100	25.0%	25.0%	12.5%	0.0%	0.0%			
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	2	0	2	2	0	
	合格者	0		0	1	0	0			
	入学定員(A)	0		0	1	0	0			
	入学定員(B)	4	4	4	4	4				
	A/B*100	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%				
	専攻計		志願者	5	2	3	5	2	10.0%	
	合格者	2	2	2	0	0				
	入学定員(A)	2	2	2	0	0				
	入学定員(B)	12	12	12	12	12				
	A/B*100	16.7%	16.7%	16.7%	0.0%	0.0%				
	政治学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	13	6	6	4		6
				合格者	5	2	2	1	1	
				入学定員(A)	3	2	2	1	1	
		入学定員(B)	4	4	4	4	4			
		A/B*100	75.0%	50.0%	50.0%	25.0%	25.0%			
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	3	0	2	4	1	50.0%
合格者	1	0		1	3	0				
入学定員(A)	1	0		1	3	0				
入学定員(B)	2	2	2	2	2					
A/B*100	50.0%	0.0%	50.0%	150.0%	0.0%					
専攻計		志願者	16	6	8	8	7	46.7%		
合格者	6	2	3	4	1					
入学定員(A)	4	2	3	4	1					
入学定員(B)	6	6	6	6	6					
A/B*100	66.7%	33.3%	50.0%	66.7%	16.7%					
研究科合計			志願者	21	8	11	13		9	22.2%
			合格者	8	4	5	4	1		
			入学定員(A)	6	4	5	4	1		
			入学定員(B)	18	18	18	18	18		
			A/B*100	33.3%	22.2%	27.8%	22.2%	5.6%		

(表18-3)

研究科名	専攻名		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)	
文学研究科	英米文学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	5	4	5	6	0	35.0%	
				合格者	3	3	5	3	0		
				入学者(A)	3	3	5	3	0		
				入学定員(B)	8	8	8	8	8		
				A/B*100	37.5%	37.5%	62.5%	37.5%	0.0%		
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	2	3	0	1	0		20.0%
				合格者	1	2	0	1	0		
				入学者(A)	1	2	0	1	0		
				入学定員(B)	4	4	4	4	4		
				A/B*100	25.0%	50.0%	0.0%	25.0%	0.0%		
	専攻計				志願者	7	7	5	7	0	30.0%
					合格者	4	5	5	4	0	
					入学者(A)	4	5	5	4	0	
					入学定員(B)	12	12	12	12	12	
					A/B*100	33.3%	41.7%	41.7%	33.3%	0.0%	
	日本文学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	4	6	6	4	3	35.0%	
				合格者	2	6	3	2	2		
				入学者(A)	2	6	3	1	2		
				入学定員(B)	8	8	8	8	8		
				A/B*100	25.0%	75.0%	37.5%	12.5%	25.0%		
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	6	3	3	5	2	50.0%	
				合格者	4	1	3	3	0		
				入学者(A)	3	1	3	3	0		
				入学定員(B)	4	4	4	4	4		
				A/B*100	75.0%	25.0%	75.0%	75.0%	0.0%		
	専攻計				志願者	10	9	9	9	5	40.0%
					合格者	6	7	6	5	2	
				入学者(A)	5	7	6	4	2		
				入学定員(B)	12	12	12	12	12		
				A/B*100	41.7%	58.3%	50.0%	33.3%	16.7%		
社会文化論専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	10	7	13	11	5	65.0%		
			合格者	8	4	9	6	2			
			入学者(A)	8	2	8	6	2			
			入学定員(B)	8	8	8	8	8			
			A/B*100	100.0%	25.0%	100.0%	75.0%	25.0%			
	博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	2	0	2	3	2	15.0%		
			合格者	0	0	1	2	1			
			入学者(A)	0	0	0	2	1			
			入学定員(B)	4	4	4	4	4			
			A/B*100	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	25.0%			
専攻計				志願者	12	7	15	14	7	48.3%	
				合格者	8	4	10	8	3		
				入学者(A)	8	2	8	8	3		
				入学定員(B)	12	12	12	12	12		
				A/B*100	66.7%	16.7%	66.7%	66.7%	25.0%		
研究科合計				志願者	29	23	29	30	12	39.4%	
				合格者	18	16	21	17	5		
				入学者(A)	17	14	19	16	5		
				入学定員(B)	36	36	36	36	36		
				A/B*100	47.2%	38.9%	52.8%	44.4%	13.9%		

(表18-3)

研究科名	専攻名		入試の種類		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	入学定員に対する 入学者数の比率 (2004～2008年平均)	
経営学研究科	経営学専攻	博士前期 (修士)課程	一般入試	志願者	32	45	39	-	-	173.3%	
				合格者	17	27	17	-	-		
				入学者(A)	14	22	16	-	-		
				入学定員(B)	10	10	10	-	-		
		A/B*100	140.0%	220.0%	160.0%	-	-				
		博士後期 (博士)課程	一般入試	志願者	1	4	0	-	-		
				合格者	1	0	0	-	-		
				入学者(A)	1	0	0	-	-		
	入学定員(B)			3	3	3	-	-			
	A/B*100	33.3%	0.0%	0.0%	-	-					
	専攻計				志願者	33	49	39	-	-	135.9%
					合格者	18	27	17	-	-	
					入学者(A)	15	22	16	-	-	
					入学定員(B)	13	13	13	-	-	
				A/B*100	115.4%	169.2%	123.1%	-	-		
研究科合計				志願者	33	49	39	-	-	135.9%	
				合格者	18	27	17	-	-		
				入学者(A)	15	22	16	-	-		
				入学定員(B)	13	13	13	-	-		
				A/B*100	115.4%	169.2%	123.1%	-	-		
大学院合計				志願者	185	169	184	144	124	68.4%	
				合格者	128	125	136	100	90		
				入学者(A)	115	115	126	91	87		
				入学定員(B)	150	158	158	158	158		
				A/B*100	76.7%	72.8%	79.7%	57.6%	55.1%		

- [注]1 博士課程前期(修士)課程、博士課程後期(博士)課程、一貫制、専門職大学院のそれぞれの課程ごとに記入してください。
2 法科大学院については、(表18-4)に記入してください。
3 「その他」欄には上記の表に該当しない入試の状況を記入してください。その際、該当する入試の名称を()内に記入してください。
4 セメスター制の採用により、秋学期入学など、年に複数回の入学時期を設定している場合は、それぞれの学期について作表してください。
5 入試の種類ごとに「入学定員に対する入学者」の割合を算出してください。
6 「課程」「専攻」「研究科」「大学院」の各計について、「入学定員に対する入学者数の比率(2004～2008年平均)」欄に、5カ年の「入学定員に対する入学者」の割合を合計し、5で除した数値を記入してください。

8 法科大学院の志願者・合格者・入学者数の推移

(表18-4)

	2004年度			2005年度			2006年度			2007年度			2008年度		
	未修者	既修者	計	未修者	既修者	計	未修者	既修者	計	未修者	既修者	計	未修者	既修者	計
志願者	875	656	1,531	578	244	822	269	286	555	309	360	669	335	322	657
合格者	62	52	114	59	31	90	75	36	111	58	40	98	53	34	87
入学者(A)	41	30	71	22	21	43	40	21	61	31	25	56	31	22	53
募集定員(B)	30	20	50	30	20	50	30	20	50	30	20	50	30	20	50
A/B*100	136.7%	150.0%	142.0%	73.3%	105.0%	86.0%	133.3%	105.0%	122.0%	103.3%	125.0%	112.0%	103.3%	110.0%	106.0%

[注] 1 春季のほかに秋季入試を実施している場合は、それぞれについて作表してください。

2 未修・既修を分けて入試を実施していない場合は、両者をひとつにまとめて記入してください。

IV 教員組織

1-1 全学の教員組織

(表19)

学部・学科，研究科・ 専攻，研究所等		専任教員数										助手	備考
		教授		准教授		講師		助教		計			
			特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		
経済学部	経済経営学科	26	3	11	-	-	-	-	-	37	3	1	
	一般教育等	6	-	-	-	1	-	-	-	7	-	-	
	教職課程	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
	計	33	3	11	-	1	-	-	-	45	3	1	
理工学部	物質生命理工学科	12	-	2	-	1	-	9	-	24	-	3	
	情報科学科	11	-	3	-	-	-	4	-	18	-	4	
	エレクトロメカニクス学科	11	-	4	-	-	-	3	-	18	-	6	
	一般教育等	5	1	1	-	-	-	1	-	7	1	1	
	教職課程	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
計	39	1	10	-	1	-	17	-	67	1	14		
文学部	英米文学科	8	-	1	-	-	-	-	-	9	-	1	
	日本文学科	6	-	1	-	-	-	-	-	7	-	-	
	国際文化学科	6	-	1	-	-	-	-	-	7	-	-	
	現代社会学科	7	3	2	-	1	-	-	-	10	3	-	
	一般教育等	1	-	6	-	-	-	-	-	7	-	-	
	教職課程	2	-	2	-	-	-	-	-	4	-	-	
計	30	3	13	-	1	-	-	-	44	3	1		

(表19)

学部・学科，研究科・ 専攻，研究所等		専任教員数										助手	備考
		教授		准教授		講師		助教		計			
		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)			
法学部	法律学科	6	-	7	-	1	-	-	-	14	-	1	
	政治学科	11	-	1	-	-	-	-	-	12	-	-	
	一般教育等	6	-	1	-	-	-	-	-	7	-	-	
	教職課程	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
計		23	-	10	-	1	-	-	-	34	-	1	
合計		125	7	44	-	4	-	17	-	190	7	17	

[注]1 全学の専任教員について，学部，大学院研究科，専門職大学院，研究所等，各所属組織ごとに記載してください。

2 専門職大学院については，該当する研究科（または専攻名）の後に「（専門職）」と付記してください。

3 教育組織と教員組織が異なる場合は，専任教員が在籍しなくても，まず教育組織を記載し，その後に教員組織を記載し，当該教員組織に専任教員数を記入してください(次ページ記入例参照)。

4 教養教育科目，外国語科目，保健体育科目，教職科目等を担当する独立の組織がある場合には，「(その他の組織)」欄に，その名称を記載し，専任教員数を記入してください。

5 本表においては，大学設置基準第11条にいう「授業を担当しない教員」についても，専任教員数に含めて記入してください。

6 「大学の教員等の任期に関する法律」に基づく任期制教員を除き，特任教授，客員教授など任用期間のある教員については，専任者（教育研究条件等において専任教員と同等の者）のみを「専任教員数」の欄の「教授」「准教授」「講師」「助教」の該当する欄（左側）に含めて記入するとともに，その数を「特任等(内数)」欄に内数で示してください。専任者以外の特任者等については記入しないでください。

7 「専任教員数」欄については，本表内では1人の専任教員を複数の組織に重複して記入しないでください。

※研究科の教員は，すべて学部へ寄せて記載。

1-2 学部の教員組織

(表19-2)

学部・学科等		専任教員数										設置基 準上必 要専任 教員数	専任教員1 人当たり の在籍学 生数(表 14(B)/ 計(A))	兼 任 教員数	備考	
		教授		准教授		講 師		助教		計 (A)						助手
			特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)					
経済学部	経済経営学科	26	3	11	-	-	-	-	-	37	3	1	22	/	37	TA: 1
	一般教育等	6	-	-	-	1	-	-	-	7	-	-	大学全体で 54	/	43	-
	教職課程	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	/	/	-	-
計		33	3	11	-	1	-	-	-	45	3	1	/	46.6	80	TA: 1
理工学部	物質生命理工学科	12	-	2	-	1	-	9	-	24	-	3	10	/	14	TA:16
	情報科学科	11	-	3	-	-	-	4	-	18	-	4	10	/	8	TA:16
	エレクトロメカニクス学科	11	-	4	-	-	-	3	-	18	-	6	10	/	15	TA:14
	一般教育等	5	1	1	-	-	-	1	-	7	1	1	大学全体で 54	/	58	TA: 9
	教職課程	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/	/	4	-
計		39	1	10	-	1	-	17	-	67	1	14	/	25.4	99	TA:55
文学部	英米文学科	8	-	1	-	-	-	-	-	9	-	1	7	/	27	TA: 5
	日本文学科	6	-	1	-	-	-	-	-	7	-	-	6	/	29	TA: 4
	国際文化学科	6	-	1	-	-	-	-	-	7	-	-	6	/	26	-
	現代社会学科	7	3	2	-	1	-	-	-	10	3	-	6	/	20	TA: 1
	一般教育等	1	-	6	-	-	-	-	-	7	-	-	大学全体で 54	/	68	-
	教職課程	2	-	2	-	-	-	-	-	4	-	-	/	/	9	-
計		30	3	13	-	1	-	-	-	44	3	1	/	46.1	179	TA:10

(表19-2)

学部・学科等		専任教員数										助手	設置基 準上必 要専任 教員数	専任教員1 人当たり の在籍学 生数(表 14(B)/ 計(A))	兼 任 教員数	備 考
		教授		准教授		講 師		助教		計 (A)						
			特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)					
法学部	法律学科	6	-	7	-	1	-	-	-	14	-	1	13	/	17	-
	政治学科	11	-	1	-	-	-	-	-	12	-	-	10	/	21	TA: 4
	一般教育等	6	-	1	-	-	-	-	-	7	-	-	大学全体で 54	/	48	-
	教職課程	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	/	1	-	
計		23	-	10	-	1	-	-	-	34	-	1	/	61.0	87	TA: 4
大学全体の取容定員に応じ 定める専任教員数		/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	54	/	/	-
合 計		125	7	44	-	4	-	17	-	190	7	17	154	/	445	TA:70

[注]1 「専任教員数」については、(表19)のうち、学部教育を担当する専任教員について作表してください。

- 2 教養教育科目、外国語科目、保健体育科目、教職科目等の学部教育を担当する独立の組織がある場合には、「(その他の学部教育担当組織)」欄に、その名称を記載し、専任教員数を記入してください。
- 3 「専任教員数」欄には、大学院研究科等の専任で、その研究科の基礎となる学部・学科等においても専任として授業を担当している教員数も含めて記入してください。その場合、(表19-3)及び(表19-4)の専任教員が、本表においても専任教員に算入されます。
たとえば、大学院研究科に専任教員が配置され、学部教育が専ら研究科の専任教員によって行われている場合がこの典型的な例です。
- 4 教育組織と教員組織が異なる場合も、大学設置基準における必要専任教員数に留意して、学部教育担当専任教員数を適切に記入してください。
- 5 当該学部・学科の専任であっても、大学設置基準第11条にいう「授業を担当しない教員」については、専任教員数には含めないでください。
- 6 「大学の教員等の任期に関する法律」に基づく任期制教員を除き、特任教授、客員教授など任用期間のある教員については、専任者(研究条件等において専任教員と同等の者)のみを「専任教員数」欄の「教授」「准教授」「講師」「助教」の該当する欄(左側)に含めて記入するとともに、その数を「特任等(内数)」欄に内数で示してください。専任者以外の特任者等については「兼任教員数」欄に含めて記入してください。
- 7 「専任教員数」欄については、本表内では1人の専任教員を複数の組織に重複記入しないでください。
- 8 「兼任教員数」欄には、学外からのいわゆる非常勤教員数を記入してください。併設短期大学からの兼務者も「兼任教員数」の欄に含めてください。
なお、国立大学所属教員については、「兼任」「兼任」を共に「併任」としている場合もありますが、学外からの併任者は「兼任教員数」欄に記入してください。
同一の兼任教員が複数の学科を担当する場合は、それぞれ記入してください(重複可)。大学の状況によっては、兼任教員数の欄は学科ごとではなく学部全体で記述しても結構です。
- 9 「設置基準上必要専任教員数」欄には、大学設置基準別表第一、第二をもとに算出した数値を記入してください。同表に基づかない算出方法により設置認可を得ている場合にはその数値を記入するとともに備考欄にその旨を記述してください。
- 10 「助手」欄には、大学院研究科等の専任で学部の業務にも従事している助手数も含めて記入してください。
- 11 専任教務補助員(例えば、いわゆる副手、実験補助員等)、ティーチング・アシスタント(TA)、リサーチ・アシスタント(RA)については、「備考」欄にその各々の名称と人数を記入してください。

1-3 大学院研究科の教員組織（専門職大学院を除く）

(表19-3)

研究科・専攻・課程			専任教員数					助手	専任教員のうち		設置基準上必要専任教員数		兼任教員数	備考					
			教授	准教授	講師	助教	計		研究指導教員数	研究指導補助教員数	研究指導教員数	研究指導補助教員数							
			特任等(内数)	特任等(内数)	特任等(内数)	特任等(内数)	特任等(内数)												
工学研究科	電気電子工学専攻	前期課程	7	-	2	-	-	-	9	-	-	9	(7)	-	4	(3)	3	5	-
		後期課程	7	-	2	-	-	-	9	-	-	6	(6)	3	4	(3)	3	-	-
	応用化学専攻	前期課程	7	-	1	-	1	-	9	-	-	8	(7)	1	4	(3)	3	3	-
		後期課程	6	-	1	-	-	-	7	-	-	5	(5)	2	4	(3)	3	-	-
	機械工学専攻	前期課程	6	1	3	-	-	-	9	1	-	8	(5)	1	4	(3)	3	5	-
		後期課程	5	-	3	-	-	-	8	-	-	5	(5)	3	4	(3)	3	-	RA: 1
	情報処理専攻	前期課程	8	-	3	-	-	-	11	-	-	11	(8)	-	4	(3)	3	4	-
		後期課程	8	-	2	-	-	-	10	-	-	8	(8)	2	4	(3)	3	-	-
	物理情報工学専攻	前期課程	10	-	-	-	-	-	10	-	-	10	(10)	-	4	(3)	3	3	-
		後期課程	10	-	-	-	-	-	10	-	-	8	(8)	2	4	(3)	3	-	-
計	前期課程	38	1	9	-	1	-	48	1	-	46	(37)	2	20	(15)	15	20	-	
	後期課程	36	-	8	-	-	-	44	-	-	32	(32)	12	20	(15)	15	-	RA: 1	
経済経営研究科	経済学専攻	前期課程	15	3	5	-	-	-	20	3	-	20	(15)	-	5	(4)	4	17	-
		後期課程	15	3	-	-	-	-	15	3	-	15	(15)	-	5	(4)	4	-	-
	経営学専攻	前期課程	13	-	6	-	-	-	19	-	-	19	(13)	-	5	(4)	4	17	-
		後期課程	13	-	-	-	-	-	13	-	-	13	(13)	-	5	(4)	4	-	-
計	前期課程	28	3	11	-	-	-	39	3	-	39	(28)	-	10	(8)	8	34	-	
	後期課程	28	3	-	-	-	-	28	3	-	28	(28)	-	10	(8)	8	-	-	
法学政治学研究科	法学専攻	前期課程	6	-	7	-	1	-	14	-	-	13	(6)	1	5	(4)	5	-	-
		後期課程	6	-	7	-	-	-	13	-	-	5	(5)	8	5	(4)	5	-	-
	政治学専攻	前期課程	12	-	1	-	-	-	13	-	-	13	(12)	-	3	(2)	3	-	-
		後期課程	12	-	1	-	-	-	13	-	-	12	(12)	1	3	(2)	3	-	-
計	前期課程	18	-	8	-	1	-	27	-	-	26	(18)	1	8	(6)	8	-	-	
	後期課程	18	-	8	-	-	-	26	-	-	17	(17)	9	8	(6)	8	-	-	

(表19-3)

研究科・専攻・課程			専任教員数					助手	専任教員のうち			設置基準上必要専任教員数		兼任教員数	備考					
			教授	准教授	講師	助教	計		研究指導教員数	研究指導補助教員数	研究指導助数	研究指導教員数	研究指導補助教員数							
			特任等(内数)	特任等(内数)	特任等(内数)	特任等(内数)	特任等(内数)													
文学研究科	英米文学専攻	前期課程	8	-	4	-	-	-	12	-	-	8	(7)	4	3	(2)	2	1	-	
		後期課程	7	-	-	-	-	-	-	7	-	-	4	(4)	3	3	(2)	2	1	-
	日本文学専攻	前期課程	6	-	2	-	-	-	-	8	-	-	6	(6)	2	3	(2)	2	5	-
		後期課程	6	-	-	-	-	-	-	6	-	-	4	(4)	2	3	(2)	2	5	-
	社会文化論専攻	前期課程	14	3	4	-	-	-	-	18	3	-	14	(14)	4	3	(2)	2	-	-
		後期課程	10	-	-	-	-	-	-	10	-	-	6	(6)	4	3	(2)	2	-	-
計	前期課程	28	3	10	-	-	-	-	38	3	-	28	(27)	10	9	(6)	6	6	-	
	後期課程	23	-	-	-	-	-	-	23	-	-	14	(14)	9	9	(6)	6	6	-	
経営学研究科	経営学専攻	前期課程	13	-	6	-	-	-	19	-	-	19	(13)	-	5	(4)	4	-	-	
		後期課程	13	-	-	-	-	-	13	-	-	13	(13)	-	5	(4)	4	-	-	
合計	前期課程	125	7	44	-	2	-	-	171	7	-	158	(123)	13	52	(39)	41	60	-	
	後期課程	118	3	16	-	-	-	-	134	3	-	104	(104)	30	52	(39)	41	6	RA:1	

() 内は教授の数を内数で示す。

- [注] 1 専任教員については、(表19)のうち、大学院研究科の教育を担当する専任教員について専攻、課程ごとに記入してください。
- 2 専門職大学院については、既存の研究科の1専攻として置かれている場合であっても、次表(表19-4)により別に作表してください。
- 3 「専任教員数」欄には、学部・学科等の専任で、たとえば、その学部・学科等に基礎を置く当該研究科・専攻等においても専任として授業を担当している常勤教員数も含めて記入してください。その場合、前表(19-2)の専任教員が、本表にも専任教員に算入されます。
- 4 教育組織と教員組織が異なる場合も、大学院設置基準等における必要専任教員数に留意して大学院研究科の教育を担当する専任教員数を適切に記入してください。
- 5 「大学の教員等の任期に関する法律」に基づく任期制教員を除き、特任教授、客員教授など任用期間のある教員については、専任者(研究条件等において専任教員と同等の者)のみを「専任教員数」欄の「教授」「准教授」「講師」「助教」の該当する欄(左側)に含めて記入するとともに、その数を「特任等(内数)」欄に内数で示してください。専任者以外の特任者等については「兼任教員数」欄に含めて記入してください。
- 6 「研究指導教員」とは、大学院設置基準第9条第1項各号に掲げる資格を有する教員を指し、「研究指導補助教員」とは、研究指導の補助を行い得る教員を指しません。
- 7 「研究指導教員数」欄の()には、教授の数を内数で記入してください。
- 8 「専任教員数」欄については、本表内では1人の専任教員を同一の課程に重複して算入しないでください。1人の専任教員を修士課程と博士課程の両課程においてそれぞれ1専攻に限り専任とすることはできますが、どちらか一方の課程において、複数の専攻の専任とすることはできませんので、留意してください。
- 9 「兼任教員数」欄には、学外からのいわゆる非常勤教員数を記入してください。なお、国立大学所属教員については、「兼任」「兼任」を共に「併任」としている場合もありますが、学外からの併任者は「兼任教員数」欄に記入してください。
- 同一の兼任教員が複数の学科を担当する場合は、それぞれ記入してください(重複可)。大学の状況によっては、兼任教員数の欄は専攻ごとではなく研究科全体で記入しても結構です。
- 10 「設置基準上必要専任教員数」欄には、「大学院に専攻ごとに置くものとする教員の数について定める件」(平成11年文部省告示第175号)により算出した数値を記入してください。同表に基づかない算出方法により設置認可を得ている場合にはその数値を記入するとともに備考欄にその旨を記述してください。
- 11 「助手」欄には、学部・学科等の専任で大学院研究科の業務にも従事している助手数も含めて記入してください。
- 12 専任教務補助員(例えば、いわゆる副手、実験補助員等)、ティーチング・アシスタント(TA)、リサーチ・アシスタント(RA)については、「備考」欄にその各々の名称と人数を記入してください。

1-4 専門職大学院の教員組織

(表19-4)

法務研究科・法務専攻 (専門職)		専任教員数										助手	設置基準上 必要専任教員数	専任教員1 人当たりの 在籍学生数	兼任 教員数	備考
		教授		准教授		講師		助教		計						
		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)		特任等 (内数)						
専任教員の内訳	専任教員	9	4	-	-	-	-	-	-	9	4	-	/			
	専任(兼任)教員	2	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-				
	実務家教員	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-				
	(みなし専任教員)	6	6	-	-	-	-	-	-	6	6	-				
合計		18	10	-	-	-	-	-	-	18	10	-	12	8.6	35	

専任教員に占める 教授の比率 (%)	100.0%
-----------------------	--------

専任教員に占める 実務家教員の比率 (%)	5.6%
--------------------------	------

- [注] 1 専任教員の内訳については、次の定義・名称によって作表してください。
- ①「専任教員」：当該専門職大学院の専任教員であって、下記②～④以外の者
 - ②専任(兼任)教員：専門職大学院設置基準附則2により、当該大学院の専任教員であって、他学部・他研究科また当該大学院を1専攻として開設している研究科の他専攻の専任でもある者。ただし、博士課程の専任に算入している教員は除く。
 - ③「実務家教員」：当該大学院の専任教員であって、平成15年文部科学省告示第53号第2条第1項に規定する実務経験と実務能力を有する者
- 2 「大学の教員等の任期に関する法律」に基づく任期制教員を除き、特任教授、客員教授など任用期間のある教員については、専任者(教育研究条件等において専任教員と同等の者)のみを「専任教員数」の欄の「教授」「准教授」「講師」「助教」の該当する欄(左側)に含めて記入するとともに、その数を「特任等(内数)」欄に内数で示してください。専任者以外の特任者等については記入しないでください。
 - 3 「設置基準上必要専任教員数」欄には、「専門職大学院に関し必要な事項について定める件」(平成15年文部科学省告示第53号)により算出した数値を記入してください。同表に基づかない算出方法により設置認可を得ている場合にはその数値を記入するとともに備考欄にその旨を記述してください。
 - 4 「兼任教員数」欄には、学外からのいわゆる非常勤教員数を記入してください。なお、国立大学所属教員については、「兼任」「兼任」を共に「併任」としている場合もありますが、学外からの併任者は「兼任教員数」欄に記入してください。
 - 5 「助手」欄には、学部・学科等の専任で専門職大学院の業務にも従事している助手数も含めて記入してください。
 - 6 専任教務補助員等については、「備考」欄にその各々の名称と人数を記入してください。

1-5 事務組織

(表19-5)

	部署名	専任職員		常勤嘱託職員	兼務職員	派遣職員	その他	計
			うち管理職					
法人業務系	学園	-	-	3	-	-	-	3
	総務部	9	3	-	-	-	-	9
	総務課	7	1	1	-	-	-	8
	人事課	7	1	1	-	2	-	10
	広報課	4	1	1	-	3	-	8
	募金課	2	1	2	-	2	-	6
	小計	29	7	5	-	7	-	41
	財務部	1	1	-	-	-	-	1
	経理課	6	1	4	-	1	-	11
	管財課	12	2	1	-	2	-	15
	小計	19	4	5	-	3	-	27
	健康支援センター	-	-	-	-	-	-	-
	健康支援センター事務室 [※]	1	1	-	-	-	-	1
	小計	1	1	-	-	-	-	1
	国際教育センター	-	-	-	-	-	-	-
	国際課	5	1	1	-	1	-	7
	小計	5	1	1	-	1	-	7
	学園情報センター	-	-	-	-	-	-	-
	情報システム課	8	1	5	-	12	-	25
	小計	8	1	5	-	12	-	25
	内部監査室	2	1	-	-	-	-	2
計	64	15	19	-	23	-	106	

(表19-5)

	部署名	専任職員	常勤嘱託職員		兼務職員	派遣職員	その他	計
			うち管理職					
大学業務系	企画運営部	1	1	-	-	-	-	1
	企画運営課	7	1	2	-	8	-	17
	研究助成課	10	1	4	-	6	-	20
	小計	18	3	6	-	14	-	38
	学務部	1	1	-	-	-	-	1
	授業課	12	1	4	-	2	-	18
	履修課	9	2	7	1	2	-	19
	小計	22	4	11	1	4	-	38
	学生相談室	1	-	1	1	-	-	3
	学生部	-	-	-	-	-	-	-
	学生生活課	5	1	3	-	4	-	12
	大学保健室※	1	1	-	-	-	-	1
	小計	6	2	3	-	4	-	13
	図書館	-	-	-	-	-	-	-
	図書館事務室	7	1	12	-	17	-	36
	小計	7	1	12	-	17	-	36
	キャリア支援センター	1	1	-	-	-	-	1
	キャリア支援センター事務室	6	1	2	-	3	-	11
	小計	7	2	2	-	3	-	12
	入試センター	-	-	-	-	-	-	-
入試センター事務室	9	1	2	-	2	-	13	
小計	9	1	2	-	2	-	13	
計	70	13	37	2	44	-	153	
合計	134	28	56	2	67	-	259	

[注]1 それぞれの部署について、業務の内容から「法人業務系」と「大学業務系」に大別して記載してください。

2 「専任職員」欄には、期間の定めのない雇用で、常時勤務している職員数を、「常勤嘱託職員」欄には、期間の定めはあるが、専任職員に準じた雇用形態をとっている職員数を、「兼務職員」欄には、雇用期間が6カ月以上の職員数を、「派遣職員」欄には、労働者派遣契約を締結することにより受け入れている職員数をそれぞれ記入してください。

なお、いずれにも該当しない職員については、「その他」欄に記入してください。

3 部長・次長など「課」に属さない職員は、「部」でまとめて記入してください。

4 部単位に「小計」、各系ごとに「計」を入れ、それぞれ集計してください。

5 「助手」は、「教員組織」(表19～表19-4)に記入してください。

※ 健康支援センター事務室及び大学保健室所属の専任職員(1名)は、兼務発令に基づき同一人物。

2 専任教員個別表

経済学部

(表20)

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	相原 修	男	59	1977. 4. 1	1986. 4. 1	経済経営 学科	企業経営入門		2.0					0.0	2.0	有	一橋大学大学院 商学研究科 商学修士		
							現代の社会問題		2.0				0.0	2.0					
							マーケティング	2.0					2.0	0.0					
							流通システム		2.0				0.0	2.0					
							応用発展演習1 (1)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習2 (1)				2.0		0.0	2.0					
							卒業研究 (1)			1.0	1.0		1.0	1.0					
							△ 経営総合演習1			2.0			2.0	0.0					
							△ 経営総合演習2				2.0		0.0	2.0					
							△ マーケティング研究	2.0					2.0	0.0					
計							4.0	6.0	5.0	5.0	0.0	0.0	9.0	11.0	10.0				
教授	井出 多加子	女	50	1992. 4. 1	2000. 4. 1	経済経営 学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	有	慶應義塾大学経 済学研究科博士 課程後期 博士 (経済学)		
							インターンシップ準備セミナー(公共)	2.0					2.0	0.0					
							経済のしくみと制度	2.0					2.0	0.0					
							ビジネスエコノミクス	2.0					2.0	0.0					
							総合経済分析2	2.0					2.0	0.0					
							計	8.0	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	10.0	0.0			5.0	
教授	伊藤 克容	男	38	2001. 4. 1	2007. 4. 1	経済経営 学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	有	一橋大学大学院 商学研究科博士 後期課程単位修 得 修士 (商学)		
							会社入門	2.0					2.0	0.0					
							コース演習C (4)			2.0			2.0	0.0					
							管理会計	2.0					2.0	0.0					
							応用発展演習1 (2)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習2 (2)				2.0		0.0	2.0					
							企業会計入門 (4)		2.0				0.0	2.0					
							戦略支援システム		2.0				0.0	2.0					
							卒業研究 (2)			1.0	1.0		1.0	1.0					
							△ 企業経営基礎研究1	2.0					2.0	0.0					
計							6.0	4.0	7.0	3.0	0.0	0.0	13.0	7.0	10.0				
教授	井上 智夫	男	41	1997. 9. 24	2004. 10. 1	経済経営 学科	応用発展演習1 (3)			2.0				2.0	0.0	有	Department of Economics, University of California, San Diego Ph. D. (Economics)		
							応用発展演習2 (3)				2.0		0.0	2.0					
							経済のしくみと制度	2.0					2.0	0.0					
							データ分析2	2.0					2.0	0.0					
							データ分析3		2.0				0.0	2.0					
							マクロ経済学入門		2.0				0.0	2.0					
							△ エコノメトリクス基礎研究	2.0					2.0	0.0					
							△ マクロエコノミクス基礎研究		2.0				0.0	2.0					
計	6.0	6.0	2.0	2.0	0.0	0.0	8.0	8.0	8.0										
教授	上田 泰	男	47	1998. 4. 1	1998. 4. 1	経済経営 学科	※ 在外研究のため、開講科目なし							-	-	有	一橋大学大学院 商学研究科博士 後期課程単位取 得 博士(経済学)		
													-	-					
							計	-	-	-	-	-	-	-	-				

経済学部

(表20)

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	うちだ ひでみ 内田 日出海	男	55	2000.4.1	2000.4.1	経済経営学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	9.0	有	早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学博士 (歴史学)	
							国際商業史	2.0					2.0	0.0					
							応用発展演習1 (4)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習2 (4)				2.0		0.0	2.0					
							中世ヨーロッパ経済	2.0					2.0	0.0					
							近現代ヨーロッパ経済		2.0				0.0	2.0					
							比較経済史		2.0				0.0	2.0					
							地域経済史		2.0				0.0	2.0					
							卒業研究 (3)			1.0	1.0		1.0	1.0					
計	4.0	6.0	5.0	3.0	0.0	0.0	9.0	9.0											
教授	おたの やすのぶ 太田 康信	男	60	2001.4.1	2001.4.1	経済経営学科	現代ファイナンス入門	2.0					2.0	0.0	11.0	有	慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了(満期退学)経済学修士(理論経済学専攻)米国Northwestern大学経営大学院修士課程Master of Science		
							応用発展演習1 (5)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習2 (5)				2.0		0.0	2.0					
							コース演習C (1)				2.0		0.0	2.0					
							コーポレート・ファイナンス		2.0				0.0	2.0					
							人間と経済活動	2.0					2.0	0.0					
							社会と経済		2.0				0.0	2.0					
							△コーポレートファイナンス研究	2.0					2.0	0.0					
							△経営総合演習1			2.0			2.0	0.0					
							△経営総合演習2				2.0		0.0	2.0					
							△証券市場研究		2.0				0.0	2.0					
計	6.0	6.0	4.0	6.0	0.0	0.0	10.0	12.0											
教授	おおにし まさいちろう 大西 雅一郎	男	52	1991.4.1	2001.4.1	一般教育等	基礎演習 (A)			2.0			2.0	0.0	10.0	無	東京大学人文科学研究科仏語仏文学修士課程文学修士		
							基礎演習 (B)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習1 (6)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習2 (6)				2.0		0.0	2.0					
							総合科目I(ヨーロッパ、都市から読む現代思想)	2.0					2.0	0.0					
							フランス文化演習A (2)			2.0			2.0	0.0					
							フランス文化演習B (2)				2.0		0.0	2.0					
							フランス語会話入門 I (99)		2.0				0.0	2.0					
							フランス語会話入門 II (99)	2.0					2.0	0.0					
							卒業研究 (4)			1.0	1.0		1.0	1.0					
計	4.0	2.0	9.0	5.0	0.0	0.0	13.0	7.0											
教授	おおまち けん 大町 健	男	55	1995.4.1	1998.4.1	教職課程	基礎演習 (A)			2.0			2.0	0.0	10.0	無	東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程文学博士		
							日本の歴史1	2.0					2.0	0.0					
							日本の歴史2		2.0				0.0	2.0					
							歴史学と現代		2.0				0.0	2.0					
							日本史概論	2.0	2.0				2.0	2.0					
							社会科教育法A	2.0					2.0	0.0					
							社会科・地理歴史科教育法	2.0					2.0	0.0					
							地理歴史科教育法		2.0				0.0	2.0					
							教職総合演習d				2.0		0.0	2.0					
							計	8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0				10.0	

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	小田 宏信	男	42	2004. 4. 1	2006. 4. 1	経済経営 学科	産業と立地	2.0						2.0	0.0	10.0	有	筑波大学大学院 博士課程地球科学 研究科地理学 専攻 博士（理学）	
							経済地理		2.0					0.0	2.0				
							応用発展演習1 (7)			2.0				2.0	0.0				
							応用発展演習2 (7)				2.0			0.0	2.0				
							卒業研究 (5)			1.0	1.0			1.0	1.0				
							地理と文化	2.0						2.0	0.0				
							地理学と地域		2.0					0.0	2.0				
							人文地理学	2.0						2.0	0.0				
							人文地理学A	2.0						2.0	0.0				
							人文地理学B		2.0					0.0	2.0				
計	8.0	6.0	3.0	3.0	0.0	0.0	11.0	9.0											
教授	川越 俊彦	男	53	1991. 4. 1	1993. 4. 1	経済経営 学科	資源と開発の経済学		2.0					0.0	2.0	9.0	有	北海道大学農学部 農業経済学科 農学博士	
							経済発展	2.0					2.0	0.0					
							応用発展演習1 (8)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習2 (8)				2.0		0.0	2.0					
							卒業研究 (6)			1.0	1.0		1.0	1.0					
							応用発展特殊講義 (経済経営ワークショップ)		2.0				0.0	2.0					
							International Studies Seminar I			2.0			2.0	0.0					
							情報分析演習2				2.0		0.0	2.0					
							マルチメディアプレゼンテーション1	2.0					2.0	0.0					
							計	4.0	4.0	5.0	5.0	0.0	0.0	9.0	9.0				
教授	河路 武志	男	41	1995. 4. 1	2006. 4. 1	経済経営 学科	企業会計入門 (1)		2.0					0.0	2.0	11.0	有	早稲田大学大学院 商学研究科後 期博士課程単 位取得退学 修士（商学）	
							現代の社会問題		2.0					0.0	2.0				
							コース演習C (3)				2.0			0.0	2.0				
							コース特殊講義D(資本市場の役割と証券投資)			2.0				0.0	2.0				
							基本簿記	2.0						2.0	0.0				
							応用発展演習1 (9)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習2 (9)				2.0		0.0	2.0					
							卒業研究 (7)			1.0	1.0		1.0	1.0					
							ビジネスゲーム	2.0						2.0	0.0				
							△ 経済経営基礎演習			2.0				2.0	0.0				
							△ 管理会計研究		2.0					0.0	2.0				
							計	4.0	8.0	5.0	5.0	0.0	0.0	9.0	13.0				
教授	北川 浩	男	48	1989. 4. 1	1999. 4. 1	経済経営 学科	キャリアプランニング1 (2)	2.0						2.0	0.0	9.6	有	一橋大学大学院 経済学研究科博 士後期課程単 位取得退学 経済学修士	
							キャリアプランニング1 (3)	2.0						2.0	0.0				
							インターンシップ準備セミナー (ビジネス)	0.7						0.7	0.0				
							公共インターンシップ						2.0	0.0	2.0				
							マクロ経済学入門		2.0					0.0	2.0				
							コース演習D (2)				2.0			0.0	2.0				
							応用発展演習1 (10)			2.0				2.0	0.0				
							応用発展演習2 (10)				2.0			0.0	2.0				
							卒業研究 (8)			1.0	1.0			1.0	1.0				
							インターンシップI						0.4	0.4	0.0				
							インターンシップII						2.0	0.0	2.0				
計	4.7	2.0	3.0	5.0	0.4	4.0	8.1	11.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目								年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実習・実技		計				
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期									
教授	近藤 正	男	59	1992. 4. 1	1992. 4. 1	一般教育等	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	無	南イリノイ大学 哲学部博士課程 満期退学 文学修士 (MA)
							地域研究2 (ニューヨークとニューイングランド)		2.0					0.0	2.0			
							英語1 (109)	2.0						2.0	0.0			
							英語2 (109)		2.0					0.0	2.0			
							英語5 (308)	2.0						2.0	0.0			
							英語5 (309)	2.0						2.0	0.0			
							英語6 (308)		2.0					0.0	2.0			
							英語6 (309)		2.0					0.0	2.0			
							英語文化コミュニケーション演習A (3)	2.0						2.0	0.0			
							英語文化コミュニケーション演習B (3)		2.0					0.0	2.0			
計	8.0	10.0	2.0	0.0	0.0	0.0	10.0	10.0										
教授	カルト サブストラック	男	58	1993. 4. 1	1999. 4. 1	経済経営学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	Sophia University, Tokyo Japan M. A. in International Relations and Comparative Culture M. A.
							基礎演習 (B)			2.0				2.0	0.0			
							英語文化・コミュニケーション演習A (2)			2.0				2.0	0.0			
							英語文化・コミュニケーション演習B (2)				2.0			0.0	2.0			
							オーラル・イングリッシュ Ia	2.0						2.0	0.0			
							オーラル・イングリッシュ Ib		2.0					0.0	2.0			
							Debate I (1)	2.0						2.0	0.0			
							Debate I (2)	2.0						2.0	0.0			
							Debate II (1)		2.0					0.0	2.0			
							Debate III (2)		2.0					0.0	2.0			
計	6.0	6.0	6.0	2.0	0.0	0.0	12.0	8.0										
教授	新村 秀一	男	60	1996. 4. 1	1996. 4. 1	経済経営学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	京都大学理学部 数学科 理学博士 (論文 博士)
							応用発展演習1 (12)			2.0				2.0	0.0			
							応用発展演習2 (12)				2.0			0.0	2.0			
							卒業研究 (10)			1.0	1.0			1.0	1.0			
							マネジメント・サイエンス	2.0						2.0	0.0			
							応用発展特殊講義 (マネジメント・サイエンス2)		2.0					0.0	2.0			
							情報科学 II (1)	2.0						2.0	0.0			
							情報科学 II (2)		2.0					0.0	2.0			
							統計学	2.0						2.0	0.0			
							△ データ分析基礎研究	2.0						2.0	0.0			
計	8.0	4.0	5.0	3.0	0.0	0.0	13.0	7.0										
教授	鈴木 絢治	男	65	1968. 4. 1	1981. 4. 1	一般教育等	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	無	東京外国語大学 外国語学研究所 ゲルマン系言語 専攻修士課程 文学修士
							基礎演習 (B)			2.0				2.0	0.0			
							英語5 (304)	2.0						2.0	0.0			
							英語5 (305)	2.0						2.0	0.0			
							英語5 (306)	2.0						2.0	0.0			
							英語5 (307)	2.0						2.0	0.0			
							英語6 (304)		2.0					0.0	2.0			
							英語6 (305)		2.0					0.0	2.0			
							英語6 (306)		2.0					0.0	2.0			
							英語6 (307)		2.0					0.0	2.0			
計	8.0	8.0	4.0	0.0	0.0	0.0	12.0	8.0										

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	すずき 鈴木 滋	男	59	1987. 4. 1	1994. 4. 1	一般教育 等	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	11.0	有	筑波大学体育研 究科コーチ学専 攻修士課程修了 体育学修士	
							スポーツと社会			2.0				0.0	2.0				
							生涯スポーツの基礎			2.0				0.0	2.0				
							身体文化とスポーツ演習1					2.0		2.0	0.0				
							身体文化とスポーツ演習2						2.0	0.0	2.0				
							身体文化とスポーツ演習11					2.0		2.0	0.0				
							コーチングの基礎			2.0				0.0	2.0				
							スポーツとビジネス	2.0						2.0	0.0				
							応用発展演習1 (13)			2.0				2.0	0.0				
							応用発展演習2 (13)				2.0			0.0	2.0				
卒業研究 (11)				1.0	1.0			1.0	1.0										
計							2.0	6.0	5.0	3.0	4.0	2.0	11.0	11.0					
教授	たかはし 高橋 史郎	男	44	1991. 4. 1	2000. 4. 1	経済経営 学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	一橋大学大学院 商学研究科経営 学および会計学 専攻博士後期課 程満期退学 商学修士	
							企業会計入門 (2)			2.0				0.0	2.0				
							コース特殊講義A (非営利法人の事業と会計)			2.0				0.0	2.0				
							コース演習D (1)				2.0			0.0	2.0				
							コース特殊講義D (国際会計2)			2.0				0.0	2.0				
							国際会計	2.0						2.0	0.0				
							応用発展演習1 (15)			2.0				2.0	0.0				
							応用発展演習2 (15)				2.0			0.0	2.0				
							卒業研究 (12)				1.0	1.0		1.0	1.0				
							△財務会計研究	2.0						2.0	0.0				
計							4.0	6.0	5.0	5.0	0.0	0.0	9.0	11.0					
教授	なかがみ 中神 康博	男	51	1992. 4. 1	1996. 4. 1	経済経営 学科	マクロ経済学入門			2.0				0.0	2.0	9.0	有	University of California, San Diego Ph. D.	
							企業と市場			2.0				0.0	2.0				
							土地と住宅の経済学	2.0						2.0	0.0				
							地方公共政策	2.0						2.0	0.0				
							応用発展演習1 (17)			2.0				2.0	0.0				
							応用発展演習2 (17)				2.0			0.0	2.0				
							卒業研究 (14)			1.0	1.0			1.0	1.0				
							△経済経営基礎演習			2.0				2.0	0.0				
							△地方公共政策研究			2.0				0.0	2.0				
							計							4.0	6.0				5.0
教授	なかにし 中西 寛子	女	51	1988. 4. 1	1997. 4. 1	経済経営 学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	8.5	有	北海道大学大学 院工学研究科情 報工学専攻博士 後期課程 工学博士	
							総合科目I(Thinking" ECO" -環境を考え、取り組む-)			0.2				0.0	0.2				
							データ分析1			2.0				0.0	2.0				
							統計学基礎 (1)	2.0						2.0	0.0				
							行列 (1)	2.0						2.0	0.0				
							行列 (2)			2.0				0.0	2.0				
							情報分析演習1			2.0				2.0	0.0				
							情報分析演習3 (2)			2.0				2.0	0.0				
							情報分析演習4 (2)				2.0			0.0	2.0				
							△学際分野特殊研究 (データの科学)			0.7				0.0	0.7				
計							4.0	4.9	6.0	2.0	0.0	0.0	10.0	6.9					

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期										
教授	なりみち 成道 秀雄	男	57	1988.10.1	1994.4.1	経済経営 学科	企業会計入門 (3)		2.0					0.0	2.0	10.0	有	成蹊大学大学院 経営学研究科博 士後期課程満期 退学 経営学修士	
							応用発展演習1 (18)			2.0				2.0	0.0				
							応用発展演習2 (18)				2.0			0.0	2.0				
							卒業研究 (15)			1.0	1.0			1.0	1.0				
							税務会計		2.0					0.0	2.0				
							租税法	2.0						2.0	0.0				
							応用発展特殊講義 (租税法 II)		2.0					0.0	2.0				
							応用発展特殊講義 (制度と会計)	2.0						2.0	0.0				
							△ 経営総合演習1 (3)			2.0				2.0	0.0				
							△ 経営総合演習2 (3)				2.0			0.0	2.0				
計							4.0	6.0	5.0	5.0	0.0	0.0	9.0	11.0					
教授	にしふじ 西藤 洋	男	64	1973.4.1	1983.4.1	経済経営 学科	コース特殊講義E (公共経済1)	2.0						2.0	0.0	10.0	有	東京大学大学院 経済学研究科理 論経済学専攻博 士課程満期退学 経済学修士	
							コース特殊講義E (公共経済2)		2.0					0.0	2.0				
							コース特殊講義E (会社法とコーポレート・ガバナンス)		2.0					0.0	2.0				
							法と経済	2.0						2.0	0.0				
							応用発展演習1 (19)			2.0				2.0	0.0				
							応用発展演習2 (19)				2.0			0.0	2.0				
							卒業研究 (16)			1.0	1.0			1.0	1.0				
							現代の経済a	2.0						2.0	0.0				
							現代の経済b		2.0					0.0	2.0				
							△ ミクロエコノミクス基礎研究	2.0						2.0	0.0				
計							8.0	6.0	3.0	3.0	0.0	0.0	11.0	9.0					
教授	はしもと 橋本 綱	女	64	1976.4.1	1983.4.1	一般教育 等	フランス語入門 I (1)	2.0						2.0	0.0	10.0	無	東京大学大学院 人文科学研究科 仏語仏文課程修 士課程 文学修士	
							フランス語入門 II (1)		2.0					0.0	2.0				
							フランス語入門 I (2)	2.0						2.0	0.0				
							フランス語入門 II (2)		2.0					0.0	2.0				
							フランス語入門 I (3)	2.0						2.0	0.0				
							フランス語入門 II (3)		2.0					0.0	2.0				
							フランス語入門 I (99)		2.0					0.0	2.0				
							フランス語入門 II (99)	2.0						2.0	0.0				
							フランス文化演習A (1)			2.0				2.0	0.0				
							フランス文化演習B (1)				2.0			0.0	2.0				
計							8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	10.0					
教授	ひらお 平尾 由紀子	女	52	1994.9.24	1997.4.1	経済経営 学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	ベトナム大学 大学院経済学博 士課程 Ph. D. (Economics)	
							ミクロ経済学入門	2.0						2.0	0.0				
							企業と市場		2.0					0.0	2.0				
							企業と産業の国際戦略		2.0					0.0	2.0				
							企業と産業の経済学	2.0						2.0	0.0				
							貿易の経済学	2.0						2.0	0.0				
							ゲーム理論		2.0					0.0	2.0				
							Media English	2.0						2.0	0.0				
							ミクロ経済学基礎		2.0					0.0	2.0				
							△ 産業組織と企業戦略		2.0					0.0	2.0				
計							8.0	10.0	2.0	0.0	0.0	0.0	10.0	10.0					

経済学部

(表20)

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期										
教授	みづがき 芳文	男	54	1981.4.1	1990.4.1	経済経営学科	ミクロ経済学入門	2.0						2.0	0.0	10.1	有	一橋大学大学院 経済学研究科 経済学修士	
							企業と市場			2.0					0.0				2.0
							現代の社会問題			2.0					0.0				2.0
							日本の環境政策			2.0					0.0				2.0
							政府と市場	2.0							2.0				0.0
							財政政策			2.0					0.0				2.0
							応用発展演習1 (21)				2.0				2.0				0.0
							応用発展演習2 (21)					2.0			0.0				2.0
							卒業研究 (19)			1.0	1.0				1.0				1.0
							総合科目I(Thinking" ECO" -環境を考え、取り組む-)			0.2					0.0				0.2
△公共経済学研究	2.0							2.0	0.0										
計							6.0	8.2	3.0	3.0	0.0	0.0	9.0	11.2					
教授	まつもと 貴典	男	46	1990.4.1	1999.4.1	経済経営学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	大阪大学大学院 経済学研究科博士 後期課程中途退学 博士 (経済学)	
							コース特殊講義E(バブルと平成不況の経済史)				2.0			0.0	2.0				
							近代日本経済史	2.0						2.0	0.0				
							現代日本経済史			2.0				0.0	2.0				
							応用発展演習1 (22)				2.0			2.0	0.0				
							応用発展演習2 (22)					2.0		0.0	2.0				
							卒業研究 (20)			1.0	1.0			1.0	1.0				
							数量経済史	2.0						2.0	0.0				
							△経済経営史基礎研究					2.0		2.0	0.0				
							△日本経済分析基礎研究						2.0	0.0	2.0				
計							4.0	2.0	7.0	7.0	0.0	0.0	11.0	9.0					
教授	みやわき 俊文	男	54	1989.4.1	1993.4.1	一般教育等	外国の文学と思想I(ジャズとアメリカ文学)		2.0					0.0	2.0	5.0	有	上智大学大学院 文学研究科英米 文学専攻修士課程 文学修士	
							英語文化コミュニケーション演習B (1)				2.0			0.0	2.0				
							International Studies Seminar II				2.0			0.0	2.0				
							風俗の社会学		2.0					0.0	2.0				
							△Advanced Media English		2.0					0.0	2.0				
計							0.0	6.0	0.0	4.0	0.0	0.0	0.0	10.0					
教授	むとう 恭彦	男	60	1988.4.1	1988.4.1	経済経営学科	経済のしくみと制度 (4)	2.0						2.0	0.0	7.0	有	ジュネーブ大学 国際研究所博士 課程修了 Docteur es science politique	
							ミクロ経済学入門 (3)	2.0						2.0	0.0				
							金融の経済学			2.0				0.0	2.0				
							国際マクロ経済学			2.0				0.0	2.0				
							国際金融制度	2.0						2.0	0.0				
							応用発展演習1 (24)				2.0			2.0	0.0				
							応用発展演習2 (24)					2.0		0.0	2.0				
計							6.0	4.0	2.0	2.0	0.0	0.0	8.0	6.0					

経済学部

(表20)

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	よしむら 義村	あつこ 敦子	女	47	1997. 4. 1	2004. 10. 1	経済経営学科	会社入門	2.0						2.0	0.0	10.0	有	慶応義塾大学商学研究科博士課程博士(商学)
								現代の社会問題			2.0				0.0	2.0			
								コース演習B(2)				2.0			2.0	0.0			
								人間行動と組織	2.0						2.0	0.0			
								人的資源管理			2.0				0.0	2.0			
								人事政策	2.0						2.0	0.0			
								応用発展演習1(28)				2.0			2.0	0.0			
								応用発展演習2(28)					2.0		0.0	2.0			
								卒業研究(25)				1.0	1.0		1.0	1.0			
								△企業経営基礎研究2				2.0			0.0	2.0			
計	6.0	6.0	5.0	3.0	0.0	0.0	11.0	9.0											
特別任用教授	こうむら 幸村	ちかから 千佳良	男	65	1980. 4. 1	2008. 4. 1	経済経営学科	経済のしくみと制度	2.0					2.0	0.0	9.0	有	米国ペンシルヴァニア州立大学大学院経済学博士課程Ph. D.	
								マクロ経済学入門			2.0			0.0	2.0				
								現代の日本経済	2.0					2.0	0.0				
								日本の金融政策			2.0			0.0	2.0				
								応用発展演習1(11)				2.0		2.0	0.0				
								応用発展演習2(11)					2.0	0.0	2.0				
								卒業研究(9)				1.0	1.0	1.0	1.0				
								応用発展特殊講義(成長と循環2)			2.0			0.0	2.0				
								マクロ経済学基礎	2.0					2.0	0.0				
計	6.0	6.0	3.0	3.0	0.0	0.0	9.0	9.0											
特別任用教授	たかぎ 高木	しんたろう 新太郎	男	66	1972. 4. 1	2007. 4. 1	経済経営学科	環境経済学	2.0					2.0	0.0	6.1	有	慶応義塾大学大学院経済学研究科理論経済学専攻博士課程満期退学経済学修士	
								教育の経済学	2.0					2.0	0.0				
								応用発展演習1(14)			2.0			2.0	0.0				
								応用発展演習2(14)				2.0		0.0	2.0				
								総合科目I(Thinking"ECO"-環境を考え、取り組む-)			0.2			0.0	0.2				
								演習Ⅲ(99)				2.0		2.0	0.0				
								演習Ⅳ(99)					2.0	0.0	2.0				
計	4.0	0.2	4.0	4.0	0.0	0.0	8.0	4.2											
特別任用教授	わたなべ 渡辺	けんいち 健一	男	66	1972. 4. 1	2007. 4. 1	経済経営学科	基礎演習(A)	2.0					2.0	0.0	6.0	有	東京大学理学系研究科化学専攻修士課程理学修士	
								コース特殊講義E(世界経済1)	2.0					2.0	0.0				
								コース特殊講義E(世界経済2)			2.0			0.0	2.0				
								応用発展演習1(29)				2.0		2.0	0.0				
								応用発展演習2(29)					2.0	0.0	2.0				
								演習マクロ経済学(2)					2.0	0.0	2.0				
								計	4.0	2.0	2.0	4.0	0.0	0.0	6.0				6.0

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
准教授	井上 潔司	男	36	2004.4.1	2007.4.1	経済経営学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程博士 (理学)	
							基礎演習 (B)			2.0				2.0	0.0				
							情報科学II (3)		2.0					0.0	2.0				
							統計学基礎 (2)	2.0						2.0	0.0				
							統計学基礎 (3)	2.0						2.0	0.0				
							基礎解析 (1)		2.0					0.0	2.0				
							基礎解析 (2)	2.0						2.0	0.0				
							確率		2.0					0.0	2.0				
							総合経済分析1		2.0					0.0	2.0				
							△ 統計学基礎研究	2.0						2.0	0.0				
計	8.0	8.0	4.0	0.0	0.0	0.0	12.0	8.0											
准教授	小林 めぐみ	女	36	2008.4.1	2008.4.1	経済経営学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	University of Pennsylvania, Graduate School of Arts and Sciences Ph.D. in Linguistics (言語学博士)	
							基礎演習 (B)			2.0				2.0	0.0				
							英語1 (121)	2.0						2.0	0.0				
							英語2 (121)		2.0					0.0	2.0				
							英語5 (320)	2.0						2.0	0.0				
							英語6 (320)		2.0					0.0	2.0				
							英語文化コミュニケーション演習A(1)			2.0				2.0	0.0				
							Current Topics (F)		2.0					0.0	2.0				
							Special Lecture (World Englishes 1)			2.0				2.0	0.0				
							Special Lecture (World Englishes 2)				2.0			0.0	2.0				
計	4.0	6.0	8.0	2.0	0.0	0.0	12.0	8.0											
准教授	鷹岡 澄子	女	32	2004.4.1	2007.4.1	経済経営学科	※ 在外研究のため、開講科目なし							-	-	-	有	大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程経済学博士	
							計	-	-	-	-	-	-	-	-				
准教授	田口 誠	男	36	2002.4.1	2005.4.1	経済経営学科	現代の社会問題		2.0					0.0	2.0	4.2	有	大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士課程修了博士 (工学)	
							コース演習A			2.0				0.0	2.0				
							環境経営		2.0					0.0	2.0				
							環境会計と評価		2.0					0.0	2.0				
							総合科目I(Thinking" ECO" -環境を考え、取り組む-)		0.2					0.0	0.2				
							△ 環境問題研究		0.2					0.0	0.2				
計	0.0	6.4	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	8.4											
准教授	時岡 規夫	男	36	2000.4.1	2003.4.1	経済経営学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.1	有	東京大学大学院経済学研究科現代経済専攻博士後期課程博士 (経済学)	
							会社入門	2.0						2.0	0.0				
							企業経営入門 (1)		2.0					0.0	2.0				
							国際経営		2.0					0.0	2.0				
							証券市場		2.0					0.0	2.0				
							資産選択の意思決定	2.0						2.0	0.0				
							応用発展演習1 (16)			2.0				2.0	0.0				
							応用発展演習2 (16)				2.0			0.0	2.0				
							卒業研究 (13)			1.0	1.0			1.0	1.0				
							△ 現代金融システム研究		2.0					0.0	2.0				
							△ 金融トピックス研究(新光証券株式会社寄附講座)	0.2						0.2	0.0				
							計	4.2	8.0	5.0	3.0	0.0	0.0	9.2	11.0				

経済学部

(表20)

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実 習・実技		計				
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期				後期
准教授	のじま 野島 美保	女	36	2002. 4. 1	2005. 4. 1	経済経営 学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	東京大学大学院 経済学研究科博 士課程修了 博士 (経済学)
							企業経営入門			2.0				0.0	2.0			
							コース演習C (2)			2.0				2.0	0.0			
							競争戦略 (1)	2.0						2.0	0.0			
							経営戦略 (1)		2.0					0.0	2.0			
							経営戦略 (2)		2.0					0.0	2.0			
							情報戦略	2.0						2.0	0.0			
							卒業研究 (17)			1.0	1.0			1.0	1.0			
							総合ビジネス分析2		2.0					0.0	2.0			
							△ 経営戦略研究	2.0						2.0	0.0			
計							6.0	8.0	5.0	1.0	0.0	0.0	11.0	9.0				
准教授	はさちと 挾本 佳代	女	43	2003. 4. 1	2003. 4. 1	経済経営 学科	現代日本の社会システム	2.0						2.0	0.0	10.1	有	法政大学大学院 社会科学研究科 社会学専攻後期 博士課程 博士 (社会学)
							現代社会とマスメディア		2.0					0.0	2.0			
							環境社会学の基礎	2.0						2.0	0.0			
							環境と社会システム		2.0					0.0	2.0			
							応用発展演習1 (20)			2.0				2.0	0.0			
							応用発展演習2 (20)				2.0			0.0	2.0			
							卒業研究 (18)			1.0	1.0			1.0	1.0			
							社会経済思想史1	2.0						2.0	0.0			
							社会経済思想史2		2.0					0.0	2.0			
							総合科目I(Thinking" ECO" -環境を考え、取り組む-)		0.2					0.0	0.2			
△ Current Topics	2.0						2.0	0.0										
計							8.0	6.2	3.0	3.0	0.0	0.0	11.0	9.2				
准教授	まるやま 丸山 桂	女	38	2003. 4. 1	2003. 4. 1	経済経営 学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	お茶の水女子大 学大学院人間文 化研究科単位取 得退学 修士 (家政学)
							コース演習B (3)				2.0			0.0	2.0			
							年金の経済学	2.0						2.0	0.0			
							健康の経済学	2.0						2.0	0.0			
							キャリアの経済学	2.0						2.0	0.0			
							福祉の経済学		2.0					0.0	2.0			
							応用発展演習1 (23)			2.0				2.0	0.0			
							応用発展演習2 (23)				2.0			0.0	2.0			
							卒業研究 (21)			1.0	1.0			1.0	1.0			
							△ 統計調査研究		2.0					0.0	2.0			
計							6.0	4.0	5.0	5.0	0.0	0.0	11.0	9.0				
准教授	やまざき 山崎 由香里	女	36	2002. 4. 1	2005. 4. 1	経済経営 学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	明治大学大学院 商学研究科博士 後期課程 修士
							企業経営入門		2.0					0.0	2.0			
							コース演習B (1)			2.0				2.0	0.0			
							人間情報処理		2.0					0.0	2.0			
							応用発展演習1 (25)			2.0				2.0	0.0			
							応用発展演習2 (25)				2.0			0.0	2.0			
							卒業研究 (22)			1.0	1.0			1.0	1.0			
							経営情報分析	2.0						2.0	0.0			
							マルチメディアプレゼンテーション2		2.0					0.0	2.0			
							△ 人間情報処理研究	2.0						2.0	0.0			
計							4.0	6.0	7.0	3.0	0.0	0.0	11.0	9.0				

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
准教授	やまもと 山本 晶	女	34	2005. 4. 1	2008. 4. 1	経済経営 学科	基礎演習 (A)			2.0				2.0	0.0	10.0	有	東京大学大学院 経済学研究科博 士課程修了 博士(経済学)	
							会社入門	2.0					2.0	0.0					
							コース演習C (5)			2.0			2.0	0.0					
							競争戦略 (2)	2.0					2.0	0.0					
							広告と市場 (1)		2.0				0.0	2.0					
							広告と市場 (2)		2.0				0.0	2.0					
							応用発展演習1 (26)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習2 (26)				2.0		0.0	2.0					
							卒業研究 (23)			1.0	1.0		1.0	1.0					
							△ 消費者行動研究		2.0				0.0	2.0					
計	4.0	6.0	7.0	3.0	0.0	0.0	11.0	9.0											
准教授	よしだ 吉田 由寛	男	40	1998. 4. 1	2001. 4. 1	経済経営 学科	ミクロ経済学入門 (1)	2.0					2.0	0.0	10.0	有	筑波大学大学院 博士課程社会工 学研究科単位取 得退学 経済学修士		
							企業と市場 (1)		2.0				0.0	2.0					
							情報とゲーム	2.0					2.0	0.0					
							コース演習E			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習1 (27)			2.0			2.0	0.0					
							応用発展演習2 (27)				2.0		0.0	2.0					
							卒業研究 (24)			1.0	1.0		1.0	1.0					
							演習ミクロ経済学 (2)	2.0					2.0	0.0					
							応用ミクロ経済学		2.0				0.0	2.0					
							解 析		2.0				0.0	2.0					
計	6.0	6.0	5.0	3.0	0.0	0.0	11.0	9.0											
講師	すずき 鈴木 恵美子	女	34	2008. 4. 1	2008. 4. 1	一般教育 等	スペイン語入門I(6)	2.0					2.0	0.0	8.0	無	東京外国語大学 大学院地域文化 研究科博士後期 課程 言語学博士		
							スペイン語入門II(6)		2.0				0.0	2.0					
							スペイン語入門I(99)		2.0				0.0	2.0					
							スペイン語入門II(99)	2.0					2.0	0.0					
							スペイン文化演習A			2.0			2.0	0.0					
							スペイン文化演習B				2.0		0.0	2.0					
							スペイン語IIa	2.0					2.0	0.0					
							スペイン語IVb		2.0				0.0	2.0					
計	6.0	6.0	2.0	2.0	0.0	0.0	8.0	8.0											

[注]1 「IV 1 全学の教員組織」(表19)に記載の専任教員について、所属組織ごとに作成してください。ただし、大学附置研究所、学部附属研究所、附属病院等の教員については、授業を担当している教員についてのみ記載してください。

2 「科目名」欄に記載する担当科目のうち、大学院研究科の授業科目には△印を付してください。

3 「授業科目」欄については、セメスター制の場合を例示していますが、通年制の場合、3学期制の場合等は、適宜、欄を修正して記入してください。

4 「毎週授業時間数」は、時間割編成上のいわゆるコマではなく、時間数に換算して記入してください(例えば1コマ90分の場合は、2時間)。

5 1授業科目を複数の教員で担当する場合は、当該授業時数を担当者数で除して毎週授業時間数を算出してください。

6 「年間平均毎週授業時間数」欄には、各専任教員ごとの前期と後期の担当授業時間の合計を2で割った年間平均の時間数を記入してください。

7 「大学院における研究指導担当資格の有無」欄には、大学が定める基準に基づいて資格の有無を記入してください。

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実 習・実技		計				
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期									
教授	あおき まさよし 青木 正喜	男	64	1972. 4. 1	1986. 4. 1	情報科学 科	フレッシュマンゼミ (CI)	2.0						2.0	0.0	有	東京大学工学系 研究科電気工学 専門課程博士課 程 工学博士	
							デジタル回路 I	2.0						2.0	0.0			
							画像処理a (CI)		2.0					0.0	2.0			
							画像処理b (CI)		2.0					0.0	2.0			
							情報科学プロジェクト実験						3.0	0.0	3.0			
							輪講	2.0	2.0					2.0	2.0			
							ハードウェア実験						4.0	0.0	4.0			
							電気電子工学実験第 IV						4.0	0.0	4.0			
							論文輪講	2.0	2.0					2.0	2.0			
							△ 論理演算回路論		2.0					0.0	2.0			
							△ 電気電子工学特別講義 I	1.0	1.0					1.0	1.0			
							△ 電気電子工学特論 II (情報・通信)	2.0	2.0					2.0	2.0			
							△ 電気電子工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0			
							△ 論文輪講 I	2.0	2.0					2.0	2.0			
計	13.0	15.0	0.0	0.0	6.0	9.0	19.0	24.0										
									21.5									
教授	あきまつ まさこ 秋松 雅子	女	57	1990. 4. 1	1995. 4. 1	一般教育 等	英語A I	2.0					2.0	0.0	無	青山学院大学大 学院文学研究科 博士課程満期退 学 (言語学) 文学修士		
							英語A II		2.0				0.0	2.0				
							英語A III	2.0					2.0	0.0				
							英語A IV		2.0				0.0	2.0				
							テクニカル・コミュニケーション I [EM] a2	2.0					2.0	0.0				
							テクニカル・コミュニケーション I [EM] b1	2.0					2.0	0.0				
							テクニカル・コミュニケーション II [EM] a2		2.0				0.0	2.0				
							テクニカル・コミュニケーション II [EM] b1		2.0				0.0	2.0				
							科学英語特講 I (1)	2.0					2.0	0.0				
							科学英語特講 I (2)	2.0					2.0	0.0				
							科学英語特講 II (1)		2.0				0.0	2.0				
							科学英語特講 II (2)		2.0				0.0	2.0				
計	12.0	12.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.0	12.0										
									12.0									
教授	いしごうおか たけし 石郷岡 猛	男	64	1971. 4. 1	1989. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0					2.0	0.0	有	成蹊大学大学院 工学研究科電気 工学専攻博士課 程修了 工学博士		
							電磁気学a (EM)	2.0					2.0	0.0				
							電気磁気測定法		2.0				0.0	2.0				
							電気機械	2.0					2.0	0.0				
							電力応用	2.0					2.0	0.0				
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0	4.0	0.0				
							エレクトロメカニクス演習 I			2.0			0.0	2.0				
							エレクトロメカニクス実験 IIIa					4.0	0.0	4.0				
							電気電子工学実験第IV					4.0	4.0	0.0				
							論文輪講	2.0	2.0				2.0	2.0				
							△ 電磁界数値解析法		2.0				0.0	2.0				
							△ 電気電子工学特別講義 I	1.0	1.0				1.0	1.0				
							△ 電気電子工学特論 I (電力・エネルギー)	2.0	2.0				2.0	2.0				
							△ 電気電子工学特別実験					2.0	2.0	2.0			2.0	
△ 論文輪講 I	2.0	2.0				2.0	2.0											
計	15.0	11.0	0.0	2.0	10.0	6.0	25.0	19.0										
									22.0									

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	伊藤 郁夫	男	55	1983.5.1	1996.4.1	一般教育等	力学B	6.0						6.0	0.0	16.7	有	東京工業大学大学院理工学研究科理学博士	
							基礎電磁気学D			6.0				0.0	6.0				
							理学基礎実験 (ML)						3.0	0.0	3.0				
							振動波動論 (ML)			2.0				0.0	2.0				
							理学基礎実験 (CI)						3.0	0.0	3.0				
							理学基礎実験 (EM)					3.0		3.0	0.0				
							文系のための科学A	2.0						2.0	0.0				
							文系のための科学B		0.4					0.0	0.4				
							△物理情報工学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△物理情報工学特別実験 I						4.0	0.0	4.0				
							計	8.0	8.4	2.0	2.0	3.0	10.0	13.0	20.4				
教授	岩崎 学	男	55	1993.4.1	1997.4.1	情報科学科	フレッシュマンゼミ (CI)	2.0					2.0	0.0	18.4	有	東京理科大学大学院理学研究科数学専攻修士課程理学博士		
							確率論a (CI)	2.0					2.0	0.0					
							確率論b (CI)	2.0					2.0	0.0					
							データ解析法a		2.0				0.0	2.0					
							データ解析法b		2.0				0.0	2.0					
							データマイニング	2.0					2.0	0.0					
							情報科学プロジェクト実験					3.0	0.0	3.0					
							輪講	2.0	2.0				2.0	2.0					
							数理科学実験					3.0	0.0	3.0					
							△統計学特論 I	2.0					2.0	0.0					
							△応用統計学特論 II		2.0				0.0	2.0					
							△情報工学特論 VII	2.0					2.0	0.0					
							△情報工学特別実験					2.0	2.0	2.0				2.0	
							△情報工学特別演習			2.0	2.0		2.0	2.0					
△学際分野特殊研究 (データの科学)		0.7				0.0	0.7												
計	14.0	8.7	2.0	2.0	2.0	8.0	18.0	18.7											
教授	上田 徹	男	61	1995.4.1	1995.4.1	情報科学科	フレッシュマンゼミ (CI)	2.0					2.0	0.0	17.9	有	京都大学大学院工学研究科数理工学専攻修士課程工学博士		
							先端科学		0.7				0.0	0.7					
							代数・離散数学a		2.0				0.0	2.0					
							代数・離散数学b		2.0				0.0	2.0					
							応用プログラミング (再)	2.0					2.0	0.0					
							オペレーションズリサーチa	2.0					2.0	0.0					
							オペレーションズリサーチb	2.0					2.0	0.0					
							応用オペレーションズリサーチ		2.0				0.0	2.0					
							応用プログラミング実験 (再)					3.0	3.0	0.0					
							情報科学プロジェクト実験					3.0	0.0	3.0					
							輪講	2.0	2.0				2.0	2.0					
							数理科学実験					3.0	0.0	3.0					
							△OR特論 II		2.0				0.0	2.0					
							△情報数理特論 I	2.0					2.0	0.0					
△情報工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0											
計	12.0	10.7	0.0	0.0	5.0	8.0	17.0	18.7											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数												
								講義		演習		実験・実 習・実技		計						
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
教授	うりう 瓜生	よしひさ 芳久	男	58	1978. 4. 1	1993. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0						2.0	0.0	22.0	有	成蹊大学大学院 工学研究科電気 工学専攻博士課 程修了 工学博士	
								回路理論a			2.0					0.0				2.0
								回路理論b			2.0					0.0				2.0
								電気回路b	2.0							2.0				0.0
								電力系統工学		2.0						0.0				2.0
								エレクトロメカニクス実験 II					4.0			4.0				0.0
								エレクトロメカニクス演習 I				2.0				0.0				2.0
								エレクトロメカニクス実験 III a						4.0		0.0				4.0
								電気電子工学実験第IV					4.0			4.0				0.0
								論文輪講	2.0	2.0						2.0				2.0
								△ 電力系統工学		2.0						0.0				2.0
								△ 電気電子工学特別講義 I	1.0	1.0						1.0				1.0
								△ 電気電子工学特論 I (電力・エネルギー)	2.0	2.0						2.0				2.0
								△ 電気電子工学特別実験					2.0	2.0		2.0				2.0
△ 論文輪講 I	2.0	2.0						2.0	2.0											
計	11.0	15.0	0.0	2.0	10.0	6.0	21.0	23.0												
教授	おおくら 大倉	もとひろ 元宏	男	55	1978. 4. 1	1997. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0					2.0	0.0	16.5	有	早稲田大学大学院 理工学研究科 博士前期課程 (機械工学専 攻・生産工学専 修) 工学博士		
								インターンシップ (EM)			3.0				0.0				3.0	
								コンピュータプログラミング I			4.0				0.0				4.0	
								人間工学 I			2.0				0.0				2.0	
								人間工学 II	2.0						2.0				0.0	
								エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0				0.0	
								エレクトロメカニクス演習 I				2.0			0.0				2.0	
								エレクトロメカニクス実験 IIIb						4.0	0.0				4.0	
								論講 b	2.0	2.0					2.0				2.0	
								△ ヒューマン・マシン・システム特論 I	2.0						2.0				0.0	
								△ 情報工学特別実験					2.0	2.0					2.0	2.0
計	8.0	11.0	0.0	2.0	6.0	6.0	14.0	19.0												
教授	おがわ 小川	たかのぶ 隆申	男	42	2000. 9. 25	2007. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0					2.0	0.0	19.5	有	東京工業大学 大学院理工学系研 究科修士課程修 了 博士 (工学)		
								流体力学 Ia		2.0					0.0				2.0	
								流体力学 Ib		2.0					0.0				2.0	
								流体力学 II	2.0						2.0				0.0	
								数値流体力学	2.0						2.0				0.0	
								エレクトロメカニクス実験 I						4.0	0.0				4.0	
								エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0				0.0	
								エレクトロメカニクス演習 I				2.0			0.0				2.0	
								学外実習						3.0	0.0				3.0	
								機械工学演習第II			2.0				2.0				0.0	
								△ 流体力学特論 I	2.0						2.0				0.0	
								△ 流体力学特論 II		2.0					0.0				2.0	
								△ 機械工学特別実験					3.0	3.0	3.0				3.0	
								△ 流体力学特別演習			2.0	2.0			2.0				2.0	
								計	8.0	6.0	4.0	4.0	7.0	10.0	19.0				20.0	

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	おぐち 小口 喜美夫	男	54	2004. 4. 1	2004. 4. 1	情報科学 科	現代を生きる（身の回りの科学）		0.3					0.0	0.3	21.7	有	慶應義塾大学大 学院工学研究科 工学博士	
							フレッシュマンゼミ（CI）	2.0					2.0	0.0					
							インターンシップ（CI）		3.0				0.0	3.0					
							情報通信a	2.0					2.0	0.0					
							情報通信b	2.0					2.0	0.0					
							情報通信網	2.0					2.0	0.0					
							基本プログラミング（再）		2.0				0.0	2.0					
							基本プログラミング実験（再）					3.0	0.0	3.0					
							情報科学プロジェクト実験					3.0	0.0	3.0					
							輪講	2.0	2.0				2.0	2.0					
							電気電子工学実験第 IV				4.0		4.0	0.0					
							論文輪講	2.0	2.0				2.0	2.0					
							△ 光通信工学特論		2.0				0.0	2.0					
							△ 電気電子工学特別講義 I	1.0	1.0				1.0	1.0					
							△ 電気電子工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0				
△ 論文輪講 I	2.0	2.0				2.0	2.0												
	計	15.0	14.3	0.0	0.0	6.0	8.0	21.0	22.3										
教授	かい 甲斐 宗徳	男	47	1988. 4. 1	2005. 9. 1	情報科学 科	フレッシュマンゼミ（CI）	2.0					2.0	0.0	15.0	有	早稲田大学大学 院理工学研究科 電気工学専攻博 士課程 工学博士		
							応用プログラミング		2.0				0.0	2.0					
							ソフトウェア設計a		2.0				0.0	2.0					
							ソフトウェア設計b		2.0				0.0	2.0					
							上級プログラミング	2.0					2.0	0.0					
							プログラミング言語	2.0					2.0	0.0					
							応用プログラミング実験					3.0	0.0	3.0					
							情報科学プロジェクト実験					3.0	0.0	3.0					
							輪講	2.0	2.0				2.0	2.0					
							上級プログラミング実験				2.0		2.0	0.0					
							△ ソフトウェア工学特論 II	2.0					2.0	0.0					
							△ 情報工学特別実験					2.0	2.0	2.0				2.0	
	計	10.0	8.0	0.0	0.0	4.0	8.0	14.0	16.0										

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目								年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実習・実技		計				
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期									
教授	かとう あきら 加藤 明良	男	54	1990.10.1	1995.4.1	物質生命理工学科	現代を生きる(身の回りの科学)		0.3					0.0	0.3	20.7	有	筑波大学大学院博士課程化学専攻理学博士
							フレッシュマンゼミ(ML)	2.0						2.0	0.0			
							有機化学Ⅰ(前期)a	2.0						2.0	0.0			
							有機化学Ⅰ(前期)b	2.0						2.0	0.0			
							有機反応機構		2.0					0.0	2.0			
							有機合成化学		2.0					0.0	2.0			
							物質生命実験Ⅰ					8.0		8.0	0.0			
							物質生命輪講(3年)		3.0					0.0	3.0			
							物質生命輪講(4年)	3.0						3.0	0.0			
							物質生命実験Ⅳ					3.0		0.0	3.0			
							化学実験	3.0						3.0	0.0			
							△精密有機合成化学特論Ⅰ(複素環化学)	2.0						2.0	0.0			
							△精密有機合成化学特論Ⅴ(非天然アミノ酸)	2.0						2.0	0.0			
							△応用化学特別演習Ⅰ			2.0	2.0			2.0	2.0			
△応用化学特別実験Ⅲ					3.0		3.0	0.0										
計	16.0	7.3	2.0	2.0	11.0	3.0	29.0	12.3										
教授	かんだ よしふみ 神田 芳文	男	58	1981.8.1	1996.4.1	情報科学科	フレッシュマンゼミ(CI)	2.0						2.0	0.0	16.0	有	東京大学大学院工学系研究科船用機械工学専攻博士課程満期退学工学博士
							数値計算法a		2.0					0.0	2.0			
							数値計算法b		2.0					0.0	2.0			
							基本プログラミング	2.0						2.0	0.0			
							シミュレーション	2.0						2.0	0.0			
							基本プログラミング実験					3.0		3.0	0.0			
							情報科学プロジェクト実験						3.0	0.0	3.0			
							輪講	2.0	2.0					2.0	2.0			
							△数値シミュレーション特論	2.0						2.0	0.0			
							△物理情報工学特別講義Ⅰ	1.0	1.0					1.0	1.0			
							△物理情報工学特別演習Ⅰ			2.0	2.0			2.0	2.0			
							△物理情報工学特別実験Ⅰ						4.0	0.0	4.0			
							計	11.0	7.0	2.0	2.0	3.0	7.0	16.0	16.0			
							教授	くどう まさひろ 工藤 正博	男	60	1993.4.1	1994.10.1	物質生命理工学科	フレッシュマンゼミ(ML)	2.0			
外国語文献講読	2.0													2.0	0.0			
無機材料プロセッシング		2.0												0.0	2.0			
化学ナノ計測	2.0													2.0	0.0			
材料物性工学		2.0												0.0	2.0			
物質生命実験Ⅲ					8.0									8.0	0.0			
物質生命輪講(3年)		3.0												0.0	3.0			
物質生命輪講(4年)	3.0													3.0	0.0			
物質生命実験Ⅳ					3.0									0.0	3.0			
△物理情報工学特別講義Ⅰ	1.0	1.0												1.0	1.0			
△材料評価論	2.0													2.0	0.0			
△物理情報工学特別演習Ⅰ			2.0	2.0										2.0	2.0			
△物理情報工学特別実験Ⅰ						4.0								0.0	4.0			
計	12.0	8.0	2.0	2.0	8.0	7.0								22.0	17.0			

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	窪田 悟	男	54	1976.4.1	2002.4.1	エレクトロメカニクス学科	現代を生きる(身の回りの科学)		0.3						0.0	0.3	15.2	有	成蹊大学工学部博士(工学)
							フレッシュマンゼミ(EM)	2.0						2.0	0.0				
							コンピュータプログラミング I		4.0					0.0	4.0				
							認知工学		2.0					0.0	2.0				
							システム工学	2.0						2.0	0.0				
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0	0.0				
							エレクトロメカニクス演習 I				2.0			0.0	2.0				
							エレクトロメカニクス実験 IIIb					4.0		0.0	4.0				
							輪講 b	2.0	2.0					2.0	2.0				
							△ 認知工学特論 I	2.0						2.0	0.0				
							△ 情報工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0				
							計	8.0	8.3	0.0	2.0	6.0	6.0	14.0	16.3				
教授	栗林 伸一	男	52	2004.4.1	2004.4.1	情報科学科	フレッシュマンゼミ(CI)	2.0						2.0	0.0	15.0	有	東北大学大学院情報工学専攻修士課程工学博士	
							ネットワークアーキテクチャa		2.0					0.0	2.0				
							ネットワークアーキテクチャb		2.0					0.0	2.0				
							ネットワークセキュリティ		2.0					0.0	2.0				
							基本プログラミング	2.0					2.0	0.0					
							基本プログラミング実験					3.0		3.0	0.0				
							情報科学プロジェクト実験						3.0	0.0	3.0				
							輪講	2.0	2.0					2.0	2.0				
							△ 物理情報工学特別講義 I	1.0	1.0					1.0	1.0				
							△ 物理情報工学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 物理情報工学特別実験 I					4.0		0.0	4.0				
							計	7.0	9.0	2.0	2.0	3.0	7.0	12.0	18.0				
教授	小島 紀徳	男	55	1987.4.1	1994.10.1	物質生命理工学科	フレッシュマンゼミ(ML)	2.0						2.0	0.0	23.9	有	東京大学大学院工学系研究科化学工学専攻博士課程(単位修得の上満期退学)工学博士	
							インターンシップ(ML)		3.0					0.0	3.0				
							環境化学工学	2.0						2.0	0.0				
							化学量論	2.0						2.0	0.0				
							物質化学工学		4.0					0.0	4.0				
							環境プロセスエンジニアリング		0.7					0.0	0.7				
							物質生命実験 III					8.0		8.0	0.0				
							物質生命輪講(3年)		3.0					0.0	3.0				
							物質生命輪講(4年)	3.0						3.0	0.0				
							物質生命実験 IV					3.0		0.0	3.0				
							△ プロセスシステム特論 I(反応プロセス)	2.0						2.0	0.0				
							△ プロセスシステム特論 V(グローバルシステム)	2.0						2.0	0.0				
							△ 応用化学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 応用化学特別実験 II					3.0		0.0	3.0				
							△ 応用化学特別演習 II			3.0	3.0			3.0	3.0				
計	13.0	10.7	5.0	5.0	8.0	6.0	26.0	21.7											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	近 匡	男	49	1989. 4. 1	2003. 4. 1	物質生命 理工学科	フレッシュマンゼミ (ML)	2.0						2.0	0.0	25.0	有	立教大学大学院 理学研究科原子 物理学専攻博士 後期課程 理学博士	
							初等量子力学 (前期) a	2.0						2.0	0.0				
							初等量子力学 (前期) b	2.0						2.0	0.0				
							初等量子力学 (後期:再)		2.0					0.0	2.0				
							量子力学		2.0					0.0	2.0				
							物質生命実験 I					8.0		8.0	0.0				
							物質生命実験 III					8.0		8.0	0.0				
							物質生命輪講 (3年)		3.0					0.0	3.0				
							物質生命輪講 (4年)	3.0						3.0	0.0				
							物質生命実験 IV					3.0		0.0	3.0				
							物理学実験					3.0		3.0	0.0				
							△ 非線形現象		2.0					0.0	2.0				
							△ 物理情報工学特別講義 I	1.0	1.0					1.0	1.0				
							△ 物理情報工学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 物理情報工学特別実験 I						4.0	0.0	4.0				
計	10.0	10.0	2.0	2.0	19.0	7.0	31.0	19.0											
教授	齋藤 洋司	男	48	1992. 4. 1	2001. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0					2.0	0.0	22.0	有	慶應義塾大学大 学院工学研究科 電気工学専攻 工学博士		
							電気回路a	2.0					2.0	0.0					
							電子物性工学	2.0					2.0	0.0					
							半導体基礎工学		2.0				0.0	2.0					
							集積回路工学		2.0				0.0	2.0					
							エレクトロメカニクス実験 I					4.0	0.0	4.0					
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0	4.0	0.0					
							エレクトロメカニクス演習 I			2.0			0.0	2.0					
							電気電子工学実験第IV					4.0	4.0	0.0					
							論文輪講	2.0	2.0				2.0	2.0					
							△ 集積回路工学特論	2.0					2.0	0.0					
							△ 電気電子工学特別講義 I	1.0	1.0				1.0	1.0					
							△ 電気電子工学特論 III (エレクトロニクス)	2.0	2.0				2.0	2.0					
							△ 電気電子工学特別実験					2.0	2.0	2.0				2.0	
							△ 論文輪講 I	2.0	2.0				2.0	2.0					
計	15.0	11.0	0.0	2.0	10.0	6.0	25.0	19.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	佐々木 成朗	男	40	2002. 9. 24	2006. 4. 1	物質生命 理工学科	フレッシュマンゼミ (ML)	2.0						2.0	0.0	22.9	有	東京大学大学院 理学系研究科物理 学専攻博士課程 博士(理学)	
							熱物理学 (ML前期) a	2.0						2.0	0.0				
							熱物理学 (ML前期) b	2.0						2.0	0.0				
							ナノテクノロジー I	2.0						2.0	0.0				
							ナノテクノロジー II		0.7					0.0	0.7				
							物質生命実験 II						8.0	0.0	8.0				
							物質生命実験 III					8.0		8.0	0.0				
							物質生命輪講 (3年)		3.0					0.0	3.0				
							物質生命輪講 (4年)	3.0						3.0	0.0				
							物質生命実験 IV					3.0		0.0	3.0				
							△ 物理情報工学特別講義 I	1.0	1.0					1.0	1.0				
							△ 原子・分子のナノ力学	2.0						2.0	0.0				
							△ 物理情報工学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 物理情報工学特別実験 I						4.0	0.0	4.0				
計	14.0	4.7	2.0	2.0	8.0	15.0	24.0	21.7											
教授	里川 重夫	男	44	2006. 4. 1	2007. 4. 1	物質生命 理工学科	フレッシュマンゼミ (ML)	2.0						2.0	0.0	20.0	有	早稲田大学大学 院理工学研究科 応用化学専攻修 士課程修了 博士(工学)	
							物理化学 I (前期) a	2.0						2.0	0.0				
							物理化学 I (前期) b	2.0						2.0	0.0				
							固体構造	2.0						2.0	0.0				
							環境触媒化学		2.0					0.0	2.0				
							物質生命実験 III					8.0		8.0	0.0				
							物質生命輪講 (3年)		3.0					0.0	3.0				
							物質生命輪講 (4年)	3.0						3.0	0.0				
							物質生命実験 IV					3.0		0.0	3.0				
							△ 環境材料化学特論 I (触媒反応工学)		2.0					0.0	2.0				
							△ 環境材料化学特論 II (触媒機能設計)		2.0					0.0	2.0				
							△ 環境材料化学特論 IV (工業触媒プロセス)		2.0					0.0	2.0				
							△ 応用化学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 応用化学特別実験 II						3.0	0.0	3.0				
計	11.0	11.0	2.0	2.0	8.0	6.0	21.0	19.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	すぎやま 杉山	けんじ 賢二	男	47	2004. 9. 24	2004. 9. 24	情報科学 科	フレッシュマンゼミ (CI)	2.0						2.0	0.0	22.0	有	東京理科大学大 学院工学研究科 電気工学専攻博 士課程 博士(工学)
								コンピュータ入門	2.0						2.0	0.0			
								コンピュータグラフィックス	2.0						2.0	0.0			
								応用プログラミング		2.0					0.0	2.0			
								対話型システム技術		2.0					0.0	2.0			
								応用プログラミング実験						3.0	0.0	3.0			
								情報科学プロジェクト実験						3.0	0.0	3.0			
								輪講	2.0	2.0					2.0	2.0			
								電気電子工学実験第IV					4.0		4.0	0.0			
								論文輪講	2.0	2.0					2.0	2.0			
								△ 情報記録論		2.0					0.0	2.0			
								△ 電気電子工学特別講義 I	1.0	1.0					1.0	1.0			
								△ 電気電子工学特論 II (情報・通信)	2.0	2.0					2.0	2.0			
								△ 電気電子工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0			
								△ 論文輪講 I	2.0	2.0					2.0	2.0			
計	15.0	15.0	0.0	0.0	6.0	8.0	21.0	23.0											
教授	たきざわ 滝沢	くにはる 國治	男	62	2000. 4. 1	2000. 4. 1	物質生命 理工学科	フレッシュマンゼミ (ML)	2.0					2.0	0.0	18.5	有	東北大学工学部 電子工学科卒業 工学博士	
								基礎光学 (前期) a	2.0					2.0	0.0				
								基礎光学 (前期) b	2.0					2.0	0.0				
								基礎光学 (後期:再)		2.0				0.0	2.0				
								光エレクトロニクス		2.0				0.0	2.0				
								物質生命実験 III					8.0	8.0	0.0				
								物質生命輪講 (3年)		3.0				0.0	3.0				
								物質生命輪講 (4年)	3.0					3.0	0.0				
								物質生命実験 IV					3.0	0.0	3.0				
								△ 物理情報工学特別講義 I	1.0	1.0				1.0	1.0				
								△ 物理情報工学特別演習 I			2.0	2.0			2.0				2.0
								△ 物理情報工学特別実験 I						4.0	0.0				4.0
計	10.0	8.0	2.0	2.0	8.0	7.0	20.0	17.0											
教授	たきざわ 滝沢	まこと 誠	男	57	2008. 4. 1	2008. 4. 1	情報科学 科	フレッシュマンゼミ (CI)	2.0					2.0	0.0	8.5	有	東北大学大学院 工学研究科応用 物理学専攻修士 課程 工学博士	
								基礎電子工学a		2.0				0.0	2.0				
								基礎電子工学b		2.0				0.0	2.0				
								上級プログラミング	2.0					2.0	0.0				
								情報科学プロジェクト実験						3.0	0.0				3.0
								上級プログラミング実験					2.0		2.0				0.0
								△ 情報工学特論VI	2.0					2.0	0.0				
								△ 情報工学特論VIII		2.0					0.0				2.0
								計	6.0	6.0	0.0	0.0	2.0	3.0	8.0				9.0

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	たなか きよし 田中 潔	男	56	1980. 9. 1	1994. 10. 1	一般教育 等	基礎化学Aa	4.0						4.0	0.0	17.0	有	東京工業大学大学院 理工学研究科化学工学専攻 博士課程 工学博士	
							基礎化学Ba		4.0					0.0	4.0				
							理学基礎実験 (ML)					3.0		0.0	3.0				
							物質生命論講 (3年)		3.0					0.0	3.0				
							物質生命論講 (4年)	3.0						3.0	0.0				
							物質生命実験IV					3.0		0.0	3.0				
							基礎化学 Ia (CI)	2.0						2.0	0.0				
							理学基礎実験 (CI)					3.0		0.0	3.0				
							基礎化学 Ia (EM)	2.0						2.0	0.0				
							理学基礎実験 (EM)					3.0		3.0	0.0				
△ 応用化学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0											
計	11.0	7.0	2.0	2.0	3.0	9.0	16.0	18.0											
教授	たなか としみつ 田中 俊光	男	60	2007. 4. 1	2007. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0						2.0	0.0	16.0	有	大阪大学大学院 基礎工学研究科 物理系機械工学 分野修士課程修 了 工学博士	
							インターンシップ (EM)		3.0					0.0	3.0				
							機械力学 Ia	2.0						2.0	0.0				
							機械力学 Ib	2.0						2.0	0.0				
							機械力学 II		2.0					0.0	2.0				
							音響工学	2.0						2.0	0.0				
							エレクトロメカニクス実験 I					4.0		0.0	4.0				
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0	0.0				
							エレクトロメカニクス演習 I				2.0			0.0	2.0				
							学外実習					3.0		0.0	3.0				
							機械工学演習第II			2.0				2.0	0.0				
△ 音響工学特別演習			2.0	2.0			2.0	2.0											
計	8.0	5.0	4.0	4.0	4.0	7.0	16.0	16.0											
教授	ちかしげ ゆういち 近重 悠一	男	62	1981. 4. 1	1989. 4. 1	一般教育 等	力学D	6.0						6.0	0.0	14.7	有	東京都立大学大学院 理学研究科 応用物理学専攻 博士課程 理学博士	
							基礎電磁気学B		6.0					0.0	6.0				
							理学基礎実験 (ML)					3.0		0.0	3.0				
							理学基礎実験 (CI)					3.0		0.0	3.0				
							理学基礎実験 (EM)					3.0		3.0	0.0				
							文系のための科学B		0.4					0.0	0.4				
							△ 物理情報工学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 物理情報工学特別実験 I						4.0	0.0	4.0				
計	6.0	6.4	2.0	2.0	3.0	10.0	11.0	18.4											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	坪村 太郎	男	50	1986.4.1	2000.4.1	物質生命理工学科	フレッシュマンゼミ (ML)	2.0						2.0	0.0	20.0	有	東京大学大学院工学研究科応用化学専攻博士課程工学博士	
							無機化学 I (前期) a	2.0						2.0	0.0				
							無機化学 I (前期) b	2.0						2.0	0.0				
							分子構造化学		2.0					0.0	2.0				
							無機化学 II	2.0						2.0	0.0				
							物質生命実験 I					8.0		8.0	0.0				
							物質生命輪講 (3年)			3.0				0.0	3.0				
							物質生命輪講 (4年)	3.0						3.0	0.0				
							物質生命実験 IV						3.0	0.0	3.0				
							△無機化学特論 I		2.0					0.0	2.0				
							△無機化学特論 II		2.0					0.0	2.0				
							△無機化学特論 V		2.0					0.0	2.0				
							△応用化学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△応用化学特別実験 I					3.0		3.0	0.0				
計	11.0	11.0	2.0	2.0	11.0	3.0	24.0	16.0											
教授	富谷 光良	男	50	1989.4.1	2004.4.1	物質生命理工学科	現代を生きる (身の回りの科学)		0.3					0.0	0.3	25.4	有	東京大学大学院理学系研究科物理専攻博士課程理学博士	
							フレッシュマンゼミ (ML)	2.0						2.0	0.0				
							外国語文献講読	2.0						2.0	0.0				
							基礎物理学演習			2.0				2.0	0.0				
							計算ナノ物理	2.0						2.0	0.0				
							多次元計測		2.0					0.0	2.0				
							物質生命実験 I					8.0		8.0	0.0				
							物質生命実験 III					8.0		8.0	0.0				
							物質生命輪講 (3年)		3.0					0.0	3.0				
							物質生命輪講 (4年)	3.0						3.0	0.0				
							物質生命実験 IV						3.0	0.0	3.0				
							地学実験						3.0	0.0	3.0				
							文系のための科学B		0.4					0.0	0.4				
							△物理情報工学特別講義 I	1.0	1.0					1.0	1.0				
△画像処理特論	2.0						2.0	0.0											
△物理情報工学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0											
△物理情報工学特別実験 I						4.0	0.0	4.0											
計	12.0	6.7	4.0	2.0	16.0	10.0	32.0	18.7											
教授	丹羽 明	男	59	1980.4.1	1997.4.1	エレクトロメカニクス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0						2.0	0.0	15.0	有	慶應義塾大学大学院工学研究科管理工学専攻博士課程工学博士	
							インダストリアル・エンジニアリングa	2.0						2.0	0.0				
							インダストリアル・エンジニアリングb	2.0						2.0	0.0				
							経済性工学 I		2.0					0.0	2.0				
							経済性工学 II	2.0						2.0	0.0				
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0	0.0				
							エレクトロメカニクス演習 I				2.0			0.0	2.0				
							エレクトロメカニクス実験 IIIb						4.0	0.0	4.0				
							輪講 b	2.0	2.0					2.0	2.0				
							△生産管理特論		2.0					0.0	2.0				
							△情報工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0				
計	10.0	6.0	0.0	2.0	6.0	6.0	16.0	14.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数												
								講義		演習		実験・実 習・実技		計						
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
教授	ぼばしげる 馬場 茂	男	59	1991. 4. 1	1992. 4. 1	物質生命 理工学科	フレッシュマンゼミ (ML)	2.0						2.0	0.0	24.0	有	東京大学工学系 大学院物理学 専攻修士課程 工学博士		
							インターンシップ (ML)			3.0					0.0				3.0	
							基礎物理実験学	2.0						2.0	0.0				2.0	
							応用物理学演習				2.0				0.0				2.0	
							物性物理学	2.0							2.0				0.0	
							物質生命実験 II							8.0	0.0				8.0	
							物質生命実験 III							8.0	0.0				8.0	
							物質生命輪講 (3年)		3.0						0.0				3.0	
							物質生命輪講 (4年)	3.0							3.0				0.0	
							物質生命実験 IV							3.0	0.0				3.0	
							△ 物理情報工学特別講義 I	1.0	1.0						1.0				1.0	
							△ 表面物性		2.0						0.0				2.0	
							△ 物理情報工学特別演習 I			2.0	2.0				2.0				2.0	
							△ 物理情報工学特別実験 I							4.0	0.0				4.0	
計	10.0	9.0	2.0	4.0	8.0	15.0	20.0	28.0												
教授	はらせつこ 原 節子	女	55	1975. 4. 1	2006. 10. 1	物質生命 理工学科	現代を生きる (身の回りの科学)		0.3					0.0	0.3	20.2	有	成蹊大学工学部 工学博士		
							フレッシュマンゼミ (ML)	2.0						2.0	0.0					
							分析化学 I	2.0						2.0	0.0					
							分析化学 II		2.0					0.0	2.0					
							食品化学	2.0						2.0	0.0					
							安全管理		2.0					0.0	2.0					
							物質生命実験 I					8.0		8.0	0.0					
							物質生命輪講 (3年)		3.0					0.0	3.0					
							物質生命輪講 (4年)	3.0						3.0	0.0					
							物質生命実験 IV						3.0	0.0	3.0					
							△ 天然物応用化学特論 I (油脂)	2.0						2.0	0.0					
							△ 天然物応用化学特論 II (食品)		2.0					0.0	2.0					
							△ 天然物応用化学特論 IV (機能性脂質)		2.0					0.0	2.0					
							△ 応用化学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0					
△ 応用化学特別実験 I					3.0		3.0	0.0												
計	11.0	11.3	2.0	2.0	11.0	3.0	24.0	16.3												
教授	ひろたあきひこ 廣田 明彦	男	62	1974. 10. 1	1988. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	機械製作法 Ia	2.0						2.0	0.0	14.5	有	東京工業大学大 学院理工学研究 科生産機械工学 専攻博士課程 工学博士		
							機械製作法 Ib	2.0						2.0	0.0					
							機械製作法 II		2.0					0.0	2.0					
							切削・研削加工学		2.0					0.0	2.0					
							エレクトロメカニクス実験 I						4.0	0.0	4.0					
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0	0.0					
							エレクトロメカニクス演習 I			2.0				0.0	2.0					
							学外実習						3.0	0.0	3.0					
							機械工学演習第II			2.0				2.0	0.0					
							△ 機械加工特論 I	2.0						2.0	0.0					
							△ 機械加工特別演習			2.0	2.0			2.0	2.0					
							計	6.0	4.0	4.0	4.0	4.0	7.0	14.0	15.0					

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	みすみ 正明 三 角	男	64	1971. 4. 1	1990. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0						2.0	0.0	19.7	有	東京大学大学院 工学研究科機械 工学専攻博士課 程満期退学 工学博士	
							材料力学 Ia			2.0				0.0	2.0				
							材料力学 Ib			2.0				0.0	2.0				
							材料力学 II	2.0						2.0	0.0				
							材料力学 III		2.0					0.0	2.0				
							エレクトロメカニクス実験 I					4.0		0.0	4.0				
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0	0.0				
							エレクトロメカニクス演習 I				2.0			0.0	2.0				
							学外実習						3.0	0.0	3.0				
							機械工学演習第II			2.0				2.0	0.0				
							文系のための科学B		0.4					0.0	0.4				
							△ 材料力学特論 I	2.0						2.0	0.0				
							△ 材料力学特論 II		2.0					0.0	2.0				
							△ 機械工学特別実験					3.0	3.0	3.0	3.0				
△ 材料力学特別演習			2.0	2.0			2.0	2.0											
計	6.0	8.4	4.0	4.0	7.0	10.0	17.0	22.4											
教授	むらかみ ひとみ 村 上 仁 己	男	61	2007. 4. 1	2007. 4. 1	情報科学 科	フレッシュマンゼミ (CI)	2.0						2.0	0.0	12.5	有	北海道大学大学院 工学研究科博士 課程電子工学 専攻修士 工学博士	
							デジタル回路 II		2.0					0.0	2.0				
							デジタル信号処理	2.0						2.0	0.0				
							インフォメーションマネジメント		2.0					0.0	2.0				
							情報科学プロジェクト実験						3.0	0.0	3.0				
							輪講	2.0	2.0					2.0	2.0				
							ハードウェア実験						4.0	0.0	4.0				
							△ 入出力機器論		2.0					0.0	2.0				
							△ 電気電子工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0				
							計	6.0	8.0	0.0	0.0	2.0	9.0	8.0	17.0				
教授	やまき あきひろ 山 崎 章 弘	男	47	2008. 4. 1	2008. 4. 1	物質生命 理工学科	フレッシュマンゼミ (ML)	2.0						2.0	0.0	16.0	有	東京大学大学院 工学系研究科化 学工学専門課程 博士課程 工学博士	
							熱物理学 (ML後期：再)		2.0					0.0	2.0				
							物理化学II		2.0					0.0	2.0				
							分離精製工学		2.0					0.0	2.0				
							物質生命実験III					8.0		8.0	0.0				
							物質生命輪講 (3年)		3.0					0.0	3.0				
							物質生命輪講 (4年)	3.0						3.0	0.0				
							物質生命実験 IV					3.0		0.0	3.0				
							△ 応用化学特別演習 I			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 応用化学特別実験 II						3.0	0.0	3.0				
							計	5.0	9.0	2.0	2.0	8.0	6.0	15.0	17.0				

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	ゆげ 弓削 康平	男	49	1991. 4. 1	2000. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0						2.0	0.0	24.5	有	東京大学大学院 工学系研究科船舶 工学専門課程 博士課程修了 工学博士	
							コンピュータリテラシーa	2.0						2.0	0.0				
							コンピュータリテラシーb	2.0						2.0	0.0				
							コンピュータプログラミング III		2.0					0.0	2.0				
							計算力学	2.0						2.0	0.0				
							エレクトロメカニクス実験 I						4.0	0.0	4.0				
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0	0.0				
							エレクトロメカニクス演習 I			2.0				0.0	2.0				
							学外実習					3.0		0.0	3.0				
							機械工学演習第II			2.0				2.0	0.0				
							△ 計算力学特論 II		2.0					0.0	2.0				
							△ 計算力学特論 IV		2.0					0.0	2.0				
							△ 機械工学特別実験				3.0	3.0		3.0	3.0				
							△ 計算力学特別演習			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 機械工学特別演習			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 機械工学特別研究	3.0	3.0					3.0	3.0				
計	11.0	9.0	6.0	6.0	7.0	10.0	24.0	25.0											
教授	わたなべ 渡辺 一衛	男	58	1984. 4. 1	1994. 4. 1	情報科学 科	フレッシュマンゼミ (CI)	2.0						2.0	0.0	15.7	有	慶應義塾大学大 学院工学研究科 工学博士	
							インターンシップ (CI)		3.0					0.0	3.0				
							システム分析序論a		2.0					0.0	2.0				
							システム分析序論b		2.0					0.0	2.0				
							スケジューリング	2.0						2.0	0.0				
							情報科学プロジェクト実験						3.0	0.0	3.0				
							輪 講	2.0	2.0					2.0	2.0				
							数理科学実験						3.0	0.0	3.0				
							工場管理通論 (ML, EM)		2.0					0.0	2.0				
							文系のための科学B		0.4					0.0	0.4				
							△ スケジューリング特論I		2.0					0.0	2.0				
							△ システム分析	2.0						2.0	0.0				
							△ 情報工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0				
							計	8.0	13.4	0.0	0.0	2.0	8.0	10.0	21.4				
特別 任用 教授	わかばやし 若林 功	男	66	1994. 4. 1	2008. 4. 1	一般教育 等	解析 I (ML)	4.0						4.0	0.0	10.0	有	東京大学理学研 究科修士課程数 学専攻修了 理学博士	
							解析 II (ML)		2.0					0.0	2.0				
							解析 IV (ML, CI)		2.0					0.0	2.0				
							線形数学 I (CI)	2.0						2.0	0.0				
							解析 III (CI)	2.0						2.0	0.0				
							解析 II (EM)		2.0					0.0	2.0				
							線形数学 II (EM)		2.0					0.0	2.0				
							△ 応用数学特論 I	2.0						2.0	0.0				
							△ 応用数学特論 II		2.0					0.0	2.0				
							計	10.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0	10.0				

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実 習・実技		計				
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期				後期
准教授	いけがみ 敦子	女	51	1981. 4. 1	2007. 4. 1	情報科学 科	フレッシュマンゼミ (CI)	2.0						2.0	0.0	13.0	有	立教大学理学部 数学科 博士 (工学)
							アルゴリズムとデータ構造 Ia			2.0				0.0	2.0			
							アルゴリズムとデータ構造 Ib			2.0				0.0	2.0			
							アルゴリズムとデータ構造 II	2.0						2.0	0.0			
							基本プログラミング	2.0						2.0	0.0			
							基本プログラミング実験					3.0		3.0	0.0			
							情報科学プロジェクト実験					3.0		0.0	3.0			
							輪講	2.0	2.0					2.0	2.0			
							△最適化アルゴリズム特論 II		2.0					0.0	2.0			
							△情報工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0			
							計	8.0	8.0	0.0	0.0	5.0	5.0	13.0	13.0			
准教授	おかもと 秀輔	男	42	2005. 4. 1	2005. 4. 1	情報科学 科	科学技術の最前線		0.4					0.0	0.4	15.2	有	成蹊大学大学院 工学研究科情報 処理専攻博士後 期課程 博士 (工学)
							フレッシュマンゼミ (CI)	2.0						2.0	0.0			
							コンピュータシステム Ia	2.0						2.0	0.0			
							コンピュータシステム Ib	2.0						2.0	0.0			
							コンピュータシステム II			2.0				0.0	2.0			
							応用プログラミング			2.0				0.0	2.0			
							上級プログラミング	2.0						2.0	0.0			
							応用プログラミング実験					3.0		0.0	3.0			
							情報科学プロジェクト実験					3.0		0.0	3.0			
							輪講	2.0	2.0					2.0	2.0			
							上級プログラミング実験					2.0		2.0	0.0			
△計算機工学特論 I		2.0					0.0	2.0										
△情報工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0										
計	10.0	8.4	0.0	0.0	4.0	8.0	14.0	16.4										
准教授	おがた 博之	男	42	2002. 4. 1	2002. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0						2.0	0.0	20.5	有	東京大学大学院 工学系研究科 博士 (工学)
							機械設計法Iおよび基礎製図a	3.0						3.0	0.0			
							機械設計法Iおよび基礎製図b	3.0						3.0	0.0			
							機構学および機械要素			2.0				0.0	2.0			
							画像処理 (EM)	2.0						2.0	0.0			
							エレクトロメカニクス実験 I						4.0	0.0	4.0			
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0	0.0			
							エレクトロメカニクス演習 I				2.0			0.0	2.0			
							学外実習						3.0	0.0	3.0			
							機械工学演習第II			2.0				2.0	0.0			
							△知能システム特論 I	2.0						2.0	0.0			
							△知能システム特論 II		2.0					0.0	2.0			
							△機械工学特別実験					3.0	3.0	3.0	3.0			
△知能機械特別演習				2.0	2.0		2.0	2.0										
計	12.0	4.0	4.0	4.0	7.0	10.0	23.0	18.0										

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
准教授	かきはら かずお 笠原 和夫	男	52	1984. 4. 1	2007. 10. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0						2.0	0.0	18.5	有	成蹊大学大学院 工学研究科博士 前期課程 博士 (工学)	
							コンピュータプログラミング I			4.0					0.0				4.0
							弾・塑性学	2.0							2.0				0.0
							機械測定法	2.0							2.0				0.0
							エレクトロメカニクス実験 I						4.0	0.0	4.0				
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0	0.0				
							エレクトロメカニクス演習 I				2.0			0.0	2.0				
							学外実習						3.0	0.0	3.0				
							機械工学演習第II			2.0				2.0	0.0				
							△ 工作機械特論 I	2.0						2.0	0.0				
							△ 機械工学特別実験					3.0	3.0	3.0	3.0				
							△ 機械創成特別演習			2.0	2.0			2.0	2.0				
							計	8.0	4.0	4.0	4.0	7.0	10.0	19.0	18.0				
准教授	しばた まさあき 柴田 昌明	男	39	1998. 4. 1	1999. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0						2.0	0.0	22.0	有	慶應義塾大学大 学院理工学研究 科電気工学専攻 後期博士課程修 了 博士 (工学)	
							電磁気学b (EM)	2.0						2.0	0.0				
							パワーエレクトロニクス	2.0						2.0	0.0				
							制御工学 I		2.0					0.0	2.0				
							モーションコントロール		2.0					0.0	2.0				
							エレクトロメカニクス実験 I					4.0	0.0	4.0					
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0		4.0	0.0				
							エレクトロメカニクス演習 I				2.0			0.0	2.0				
							電気電子工学実験第IV					4.0		4.0	0.0				
							論文輪講	2.0	2.0					2.0	2.0				
							△ 自動制御論	2.0						2.0	0.0				
							△ 電気電子工学特別講義 I	1.0	1.0					1.0	1.0				
							△ 電気電子工学特論 I (電力・エネルギー)	2.0	2.0					2.0	2.0				
							△ 電気電子工学特別実験					2.0	2.0	2.0	2.0				
							△ 論文輪講 I	2.0	2.0					2.0	2.0				
計	15.0	11.0	0.0	2.0	10.0	6.0	25.0	19.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
准教授	鈴木 誠一	男	46	1991. 4. 1	1998. 4. 1	物質生命 理工学科	現代を生きる(身の回りの科学)		0.3					0.0	0.3	27.2	有	東京大学大学院 医学系研究科 医学博士	
							フレッシュマンゼミ (ML)	2.0					2.0	0.0					
							基礎生物学		4.0				0.0	4.0					
							バイオメディカルエレクトロニクス	2.0					2.0	0.0					
							生体情報論	2.0					2.0	0.0					
							物質生命実験 II					8.0	0.0	8.0					
							物質生命輪講 (3年)		3.0				0.0	3.0					
							物質生命輪講 (4年)	3.0					3.0	0.0					
							物質生命実験 IV					3.0	0.0	3.0					
							生物学実験					3.0	0.0	3.0					
							電気電子工学実験第IV					4.0	4.0	0.0					
							論文輪講	2.0	2.0				2.0	2.0					
							△ 生体電気工学	2.0					2.0	0.0					
							△ 電気電子工学特別講義 I	1.0	1.0				1.0	1.0					
							△ 電気電子工学特論 III (エレクトロニクス)	2.0	2.0				2.0	2.0					
△ 電気電子工学特別実験					2.0	2.0	2.0												
△ 論文輪講 I	2.0	2.0				2.0	2.0												
計	18.0	14.3	0.0	0.0	6.0	16.0	24.0	30.3											
准教授	鳥毛 明	男	51	1985. 4. 1	1986. 4. 1	エレクト ロメカニ クス学科	フレッシュマンゼミ (EM)	2.0					2.0	0.0	19.5	有	東京大学大学院 工学系研究科産 業機械工学専攻 博士課程修了 工学博士		
							コンピュータプログラミング II	2.0					2.0	0.0					
							メカトロニクス		2.0				0.0	2.0					
							制御工学 II	2.0					2.0	0.0					
							ロボット工学		2.0				0.0	2.0					
							エレクトロメカニクス実験 I					4.0	0.0	4.0					
							エレクトロメカニクス実験 II					4.0	4.0	0.0					
							エレクトロメカニクス演習 I			2.0			0.0	2.0					
							学外実習					3.0	0.0	3.0					
							機械工学演習第II		2.0				2.0	0.0					
							△ ロボット工学特論		2.0				0.0	2.0					
							△ 制御工学特論 I	2.0					2.0	0.0					
							△ 機械工学特別実験					3.0	3.0	3.0					
							△ 制御工学特別演習			2.0	2.0		2.0	2.0					
計	8.0	6.0	4.0	4.0	7.0	10.0	19.0	20.0											
准教授	中野 有紀子	女	42	2008. 4. 1	2008. 4. 1	情報科学 科	フレッシュマンゼミ (CI)	2.0					2.0	0.0	7.0	有	マサチューセツ 工科大学大学院 Media Arts & Sciences専攻修了 博士(情報理工学)		
							コンピュータ入門	2.0					2.0	0.0					
							Javaプログラミング	3.0					3.0	0.0					
							人工知能・学習理論		2.0				0.0	2.0					
							情報科学プロジェクト実験					3.0	0.0	3.0					
							△ 知識工学特論 I		2.0				0.0	2.0					
計	7.0	4.0	0.0	0.0	0.0	3.0	7.0	7.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
准教授	ひさとみ ひさし 久富 寿	男	40	2006. 4. 1	2006. 4. 1	物質生命 理工学科	現代を生きる(身の回りの科学)		0.3					0.0	0.3	19.2	有	明治大学大学院 農学研究科 博士(農学)	
							フレッシュマンゼミ (ML)	2.0					2.0	0.0					
							生化学 I	2.0					2.0	0.0					
							生化学 II		2.0				0.0	2.0					
							生物生理学		2.0				0.0	2.0					
							バイオテクノロジー	2.0					2.0	0.0					
							物質生命実験 II					8.0	0.0	8.0					
							物質生命輪講 (3年)		3.0				0.0	3.0					
							物質生命輪講 (4年)	3.0					3.0	0.0					
							物質生命実験 IV					3.0	0.0	3.0					
							△生物物理特論 I(細胞工学)	2.0					2.0	0.0					
							△生物物理特論 IV(バイオテクノロジー)	2.0					2.0	0.0					
							△応用化学特別演習 I			2.0	2.0		2.0	2.0					
							△応用化学特別実験 III					3.0		3.0	0.0				
計	13.0	7.3	2.0	2.0	3.0	11.0	18.0	20.3											
准教授	むとう けんいちろう 武藤 健一郎	男	40	1997. 4. 1	2001. 4. 1	一般教育 等	スポーツトレーニング IVa [3]				2.0		2.0	0.0	16.0	無	筑波大学大学院 修士課程体育研 究科コーチ学専 攻 体育学修士		
							スポーツトレーニング IVa [4]				2.0		2.0	0.0					
							スポーツトレーニング IVa [5]				2.0		2.0	0.0					
							スポーツトレーニング IVa [6]				2.0		2.0	0.0					
							スポーツトレーニング IVa [8]				2.0		2.0	0.0					
							スポーツトレーニング IVa [9]				2.0		2.0	0.0					
							スポーツトレーニング IVa [10]				2.0		2.0	0.0					
							スポーツトレーニング IVb [3]					2.0	0.0	2.0					
							スポーツトレーニング IVb [4]					2.0	0.0	2.0					
							スポーツトレーニング IVb [5]					2.0	0.0	2.0					
							スポーツトレーニング IVb [6]					2.0	0.0	2.0					
							スポーツトレーニング IVb [8]					2.0	0.0	2.0					
							スポーツトレーニング IVb [9]					2.0	0.0	2.0					
							スポーツトレーニング IVb [10]					2.0	0.0	2.0					
							トレーニングの科学		2.0				0.0	2.0					
スポーツ健康論	2.0					2.0	0.0												
計	2.0	2.0	0.0	0.0	14.0	14.0	16.0	16.0											
講師	とたに きいちろう 戸谷 希一郎	男	34	2008. 4. 1	2008. 4. 1	物質生命 理工学科	フレッシュマンゼミ (ML)	2.0					2.0	0.0	16.0	無	慶應義塾大学大 学院理工学研究 科後期博士課程 博士(工学)		
							生命基礎化学	2.0					2.0	0.0					
							高分子化学 I		2.0				0.0	2.0					
							高分子化学 II	2.0					2.0	0.0					
							物質生命実験 II					8.0	0.0	8.0					
							物質生命輪講 (3年)		3.0				0.0	3.0					
							物質生命輪講 (4年)	3.0					3.0	0.0					
							物質生命実験 IV					3.0	0.0	3.0					
							△応用化学特別演習 I			2.0	2.0		2.0	2.0					
							△応用化学特別実験 III					3.0		3.0				0.0	
計	9.0	5.0	2.0	2.0	3.0	11.0	14.0	18.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導 担 当 資 格 の 有 無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
助教	伊東 拓	男	29	2006. 4. 1	2008. 4. 1	情報科学 科	基本プログラミング (再)		2.0					0.0	2.0	4.5	無	筑波大学大学院 博士課程シス テム情報工学研究 科 博士(工学)	
							上級プログラミング	2.0					2.0	0.0					
							基本プログラミング実験 (再)					3.0	0.0	3.0					
							上級プログラミング実験				2.0	0.0	2.0	0.0					
					計	2.0	2.0	0.0	0.0	2.0	3.0	4.0	5.0						
助教	岩田 理	男	45	1990. 4. 1	2008. 4. 1	一般教育 等	基礎化学Bc		4.0					0.0	4.0	8.5	無	筑波大学大学院 理工学研究科 博士(工学)	
							理学基礎実験 (ML)					3.0	0.0	3.0					
							基礎化学 Ic (CI)	2.0					2.0	0.0					
							理学基礎実験 (CI)					3.0	0.0	3.0					
							基礎化学 Ic (EM)	2.0					2.0	0.0					
							理学基礎実験 (EM)					3.0		3.0	0.0				
					計	4.0	4.0	0.0	0.0	3.0	6.0	7.0	10.0						
助教	浦崎 浩平	男	30	2008. 4. 1	2008. 4. 1	物質生命 理工学科	基礎化学Ac	4.0					4.0	0.0	3.0	無	早稲田大学理工学研究科 応用化学専攻博士後期課 程修了 博士(工学)		
							エネルギー反応工学	2.0					2.0	0.0					
							計	6.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0				0.0	
助教	加藤 信彦	男	30	2005. 5. 1	2008. 4. 1	物質生命 理工学科	機器分析 I	2.0					2.0	0.0	2.0	無	金沢大学自然科学研究 科博士後期課程 博士(理学)		
							量子化学		2.0				0.0	2.0					
							計	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0				2.0	
助教	小柳 文子	女	53	1980. 4. 1	2008. 4. 1	物質生命 理工学科	基礎電磁気学H		4.0					0.0	4.0	4.0	無	工学院大学工学 研究科修士課程 博士(工学)	
							解析 IIIa (CI)	0.5					0.5	0.0					
							解析 IIIb (CI)	0.5					0.5	0.0					
							解析 I (EM)	1.0					1.0	0.0					
							線形数学 Ia (EM)	0.5					0.5	0.0					
							線形数学 Ib (EM)	0.5					0.5	0.0					
							解析 IIIa (EM)	0.5					0.5	0.0					
							解析 IIIb (EM)	0.5					0.5	0.0					
												計	4.0	4.0	0.0				0.0
助教	坂本 昇一	男	46	1991. 4. 1	2008. 4. 1	物質生命 理工学科	解析 IIIa (CI)	0.5					0.5	0.0	3.5	無	慶應義塾大学大 学院理工学研究 科博士課程 理学博士		
							解析 IIIb (CI)	0.5					0.5	0.0					
							力学E	4.0					4.0	0.0					
							解析 IIa (EM)		0.5				0.0	0.5					
							解析 IIb (EM)		0.5				0.0	0.5					
							線形数学 IIa (EM)		0.5				0.0	0.5					
							線形数学 IIb (EM)		0.5				0.0	0.5					
					計	5.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.0	2.0						
助教	相良 直哉	男	29	2006. 4. 1	2008. 4. 1	情報科学 科	基本プログラミング	2.0					2.0	0.0	5.0	無	中央大学大学院理 工学研究科情報工 学専攻博士後期課 程 博士(工学)		
							応用プログラミング		2.0				0.0	2.0					
							基本プログラミング実験					3.0	3.0	0.0					
							応用プログラミング実験					3.0	0.0	3.0					
					計	2.0	2.0	0.0	0.0	3.0	3.0	5.0	5.0						
助教	菅沼 秀樹	男	29	2008. 4. 1	2008. 4. 1	物質生命 理工学科	基礎科学Ac	4.0					4.0	0.0	3.0	無	筑波大学大学院生命環 境科学研究科修了 博士(農学)		
							物理化学 I(後期:再)		2.0				0.0	2.0					
							計	4.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0				2.0	
助教	菅谷 麻希	女	28	2008. 4. 1	2008. 4. 1	物質生命 理工学科	外国語文献講読	2.0					2.0	0.0	2.0	無	成蹊大学大学院工学研 究科博士後期課程修了 博士(工学)		
							遺伝子工学		2.0				0.0	2.0					
							計	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0				2.0	

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号			
							科目名	毎週授業時間数												
								講義		演習		実験・実 習・実技		計						
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期											
助教	つくだ 佃 俊明	男	33	2005.7.1	2008.4.1	物質生命 理工学科	外国語文献講読 無機化学 I (後期:再)	2.0						2.0	0.0	2.0	無	大阪大学大学院理学研 究科博士後期課程修了 博士(理学)		
							計	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0	2.0				
助教	なかの 中野 武雄	男	41	1991.4.1	2008.4.1	物質生命 理工学科	解析 IIIa (CI) 解析 IIIb (CI) 解析 IIa (EM) 解析 IIb (EM) 線形数学 IIa (EM) 線形数学 IIb (EM) 解析 IIIa (EM) 解析 IIIb (EM)	0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5						0.5 0.5 0.0 0.5 0.0 0.5 0.5 0.5	0.0 0.0 0.5 0.5 0.0 0.5 0.0 0.0	2.0	無	東京大学大学院 工学研究科物理工 学専攻修士課程 博士(工学)		
							計	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0	2.0				
助教	にのみや 二ノ宮 晃	男	56	1977.4.1	2008.4.1	エレクト ロメカニ クス学科	基礎電磁気学M コンピュータリテラシーa コンピュータリテラシーb	2.0 2.0 2.0						4.0 2.0 2.0	0.0 0.0 0.0	4.0	無	工学院大学工学 部電気工学科 博士(工学)		
							計	4.0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	4.0	4.0				
助教	はたの 波多野 滋子	女	61	1973.4.1	2008.4.1	エレクト ロメカニ クス学科	解析 IIIa (CI) 解析 IIIb (CI) 解析 I (EM) 線形数学 Ia (EM) 線形数学 Ib (EM) 機械設計法 Iおよび基礎製図a 機械設計法 Iおよび基礎製図b	0.5 0.5 1.0 0.5 0.5 2.0 2.0						0.5 0.5 1.0 0.5 0.5 2.0 2.0	0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0 0.0	7.0	0.0	3.5	無	東京女子大学大 学院理学研究科 数学専攻修士課 程 博士(工学)
							計	7.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.0	0.0	3.5				
助教	はなわ 端 大	男	31	2007.4.1	2008.4.1	情報科学 科	基本プログラミング 応用プログラミング 基本プログラミング実験 応用プログラミング実験	2.0 2.0 2.0 2.0						2.0 2.0 3.0 3.0	0.0 0.0 0.0 0.0	5.0	無	茨城大学大学院 理工学研究科博 士課程 工学博士		
							計	2.0	2.0	0.0	0.0	3.0	3.0	5.0	5.0	5.0				
助教	まつむら 松村 有里子	女	30	2007.4.1	2008.4.1	物質生命 理工学科	有機化学 I (後期:再) 機器分析 II	2.0 2.0						2.0 2.0	0.0 0.0	2.0	無	奈良女子大学大学院人間文 化研究科人間環境科学専攻 博士後期課程 博士(理学)		
							計	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0	2.0				
助教	むらまつ 村松 大吾	男	34	2007.4.1	2008.4.1	エレクト ロメカニ クス学 科	コンピュータプログラミング II コンピュータプログラミング III	2.0 2.0						2.0 2.0	0.0 0.0	2.0	無	早稲田大学大学院理工 学研究科博士後期課程 博士(工学)		
							計	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0	2.0				
助教	よしだ 吉田 清隆	男	39	2005.4.1	2008.4.1	情報科学 科	応用プログラミング(再) 応用プログラミング実験(再)	2.0 2.0						2.0 3.0	0.0 0.0	2.5	無	北海道大学大学院工学研究 科システム情報工学専攻博 士後期課程 博士(工学)		
							計	2.0	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0	5.0	0.0	2.5				

[注]1 「IV 1 全学の教員組織」(表19)に記載の専任教員について、所属組織ごとに作成してください。ただし、大学附置研究所、学部附属研究所、附属病院等の教員については、授業を担当している教員についてのみ記載してください。

- 「科目名」欄に記載する担当科目のうち、大学院研究科の授業科目には△印を付してください。
- 「授業科目」欄については、セメスター制の場合を例示していますが、通年制の場合、3学期制の場合等は、適宜、欄を修正して記入してください。
- 「毎週授業時間数」は、時間割編成上のいわゆるコマではなく、時間数に換算して記入してください(例えば1コマ90分の場合は、2時間)。
- 1授業科目を複数の教員で担当する場合は、当該授業時数を担当者数で除して毎週授業時間数を算出してください。
- 「年間平均毎週授業時間数」欄には、各専任教員ごとの前期と後期の担当授業時間の合計を2で割った年間平均の時間数を記入してください。
- 「大学院における研究指導担当資格の有無」欄には、大学が定める基準に基づいて資格の有無を記入してください。

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実 習・実技		計				
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期									
教授	あさみ かずひこ 浅見 和彦	男	60	1976. 4. 1	1986. 4. 1	日本文学 科	日本文学入門 Ic	2.0					2.0	0.0	10.0	有	東京大学大学院 博士課程満期退 学 文学修士	
							日本文学入門 IIc		2.0				0.0	2.0				
							古典文学基礎研究c	2.0	2.0				2.0	2.0				
							日本文学演習 Id			2.0	2.0		2.0	2.0				
							日本語・日本文学総合テーマ講義C	2.0					2.0	0.0				
							日本語・日本文学総合テーマ講義D		2.0				0.0	2.0				
							△ 中世文学演習			2.0	2.0		2.0	2.0				
計	6.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0										
教授	あらかや しげひこ 新屋 重彦	男	63	1989. 4. 1	1997. 4. 1	現代社会 学科	現代と宗教	2.0					2.0	0.0	12.0	有	明治学院大学大 学院社会学社会 福祉学博士課程 単位取得修了 社会学修士	
							現代社会研究の基礎 Ia	2.0					2.0	0.0				
							現代社会研究の基礎 IIa		2.0				0.0	2.0				
							現代社会研究の方法 Ia	2.0					2.0	0.0				
							現代社会研究の方法 IIa		2.0				0.0	2.0				
							演習 Ia			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIa				2.0		0.0	2.0				
							宗教と人間	2.0					2.0	0.0				
							宗教と現代世界		2.0				0.0	2.0				
							生命倫理と社会	2.0					2.0	0.0				
							△ 社会学演習A			2.0	2.0		2.0	2.0				
計	10.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	14.0	10.0										
教授	いけがみ ひろこ 池上 裕子	女	60	1991. 4. 1	1994. 4. 1	国際文化 学科	歴史に学ぶ(神話と中世のファンタジー)		0.3				0.0	0.3	12.3	有	一橋大学大学院 経済学研究科博 士後期課程 博士(史学)	
							国際文化研究の現在	0.3					0.3	0.0				
							基礎演習 IIIa			2.0			2.0	0.0				
							基礎演習 IVa				2.0		0.0	2.0				
							演習 Ib			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIb				2.0		0.0	2.0				
							演習 IIIb				2.0		2.0	0.0				
							演習 IVb				2.0		0.0	2.0				
							日本の歴史と文化	2.0					2.0	0.0				
							日本文化・文化史特講C		2.0				0.0	2.0				
							△ 歴史研究 IA	2.0					2.0	0.0				
							△ 歴史研究 IIA		2.0				0.0	2.0				
△ 歴史特殊研究B	2.0	2.0				2.0	2.0											
計	6.3	6.3	6.0	6.0	0.0	0.0	12.3	12.3										
教授	いび たかし 揖斐 高	男	61	1979. 4. 1	1986. 4. 1	日本文学 科	※ 在外研究のため、開講科目なし						-	-	-	有	東京大学大学院 文学研究科国語 国文学専攻博士 課程 博士(文学)	
							計	-	-	-	-	-	-	-				

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導 担当 資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	おおくま 大熊 昭信	男	63	2000. 4. 1	2000. 4. 1	英米文学 科	歴史に学ぶ (神話と中世のファンタジー)		0.3						0.0	0.3	10.2	有	東京教育大学大 学院文学研究科 英語学英米文学 科専攻 博士 (文学)
							英米文学概論 I	2.0						2.0	0.0				
							イギリス文学史 II		2.0					0.0	2.0				
							基礎演習 Id			2.0				2.0	0.0				
							基礎演習 IId				2.0			0.0	2.0				
							演習 Ia・IIIa				2.0			2.0	0.0				
							演習 IIa・IVa					2.0		0.0	2.0				
							演習 Ib・IIIb				2.0			2.0	0.0				
							演習 IIb・IVb					2.0		0.0	2.0				
							△イギリス文学研究 IC (小説・批評)	2.0						2.0	0.0				
							△イギリス文学研究 IIC (小説・批評)		2.0					0.0	2.0				
計	4.0	4.3	6.0	6.0	0.0	0.0	10.0	10.3											
教授	おおくま 奥野 昌宏	男	61	1982. 4. 1	1992. 4. 1	現代社会 学科	トピック・セミナーC	2.0						2.0	0.0	10.0	有	立教大学大学院 社会学研究科応 用社会学専攻博 士後期課程 (満 期退学) 社会学修士	
							現代社会研究の基礎 Ib	2.0					2.0	0.0					
							現代社会研究の基礎 I Ib		2.0				0.0	2.0					
							演習 Ic・IIIc			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIc・IVc				2.0		0.0	2.0					
							演習 Id・IIId			2.0			2.0	0.0					
							演習 IId・IVd				2.0		0.0	2.0					
							マス・コミュニケーション論	2.0					2.0	0.0					
							ジャーナリズム論		2.0				0.0	2.0					
							コミュニケーション史		2.0				0.0	2.0					
計	6.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
教授	おの 小野 尚美	女	46	2004. 4. 1	2004. 4. 1	英米文学 科	英語講読演習 IIc			2.0			0.0	2.0	10.0	有	米国州立イン ディアナ大学大 学院 (ブルーミ ントン校) Ph. D (学術博士)		
							フレッシュマン・セミナー Ib	2.0					2.0	0.0					
							フレッシュマン・セミナー IIb		2.0				0.0	2.0					
							演習 In・IIIIn			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIn・IVn				2.0		0.0	2.0					
							英語科教育法 I		2.0				0.0	2.0					
							英語科教育法 IIa	2.0					2.0	0.0					
							△コア・カリキュラム (英語教育) A	2.0					2.0	0.0					
							△英語教育特殊研究A (教育理論)	2.0	2.0				2.0	2.0					
計	8.0	6.0	2.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
教授	かどぐら 門口 充徳	男	57	1982. 4. 1	1992. 4. 1	現代社会 学科	社会学の基礎 I	2.0					2.0	0.0	12.0	有	早稲田大学大 学院文学研究科 社会学専攻博士 後期課程 (満期 退学) 文学修士		
							社会学の基礎 II		2.0				0.0	2.0					
							現代社会研究の基礎 Id	2.0					2.0	0.0					
							現代社会研究の基礎 IId		2.0				0.0	2.0					
							演習 Ie			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIe				2.0		0.0	2.0					
							演習 If			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIIf				2.0		0.0	2.0					
							社会学の理論A	2.0					2.0	0.0					
							現代社会と政策		2.0				0.0	2.0					
							△社会学研究 IA	2.0					2.0	0.0					
							△社会学研究 IIA		2.0				0.0	2.0					
							計	8.0	8.0	4.0	4.0	0.0	0.0	12.0				12.0	

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期										
教授	木内 剛	男	56	1993. 4. 1	1999. 4. 1	教職課程	教育原論IIa		2.0					0.0	2.0	13.0	無	東京大学大学院 教育学研究科学 校教育学専攻博 士課程中退 教育学修士	
							教育原論IIb		2.0					0.0	2.0				
							社会科教育法B	2.0						2.0	0.0				
							社会科・公民科教育法a		2.0					0.0	2.0				
							社会科・公民科教育法b		2.0					0.0	2.0				
							公民科教育法a	2.0						2.0	0.0				
							公民科教育法b		2.0					0.0	2.0				
							教職総合演習a			2.0				2.0	0.0				
							教育実践研究Ic	2.0	2.0					2.0	2.0				
							教育実践研究IIc	3.0	3.0					3.0	3.0				
計							9.0	15.0	2.0	0.0	0.0	0.0	11.0	15.0					
教授	久保田 篤	男	47	1996. 4. 1	2003. 4. 1	日本文学 科	日本語学基礎研究a	2.0	2.0					2.0	2.0	10.0	有	東京大学大学院 人文科学研究科 国語国文学専門 課程修士課程修 了 文学修士	
							日本語学演習Ia			2.0	2.0			2.0	2.0				
							日本語の歴史A	2.0						2.0	0.0				
							日本語の歴史B		2.0					0.0	2.0				
							日本語学講義A	2.0						2.0	0.0				
							実践漢字講座b		2.0					0.0	2.0				
							△日本語学研究A	2.0	2.0					2.0	2.0				
計							8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	10.0					
教授	下河辺 美知子	女	58	1994. 4. 1	1994. 4. 1	英米文学 科	英語 I-C0d	2.0						2.0	0.0	10.0	有	青山学院大学大 学院文学研究英 米文学専攻博士 課程単位取得満 期退学 文学修士	
							英語 II-C0e		2.0					0.0	2.0				
							アメリカ文学史 II		2.0					0.0	2.0				
							演習 Ih・IIIh			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIh・IVh				2.0			0.0	2.0				
							演習 Ii・IIIi			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIi・IVi				2.0			0.0	2.0				
							文学理論 I	2.0						2.0	0.0				
							△アメリカ文学研究IB (政治的表象)	2.0						2.0	0.0				
							△アメリカ文学研究IIB (政治的表象)		2.0					0.0	2.0				
計							6.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0					
教授	石 剛	男	54	1999. 4. 1	2002. 4. 1	国際文化 学科	国際文化研究の現在	0.3						0.3	0.0	10.2	有	一橋大学大学院 社会学研究科 博士 (Ph. D)	
							基礎演習Ib			2.0				2.0	0.0				
							基礎演習IIb				2.0			0.0	2.0				
							基礎演習IIIb			2.0				2.0	0.0				
							基礎演習IVb				2.0			0.0	2.0				
							演習Id			2.0				2.0	0.0				
							演習IID				2.0			0.0	2.0				
							比較文化研究A	2.0						2.0	0.0				
							比較文化研究B		2.0					0.0	2.0				
							△歴史研究ID	2.0						2.0	0.0				
							△歴史研究IID		2.0					0.0	2.0				
							計							4.3	4.0				6.0

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導 担当 資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	たかだ 高田 昭彦	男	60	1976. 4. 1	1986. 4. 1	現代社会 学科	トピック・セミナーD		2.0					0.0	2.0	16.5	有	東京大学大学院 文学研究科社会 学専攻博士課程 社会学修士	
							インターンシップIIC					1.0	0.0	1.0					
							現代社会の諸問題	2.0					2.0	0.0					
							現代社会の理論		2.0				0.0	2.0					
							現代社会研究の方法Ic	2.0					2.0	0.0					
							現代社会研究の方法IIc		2.0				0.0	2.0					
							演習I l			2.0			2.0	0.0					
							演習II l				2.0		0.0	2.0					
							演習Im			2.0			2.0	0.0					
							演習II m				2.0		0.0	2.0					
							環境社会学		2.0				0.0	2.0					
							現代の環境問題	2.0					2.0	0.0					
							NPOの社会学	2.0					2.0	0.0					
							△ 地域福祉・NPO演習A			2.0	2.0		2.0	2.0					
△ 社会学特殊研究B	2.0	2.0				2.0	2.0												
計	10.0	10.0	6.0	6.0	0.0	1.0	16.0	17.0											
教授	たけうち 竹内 敬子	女	52	1988. 4. 1	1999. 4. 1	国際文化 学科	女性・男性・ジェンダーA	2.0					2.0	0.0	11.2	有	University of Manchester School of Arts, History and Cultures (Ph. D)		
							国際文化研究の現在	0.3					0.3	0.0					
							基礎演習 Ic			2.0			2.0	0.0					
							基礎演習 IIc				2.0		0.0	2.0					
							演習 Ie			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIe				2.0		0.0	2.0					
							演習 IIIe			2.0			2.0	0.0					
							演習 IVe				2.0		0.0	2.0					
							イギリスの歴史と文化A	2.0					2.0	0.0					
							イギリスの歴史と文化B		2.0				0.0	2.0					
							△ 女性史・ジェンダー研究 IA	2.0					2.0	0.0					
							△ 女性史・ジェンダー研究 IIA		2.0				0.0	2.0					
							計	6.3	4.0	6.0	6.0	0.0	0.0	12.3				10.0	
							教授	たなべ 田辺 春美	女	51	1990. 4. 1	1999. 4. 1	英米文学 科	英語 I-C0p				2.0	
TOEFL Preparation I	2.0					2.0								0.0					
歴史に学ぶ(神話と中世のファンタジー)		0.3				0.0								0.3					
英語学概論 I	2.0					2.0								0.0					
基礎演習 Ie			2.0			2.0								0.0					
基礎演習 IIe				2.0		0.0								2.0					
演習 Im・III m			2.0			2.0								0.0					
演習 IIm・IV m				2.0		0.0								2.0					
英語史 I	2.0					2.0								0.0					
英語史 II		2.0				0.0								2.0					
計	8.0	2.3	4.0	4.0	0.0	0.0								12.0	6.3				
教授	なかざと 中里 明彦	男	63	1978. 4. 1	1984. 4. 1	国際文化 学科	国際文化研究の現在	0.3					0.3	0.0	4.2	有	東京大学大学院 社会学研究科 (国際関係論専 攻課程) 国際学修士		
							演習 III f			2.0			2.0	0.0					
							演習 IV f				2.0		0.0	2.0					
							アメリカの歴史と文化A	2.0					2.0	0.0					
							アメリカの歴史と文化B		2.0				0.0	2.0					
計	2.3	2.0	2.0	2.0	0.0	0.0	4.3	4.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	なだみつ ようこ 灘光 洋子	女	52	2005. 4. 1	2005. 4. 1	英米文学科	英語I-C0o	2.0						2.0	0.0	10.0	無	University of Oklahoma, Dept. of Communication Ph. D.	
							英語II-C0o		2.0					0.0	2.0				
							フレッシュマン・セミナーIa	2.0						2.0	0.0				
							フレッシュマン・セミナーIIa		2.0					0.0	2.0				
							演習Ik・IIIk			2.0				2.0	0.0				
							演習IIk・IVk				2.0			0.0	2.0				
							翻訳・通訳セミナーA	2.0						2.0	0.0				
							翻訳・通訳セミナーB		2.0					0.0	2.0				
							Intercultural Communication I	2.0						2.0	0.0				
Intercultural Communication II		2.0					0.0	2.0											
計	8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
教授	はまだ ゆうすけ 浜田 雄介	男	48	2004. 4. 1	2004. 4. 1	日本文学科	日本文学入門 Id	2.0						2.0	0.0	10.0	有	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程退学文学修士	
							日本文学入門 IID		2.0					0.0	2.0				
							近・現代文学基礎研究b	2.0	2.0					2.0	2.0				
							日本文学演習 Ih・IIh			2.0	2.0			2.0	2.0				
							日本文学演習 Ii・IIi			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△近代文学演習B			2.0	2.0			2.0	2.0				
計	4.0	4.0	6.0	6.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
教授	はやし ひろちか 林 廣親	男	55	1983. 4. 1	1995. 4. 1	日本文学科	近・現代文学基礎研究a	2.0	2.0					2.0	2.0	10.0	有	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻課程博士課程中退文学修士	
							日本文学演習 If・IIIf			2.0	2.0			2.0	2.0				
							日本文学演習 Ig・IIg			2.0	2.0			2.0	2.0				
							近・現代日本文学講義E	2.0						2.0	0.0				
							近・現代日本文学講義F		2.0					0.0	2.0				
							△近代文学研究A	2.0	2.0					2.0	2.0				
計	6.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
教授	ほりうち まさき 堀内 正樹	男	56	2002. 4. 1	2002. 4. 1	国際文化学科	国際文化研究の現在	0.3						0.3	0.0	10.2	有	東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻博士課程文学修士	
							基礎演習 Ie			2.0				2.0	0.0				
							基礎演習 IIe				2.0			0.0	2.0				
							基礎演習 IIIId			2.0				2.0	0.0				
							基礎演習 IVd				2.0			0.0	2.0				
							演習 Ih			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIh				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIh			2.0				2.0	0.0				
							演習 IVh				2.0			0.0	2.0				
							民族誌 (地誌を含む。)		2.0					0.0	2.0				
							フィールドワーク論	2.0						2.0	0.0				
計	2.3	2.0	8.0	8.0	0.0	0.0	10.3	10.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	まさおか かずえ 正岡 和恵	女	54	1995.4.1	2001.4.1	英米文学科	英語 III-C01	2.0						2.0	0.0	10.2	有	東京大学大学院 人文科学研究科 英語英文学専門 課程博士課程単 位取得満期退学 文学修士	
							英語 IV-C01			2.0					0.0				2.0
							歴史に学ぶ(神話と中世のファンタジー)			0.3					0.0				0.3
							イギリス文学史 I	2.0							2.0				0.0
							フレッシュマン・セミナー Ie	2.0							2.0				0.0
							フレッシュマン・セミナー Iie			2.0					0.0				2.0
							基礎演習 Ih			2.0					2.0				0.0
							基礎演習 IIh				2.0				0.0				2.0
							演習 Ic・IIIc				2.0				2.0				0.0
							演習 IIc・IVc					2.0			0.0				2.0
英米文学を読むための思想B			2.0					0.0	2.0										
計	6.0	6.3	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.3											
教授	まつら よしひろ 松浦 義弘	男	55	1995.4.1	1998.4.1	国際文化学科	国際文化研究の現在	0.3						0.3	0.0	10.2	有	東京大学大学院 人文科学研究科 西洋史学専攻博 士課程 文学修士	
							基礎演習 If			2.0				2.0	0.0				
							基礎演習 IIIf				2.0			0.0	2.0				
							基礎演習 IIIe			2.0				2.0	0.0				
							基礎演習 IVe				2.0			0.0	2.0				
							演習 Ii			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIi				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIi			2.0				2.0	0.0				
							演習 IVi				2.0			0.0	2.0				
							フランスの歴史と文化A	2.0						2.0	0.0				
フランスの歴史と文化B		2.0					0.0	2.0											
計	2.3	2.0	8.0	8.0	0.0	0.0	10.3	10.0											
教授	みうら くによす 三浦 國泰	男	60	1988.4.1	1991.4.1	一般教育等	※ 在外研究のため、開講科目なし							-	-	-	有	北海道大学大学 院文学研究科博 士後期課程退学 文学博士	
							計	-	-	-	-	-	-	-	-				
教授	むた えつこ 牟田 悦子	女	58	1995.4.1	1998.4.1	教職課程	※ 在外研究のため、開講科目なし							-	-	-	無	東京大学大学院 教育学研究科博 士課程単位取得 満期退学 教育学修士	
							計	-	-	-	-	-	-	-					
教授	がい モティカ ガイ モティカ	男	58	1995.4.1	2000.4.1	英米文学科	英語I-0Re	2.0						2.0	0.0	10.0	有	ワシントン大学大 学院言語学博士課 程ABD MOTESOL	
							英語II-0Re		2.0					0.0	2.0				
							Academic Writing IIIb		2.0					0.0	2.0				
							演習Io・IIIo			2.0				2.0	0.0				
							演習IIo・IVo				2.0			0.0	2.0				
							Teaching English as a Second Language I	2.0						2.0	0.0				
							Teaching English as a Second Language II		2.0					0.0	2.0				
							Topics in American Culture A	2.0						2.0	0.0				
							△ 英語教育演習B			2.0	2.0			2.0	2.0				
計	6.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期										
教授	もり 森 雄一	男	41	2000. 4. 1	2008. 4. 1	日本文学 科	日本語学基礎研究b	2.0	2.0					2.0	2.0	10.0	有	東京大学大学院 人文科学研究科 博士課程退学 修士（文学）	
							日本語学演習 Ib・IIb			2.0	2.0			2.0	2.0				
							日本語学演習 Ic・IIc			2.0	2.0			2.0	2.0				
							日本語の構造	2.0						2.0	0.0				
							日本語の文法		2.0					0.0	2.0				
							△日本語学共通講義 I	2.0						2.0	0.0				
							△日本語学共通講義 II		2.0					0.0	2.0				
計	6.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
教授	よねやま 米山 三明	男	59	1974. 4. 1	1989. 4. 1	英米文学 科	英語学概論 II		2.0					0.0	2.0	10.0	有	東京大学大学院 人文科学研究科 英語英文学専攻 修士課程 文学修士	
							フレッシュマン・セミナー If	2.0					2.0	0.0					
							フレッシュマン・セミナー IIIf		2.0				0.0	2.0					
							演習 II・IIII			2.0			2.0	0.0					
							演習 III・IVI				2.0		0.0	2.0					
							英文法 I	2.0					2.0	0.0					
							英文法 II		2.0				0.0	2.0					
							△コア・カリキュラム（英語学）B	2.0					2.0	0.0					
							△英語学特殊研究A（理論言語学）	2.0	2.0				2.0	2.0					
計	8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
特別 任用 教授	おおくぼ 大久保 洋子	女	68	1965. 4. 1	2006. 4. 1	現代社会 学科	福祉社会に生きる	2.0						2.0	0.0	15.0	有	お茶の水女子大 学教育学部 教育学士	
							老年学	2.0					2.0	0.0					
							老人福祉論		2.0				0.0	2.0					
							地域福祉実践研究a	2.0					2.0	0.0					
							地域福祉実践研究b	2.0					2.0	0.0					
							地域福祉論		2.0				0.0	2.0					
							フィットネスの理論と実際（トリム）					2.0	2.0	0.0					
							スポーツの理論と実際C					2.0	2.0	0.0					
							スポーツの理論と実際D					2.0	0.0	2.0					
							演習Ib・IIIb			2.0			2.0	0.0					
							演習IIb・IVb				2.0		0.0	2.0					
							社会福祉事業史	2.0					2.0	0.0					
							社会福祉概論		2.0				0.0	2.0					
△地域福祉・NPO演習B			2.0	2.0		2.0	2.0												
計	10.0	6.0	4.0	4.0	4.0	2.0	18.0	12.0											
特別 任用 教授	さとう 佐藤 バーバラ	女	65	1994. 4. 1	2008. 4. 1	現代社会 学科	国際英語セミナーIIIA	2.0					2.0	0.0	10.0	有	コロンビア大学 大学院 Department of East Asian Languages and Cultures 博士 課程修了 Doctor of Philosophy		
							国際英語セミナーIVA		2.0				0.0	2.0					
							現代社会研究の基礎Ic	2.0					2.0	0.0					
							現代社会研究の基礎II c		2.0				0.0	2.0					
							演習Ii			2.0			2.0	0.0					
							演習IIi				2.0		0.0	2.0					
							近代社会の誕生	2.0					2.0	0.0					
							近代社会の変容		2.0				0.0	2.0					
							グローバリゼーションと社会変動		2.0				0.0	2.0					
							メディアの社会史	2.0					2.0	0.0					
計	8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	10.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実 習・実技		計				
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期											
特別 任用 教授	鈴木 健二	男	65	1997. 4. 1	2008. 4. 1	現代社会 学科	現代社会研究の方法 If (調査)	2.0					2.0	0.0	10.0	有	東京大学大学院 人文社会系研究 科社会情報学専 攻博士課程 社会学博士	
							現代社会研究の方法 IIf (調査)		2.0				0.0	2.0				
							演習 Ij			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIj			2.0			0.0	2.0				
							演習 Ik			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIk				2.0		0.0	2.0				
							新聞史	2.0					2.0	0.0				
							現代の新聞		2.0				0.0	2.0				
							△メディア・コミュニケーション研究 IB	2.0					2.0	0.0				
							△メディア・コミュニケーション研究 IIB		2.0				0.0	2.0				
計	6.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0										
准教授	岩田 淳子	女	49	2004. 4. 1	2008. 4. 1	教職課程	心理学A	2.0					2.0	0.0	7.0	無	青山学院大学大 学院文学研究科 心理学専攻修士 課程 文学修士	
							心理学B		2.0				0.0	2.0				
							こころの健康B		2.0				0.0	2.0				
							教育相談a	2.0					2.0	0.0				
							教育相談b		2.0				0.0	2.0				
							教育相談c	2.0					2.0	0.0				
							教職総合演習e			2.0			0.0	2.0				
計	6.0	6.0	0.0	2.0	0.0	0.0	6.0	8.0										
准教授	遠藤 不比人	男	47	2008. 4. 1	2008. 4. 1	一般教育 等	英語I-C0n	2.0					2.0	0.0	10.0	無	慶應義塾大学大 学院文学研究科 英米文学専攻博 士課程 文学修士	
							英語II-C0n		2.0				0.0	2.0				
							英語II-C0p		2.0				0.0	2.0				
							Academic Writing Ib		2.0				0.0	2.0				
							フレッシュマン・セミナーId	2.0					2.0	0.0				
							フレッシュマン・セミナーIIId		2.0				0.0	2.0				
							演習Id・IIId			2.0			2.0	0.0				
							演習IIId・IVd				2.0		0.0	2.0				
							英米文学を読むための思想A	2.0					2.0	0.0				
国際社会セミナーIII	2.0					2.0	0.0											
計	8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	10.0										
准教授	川村 陶子	女	39	2000. 4. 1	2003. 4. 1	国際文化 学科	国際文化研究の現在	0.3					0.3	0.0	12.2	無	東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程 (単位 取得) 学術修士	
							基礎演習 Ia			2.0			2.0	0.0				
							基礎演習 IIa				2.0		0.0	2.0				
							演習 Ic			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIc				2.0		0.0	2.0				
							演習 IIIc			2.0			2.0	0.0				
							演習 IVc				2.0		0.0	2.0				
							国際関係入門	2.0					2.0	0.0				
							ドイツの歴史と文化A	2.0					2.0	0.0				
							ドイツの歴史と文化B		2.0				0.0	2.0				
							国際社会研究 (グローバル化と文化)		2.0				0.0	2.0				
							△欧米文化研究 IB	2.0					2.0	0.0				
							△欧米文化研究 IIB		2.0				0.0	2.0				
							計	6.3	6.0	6.0	6.0	0.0	0.0	12.3				12.0

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数								前期				後期
								講義		演習		実験・実 習・実技		計						
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
准教授	喜岡 淳治	男	48	1999. 4. 1	2008. 4. 1	教職課程	教育原論 Ia	2.0						2.0	0.0	13.0	無	東京大学大学院 教育学研究科修 士課程 教育学修士		
							教育原論 Ib	2.0						2.0	0.0					
							国語科教育法 III		2.0					0.0	2.0					
							教育方法論(視聴覚教育メディア論1単位を含む。)	2.0						2.0	0.0					
							教職総合演習c			2.0				0.0	2.0					
							教育実践研究 Ib	2.0	2.0					2.0	2.0					
							教育実践研究 IIb	3.0	3.0					3.0	3.0					
教育実践研究 IIId	3.0	3.0					3.0	3.0												
計	14.0	10.0	0.0	2.0	0.0	0.0	14.0	12.0												
准教授	木谷 真理子	女	40	2006. 4. 1	2008. 4. 1	一般教育 等	日本の芸術A	2.0						2.0	0.0	10.0	無	東京大学大学院 人文社会系研究 科日本文化研究 専攻博士課程 博士(文学)		
							日本の芸術B		2.0					0.0	2.0					
							日本文学入門 Ib	2.0						2.0	0.0					
							日本文学入門 IIb		2.0					0.0	2.0					
							古典文学基礎研究b	2.0	2.0					2.0	2.0					
							日本文学演習 Ic・IIc			2.0	2.0			2.0	2.0					
							日本語・日本文学総合テーマ講義A	2.0						2.0	0.0					
日本語・日本文学総合テーマ講義B		2.0					0.0	2.0												
計	8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	10.0												
准教授	見城 武秀	男	42	1996. 4. 1	2005. 4. 1	現代社会 学科	コミュニケーション論の基礎	2.0						2.0	0.0	10.0	無	東京大学大学院 社会学研究科社 会学(B)専攻 第一種博士課程 中途退学 修士(社会学)		
							コミュニケーション論の展開		2.0					0.0	2.0					
							現代社会研究の方法 Ib	2.0						2.0	0.0					
							現代社会研究の方法 IIb		2.0					0.0	2.0					
							演習 Ig・IIIg			2.0				2.0	0.0					
							演習 IIg・IVg				2.0			0.0	2.0					
							メディア・リテラシー実習a					4.0		4.0	0.0					
メディア・リテラシー実習b						4.0	0.0	4.0												
計	4.0	4.0	2.0	2.0	4.0	4.0	10.0	10.0												
准教授	権田 建二	男	36	2005. 4. 1	2008. 4. 1	一般教育 等	英語I-C01	2.0						2.0	0.0	10.0	無	東京都立大学大 学院人文科学研 究科博士課程単 位取得満期退学 博士(文学)		
							英語II-C01		2.0					0.0	2.0					
							英米文学概論II		2.0					0.0	2.0					
							英語講読演習Ic			2.0				2.0	0.0					
							基礎演習Ia			2.0				2.0	0.0					
							基礎演習IIa				2.0			0.0	2.0					
							演習Ij・IIIj			2.0				2.0	0.0					
							演習IIj・IVj				2.0			0.0	2.0					
アメリカ文学・文化BI	2.0						2.0	0.0												
△コア・カリキュラム(アメリカ文学) A		2.0					0.0	2.0												
計	4.0	6.0	6.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0												
准教授	モーリス シェヤマル	男	44	2002. 4. 1	2002. 4. 1	一般教育 等	※ 在外研究のため、開講科目なし						-	-	-	無	University of Kent at Canterbury 応用言語学修士			
							計	-	-	-	-	-	-	-						

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導 担当 資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実 習・実技		計				
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期									
准教授	しょうじ ひろこ 庄司 宏子	女	46	2002. 4. 1	2002. 4. 1	英米文学 科	英語 III-C0d	2.0					2.0	0.0	10.0	無	お茶の水女子大 学大学院博士課 程人間文化研究 科比較文化学専 攻 文学修士	
							英語 IV-C0d		2.0				0.0	2.0				
							アメリカ文学史 I	2.0					2.0	0.0				
							英語講読演習 Id			2.0			2.0	0.0				
							英語講読演習 IID				2.0		0.0	2.0				
							演習 Ie・IIIe			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIe・IVe				2.0		0.0	2.0				
							演習 If・IIIf			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIIf・IVf				2.0		0.0	2.0				
アメリカ文学・文化B II		2.0				0.0	2.0											
計	4.0	4.0	6.0	6.0	0.0	0.0	10.0	10.0										
准教授	なかえ けいこ 中江 桂子	女	44	1999. 4. 1	1999. 4. 1	現代社会 学科	現代社会研究の基礎 Ie	2.0					2.0	0.0	10.0	無	法政大学大学院 社会科学研究科 社会学専攻博士 後期課程卒業 博士(社会学)	
							現代社会研究の基礎 IIe		2.0				0.0	2.0				
							演習 In・IIIn			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIIn・IVn				2.0		0.0	2.0				
							社会思想史	2.0					2.0	0.0				
							社会学史		2.0				0.0	2.0				
							現代文化論	2.0					2.0	0.0				
							社会学の理論B		2.0				0.0	2.0				
							文化社会学A	2.0					2.0	0.0				
文化社会学B		2.0				0.0	2.0											
計	8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	10.0										
准教授	はかた けい 墓田 桂	男	38	2005. 4. 1	2008. 4. 1	一般教育 等	フランス語 I-GRe	2.0					2.0	0.0	10.7	無	Doctorat de troisieme cycle, Universite de Nancy II (France) Docteur en Droit public	
							フランス語 I-GRg	2.0					2.0	0.0				
							フランス語 II-GRg		2.0				0.0	2.0				
							インターンシップ IIC					1.0	0.0	1.0				
							国際文化研究の現在	0.3					0.3	0.0				
							基礎演習 Id			2.0			2.0	0.0				
							基礎演習 IIId				2.0		0.0	2.0				
							演習 Ig			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIg				2.0		0.0	2.0				
							国際協力論	2.0					2.0	0.0				
							国際関係論特講A	2.0					2.0	0.0				
							国際社会セミナー II		2.0				0.0	2.0				
計	8.3	4.0	4.0	4.0	0.0	1.0	12.3	9.0										
准教授	ひびの けい 日比野 啓	男	40	1999. 4. 1	2002. 4. 1	一般教育 等	英語I-C0e	2.0					2.0	0.0	10.0	有	PhD Candidate, PhD in Theatre, City University of New York (Theatre)	
							TOEIC Preparation I		2.0				0.0	2.0				
							トピック・セミナーA	2.0					2.0	0.0				
							フレッシュマン・セミナーIc	2.0					2.0	0.0				
							フレッシュマン・セミナーIIc		2.0				0.0	2.0				
							演習Ig・IIIg			2.0			2.0	0.0				
							演習IIg・IVg				2.0		0.0	2.0				
							文学理論II		2.0				0.0	2.0				
							△アメリカ文学研究IA (文化的表象)	2.0					2.0	0.0				
△アメリカ文学研究IIA (文化的表象)		2.0				0.0	2.0											
計	8.0	8.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	10.0										

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期										
准教授	よしだ 吉田	みきお 幹生	男	35	2005. 4. 1	2008. 4. 1	日本文学 科	日本文学入門 Ia	2.0						2.0	0.0	10.0	無	東京大学大学院 人文社会系研究 科日本文化研究 専攻博士課程 博士（文学）
								日本文学入門 IIa		2.0					0.0	2.0			
								古典文学基礎研究a	2.0	2.0					2.0	2.0			
								日本文学演習 Ia・IIa			2.0	2.0			2.0	2.0			
								日本文学演習 Ib・IIb			2.0	2.0			2.0	2.0			
								古代日本文学史A	2.0						2.0	0.0			
								古代日本文学史B		2.0					0.0	2.0			
計	6.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
講師	こばやし 小林	じゅん 盾	男	40	2005. 4. 1	2005. 4. 1	現代社会 学科	演習 Ih・IIIh			2.0				2.0	0.0	10.0	無	PhD Candidate, Department of Sociology, University of Chicago PhD in Sociology
								演習 IIh・IVh				2.0			0.0	2.0			
								社会調査実習 Ia					2.0		2.0	0.0			
								社会調査実習 IIa						2.0	0.0	2.0			
								社会調査実習 Ib					2.0		2.0	0.0			
								社会調査実習 IIb						2.0	0.0	2.0			
								社会調査の基礎	2.0						2.0	0.0			
								社会調査の技法		2.0					0.0	2.0			
								社会統計学の基礎	2.0						2.0	0.0			
								社会統計学の応用		2.0					0.0	2.0			
計	4.0	4.0	2.0	2.0	4.0	4.0	10.0	10.0											

[注]1 「IV 1 全学の教員組織」(表19)に記載の専任教員について、所属組織ごとに作成してください。ただし、大学附置研究所、学部附属研究所、附属病院等の教員については、授業を担当している教員についてのみ記載してください。

2 「科目名」欄に記載する担当科目のうち、大学院研究科の授業科目には△印を付してください。

3 「授業科目」欄については、 Semester制の場合を例示していますが、通年制の場合、3学期制の場合等は、適宜、欄を修正して記入してください。

4 「毎週授業時間数」は、時間割編成上のいわゆるコマではなく、時間数に換算して記入してください（例えば1コマ90分の場合は、2時間）。

5 1授業科目を複数の教員で担当する場合は、当該授業時数を担当者数で除して毎週授業時間数を算出してください。

6 「年間平均毎週授業時間数」欄には、各専任教員ごとの前期と後期の担当授業時間の合計を2で割った年間平均の時間数を記入してください。

7 「大学院における研究指導担当資格の有無」欄には、大学が定める基準に基づいて資格の有無を記入してください。

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導 担当 資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	あべ けいすけ 安部 圭介	男	38	2001. 4. 1	2006. 4. 1	法律学科	憲法 I	4.0						4.0	0.0	12.1	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科博士課程修了 博士（法学）	
							外国法 I		4.0					0.0	4.0				
							演習 IA (8) (企業倫理と法)			2.0				0.0	2.0				
							演習 IA (19) (裁判と社会)			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIA (アメリカ法入門I)			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB (アメリカ法入門II)				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA (生命倫理と法)			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIA (英米法)				2.0			0.0	2.0				
							演習 IVA (生命倫理と法)			2.0				2.0	0.0				
							演習 IVA (英米法)				2.0			0.0	2.0				
現代を生きる (世界の中の日本法)	0.2						0.2	0.0											
計	4.2	4.0	8.0	8.0	0.0	0.0	12.2	12.0											
教授	あんざい ありこ 安西 明子	女	39	2004. 9. 24	2007. 4. 1	法律学科	民事手続法 I	4.0						4.0	0.0	8.1	有	九州大学大学院 法学研究科修士 課程 法学修士	
							民事手続法 II		4.0					0.0	4.0				
							演習 IIA (裁判学)			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB (裁判学)				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIA (民事手続法)			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB (民事手続法)				2.0			0.0	2.0				
							現代を生きる (世界の中の日本法)	0.2						0.2	0.0				
計	4.2	4.0	4.0	4.0	0.0	0.0	8.2	8.0											
教授	えんどう せいじ 遠藤 誠治	男	45	1991. 9. 16	2001. 4. 1	政治学科	政治学への案内 I	0.3						0.3	0.0	10.3	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科政治学専攻修 士課程修了 法学修士	
							政治学への案内 II		0.3					0.0	0.3				
							国際政治学 I	2.0						2.0	0.0				
							国際政治学 II		2.0					0.0	2.0				
							現代の国際関係		2.0					0.0	2.0				
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IVB				2.0			0.0	2.0				
△ 政治学基本研究 III	2.0	2.0					2.0	2.0											
計	4.3	6.3	4.0	6.0	0.0	0.0	8.3	12.3											
教授	かとう せつ 加藤 節	男	63	1974. 4. 1	1982. 4. 1	政治学科	政治学への案内 I	0.3						0.3	0.0	12.2	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科博士課程 法学博士	
							政治学原論 I	2.0						2.0	0.0				
							政治学原論 II		2.0					0.0	2.0				
							西欧の政治思想	2.0						2.0	0.0				
							PSE国際科目I(ジョン・ロック『統治二論』を読む)	2.0						2.0	0.0				
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IVB				2.0			0.0	2.0				
							△ 政治学史基本演習			2.0	2.0			2.0	2.0				
							△ 法と政治		2.0					0.0	2.0				
計	6.3	4.0	6.0	8.0	0.0	0.0	12.3	12.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	かめじま 亀嶋 庸一	男	58	1986. 4. 1	1989. 4. 1	政治学科	政治学への案内 I	0.3						0.3	0.0	11.2	有	成蹊大学大学院 法学政治学研究 科博士後期課程 法学博士	
							現代の政治思想		2.0					0.0	2.0				
							現代政治理論 I	2.0						2.0	0.0				
							現代政治理論 II		2.0					0.0	2.0				
							PSE IIA	2.0						2.0	0.0				
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
演習 IVB				2.0			0.0	2.0											
△ 政治学基本研究 II	2.0	2.0					2.0	2.0											
計	6.3	6.0	4.0	6.0	0.0	0.0	10.3	12.0											
教授	かわすみ 川澄 英男	男	60	1991. 4. 1	1992. 4. 1	一般教育 等	※ 在外研究のため、開講科目なし							-	-	-	無	成城大学大学院 文学研究科英文 学専攻修士課程 文学修士	
							計	-	-	-	-	-	-	-	-				
教授	きん 金 光旭	男	45	1998. 4. 1	2004. 4. 1	法律学科	刑法 I		4.0					0.0	4.0	9.0	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科博士課程修了 法学博士	
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							刑事法特殊講義IIA (刑事政策総論)	2.0						2.0	0.0				
							刑事法特殊講義IIB (刑事政策各論)		2.0					0.0	2.0				
							△ 刑事学 I	2.0						2.0	0.0				
							△ 演習 I				2.0			0.0	2.0				
計	4.0	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	8.0	10.0											
教授	こばやし 小林 登	男	60	1999. 4. 1	1999. 4. 1	法律学科	商法 II		2.0					0.0	2.0	8.0	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科修士課程 法学修士	
							商法 III	2.0						2.0	0.0				
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IVA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IVB				2.0			0.0	2.0				
計	2.0	2.0	6.0	6.0	0.0	0.0	8.0	8.0											
教授	こはら 小原 隆治	男	49	1991. 4. 1	1998. 4. 1	政治学科	政治学への案内 II		0.3					0.0	0.3	6.2	有	早稲田大学大学 院政治学研究科 博士課程単位取 得退学 政治学修士	
							日本の都市政治	2.0						2.0	0.0				
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IVB				2.0			0.0	2.0				
計	2.0	0.3	4.0	6.0	0.0	0.0	6.0	6.3											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	境 広志	男	42	2000. 4. 1	2006. 4. 1	一般教育 等	運動機能と健康	2.0						2.0	0.0	12.0	無	筑波大学体育研 究科健康教育学 修士課程 健康教育学修士	
							ウェルネス論			2.0				0.0	2.0				
							スポーツ実習 IVA(10)					2.0		2.0	0.0				
							スポーツ実習 IVA(15)					2.0		2.0	0.0				
							スポーツ実習 IVA(17)					2.0		2.0	0.0				
							スポーツ実習 IVA(19)					2.0		2.0	0.0				
							スポーツ実習 IVB(9)						2.0	0.0	2.0				
							スポーツ実習 IVB(11)						2.0	0.0	2.0				
							スポーツ実習 IVB(16)						2.0	0.0	2.0				
							スポーツ実習 IVB(20)						2.0	0.0	2.0				
							健康の科学			2.0				0.0	2.0				
							スポーツの科学	2.0						2.0	0.0				
							計	4.0	4.0	0.0	0.0	8.0	8.0	12.0	12.0				
教授	里村 和秋	男	45	1998. 4. 1	2003. 4. 1	一般教育 等	外国の文学と思想2(ドイツの文学・文化とその周辺)		2.0					0.0	2.0	12.0	無	東北大学大学院 文学研究科ドイツ 文学・ドイツ 語学専攻博士課程 文学修士	
							ドイツ語文化演習 A			2.0				2.0	0.0				
							ドイツ語文化演習 B				2.0			0.0	2.0				
							言語と文化(ドイツ語圏) a(1)	2.0						2.0	0.0				
							ドイツ語 Ia(1)	2.0						2.0	0.0				
							ドイツ語 Ia(2)	2.0						2.0	0.0				
							ドイツ語 IIIb(1)		2.0					0.0	2.0				
							ドイツ語 IIIb(2)		2.0					0.0	2.0				
							ドイツ語基礎演習 I			2.0				2.0	0.0				
							ドイツ語基礎演習 II				2.0			0.0	2.0				
							ドイツ語文化演習 I			2.0				2.0	0.0				
							ドイツ語文化演習 II				2.0			0.0	2.0				
							計	6.0	6.0	6.0	6.0	0.0	0.0	12.0	12.0				
教授	塩澤 一洋	男	39	2000. 4. 1	2008. 4. 1	法律学科	民法 IB(1)		2.0					0.0	2.0	13.1	有	慶應義塾大学大 学院法学研究科 民事法学専攻博 士課程単位取得 修士(法学)	
							民法 II	4.0						4.0	0.0				
							民法 IV	2.0	2.0					2.0	2.0				
							著作権法		2.0					0.0	2.0				
							民法 IV発展講義		2.0					0.0	2.0				
							演習 IA(3)			2.0				2.0	0.0				
							演習 IB(3)				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
							現代を生きる(世界の中の日本法)	0.2						0.2	0.0				
							計	6.2	8.0	6.0	6.0	0.0	0.0	12.2	14.0				

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	瀬戸 一夫	男	49	1992. 4. 1	1999. 4. 1	一般教育 等	自然科学とは何か	2.0						2.0	0.0	10.0	有	東京大学大学院 理学系研究科科学 史・科学基礎 論研究課程博士 課程 理学修士・ 政治学博士	
							自然科学の方法		2.0					0.0	2.0				
							社会科学方法論 I (1)	2.0						2.0	0.0				
							社会科学方法論 II (1)		2.0					0.0	2.0				
							社会科学と論理		4.0					0.0	4.0				
							哲学	4.0						4.0	0.0				
							△学際分野特殊研究 (科学の考え方 I)	2.0						2.0	0.0				
							△学際分野特殊研究 (科学の考え方 II)		2.0					0.0	2.0				
計	10.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
教授	曾田 厚	男	61	1973. 4. 1	1982. 4. 1	法律学科	演習 IA (21)			2.0				2.0	0.0	8.0	有	東京大学法学部 法律学科 法学士	
							演習 IB (21)				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
							私法原論 I	2.0						2.0	0.0				
							私法原論 II		2.0					0.0	2.0				
							民事法特殊講義 IIA	2.0						2.0	0.0				
							民事法特殊講義 IIB		2.0					0.0	2.0				
計	4.0	4.0	4.0	4.0	0.0	0.0	8.0	8.0											
教授	富田 武	男	62	1988. 4. 1	1991. 4. 1	政治学科	政治学への案内 II		0.3					0.0	0.3	9.2	有	東京大学大学院 社会学研究科国 際関係論専攻博 士課程 国際学修士	
							比較政治制度	2.0						2.0	0.0				
							西洋政治史 I	2.0						2.0	0.0				
							西洋政治史 II		2.0					0.0	2.0				
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IV B				2.0			0.0	2.0				
							歴史に学ぶ(第二次世界大戦後の世界と日本)		2.0					0.0	2.0				
計	4.0	4.3	4.0	6.0	0.0	0.0	8.0	10.3											
教授	西崎 文子	女	49	1990. 9. 25	1998. 4. 1	政治学科	政治学への案内 II		0.3					0.0	0.3	9.2	有	米国イェール大 学大学院歴史学 研究科アメリカ 史専攻博士課程 修了 Ph. D	
							国際政治史 I	2.0						2.0	0.0				
							国際政治史 II		2.0					0.0	2.0				
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
							△アメリカ政治外交史基本研究	2.0	2.0					2.0	2.0				
							△アメリカ政治外交史特殊研究	2.0						2.0	0.0				
計	6.0	4.3	4.0	4.0	0.0	0.0	10.0	8.3											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実 習・実技		計				
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期									
教授	にしむら 西村 美香	女	42	1995. 4. 1	2005. 4. 1	政治学科	政治学への案内 II		0.3					0.0	0.3	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科 法学修士	
							行政学 I	2.0					2.0	0.0				
							行政学 II		2.0				0.0	2.0				
							日本の行政	2.0					2.0	0.0				
							演習 IIA			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0		0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0		0.0	2.0				
演習 IVB				2.0		0.0	2.0											
計							4.0	2.3	4.0	6.0	0.0	0.0	8.0	8.3	8.2			
教授	みつた 光田 剛	男	42	2000. 4. 1	2006. 4. 1	政治学科	※ 在外研究のため、開講科目なし								-	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科博士課程退学 法学博士	
							計							-				-
教授	みやむら 宮村 治雄	男	61	2005. 4. 1	2005. 4. 1	政治学科	政治学への案内I	0.3						0.3	0.0	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科 法学博士	
							日本の政治		2.0				0.0	2.0				
							日本政治思想史I	2.0					2.0	0.0				
							日本政治思想史II		2.0				0.0	2.0				
							演習 IIA			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0		0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0		0.0	2.0				
							演習 IVB				2.0		0.0	2.0				
							△ 日本政治思想史基本研究	2.0	2.0				2.0	2.0				
							△ 日本政治思想史特殊研究	2.0					2.0	0.0				
△ 日本政治思想史基本演習	2.0	2.0				2.0	2.0											
計							8.3	8.0	4.0	6.0	0.0	0.0	12.3	14.0	13.2			
教授	みやもと 宮本 光雄	男	61	1982. 4. 1	1989. 4. 1	政治学科	政治学への案内II		0.3					0.0	0.3	有	東京大学大学院 国際関係論専門 課程博士課程 国際学修士	
							現代の世界I		2.0				0.0	2.0				
							欧米政治社会論IA		2.0				0.0	2.0				
							欧米政治社会論IB		2.0				0.0	2.0				
							PSE IIB		2.0				0.0	2.0				
							演習IVB				2.0		0.0	2.0				
							△ 国際政治基本演習I				4.0		0.0	4.0				
							△ 西洋政治外交史基本演習II				4.0		0.0	4.0				
計							0.0	8.3	0.0	10.0	0.0	0.0	0.0	18.3	9.2			

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目										年間平均毎週授業時間数	大学院における研究指導担当資格の有無	最終学歴及び学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
教授	山田 崇人	男	46	1992. 4. 1	2003. 4. 1	一般教育等	基礎演習I f			2.0				2.0	0.0	10.0	無	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程文学修士	
							基礎演習II f				2.0			0.0	2.0				
							言語と文化(英語圏) a (1)	2.0						2.0	0.0				
							言語と文化(英語圏) b (1)		2.0					0.0	2.0				
							英語III (7)	2.0						2.0	0.0				
							英語IV (7)		2.0					0.0	2.0				
							英語文化演習I (1)			2.0				2.0	0.0				
							英語文化演習II (1)				2.0			0.0	2.0				
							英語特殊演習V				2.0			2.0	0.0				
							英語特殊演習VI					2.0		0.0	2.0				
計	4.0	4.0	6.0	6.0	0.0	0.0	10.0	10.0											
教授	湯山 トミ子	女	57	1996. 4. 1	1997. 4. 1	一般教育等	中国文化演習A			2.0				2.0	0.0	12.0	無	東京都立大学(現首都大学)大学院人文科学研究科中国文学専攻博士課程文学修士	
							中国文化演習B				2.0			0.0	2.0				
							中国語講読IA	2.0						2.0	0.0				
							中国語講読IIA		2.0					0.0	2.0				
							言語と文化(中国語圏) a	2.0						2.0	0.0				
							言語と文化(中国語圏) b		2.0					0.0	2.0				
							中国語I a	2.0						2.0	0.0				
							中国語II b		2.0					0.0	2.0				
							中国語文化演習I			2.0				2.0	0.0				
							中国語文化演習II				2.0			0.0	2.0				
							中国語特殊演習I				2.0			2.0	0.0				
							中国語特殊演習II					2.0		0.0	2.0				
							計	6.0	6.0	6.0	6.0	0.0	0.0	12.0	12.0				
教授	李 静和	女	50	1996. 4. 1	2000. 4. 1	政治学科	政治学への案内 I	0.3						0.3	0.0	13.2	有	慶應義塾大学社会学研究科社会学専攻修士課程修了社会学修士	
							政治と文化	2.0						2.0	0.0				
							政治文化論 I	2.0						2.0	0.0				
							政治文化論 II		2.0					0.0	2.0				
							演習 IIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0				2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0			0.0	2.0				
							演習 IVB				2.0			0.0	2.0				
							△政治社会学基本研究 I	2.0	2.0					2.0	2.0				
							△政治社会学特殊研究 I	2.0						2.0	0.0				
							△政治社会学基本演習 I	2.0	2.0					2.0	2.0				
							計	10.3	6.0	4.0	6.0	0.0	0.0	14.3	12.0				

法学部

(表20)

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目										年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号
							科目名	毎週授業時間数											
								講義		演習		実験・実 習・実技		計					
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
准教授	飯田 高	男	31	2004.4.1	2006.4.1	法律学科	民法 IA (1)	2.0						2.0	0.0	10.1	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科修士課程 (基 礎法学専攻) 法学修士	
							家族法 I	2.0					2.0	0.0					
							現代法過程論		4.0				0.0	4.0					
							民事法発展講義 II (法と経済学)	2.0					2.0	0.0					
							演習 IIIA			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIIB				2.0		0.0	2.0					
							演習 IVA			2.0			2.0	0.0					
							演習 IVB				2.0		0.0	2.0					
							現代を生きる (世界の中の日本法)	0.2					0.2	0.0					
△ Law&Economics		2.0				0.0	2.0												
計	6.2	6.0	4.0	4.0	0.0	0.0	10.2	10.0											
准教授	北川 徹	男	37	2007.9.21	2007.9.21	法律学科	商法 I	4.0					4.0	0.0	8.1	有	成蹊大学大学院 法学政治学研究 科 博士 (法学)		
							演習 IA (18)			2.0			2.0	0.0					
							演習 IB (18)				2.0		0.0	2.0					
							演習 IIA (起業家体験プログラム)			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIB (起業家体験プログラム)				2.0		0.0	2.0					
							演習 IIIA (企業買収)				2.0		0.0	2.0					
							演習 IIIB (非公開企業・JV)				2.0		0.0	2.0					
							現代を生きる (世界の中の日本法)	0.2					0.2	0.0					
計	4.2	0.0	4.0	8.0	0.0	0.0	8.2	8.0											
准教授	佐藤 義明	男	36	2008.4.1	2008.4.1	法律学科	国際法 I	4.0					4.0	0.0	8.0	有	東京大学大学院 法学政治学研究 科博士課程 博士 (法学)		
							演習 IIIA			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIIB				2.0		0.0	2.0					
							国際法 II		4.0				0.0	4.0					
							国際法基本演習 I			4.0			4.0	0.0					
計	4.0	4.0	6.0	2.0	0.0	0.0	10.0	6.0											
准教授	高安 健将	男	36	2006.4.1	2006.4.1	政治学科	政治学への案内 I	0.3					0.3	0.0	8.2	有	London School of Economics and Political Science政治学 部博士課程 Ph.D. in Political Science		
							現代の政治過程		2.0				0.0	2.0					
							政治過程論 I	2.0					2.0	0.0					
							政治過程論 II		2.0				0.0	2.0					
							演習 IIA			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIB				2.0		0.0	2.0					
							演習 IIIA			2.0			2.0	0.0					
							演習 IIIB				2.0		0.0	2.0					
							演習 IVB				2.0		0.0	2.0					
計	2.3	4.0	4.0	6.0	0.0	0.0	6.3	10.0											
准教授	中島 雅	女	28	2005.4.1	2008.4.1	法律学科	民法 IA (2)	2.0					2.0	0.0	8.1	有	東京大学法学部 第1類 法学士		
							民法 IB (2)		2.0				0.0	2.0					
							民法 III		4.0				0.0	4.0					
							民法 II発展講義	2.0					2.0	0.0					
							民法 III発展講義		2.0				0.0	2.0					
							演習 IA (6)			2.0			2.0	0.0					
							演習 IA (7)			2.0			2.0	0.0					
							現代を生きる (世界の中の日本法)	0.2					0.2	0.0					
計	4.2	8.0	4.0	0.0	0.0	0.0	8.2	8.0											

職名	氏名	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 における 研究 指導 担当 資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実 習・実技		計				
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期									
准教授	原 昌登	男	31	2004. 4. 1	2006. 4. 1	法律学科	労働法	4.0					4.0	0.0	8.1	有	東北大学法学部 法学士	
							民法 IB発展講義		2.0				0.0	2.0				
							演習 IA (9)				2.0		0.0	2.0				
							演習 IIIA (労働法演習)			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIIB (労働法演習)			2.0			0.0	2.0				
							現代を生きる (世界の中の日本法)	0.2					0.2	0.0				
							△労働法 I	2.0					2.0	0.0				
							△労働法 II		2.0				0.0	2.0				
計	6.2	4.0	2.0	4.0	0.0	0.0	8.2	8.0										
准教授	坂野 由紀子	女	39	2003. 4. 1	2003. 4. 1	教職課程	英語科教育法 IIIB		2.0				0.0	2.0	10.0	無	東京大学大学院 人文社会系研究 科 欧米系文化 研究専攻英語英 文学専門分野博 士課程単位取得 退学 文学修士	
							言語と文化 (英語圏) a (2)	2.0					2.0	0.0				
							言語と文化 (英語圏) a (3)	2.0					2.0	0.0				
							言語と文化 (英語圏) b (2)		2.0				0.0	2.0				
							英語文化演習 I (2)			2.0			2.0	0.0				
							英語文化演習 II (2)				2.0		0.0	2.0				
							英語特殊演習 I			2.0			2.0	0.0				
							英語特殊演習 II				2.0		0.0	2.0				
							英語総合演習 III			2.0			2.0	0.0				
英語総合演習 IV				2.0		0.0	2.0											
計	4.0	4.0	6.0	6.0	0.0	0.0	10.0	10.0										
准教授	東 雪見	女	34	2004. 4. 1	2006. 4. 1	法律学科	刑法 II	4.0					4.0	0.0	8.1	有	上智大学大学院 法学研究科 修士	
							演習 IA (10)			2.0			2.0	0.0				
							演習 IA (11)			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIA			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIB				2.0		0.0	2.0				
							演習 IIIA			2.0			2.0	0.0				
							演習 IIIB				2.0		0.0	2.0				
							現代を生きる (世界の中の日本法)	0.2					0.2	0.0				
計	4.2	0.0	8.0	4.0	0.0	0.0	12.2	4.0										
准教授	澗 史彦	男	35	2000. 4. 1	2004. 4. 1	法律学科	※ 在外研究のため、開講科目なし						-	-	-	有	東京大学法学部 法学士	
							計	-	-	-	-	-	-	-				
准教授	横山 裕人	男	46	1999. 4. 1	1999. 4. 1	一般教育 等	ヨーロッパの文学B		2.0				0.0	2.0	11.0	無	東京大学大学院 人文科学研究科 仏語仏文学専攻 課程博士課程 (単位取得退学) 文学修士	
							言語と文化 (フランス語圏) a (3)	2.0					2.0	0.0				
							言語と文化 (フランス語圏) b		2.0				0.0	2.0				
							フランス語 IIa (1)	2.0					2.0	0.0				
							フランス語 IIa (2)	2.0					2.0	0.0				
							フランス語 IIa (3)	2.0					2.0	0.0				
							フランス語 IVb (1)		2.0				0.0	2.0				
							フランス語 IVb (2)		2.0				0.0	2.0				
							フランス語 IVb (3)		2.0				0.0	2.0				
							フランス語特殊演習B I			2.0			2.0	0.0				
							フランス語特殊演習B II				2.0		0.0	2.0				
計	8.0	10.0	2.0	2.0	0.0	0.0	10.0	12.0										

職名	氏名 ふりがな	(性別)	(年齢)	就 職 年 月 日	現職就任 年 月 日	所属学科	授 業 科 目								年間 平均 毎週 授業 時間 数	大学院 におけ る研究 指導担 当資格 の有無	最終学歴及び 学位称号	
							科目名	毎週授業時間数										
								講義		演習		実験・実 習・実技		計				
								前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期				後期
講師	きたじま 北島	しゅうさく 周作	男	32	2008. 4. 1	2008. 4. 1	法律学科	行政法I	2.0						2.0	0.0	無	東京大学大学院 法学政治学研究 科博士課程修了 博士（法学）
								行政法II		4.0					0.0	4.0		
								演習 IA (20)			2.0				2.0	0.0		
								演習 IIIA			2.0				2.0	0.0		
								演習 IIIB				2.0			0.0	2.0		
								計	2.0	4.0	4.0	2.0	0.0	0.0	6.0	6.0		
								6.0										

[注]1 「IV 1 全学の教員組織」(表19)に記載の専任教員について、所属組織ごとに作成してください。ただし、大学附置研究所、学部附属研究所、附属病院等の教員については、授業を担当している教員についてのみ記載してください。

2 「科目名」欄に記載する担当科目のうち、大学院研究科の授業科目には△印を付してください。

3 「授業科目」欄については、 Semester制の場合を例示していますが、通年制の場合、3学期制の場合等は、適宜、欄を修正して記入してください。

4 「毎週授業時間数」は、時間割編成上のいわゆるコマではなく、時間数に換算して記入してください(例えば1コマ90分の場合は、2時間)。

5 1授業科目を複数の教員で担当する場合は、当該授業時数を担当者数で除して毎週授業時間数を算出してください。

6 「年間平均毎週授業時間数」欄には、各専任教員ごとの前期と後期の担当授業時間の合計を2で割った年間平均の時間数を記入してください。

7 「大学院における研究指導担当資格の有無」欄には、大学が定める基準に基づいて資格の有無を記入してください。

3 専任教員年齢構成

(表21)

学部・研究科	職 位	71歳 以上	66歳～ 70歳	61歳～ 65歳	56歳～ 60歳	51歳～ 55歳	46歳～ 50歳	41歳～ 45歳	36歳～ 40歳	31歳～ 35歳	26歳～ 30歳	計
経済学部	教 授	0	2	4	8	9	5	4	1	0	0	33
		0.0%	6.1%	12.1%	24.2%	27.3%	15.2%	12.1%	3.0%	0.0%	0.0%	100%
	准教授	0	0	0	0	0	0	1	8	2	0	11
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	72.7%	18.2%	0.0%	100%
	専任講師	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100%
	助 教	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
学部計	0	2	4	8	9	5	5	9	3	0	45	
	0.0%	4.4%	8.9%	17.8%	20.0%	11.1%	11.1%	20.0%	6.7%	0.0%	100%	
理工学部	教 授	0	1	8	10	9	8	2	1	0	0	39
		0.0%	2.6%	20.5%	25.6%	23.1%	20.5%	5.1%	2.6%	0.0%	0.0%	100%
	准教授	0	0	0	0	3	1	3	3	0	0	10
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	30.0%	10.0%	30.0%	30.0%	0.0%	0.0%	100%
	専任講師	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100%
	助 教	0	0	1	1	1	1	2	1	3	7	17
		0.0%	0.0%	5.9%	5.9%	5.9%	5.9%	11.8%	5.9%	17.6%	41.2%	100%
学部計	0	1	9	11	13	10	7	5	4	7	67	
	0.0%	1.5%	13.4%	16.4%	19.4%	14.9%	10.4%	7.5%	6.0%	0.0%	100%	

(表21)

学部・研究科	職 位	71歳 以上	66歳～ 70歳	61歳～ 65歳	56歳～ 60歳	51歳～ 55歳	46歳～ 50歳	41歳～ 45歳	36歳～ 40歳	31歳～ 35歳	26歳～ 30歳	計	
文学部	教 授	0	1	7	11	7	3	1	0	0	0	30	
		0.0%	3.3%	23.3%	36.7%	23.3%	10.0%	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	100%	
	准教授	0	0	0	0	0	4	3	5	1	0	13	
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	30.8%	23.1%	38.5%	7.7%	0.0%	100%	
	専任講師	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100%	
	助 教	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
学部計	0	1	7	11	7	7	4	6	1	0	44		
	0.0%	2.3%	15.9%	25.0%	15.9%	15.9%	9.1%	13.6%	2.3%	0.0%	100%		
法学部	教 授	0	0	5	4	0	5	6	3	0	0	23	
		0.0%	0.0%	21.7%	17.4%	0.0%	21.7%	26.1%	13.0%	0.0%	0.0%	100%	
	准教授	0	0	0	0	0	1	0	4	4	1	10	
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.0%	0.0%	40.0%	40.0%	10.0%	100%	
	専任講師	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100%	
	助 教	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
学部計	0	0	5	4	0	6	6	7	5	1	34		
	0.0%	0.0%	14.7%	11.8%	0.0%	17.6%	17.6%	20.6%	14.7%	0.0%	100%		
大学合計		0	4	25	34	29	28	22	27	13	8	190	
		0.0%	2.1%	13.2%	17.9%	15.3%	14.7%	11.6%	14.2%	6.8%	4.2%	100%	
定年 65歳													

[注]1 「IV 1 全学の教員組織」(表19)中、学部、大学院研究科(及びその他の組織)に記載の専任教員について、所属組織ごとに作成してください。
ただし、教養教育担当者が学部に分属しているものの教養教育は全学共通で行っている場合は、その教員数を学部から除き、教養教育担当者の表を学部準じて別個に作成してください。

2 各欄の下端にはそれぞれ「計」欄の数値に対する割合を記入してください。

4 専任教員の担当授業時間

経済学部（45人）

（表22）

教員 区分	教授	准教授	講師	助教	備考
最高	11.0 授業時間	10.1 授業時間	8.0 授業時間	-	1授業時間 90分
最低	5.0 授業時間	4.2 授業時間	8.0 授業時間	-	
平均	9.1 授業時間	9.4 授業時間	8.0 授業時間	-	
責任授業時間数	(10.0 授業時間)	(10.0 授業時間)	(10.0 授業時間)	-	

理工学部（67人）

（表22）

教員 区分	教授	准教授	講師	助教	備考
最高	25.4 授業時間	27.2 授業時間	16.0 授業時間	8.5 授業時間	1授業時間 90分
最低	8.5 授業時間	7.0 授業時間	16.0 授業時間	2.0 授業時間	
平均	18.4 授業時間	17.8 授業時間	16.0 授業時間	3.4 授業時間	
責任授業時間数	-	-	-	-	

文学部（44人）

（表22）

教員 区分	教授	准教授	講師	助教	備考
最高	15.0 授業時間	13.0 授業時間	10.0 授業時間	-	1授業時間 90分
最低	4.2 授業時間	7.0 授業時間	10.0 授業時間	-	
平均	10.4 授業時間	10.2 授業時間	10.0 授業時間	-	
責任授業時間数	(10.0 授業時間)	(10.0 授業時間)	(10.0 授業時間)	-	

法学部 (34人)

(表22)

区 分 \ 教 員	教 授	准 教 授	講 師	助 教	備 考
最 高	13.2 授業時間	11.0 授業時間	6.0 授業時間	-	1授業時間 90分
最 低	6.2 授業時間	8.0 授業時間	6.0 授業時間	-	
平 均	10.3 授業時間	8.9 授業時間	6.0 授業時間	-	
責任授業時間数	(10.0 授業時間)	(10.0 授業時間)	(10.0 授業時間)	-	

[注]1 「IV 1 全学の教員組織」(表19)中、学部、大学院研究科(及びその他の組織)に記載の専任教員について、所属組織ごとに作成してください。

- 2 「IV 2 専任教員個別表」(表20)で算出した年間平均毎週授業時間数をもとに、専任教員が当該大学において担当する1週間の最高、最低及び総平均授業時間を記載してください。
- 3 「備考」欄に1授業時間が何分であるかを記入してください。ここでいう授業時間とはいわゆるコマではないので、1コマ90分の場合は、45分と記入してください。
- 4 専任の教授、准教授、講師、助教の1週間の責任授業時間数等の規定が無い場合は、「責任授業時間数」欄には「-」を記入してください。
- 5 担当授業時間が特に多い教員、または特に少ない教員がいる場合は、その理由を欄外に付記してください。
- 6 開設されてはいるものの、履修者のいない科目についても上表に含めること。

5 専任教員の給与

(表23)

学部・研究科		専任教員俸給額(年収) (円)			
		教授	准教授	講師	助教
経済学部	最低	10,414,090	8,597,540	8,861,950	-
	平均	13,618,108	9,725,870	8,861,950	-
理工学部	最低	11,314,700	10,624,800	11,713,620	-
	平均	14,391,151	11,492,396	11,713,620	-
文学部	最低	12,236,700	10,281,310	8,705,010	-
	平均	13,886,747	10,845,416	9,462,092	-
法学部	最低	10,547,680	8,262,120	6,776,720	-
	平均	13,109,610	9,494,785	6,776,720	-
法務研究科	最低	5,160,400	-	-	-
	平均	10,691,808	-	-	-

[注]1 本「大学基礎データ」作成前年(2007年)1月から12月の1年間を対象として作成してください。

2 年収は、諸手当を含めた前年の支給総額を記入してください。

3 原則として「IV 1 全学の教員組織」(表19)に掲げた組織の順に作成してください。

4 「最低」「平均」の記入にあたっては、上記1の期間途中での採用及び退職者は除いてください。

「表24：別冊参照」

「表25：別冊参照」

V 研究活動と研究環境

3 専任教員の研究費

(表29)

学部・研究科等	総額 (A)	総額 (B) (除、講座・研究室等の共同研究費)	専任教員数 (C)	教員1人 当たりの額 ① (A/C)	教員1人 当たりの額 ② (B/C)	備考
経済学部	49,443,877	49,443,877	45	1,098,753	1,098,753	
理工学部	69,237,971	29,403,239	49	1,413,020	600,066	
文学部	47,521,523	47,521,523	43	1,105,152	1,105,152	
法学部	46,540,163	46,540,163	34	1,368,828	1,368,828	
法務研究科	23,743,542	23,743,542	16	1,483,971	1,483,971	
計	236,487,076	196,652,344	187	6,469,724	5,656,770	

[注]1 2007年度の実績をもとに作表してください。したがって「専任教員数」欄にも、2007年度の人数（助手を除く）を記入してください。

2 研究費総額 (A) には、学科、研究室等ごとに支給される研究費も含めて記入してください。ただし、間接経費（水道光熱費、人件費等）は除いてください。また、競争的な研究費も含めないでください。

3 研究費総額 (B) には、講座研究費、個人研究費等の名称は問わず、教員個人が専らその研究の用に充てるために支給される経常的経費（図書購入費、機器備品費、研究用消耗品費、アルバイトなどへの謝金等）を記入してください。

4 本表における専任教員数は、(表34)と一致します。

4 専任教員の研究旅費

(表30)

学部・研究科等		国外留学		国内留学		学会等出張旅費		備考
		長期	短期	長期	短期	国外	国内	
経済学部	総 額	6,000,000	-	-	-	1,961,392	1,631,340	
	支給件数	2	-	-	-	10	24	
理工学部	総 額	-	2,999,500	-	-	844,640	9,833,433	
	支給件数	-	12	-	-	3	185	
文学部	総 額	3,000,000	1,065,230	1,118,880	-	2,299,573	3,548,469	
	支給件数	1	1	2	-	11	65	
法学部	総 額	3,000,000	-	245,360	-	2,684,479	1,348,647	
	支給件数	1	-	2	-	11	21	
法務研究科	総 額	-	419,680	-	-	1,351,942	645,400	
	支給件数	-	1	-	-	5	13	
計	総 額	12,000,000	4,484,410	1,364,240	-	9,142,026	17,007,289	
	支給件数	4	14	4	-	40	308	

[注]1 2007年度の実績をもとに作表してください。

2 教員研究旅費には、前表「3 専任教員の研究費（実績）」（表29）は含めないでください。

3 それぞれの研究旅費の支給条件（例えば、受給資格、支給額の上限等）を備考欄に注記してください。

4 留学の「長期」とは、1年以上のものをいい、1年未満を「短期」とします。

5 学内共同研究費

(表31)

大学・学部・大学院研究科等	総 額	利用件数	備 考
経済学部	3,784,000	5	
理工学部	253,968	1	
文学部	1,061,000	2	
法学部	5,055,696	8	
法務研究科	250,000	1	
アジア太平洋研究センター	8,882,989	7	
計	19,287,653	24	

- [注] 1 2007年度の実績を記入してください。
 2 ここでいう「学内共同研究費」とは、予算上措置されている研究費で、個人研究・共同研究を問わず、申請に基づき審査を経て交付される競争的な研究費（いわゆる学内科研費）を指します。
 3 研究費に旅費が含まれている場合、これを除く必要はありません。
 4 総額の合計は、教員研究費内訳（表32）中の学内共同研究費の合計と一致します。

6 教員研究費内訳

(表32)

学部・研究科等	研究費の内訳	2005年度		2006年度		2007年度		
		研究費 (円)	研究費総額に対する割合 (%)	研究費 (円)	研究費総額に対する割合 (%)	研究費 (円)	研究費総額に対する割合 (%)	
経済学部	研究費総額	66,075,413	100%	68,296,446	100%	77,370,609	100%	
	学内	経常研究費 (教員当り積算校費総額)	56,461,413	85.45%	60,766,446	88.97%	59,036,609	76.30%
		学内共同研究費	4,514,000	6.83%	4,330,000	6.34%	3,784,000	4.89%
		その他	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
	学外	科学研究費補助金	3,400,000	5.15%	3,200,000	4.69%	12,600,000	16.29%
		政府もしくは政府関連 法人からの研究助成金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		民間の研究助成財団 等からの研究助成金	1,700,000	2.57%	-	0.00%	1,950,000	2.52%
		奨学寄附金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		受託研究費	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		共同研究費	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		その他	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
	理工学部	研究費総額	242,247,269	100%	204,197,444	100%	294,166,877	100%
		学内	経常研究費 (教員当り積算校費総額)	83,043,049	34.28%	88,823,502	43.50%	82,915,544
学内共同研究費			229,000	0.09%	696,000	0.34%	253,968	0.09%
その他			-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
学外		科学研究費補助金	24,300,000	10.03%	-	0.00%	14,970,000	5.09%
		政府もしくは政府関連 法人からの研究助成金	90,158,000	37.22%	61,857,000	30.29%	130,387,943	44.32%
		民間の研究助成財団 等からの研究助成金	3,390,000	1.40%	2,700,000	1.32%	8,300,000	2.82%
		奨学寄附金	9,300,000	3.84%	11,405,555	5.59%	19,630,000	6.67%
		受託研究費	31,827,220	13.14%	38,715,387	18.96%	37,709,422	12.82%
		共同研究費	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		その他	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%

(表32)

学部・研究科等	研究費の内訳	2005年度		2006年度		2007年度		
		研究費 (円)	研究費総額に対する割合 (%)	研究費 (円)	研究費総額に対する割合 (%)	研究費 (円)	研究費総額に対する割合 (%)	
文学部	研究費総額	73,222,487	100%	68,134,578	100%	61,694,675	100%	
	学内	経常研究費 (教員当り積算校費総額)	62,043,487	84.73%	64,761,578	95.05%	58,553,675	94.91%
		学内共同研究費	2,279,000	3.11%	2,273,000	3.34%	1,061,000	1.72%
		その他	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
	学外	科学研究費補助金	8,900,000	12.15%	1,100,000	1.61%	2,080,000	3.37%
		政府もしくは政府関連 法人からの研究助成金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		民間の研究助成財団 等からの研究助成金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		奨学寄附金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		受託研究費	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		共同研究費	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		その他	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
法学部	研究費総額	62,549,394	100%	59,865,600	100%	61,474,345	100%	
	学内	経常研究費 (教員当り積算校費総額)	55,135,394	88.15%	55,118,232	92.07%	53,818,649	87.55%
		学内共同研究費	2,314,000	3.70%	3,747,368	6.26%	5,055,696	8.22%
		その他	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
	学外	科学研究費補助金	4,100,000	6.55%	-	0.00%	2,100,000	3.42%
		政府もしくは政府関連 法人からの研究助成金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		民間の研究助成財団 等からの研究助成金	1,000,000	1.60%	1,000,000	1.67%	500,000	0.81%
		奨学寄附金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		受託研究費	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		共同研究費	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		その他	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%

(表32)

学部・研究科等	研究費の内訳	2005年度		2006年度		2007年度		
		研究費 (円)	研究費総額に対する割合 (%)	研究費 (円)	研究費総額に対する割合 (%)	研究費 (円)	研究費総額に対する割合 (%)	
法務研究科	研究費総額	28,110,854	100%	27,005,729	100%	26,910,564	100%	
	学内	経常研究費 (教員当り積算校費総額)	27,610,854	98.22%	26,505,729	98.15%	26,160,564	97.21%
		学内共同研究費	-	0.00%	-	0.00%	250,000	0.93%
		その他	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
	学外	科学研究費補助金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		政府もしくは政府関連 法人からの研究助成金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		民間の研究助成財団 等からの研究助成金	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		奨学寄附金	500,000	1.78%	500,000	1.85%	500,000	1.86%
		受託研究費	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
		共同研究費	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%
	その他	-	0.00%	-	0.00%	-	0.00%	

[注] 1 学内研究費の「その他」欄には、(表29)の(A)+(表30)の計、経常研究費、(表31)でいう学内共同研究費以外に該当するものがある場合は記入してください。

7 科学研究費の採択状況

(表33)

学部・研究科等	科 学 研 究 費								
	2005年度			2006年度			2007年度		
	申請件数(A)	採択件数(B)	採択率(%) B/A*100	申請件数(A)	採択件数(B)	採択率(%) B/A*100	申請件数(A)	採択件数(B)	採択率(%) B/A*100
経済学部	3	1	33.33%	3	2	66.67%	4	1	25.00%
理工学部	29	3	10.34%	32	-	0.00%	36	6	16.67%
文学部	4	1	25.00%	2	1	50.00%	3	-	0.00%
法学部	3	1	33.33%	1	-	0.00%	2	1	50.00%
法務研究科	-	-	0.00%	-	-	0.00%	-	-	0.00%
計	39	6	15.38%	38	3	7.89%	45	8	17.78%

[注] 1 教員，助手が専任として配置されている学部，研究科等ごとに記入してください。

2 採択件数には，当該年度新規に採択された件数のみをあげ，前年度からの継続分は含めないでください。

8 学外からの研究費

(表34)

学部・研究科等	専任 教員数	科学研究費補助金		その他の学外研究費		合 計 (A+B)
		科学研究費補 助金総額 (A)	うちオーバーヘッド の額	その他の学外研究費 総額 (B)	うちオーバーヘッド の額	
経済学部	45	12,600,000	2,100,000	1,950,000	-	14,550,000
理工学部	49	14,970,000	2,670,000	196,027,365	17,990,897	210,997,365
文学部	43	20,800,000	480,000	-	-	20,800,000
法学部	34	2,100,000	-	500,000	-	2,600,000
法務研究科	16	-	-	500,000	-	500,000
合 計	187	50,470,000	5,250,000	198,977,365	17,990,897	249,447,365

- [注]1 教員が専任として配置されている学部、研究科等ごとに記入してください。
- 2 2007年度の実績をもとに作表してください。したがって「専任教員数」欄にも、2007年度の人数を記入してください。
- 3 「その他の学外研究費」には、科研費以外の政府もしくは政府関連法人からの研究助成金、民間の研究助成財団等からの研究助成金、奨学寄付金、受託研究費、共同研究費などが該当します。
- 4 本表における専任教員数は、2007年度の教員数であり、(表29)及び(表30)と一致します。

9 教員研究室

(表35)

学 部 研究科	室 数			総面積 (㎡)	1室当たりの平均面積 (㎡)		専任教員数 (B)	個室率 (%) (A/B*100)	教員1人当た りの平均面積 (㎡)	備 考
	個室(A)	共 同	計		個 室	共 同				
経済学部	51	2	53	1,775.6	29.9	124.3	45	100.0%	39.5	
理工学部	51	3	54	1,220.7	22.2	29.6	67	76.1%	18.2	助教(17名)は、個室を所 有していない。
文学部	49	2	51	1,725.5	29.9	129.2	44	100.0%	39.2	
法学部	40	2	42	1,472.6	29.9	137.5	34	100.0%	43.3	
法務研究科	20	-	20	638.0	31.9	-	18	100.0%	35.4	
計	211	9	220	6,832.4	28.8	84.1	208	100.0%	32.8	

[注]1 「室数」「総面積」欄には、学部、大学院研究科等の保有する全ての教員研究室について記入してください。

2 「1室当たりの平均面積」は全ての教員研究室について、「教員1人当たりの平均面積」は学部、大学院研究科等の専任教員が実際に使用している教員研究室について算出してください。

3 「個室率」の算出にあたっては、個室数が専任教員数を上回る場合は、原則として100%と記入してください。

4 個室を持たない教員については、「備考」欄にその数を記入してください。

VI 施設・設備等

1 校地、校舎、講義室・演習室等の面積

(表36)

校 地 ・ 校 舎				講義室・演習室等	
校地面積 (m ²)	設置基準上必要 校地面積 (m ²)	校舎面積(m ²)	設置基準上必要 校舎面積 (m ²)	講義室・演習室・ 学生自習室総数	講義室・演習室・ 学生自習室 総面積 (m ²)
178,001	63,520	94,475	38,788	167	13,335

[注] 1 校舎面積に算入できる施設としては、講義室、演習室、学生自習室、実験・実習室、研究室、図書館（書庫、閲覧室、事務室）、管理関係施設（学長室、応接室、事務室（含記録庫）、会議室、受付、守衛室、宿直室、倉庫）、学生集会所、食堂、廊下、便所などが挙げられます。

2 講堂を講義室に準じて使用している場合は「講義室・演習室・学生自習室」に含めても結構です。

3 複数のキャンパスを設置している場合は、キャンパスごとに作表してください。

2 主要施設の概況

(表36-2)

施設名	用 途	建 築 年	延床面積(m2)	備 考
本 館	事務室, 学生相談室, 学長室, 学部長室等	昭 和 3 (1928) 年	5, 820	2008年に耐震補強工事実施
1号館	事務室, 研究所, 講義室, 大学院研究室等	昭 和 41 (1966) 年	6, 755	
2号館	演習室, 書庫	昭 和 57 (1982) 年	4, 750	
3号館	講義室, 視聴覚教室, 事務室	平 成 7 (1995) 年	5, 780	
4号館	講義室	平 成 7 (1995) 年	1, 230	
5号館	講義室	昭 和 39 (1964) 年	1, 399	
6号館	事務室, 会議室等	昭 和 42 (1967) 年	2, 034	
7号館	事務室, PC教室	昭 和 56 (1981) 年	1, 390	
8号館	講義室	平 成 5 (1993) 年	5, 495	
9号館	講義室	平 成 4 (1992) 年	5, 125	
10号館	事務室, 研究室, ホール等	平 成 6 (1994) 年	11, 369	
11号館	事務室, 研究室, 実験実習室	昭 和 39 (1964) 年	5, 097	
12号館	研究室, 実験実習室, 講義演習室	昭 和 39 (1964) 年	6, 340	
13号館	研究室, 実験実習室, 講義演習室	昭 和 37 (1962) 年	3, 756	
14号館	実験実習室, 会議室	平 成 13 (2001) 年	6, 760	

(表36-2)

施設名	用 途	建 築 年	延床面積(m2)	備 考
西1号館	研究室, 講義演習室, 事務室	平成15(2003)年	4,460	
学生会館	食堂, 売店, 会議室等	昭和50(1975)年	3,677	
トラスコンガーデン	学生ホール, 売店	昭和3(1928)年	851	
第2学生食堂, 第1集会所	食堂, 集会所	昭和50(1975)年	433	
情報図書館	図書館	平成18(2006)年	11,956	
大学体育館	体育館	昭和53(1978)年	3,168	
大学小体育館	体育館	平成5(1993)年	750	
南体育館	体育館	昭和61(1986)年	1,125	
大学卓球場	体育施設	昭和56(1981)年	357	
大学弓道場	体育施設	昭和50(1975)年	159	

[注]1 「財産目録」記載のうち, 教育研究活動に使用されている主要な建物について記載してください。

2 上記, 施設の大規模な改築や改修計画がある場合は, 備考欄にその旨記入してください。

3 学部・研究科ごとの講義室，演習室等の面積・規模

(表37)

学部・研究科等	講義室・演習室 学生自習室等	室数	総面積 (㎡)	専用・共用 の別	収容人員 (総数)	学生総数	在籍学生1人当 り面積 (㎡)	備考
全学共通	講義室	64	8,438.8	共用	7,368	7,918	1.07	
	演習室	46	2,187.3	共用	1,313	7,918	0.28	
	学生自習室	1	193.0	共用	54	7,918	0.02	3-201
理工学部・ 工学部共通	演習室	2	84.7	共用	-	1,718	0.05	
経済学・経 済経営・経 営学研究科 共通	講義室	-	-	-	-	-		学部と共用
	演習室	-	-	-	-	-		学部と共用
	学生自習室	7	274.2	共用	-	16		
法学政治学 研究科	講義室	-	-	-	-	-		学部と共用
	演習室	-	-	-	-	-		学部と共用
	学生自習室	8	190.1	専用	-	9		
文学研究科	講義室	-	-	-	-	-		学部と共用
	演習室	-	-	-	-	-		学部と共用
	学生自習室	12	347.9	専用	-	34		

(表37)

学部・研究科等	講義室・演習室 学生自習室等	室数	総面積 (㎡)	専用・共用 の別	収容人員 (総数)	学生総数	在籍学生1人当 り面積 (㎡)	備考
工学研究科	講義室	-	-	-	-	-		学部と共用
	演習室	6	368.2	専用	-	145		
	学生自習室	-	-	-	-	-		
法務研究科	講義室	7	558.5	専用	358	154		
	演習室	5	168.8	専用	56	154		
	学生自習室	8	492.0	専用	160	154		
	体育館	5	5,559.0	共用				
	講堂	1	353.3	共用	406			

[注]1 学部，大学院研究科ごとに記載してください。

- 2 当該施設を複数学部，研究科，短期大学等が共用している場合には，当該学部・大学院研究科専用の施設とは別個に記載し，「専用・共用の別」欄にその旨を明記するとともに，「利用学生総数」欄にも共用する学部，研究科，短期大学等の学生を含めた数値を記入してください。
- 3 キャンパスごとに施設を共用している場合は，「学部・研究科等」欄にキャンパス名を記入してください。
- 4 全学で全ての施設を共用している場合は，「学部・研究科等」欄に「全学共通」と記入してください。
- 5 教養教育のための専用施設がある場合は，学部に準じて記載してください。
- 6 「利用学生1人当たり面積」は，小数点第3位を四捨五入し，小数点第2位まで記入してください。
- 7 他学部，研究科等と共用で使用している講義室・演習室等の「利用学生1人当たりの面積」の算出に当たっては，当該施設を利用しているすべての学部，研究科の学生数（短期大学と共用している場合は，短期大学の学生数を含む）で総面積を除いて算出してください。

4 学部・研究科ごとの学生用実験・実習室の面積・規模

(表38)

用途別室名	室数	総面積 (㎡)	収容人員 (総数)	収容人員1人当たりの面積 (㎡)	使用学部・研究科等	備考
(情報処理学習施設)						
スタディホール101	1	141.6	70	2.0	経済・理工・文・法学部	
パソコン教室201	1	290.1	120	2.4	経済・理工・文・法学部	
パソコン教室301	1	134.6	48	2.8	経済・理工・文・法学部	
パソコン教室302	1	61.9	26	2.4	経済・理工・文・法学部	
パソコン教室303	1	61.9	26	2.4	経済・理工・文・法学部	
パソコン教室(8-102)	1	206.4	84	2.5	経済・理工・文・法学部	
パソコン教室(14号館)	1	333.2	120	2.8	経済・理工・文・法学部	
小計	7	1,229.8	494	2.5		
(語学・視聴覚学習施設)						
視聴覚学習室・デジタルガレージ	1	193.0	32	6.0	経済・理工・文・法学部	
多目的視聴覚教室 (MOLL教室)	1	156.7	64	2.4	経済・理工・文・法学部	
CALL教室1	1	154.5	48	3.2	経済・理工・文・法学部	
視聴覚教室	1	288.3	288	1.0	経済・理工・文・法学部	
視聴覚教室	1	145.4	143	1.0	経済・理工・文・法学部	
CALL教室2	1	144.0	48	3.0	経済・理工・文・法学部	
小計	6	1,081.9	623	1.7		
(資格課程等実習室)						
メディア・リテラシー実習室	1	35.6	16	2.2	文学部	
社会調査士課程室	1	96.0	48	2.0	文学部	
日本語教員養成課程室	1	50.0	30	1.7	文学部	
教職課程指導室	1	87.0	20	4.4	経済・理工・文・法学部	
小計	4	268.6	114	2.4		
(工学部・理工学部専用実験実習室)						
1階機械系実験室	1	313.5	-	-	工学部・理工学部	
機械系実験室準備室	1	20.6	-	-	〃	
電気機械実験室	1	121.0	-	-	〃	
測定室1	1	27.0	-	-	〃	
測定室2	1	25.4	-	-	〃	
測定室1・2準備室	1	11.0	-	-	〃	
情報系実験室2	1	256.8	-	-	〃	
情報系実験室1	1	236.8	-	-	〃	
製図室	1	185.0	-	-	〃	
製図室準備室	1	13.0	-	-	〃	
物理系第1実験室	1	204.1	-	-	〃	
実験準備室(1)	1	103.5	-	-	〃	
物理系第3実験室	1	326.7	-	-	〃	

(表38)

用途別室名	室数	総面積 (㎡)	収容人員 (総数)	収容人員1人当たりの面積 (㎡)	使用学部・研究科等	備考
実験準備室 (2)	1	95.2	-	-	〃	
物理系第2実験室	1	198.0	-	-	〃	
暗室	1	34.5	-	-	〃	
基礎物理準備室	1	22.1	-	-	〃	
光学実験室	1	33.8	-	-	〃	
基礎物理実験室	1	316.1	-	-	〃	
第3実験室	1	89.0	-	-	〃	
第2実験室	1	82.3	-	-	〃	
器具保管庫	1	35.2	-	-	〃	
分析機器室	1	161.0	-	-	〃	
実験準備室 (1)	1	100.7	-	-	〃	
薬品保管室	1	28.3	-	-	〃	
化学系実験室	1	494.0	-	-	〃	
実験準備室 (2)	1	26.2	-	-	〃	
実験演習室	1	174.2	-	-	〃	
分析機器室1	1	44.5	-	-	〃	
分析機器室3	1	20.8	-	-	〃	
分析機器室5	1	20.4	-	-	〃	
分析機器室2	1	30.4	-	-	〃	
電力系統実験室	1	83.8	-	-	〃	
バイオ測定室	1	16.6	-	-	〃	
電子デバイス分析室	1	17.3	-	-	〃	
電気機械実験室B	1	49.2	-	-	〃	
エネルギー制御実験室	1	166.2	-	-	〃	
機械工作実験室	1	8.9	-	-	〃	
測定室	1	14.2	-	-	〃	
材料力学実験室	1	106.3	-	-	〃	
機械創生実験室・機械工作実験室	1	261.9	-	-	〃	
環境・流体実験室・エレクトロニクス共通実験室	1	299.1	-	-	〃	
知能機械・制御工学実験室	1	166.1	-	-	〃	
共通実験室	1	49.9	-	-	〃	
バイオエレクトロニクス実験室	1	66.5	-	-	〃	
暗室	1	11.1	-	-	〃	
電子デバイス実験室	1	72.0	-	-	〃	
電子デバイス測定室	1	24.9	-	-	〃	
エレクトロメカニクス演習室	1	59.1	-	-	〃	
多目的演習室	1	44.3	-	-	〃	
電気・電子工学演習室	1	41.3	-	-	〃	

(表38)

用途別室名	室数	総面積 (㎡)	収容人員 (総数)	収容人員1人当たりの面積 (㎡)	使用学部・研究科等	備考
分散システム研究室	1	72.0	-	-	//	
電子デバイス研究室	1	72.0	-	-	//	
分散システム研究室	1	62.7	-	-	//	
材料力学研究室	1	51.6	-	-	//	
機械創成研究室	1	51.6	-	-	//	
環境・流体研究室	1	62.8	-	-	//	
環境・流体研究室	1	22.1	-	-	//	
熱機関研究室	1	66.5	-	-	//	
機械創成研究室	1	66.5	-	-	//	
材料力学研究室	1	66.5	-	-	//	
電力系統研究室(I)	1	123.9	-	-	//	
電力系統研究室(II)	1	13.7	-	-	//	
計算力学研究室	1	119.5	-	-	//	
物理計測研究室	1	44.3	-	-	//	
物理計測研究室	1	33.2	-	-	//	
物理計測研究室	1	33.2	-	-	//	
物理計測研究室	1	19.7	-	-	//	
ナノテクノロジー研究室	1	59.1	-	-	//	
ナノテクノロジー研究室	1	59.1	-	-	//	
薄膜・表面物性研究室	1	34.6	-	-	//	
物質情報計測研究室	1	142.4	-	-	//	
映像情報研究室	1	66.5	-	-	//	
光通信網研究室	1	22.2	-	-	//	
画像工学研究室	1	22.2	-	-	//	
画像工学研究室	1	88.6	-	-	//	
光通信網研究室	1	88.6	-	-	//	
映像情報研究室	1	44.3	-	-	//	
機械工作研究室	1	66.5	-	-	//	
制御工学研究室	1	66.5	-	-	//	
知能機械研究室	1	66.5	-	-	//	
心理音響研究室	1	66.5	-	-	//	
ユビキタス研究室	1	44.3	-	-	//	
心理・物理音響研究室	1	22.2	-	-	//	
心理・物理音響研究室	1	22.2	-	-	//	
心理・物理音響研究室	1	22.2	-	-	//	
ユビキタス研究室	1	22.2	-	-	//	

(表38)

用途別室名	室数	総面積 (㎡)	収容人員 (総数)	収容人員1人当たりの面積(㎡)	使用学部・研究科等	備考
情報・生産システム研究室Ⅱ	1	44.3	-	-	〃	
情報数理研究室Ⅱ	1	44.3	-	-	〃	
情報数理研究室Ⅰ	1	22.2	-	-	〃	
生産システム研究室Ⅰ	1	22.2	-	-	〃	
ソフトウェア研究室Ⅱ	1	44.3	-	-	〃	
ソフトウェア研究室Ⅰ	1	22.2	-	-	〃	
モデリング&アルゴリズム研究室	1	22.2	-	-	〃	
コンピュータシステム研究室	1	22.2	-	-	〃	
コンピュータシステム研究室Ⅱ	1	44.3	-	-	〃	
モデリング&アルゴリズム研究室	1	44.3	-	-	〃	
ソフトウェア研究室Ⅲ	1	22.1	-	-	〃	
認知工学研究室Ⅱ	1	49.6	-	-	〃	
統計学研究室Ⅱ	1	44.3	-	-	〃	
統計学研究室Ⅰ	1	22.2	-	-	〃	
認知工学研究室Ⅰ	1	22.2	-	-	〃	
経営システム工学研究室Ⅱ	1	44.3	-	-	〃	
人間工学研究室Ⅰ	1	22.2	-	-	〃	
人間工学研究室Ⅱ	1	44.3	-	-	〃	
経営システム工学研究室Ⅰ	1	22.2	-	-	〃	
バイオエレクトロニクス研究室	1	59.1	-	-	〃	
心理・物理音響研究室(防音室)	1	59.1	-	-	〃	
知的インターフェース研究室	1	88.6	-	-	〃	
光システム研究室	1	88.6	-	-	〃	
生体分子化学研究室	1	11.2	-	-	〃	
環境化学工学研究室	1	9.3	-	-	〃	
環境材料化学研究室	1	71.5	-	-	〃	
環境材料化学研究室	1	23.9	-	-	〃	
環境化学工学研究室	1	20.4	-	-	〃	
生体分子化学研究室	1	60.7	-	-	〃	
プロセスシステム研究室	1	15.0	-	-	〃	
環境化学工学研究室	1	22.2	-	-	〃	
応用錯体化学研究室	1	44.3	-	-	〃	
応用錯体化学研究室	1	44.3	-	-	〃	
応用錯体化学研究室	1	22.2	-	-	〃	
応用錯体化学研究室	1	22.2	-	-	〃	
応用錯体化学研究室	1	22.2	-	-	〃	
応用錯体化学研究室	1	22.2	-	-	〃	
環境化学工学研究室	1	88.6	-	-	〃	

(表38)

用途別室名	室数	総面積 (㎡)	収容人員 (総数)	収容人員1人当たりの面積 (㎡)	使用学部・研究科等	備考
プロセスシステム研究室	1	44.3	-	-	//	
プロセスシステム研究室	1	44.3	-	-	//	
環境材料化学研究室	1	21.1	-	-	//	
環境材料化学研究室	1	22.2	-	-	//	
環境材料化学研究室	1	44.2	-	-	//	
プロセスシステム研究室	1	22.2	-	-	//	
プロセスシステム研究室	1	44.3	-	-	//	
生体分子化学研究室	1	87.6	-	-	//	
細胞分子デバイス研究室	1	22.2	-	-	//	
細胞分子デバイス研究室	1	22.2	-	-	//	
細胞分子デバイス研究室	1	22.2	-	-	//	
細胞分子デバイス研究室	1	22.2	-	-	//	
細胞分子デバイス研究室	1	22.2	-	-	//	
精密有機合成化学研究室	1	22.2	-	-	//	
精密有機合成化学研究室	1	44.3	-	-	//	
精密有機合成化学研究室	1	44.3	-	-	//	
精密有機合成化学研究室	1	44.3	-	-	//	
天然物応用化学研究室	1	44.3	-	-	//	
天然物応用化学研究室	1	44.3	-	-	//	
天然物応用化学研究室	1	22.2	-	-	//	
天然物応用化学研究室	1	44.3	-	-	//	
天然物応用化学研究室	1	22.2	-	-	//	
精密有機合成化学研究室	1	22.2	-	-	//	
共通準備室	1	44.3	-	-	//	
分子制御研究室	1	44.3	-	-	//	
分子制御研究室	1	44.3	-	-	//	
分子制御研究室	1	22.2	-	-	//	
数理解析研究室	1	44.3	-	-	//	
数理解析研究室	1	22.2	-	-	//	
数理解析研究室	1	22.2	-	-	//	
数理解析研究室	1	44.3	-	-	//	
細胞分子デバイス研究室	1	44.3	-	-	//	
細胞分子デバイス研究室 (P2-ROOM)	1	22.2	-	-	//	
薄膜・表面物性研究室(1)	1	132.2	-	-	//	
薄膜・表面物性研究室(2)	1	33.2	-	-	//	
動的システム研究室	1	44.1	-	-	//	
動的システム研究室	1	30.3	-	-	//	
動的システム研究室	1	80.5	-	-	//	

(表38)

用途別室名	室数	総面積 (㎡)	収容人員 (総数)	収容人員1人当たりの面積(㎡)	使用学部・研究科等	備考
ロボティクス研究室	1	148.8	-	-	//	
ロボティクス研究室	1	19.4	-	-	//	
材料力学研究室	1	14.2	-	-	//	
電気機械研究室A	1	116.3	-	-	//	
物理研究室	1	58.1	-	-	//	
物理研究室	1	24.9	-	-	//	
物理研究室	1	24.9	-	-	//	
心理・物理音響研究室	1	16.6	-	-	//	
小計	171	10,732.4	-	-		
実験室	1	78.0	-	-	工学研究科	
演習室	6	370.5	-	-	工学研究科	
小計	7	448.5	-	-		
計	195	13,761.2	-	-		

[注]1 原則として学部・研究科ごとにまとめてください。

2 「用途別室名」欄には、その施設の用途が具体的にわかるような名称を記入してください。

3 当該施設を複数の学部・研究科もしくは併設の短期大学と共用している場合は、その学部名等のすべてを「使用学部・研究科等」欄に記載し、本表において同一施設を重複して記載しないでください。

4 語学学習施設・情報処理学習施設、ビデオ・オーディオルームその他の視聴覚教室施設等も、ここに記入してください。

5 教養教育のための施設については「使用学部・研究科等」欄にその旨記入してください。

6 実習室としての機能を備えているものの、講義室・演習室等としての利用が中心である施設については、前表「3 学部・大学院研究科等ごとの講義室、演習室等の面積・規模」(表37)の講義室・演習室に含めても結構です。その場合は、当該施設の本表での記載に当たっては、「備考」欄に必ず「【再掲】」と記入してください。

7 実験・実習室の主な設備・機器の設置とその更新状況については、点検・評価報告書に記載してください。

5 学部・研究科ごとの規模別講義室・演習室使用状況一覧表

(表40)

学 部 名	収 容 人 員	使用教室数	総授業時数	使用度数	使用率 (%)	備 考
経済学部 (前期)	1 ~ 50	20	421	146	34.7%	
	51 ~ 100	27		171	40.6%	
	101 ~ 200	12		65	15.4%	
	201 ~ 300	5		22	5.2%	
	301 ~	3		17	4.0%	
計		67		421	100.0%	
経済学部 (後期)	1 ~ 50	24	407	123	30.2%	
	51 ~ 100	28		184	45.2%	
	101 ~ 200	13		56	13.8%	
	201 ~ 300	6		27	6.6%	
	301 ~	3		17	4.2%	
計		74		407	100.0%	
理工学部 (前期)	1 ~ 50	24	345	48	13.9%	
	51 ~ 100	16		103	29.9%	
	101 ~ 200	21		160	46.4%	
	201 ~ 300	5		27	7.8%	
	301 ~	3		7	2.0%	
計		69		345	100.0%	
理工学部 (後期)	1 ~ 50	18	335	42	12.5%	
	51 ~ 100	19		106	31.6%	
	101 ~ 200	18		146	43.6%	
	201 ~ 300	6		34	10.1%	
	301 ~	2		7	2.1%	
計		63		335	100.0%	

(表40)

学 部 名	収 容 人 員	使用教室数	総授業時数	使用度数	使用率 (%)	備 考
文学部 (前期)	1 ~ 50	43	577	262	45.4%	
	51 ~ 100	27		204	35.4%	
	101 ~ 200	11		64	11.1%	
	201 ~ 300	7		45	7.8%	
	301 ~	2		2	0.3%	
計		90		577	100.0%	
文学部 (後期)	1 ~ 50	40	610	278	45.6%	
	51 ~ 100	27		204	33.4%	
	101 ~ 200	17		85	13.9%	
	201 ~ 300	5		36	5.9%	
	301 ~	2		7	1.1%	
計		91		610	100.0%	
法学部 (前期)	1 ~ 50	22	316	106	33.5%	
	51 ~ 100	16		100	31.6%	
	101 ~ 200	12		58	18.4%	
	201 ~ 300	5		25	7.9%	
	301 ~	3		27	8.5%	
計		58		316	100.0%	
法学部 (後期)	1 ~ 50	22	314	95	30.3%	
	51 ~ 100	23		122	38.9%	
	101 ~ 200	11		50	15.9%	
	201 ~ 300	6		24	7.6%	
	301 ~	3		23	7.3%	
計		65		314	100.0%	

[注]1 原則として学部ごとに作成してください。

2 使用教室数は、当該学部の正規の授業として使用している教室数を指し、総授業時数とは、1週間の総授業科目のうち、講義室・演習室を使用する全ての授業科目の時間数を示します。なお、使用率は、(使用度数/総授業時数)により算出してください。

3 セメスター制を採用している場合で、使用状況が大きく異なる場合については、セメスターごとに作表してください。

VII 図書館及び図書・電子媒体

1 図書，資料の所蔵数及び受け入れ状況

(表41)

図書館の名称	図書の冊数 (冊)		定期刊行物の種類 (種類)		視聴覚資料の所蔵数 (点数)	電子ジャーナルの種類 (種類)	過去3年間の図書受け入れ状況			備考
	図書の冊数	開架図書の冊数 (内数)	内国書	外国書			2005年度	2006年度	2007年度	
図書館	1,078,851	550,000	7,607	3,033	67,510	5,500	46,286	36,634	66,034	

[注]1 雑誌等ですでに製本済みのものは図書の冊数に加えても結構です。

- 2 視聴覚資料には、マイクロフィルム、マイクロフィッシュ、カセットテープ、ビデオテープ、CD・LD・DVD、スライド、映画フィルム、CD-ROM等を含めてください。
- 3 電子ジャーナルが中央図書館で集中管理されている場合は、中央図書館にのみ数値を記入し、備考欄にその旨を注記してください。
- 4 視聴覚資料の所蔵数については、タイトル数を記載してください。

2 図書館利用状況

(表42)

図書館の名称	専任 スタッフ数	非常勤 スタッフ数	年間 開館日数	開館時間	年間利用者数(延べ数)			年間貸し出し冊数			備 考
					2005年度	2006年度	2007年度	2005年度	2006年度	2007年度	
図書館	8 (5)	27 (12)	300	月～金 8:30 ～ 21:00	344,099人	428,960人	549,206人	135,298冊	142,175冊	190,993冊	
				土 9:00 ～ 19:00	(教員 13,189人 職員 1,568人 学生329,342人)	(教員 12,716人 職員 2,444人 学生413,800人)	(教員 12,553人 職員 2,034人 学生534,619人)	(教員 14,435冊 職員 601冊 学生120,262冊)	(教員 13,103冊 職員 546冊 学生128,526冊)	(教員 58,722冊 職員 1,198冊 学生131,073冊)	
				日祭日 10:00 ～ 17:30							
				長期休暇中 9:00 ～ 19:00							

- [注] 1 スタッフ数は、専任、非常勤ごとに、司書の資格を有するものを（ ）内に内数で記入してください。
- 2 年間利用者数・貸出し冊数には、一般開放による地域住民等の人数や冊数は含めないで、学生及び教職員の利用状況を記入してください。
- 3 「開館時間」に上記以外の時間帯がある場合は、作表してください。
- 4 「年間利用者数(延べ数)」及び「年間貸し出し冊数」について、教員・職員・学生の別に内訳を把握している場合は、（ ）内に記入してください。

3 学生閲覧室等

(表43)

図書館の名称	学生閲覧室 座席数(A)	学生収容定員 (B)	収容定員に対する座 席数の割合(%) $A/B * 100$	その他の学習室の 座席数 (内訳備考)	備 考
図書館	1,150	6,860	16.8%	50	図書館管轄図書室 文学部共同研究室資料室座席数 32 法科大学院図書室座席数 18 学生収容定員内訳 学部学生 6,352 大学院学生 508

[注]1 「学生収容定員」には、学部学生、大学院学生、専攻科、別科の学生収容定員のほか、当該施設を短期大学と共用している場合には、短大の学生収容定員もこの数に加えてください。

2 「その他の学習室」の具体的名称を「その他の学習室の座席数」欄のカッコ内に記入一般開放による地域住民等は含めないでください。

3 「備考」欄には学生収容定員(B)の内訳を、学部、大学院、専攻科、別科、短期大学ごとに記入してください。

VIII 学生生活

1 奨学金給付・貸与状況

(表44)

奨学金の名称	学内・学外の別	給付・貸与の別	支給対象学生数 (A)	在籍学生総数 (B)	在籍学生数に対する比率 A/B*100	支給総額 (C)	1件当たり支給額 C/A
(学部, 大学院共通)							
関育英奨学金給費生	学内	給付	4	1,786	0.2%	480,000	120,000
成蹊大学貸与奨学生	学内	貸与	62	8,060	0.8%	35,800,000	577,419
成蹊会育英奨学生	学内	貸与	29	8,060	0.4%	17,400,000	600,000
成蹊学園留学奨学金	学内	給付	7	8,060	0.1%	1,850,000	264,286
日揮・実吉奨学会奨学生	学外	貸与	1	1,786	0.1%	540,000	540,000
(学部学生対象)							
成蹊大学給付奨学生	学内	給付	40	7,676	0.5%	12,000,000	300,000
岡野奨学生	学内	給付	8	5,822	0.1%	720,000	90,000
成蹊大学社会人入学生奨学金	学内	給付	4	5,822	0.1%	1,200,000	300,000
成蹊大学学修支援奨学金	学内	給付	26	7,676	0.3%	10,090,000	388,077
成蹊大学学業奨励奨学金	学内	給付	60	3,822	1.6%	9,000,000	150,000
成蹊大学清水建設奨学生	学内	給付	27	3,822	0.7%	5,400,000	200,000
日本学生支援機構第一種奨学生	学外	貸与	599	7,676	7.8%	424,092,000	708,000
日本学生支援機構第二種奨学生	学外	貸与	996	7,676	13.0%	776,880,000	780,000
中村積善会奨学生	学外	貸与	1	5,822	0.0%	636,000	636,000
安藤記念奨学財団奨学生	学外	給付	2	3,822	0.1%	480,000	240,000
里見奨学会奨学生	学外	給付	3	1,175	0.3%	1,080,000	360,000
三菱UFJ信託奨学財団	学外	給付	6	2,856	0.2%	2,160,000	360,000

(表44)

奨学金の名称	学内・学外の別	給付・貸与の別	支給対象学生数 (A)	在籍学生総数 (B)	在籍学生数に対する比率 A/B*100	支給総額 (C)	1件当たり支給額 C/A
(大学院学生対象)							
成蹊大学大学院給付奨学生	学内	給付	120	245	49.0%	31,692,500	264,104
成蹊大学法科大学院給付奨学生A種	学内	給付	14	139	10.1%	16,800,000	1,200,000
成蹊大学法科大学院給付奨学生B種	学内	給付	20	139	14.4%	12,000,000	600,000
成蹊大学法科大学院貸与奨学生一種	学内	貸与	32	139	23.0%	32,000,000	1,000,000
成蹊大学法科大学院貸与奨学生二種	学内	貸与	2	139	1.4%	1,500,000	750,000
成蹊大学法科大学院貸与奨学生三種	学内	貸与	1	139	0.7%	600,000	600,000
日本学生支援機構大学院第一種奨学生	学外	貸与	62	245	25.3%	65,472,000	1,056,000
日本学生支援機構大学院第二種奨学生	学外	貸与	23	245	9.4%	24,840,000	1,080,000
日本学生支援機構法科大学院第一種	学外	貸与	14	139	10.1%	14,784,000	1,056,000
日本学生支援機構法科大学院第二種	学外	貸与	8	139	5.8%	8,640,000	1,080,000

[注]1 2007年度実績をもとに作表してください。

2 学部・大学院共通，学部対象，大学院対象の順に作成してください。

3 当該奨学金が学部学生のみを対象とする場合は，「在籍学生総数」欄には学部学生の在籍学生総数を，大学院学生のみを対象とする場合は，大学院の在籍学生総数を記載してください。

4 日本学生支援機構による奨学金も記載してください。

2 学生相談室利用状況

(表45)

施設の名称	専任 スタッフ 数	非常勤 スタッフ 数	週当たり 開室日数	年間 開室日数	開室時間	年間相談件数			備 考
						2005年度	2006年度	2007年度	
学生相談室	2	4	5	229	10：00～18：00	2,278	2,758	2,480	専任 教員1名, 職員1名 専任カウンセラー1名 (臨床心理士) 非常勤カウンセラー2名 (臨床心理士) 非常勤職員2名 (臨床心理士)

- [注] 1 専任, 非常勤ごとに, スタッフの種類 (医師, 資格を持ったカウンセラー, 教員, 職員等) を備考欄または欄外に記載してください。
 2 年間相談件数は, 延べ数を記載してください。

IX 財 務

1-1 消費収支計算書関係比率（法人全体のもの） ※私立大学のみ

（表46）

	比 率	算 式（※100）	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	備 考
1	人 件 費 比 率	$\frac{\text{人 件 費}}{\text{帰 属 収 入}}$	51.4	52.6	50.4	53.3	50.5	
2	人 件 費 依 存 率	$\frac{\text{人 件 費}}{\text{学 生 生 徒 等 納 付 金}}$	68.0	71.7	69.9	73.0	69.3	
3	教 育 研 究 経 費 比 率	$\frac{\text{教 育 研 究 経 費}}{\text{帰 属 収 入}}$	28.5	29.1	28.3	29.4	30.2	
4	管 理 経 費 比 率	$\frac{\text{管 理 経 費}}{\text{帰 属 収 入}}$	5.6	5.7	5.9	6.7	6.0	
5	借 入 金 等 利 息 比 率	$\frac{\text{借 入 金 等 利 息}}{\text{帰 属 収 入}}$	0.6	0.5	0.4	0.4	0.3	
6	帰 属 収 支 差 額 比 率	$\frac{\text{帰 属 収 入} - \text{消 費 支 出}}{\text{帰 属 収 入}}$	13.3	10.4	14.6	9.6	7.6	
7	消 費 支 出 比 率	$\frac{\text{消 費 支 出}}{\text{帰 属 収 入}}$	86.7	89.6	85.4	90.4	92.4	
8	消 費 収 支 比 率	$\frac{\text{消 費 支 出}}{\text{消 費 収 入}}$	109.0	112.6	104.4	108.5	106.7	
9	学 生 生 徒 等 納 付 金 比 率	$\frac{\text{学 生 生 徒 等 納 付 金}}{\text{帰 属 収 入}}$	75.7	73.3	72.1	73.0	72.9	
10	寄 付 金 比 率	$\frac{\text{寄 付 金}}{\text{帰 属 収 入}}$	3.2	2.9	2.6	3.1	3.0	
11	補 助 金 比 率	$\frac{\text{補 助 金}}{\text{帰 属 収 入}}$	9.2	11.2	10.1	11.6	11.1	
12	基 本 金 組 入 率	$\frac{\text{基 本 金 組 入 額}}{\text{帰 属 収 入}}$	20.5	20.4	18.2	16.7	13.4	
13	減 価 償 却 費 比 率	$\frac{\text{減 価 償 却 費}}{\text{消 費 支 出}}$	14.2	14.5	14.9	14.4	15.0	

[注] 「学校法人会計基準」に基づく財務計算書類中の消費収支計算書（法人全体のもの）を用いて、表に示された算式により過去5年分の比率を記入してください。
 なお、法人として当該大学のみを運営している場合は、本表のみを表表してください。ただし、医・歯学部等で附属病院を併設している場合は、次表（表46-2）も作成してください。

1-2 消費収支計算書関係比率（大学単独のもの） ※私立大学のみ

(表46-2)

	比 率	算 式 (*100)	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	備 考
1	人 件 費 比 率	$\frac{\text{人 件 費}}{\text{帰 属 収 入}}$	47.5	49.7	49.3	50.2	47.6	
2	人 件 費 依 存 率	$\frac{\text{人 件 費}}{\text{学 生 生 徒 等 納 付 金}}$	59.9	64.2	62.8	65.8	62.2	
3	教 育 研 究 経 費 比 率	$\frac{\text{教 育 研 究 経 費}}{\text{帰 属 収 入}}$	29.2	31.1	30.4	30.5	30.5	
4	管 理 経 費 比 率	$\frac{\text{管 理 経 費}}{\text{帰 属 収 入}}$	5.3	5.6	6.1	6.7	6.1	
5	借 入 金 等 利 息 比 率	$\frac{\text{借 入 金 等 利 息}}{\text{帰 属 収 入}}$	0.7	0.7	0.6	0.5	0.4	
6	帰 属 収 支 差 額 比 率	$\frac{\text{帰 属 収 入} - \text{消 費 支 出}}{\text{帰 属 収 入}}$	16.5	10.6	13.2	11.9	15.1	
7	消 費 支 出 比 率	$\frac{\text{消 費 支 出}}{\text{帰 属 収 入}}$	83.4	89.3	86.8	88.1	84.9	
8	消 費 収 支 比 率	$\frac{\text{消 費 支 出}}{\text{消 費 収 入}}$	97.1	111.6	109.3	105.8	89.8	
9	学 生 生 徒 等 納 付 金 比 率	$\frac{\text{学 生 生 徒 等 納 付 金}}{\text{帰 属 収 入}}$	79.3	77.4	78.5	76.3	76.6	
10	寄 付 金 比 率	$\frac{\text{寄 付 金}}{\text{帰 属 収 入}}$	2.2	1.9	1.7	2.2	2.3	
11	補 助 金 比 率	$\frac{\text{補 助 金}}{\text{帰 属 収 入}}$	6.4	9.2	7.9	9.2	8.4	
12	基 本 金 組 入 率	$\frac{\text{基 本 金 組 入 額}}{\text{帰 属 収 入}}$	14.1	20.0	20.6	16.7	5.5	
13	減 価 償 却 費 比 率	$\frac{\text{減 価 償 却 費}}{\text{消 費 支 出}}$	15.3	15.6	16.1	15.7	17.1	

[注] 「学校法人会計基準」に基づく財務計算書類中の消費収支計算書（大学単独のもの）を用いて、表に示された算式により過去5年分の比率を記入してください。

2 貸借対照表関係比率（私立大学のみ）

（表47）

	比 率	算 式（*100）	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	備 考
1	固定資産構成比率	$\frac{\text{固定資産}}{\text{総資産}}$	% 80.9	% 81.6	% 88.6	% 87.4	% 87.1	
2	流動資産構成比率	$\frac{\text{流動資産}}{\text{総資産}}$	19.1	18.4	11.4	12.6	12.9	
3	固定負債構成比率	$\frac{\text{固定負債}}{\text{総資金}}$	9.0	8.3	7.8	7.1	6.5	
4	流動負債構成比率	$\frac{\text{流動負債}}{\text{総資金}}$	4.7	4.2	4.0	4.4	4.1	
5	自己資金構成比率	$\frac{\text{自己資金}}{\text{総資金}}$	86.3	87.5	88.2	88.5	89.4	
6	消費収支差額構成比率	$\frac{\text{消費収支差額}}{\text{総資金}}$	1.6	-0.1	-0.8	-2.0	-3.0	
7	固 定 比 率	$\frac{\text{固定資産}}{\text{自己資金}}$	93.7	93.3	100.4	98.7	97.4	
8	固定長期適合率	$\frac{\text{固定資産}}{\text{自己資金}+\text{固定負債}}$	84.9	85.1	92.2	91.4	90.8	
9	流 動 比 率	$\frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}}$	405.7	446.3	289.1	286.4	314.8	
10	総 負 債 比 率	$\frac{\text{総負債}}{\text{総資産}}$	13.7	12.5	11.7	11.5	10.6	
11	負 債 比 率	$\frac{\text{総負債}}{\text{自己資金}}$	15.9	14.3	13.3	12.9	11.8	
12	前受金保有率	$\frac{\text{現金預金}}{\text{前受金}}$	350.2	314.8	344.4	404.8	382.1	
13	退職給与引当預金率	$\frac{\text{退職給与引当特定預金(資産)}}{\text{退職給与引当金}}$	66.6	69.6	72.9	77.0	81.4	
14	基 本 金 比 率	$\frac{\text{基本金}}{\text{基本金要組入額}}$	97.0	98.0	98.2	97.9	98.8	
15	減 価 償 却 比 率	$\frac{\text{減価償却累計額}}{\text{減価償却資産取得価格(図書を除く)}}$	40.4	42.6	45.2	43.6	45.0	

[注] 1 「学校法人会計基準」に基づく財務計算書類中の貸借対照表を用いて、表に示された算式により過去5年分の比率を記入するしてください。

2 「総資金」は負債+基本金+消費収支差額を、「自己資金」は基本金+消費収支差額をあらわします。

X I 情報公開・説明責任

1 財政公開状況（私立大学のみ）

(表48)

公開の対象者	公開している 財務諸表及び その解説	公開の方法							開示請求があれ ば対応する
		自己点検・ 評価報告書	学内広報誌・紙	大学機関誌・紙	財務状況に 関する報告書	学内LAN	ホームページ (Web等)	その他 ()	
教職員	資金収支計算書		○				○		
	消費収支計算書	○	○	○			○		
	貸借対照表	○	○				○		
	財務状況に関する解説		○				○		
	その他()								
	その他()								
在学生	資金収支計算書		○				○		
	消費収支計算書	○	○	○			○		
	貸借対照表	○	○				○		
	財務状況に関する解説		○				○		
	その他()								
	その他()								
卒業生	資金収支計算書		○				○		
	消費収支計算書	○	○	○			○		
	貸借対照表	○	○				○		
	財務状況に関する解説		○				○		
	その他()								
	その他()								
保護者	資金収支計算書		○				○		
	消費収支計算書	○	○	○			○		
	貸借対照表	○	○				○		
	財務状況に関する解説		○				○		
	その他()								
	その他()								
社会・一般 (不特定多数)	資金収支計算書						○		
	消費収支計算書	○					○		
	貸借対照表	○					○		
	財務状況に関する解説								
	その他()								
	その他()								
その他 ()	資金収支計算書								
	消費収支計算書								
	貸借対照表								
	財務状況に関する解説								
	その他()								
	その他()								

[注]1 2007年度決算について2008年度中に公開した対象・方法をすべて記入してください。

2 「公開している財務諸表及びその解説」欄のうち、「財務状況に関する解説」については、事業内容と関連させた財務状況の解説が付されているかについて、該当する「公開方法」欄へ○を付してください。

3 各対象者への財政公開を行っていないが開示請求があれば対応するという場合には、「開示請求があれば対応する」欄に○を付してください。

4 「公開の対象者」および「公開の方法」欄の「その他」には、カッコ内に具体的な名称を記入してください。また、「公開している財務諸表及びその解説」欄の「その他」には、監事監査報告書、財産目録、事業報告書等の具体名を記入してください。

5 2008年度決算の公開にあたり変更が予定されている場合には、欄外に注記してください。なお、その場合、公開した時点で該当する資料を提出してください。



2009年度「大学評価」申請用 大学基礎データ（表24, 25）

成蹊大学

目 次

經 濟 学 部	1
理 工 学 部	47
文 学 部	121
法 学 部	167

經 濟 学 部

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	相原 修	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 受講生に分かりやすく、楽しく理解できる講義の実践		2003年度～現在	講義はパワーポイントを利用し、進めている。その要約はIT'S classの教材の部分に講義前に提示してあるため、それを持参し受講することで、内容理解が得やすいようにしている。 また、事例としてDVDやVTRを活用することで、多面的に理解しやすい講義を心がけている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 マーケティングの入門書として「ベーシックマーケティング入門」(日経)を1989年に出版している。その後改訂を重ね第4版を2007年出版。		2003年, 2007年	「ベーシックマーケティング入門」(日経)は1989年に出したが、内容を更新し、第2版は1999年、第3版は2003年に改訂を行っている。最新版は第4版で2007年に出している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	グローバル マーケティング戦略	共著	2003年	中央経済社	◎堀出一郎		
著書	企業経営入門	共著	2004年	多賀出版	◎相原修		
著書	経営学の基本 (経営学検定試験公式テキスト)	共著	2006年	中央経済社	経営能力開発センター		
著書	ベーシック マーケティング入門 (第4版)	単著	2007年	日本経済新聞出版社	相原修		
論文	フードサービス産業-日仏比較	単著	2008年	日本フードサービス学会年報第12号	相原修		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本商業学会 (理事)							
日本フードサービス学会 (編集委員会委員長, 副会長)							
日本マーケティング・サイエンス学会							
日本広告学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	井出 多加子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 学生によるグループワークの活用		2003年4月1日 ～2007年7月31日	3年次のゼミナール受講生を3グループに分割し、地域活性化と若者の就労支援という大きなテーマのもとに、個別のテーマを設定させてグループワークを実施した。学生同士の対話の中から生まれた疑問をもとに、インターンシップの新しい形態を模索するべく、ゼミ全員で中学高校生に対してアンケート調査を実施した。アンケートの質問項目から、先方の中学高校への依頼まで学生が主体的に実施した。その結果、興味深い帰結が得られたため、自身の分析と統合して書籍に掲載することができた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「経済のしくみと制度」		2003年6月発行。 2008年3月第3版。	経済学部1年次の選択必修科目である「経済のしくみと制度」向けの、テキストである。1年次の4月から利用するため、受講生の多くが高校生としての基礎知識しか持たないこと、さまざまな受験ルートからの学生が混在するため経済に関する知識にもばらつきがあることなどを考慮し、この科目を分担担当する4名のスタッフで執筆した。高校までの社会科で習得した経済学ではない、実際の経済活動に即した形で、できるだけ経済学初習者の興味を引き付けるテーマで構成している。たとえば、「景気」「金融」という正統派の基礎知識から、「税金」では所得税を計算させたりするなど、実践的な話題から経済に関心を持ってもらうことを主眼とした。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	地方交付税・国庫支出金の経済効果について(『都市再生の経済分析』第1章)	共著	2003年	東洋経済新報社	山崎福寿・大重斉他		
著書	「家族のあり方と税制—住宅取得における世代間所得移転の実証分析から」『家族の変容とジェンダー—少子高齢化と福祉見直しの中で』	単著	2006年	日本評論社	富田武、李静和(編)		
論文	贈与と住宅資金:東京圏のマイクロデータから	単著	2004年	都市住宅学44号, 136-147			
論文	情報の非対称性と住宅市場の活性化	単著	2004年	都市住宅学44号, 20-24			
論文	マンション建設と外部不経済	単著	2006年	日本不動産学会誌 76号			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
国土交通省社会資本整備審議会委員							
国土交通省国土審議会専門委員							
武蔵野市固定資産評価審査委員							
東京都地価動向委員会委員							

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	伊藤 克容	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「戦略支援システム」の開講		2005年4月～現在	戦略の策定・実行の財務的側面にフォーカスした講義を準備し、担当した。伝統的な管理会計の講義内容ではじゅうぶんに教育されてこなかった、経営戦略論との結び付き(事業計画の作成、企業価値評価など)は実務でも年々、重視されており、他には見られないユニークかつ先進的な科目である。				
2.作成した教科書、教材、参考書 門田安弘編著『管理会計レクチャー(上級編)』税務経理協会		2008年8月	「第5章 ミニ・プロフィットセンターの管理会計」(pp.65-79)を菅本栄造(中央大学商学部准教授)と共同で分担執筆。伝統的な管理会計の教科書では扱われていなかった日本の管理会計の代表的手法であるミニ・プロフィットセンターについて取り上げたテキストである。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 ゼミナール研究発表大会を一橋大学、慶應義塾大学と共催		2007年12月22日	毎年、一橋大学、慶應義塾大学、東京経済大学、専修大学、日本大学、神戸大学、駒澤大学、神戸大学などと定期的に交流ゼミを開催している。交流ゼミを毎年度、複数回開催し、ゼミナールでの研究成果を外部発表する機会を設けている。				
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『知的財産マネジメント-創造プロセスの経営管理ツール-』	共著	2005年	商事法務	財団法人知的資産活用センター・新日本監査法人監修・二村隆章編著		
著書	『企業再編と分権化:企業価値を高める再生の手法』(「第10章 ミニ・プロフィットセンターの現代的意義-国内製造業における競争力再構築の取り組み-」)	共著	2005年	中央経済社, pp.142-156 所収	櫻井通青編著		
著書	Value-Based Management of Rising Sun, "Chapter 17 Designing Micro-Profit Centers to Promote Organizational Learning"	共著	2006年	World Scientific Publishing Co. Pte. Ltd.	Y. Monden, K. Miyamoto, K. Hamada, G. Lee and T. Asada (eds.)		
著書	『企業価値創造の管理会計』(「第2章 経営戦略論の進展と管理会計研究」)	共著	2007年	同文館出版, pp. 29-42 所収	櫻井通青・伊藤和徳		
著書	『組織を活かす管理会計-組織モデルと業績管理会計との関係性-』	単著	2007年	生産性出版	伊藤克容		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本会計研究学会							
日本原価計算研究学会							
日本管理会計学会							
EAA(European Accounting Association)							
Institute for Advanced Studies in Management							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	井上 智夫	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) IT's class を用いた講義資料の配布, 宿題・レポートの回収, 学生とのコミュニケーション		2007年4月～現在	IT's class を用い, 講義中に配布した資料を随時掲載し, また宿題・レポートを掲載することで課題提出の徹底を図った。また掲示板機能を用いて, 学生とのコミュニケーションを図った。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 教科書「経済のしくみと制度」の作成 (共著)		2004年5月15日	学部1年生の講義で用いる教科書を共同執筆した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 2006年度前期 成蹊大学公開講座『知の最前線への誘い』の講師		2006年6月3日	「経済予測における統計学の役割」というタイトルのもとで, 経済予測の考え方とその利用方法についての講義を行った。講義前半では経済予測に関わる諸概念を整理し, 経済理論と統計学の役割や, 予測結果の活用例などを紹介した。これをベースに, 講義後半では, 「失われた10年」と呼ばれる1990年代の日本で, 日本銀行が実施した金融政策の評価を行った。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	経済のしくみと制度	分担執筆	2004年	多賀出版, 1章, 2章, 10章1・2節	井出多加子・井上智夫・北川浩・幸村千佳良		
著書	マクロ経済理論入門	分担執筆	2005年	多賀出版, 6章	北川浩・幸村千佳良[編] 井出多加子・井上智夫・北川浩・幸村千佳良[著]		
論文	Tackling the Omitted Variables Problem without the Strong Assumptions of Proxies	共著	2007年	European Journal of Operational Research, 178 (3), pp. 819-840	Leightner, J. and Inoue, T.		
論文	日本における金融政策の効果 - 構造変化の可能性を考慮に入れた再検証 -	共著	2007年	勁草書房, 林文夫編, 経済制度の実証分析と設計第1巻, 『経済学常帯の原因と制度』, 7章	井上智夫・沖本竜義		
翻訳	時系列解析(上・下)	共訳	2006年	シーエービー出版	Hamilton, J. [原著] 沖本竜義・井上智夫 [訳]		
III 学会等及び社会における主な活動							
American Economic Association, Econometric Society							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	上田 泰	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミ活動の一環として、他大学のゼミとの共同発表会の実施		2003年4月1日 ～2006年3月31日	近隣大学の2つのゼミとの間で、毎年、共同の発表会を実施して、学生の勉学に対する動機付けを高めるようにしている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 講義中の資料のインターネット上での配布		2003年4月1日 ～2007年3月31日	講義中にパワーポイントで提示する教材資料については、講義の最初に配布するほか、ネット上でも学生が自由にダウンロードできるようにしている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 大学教員間でのML を利用した大学教育に関する情報の提供		2003年4月1日 ～2008年3月31日	領域的に類似した専攻の他大学教員とML を作成し、日頃から、教育や研究に関する情報を提供するように心がけた。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 宝塚歌劇団を教育材料とした新鮮な演習の実施		2004年4月1日 ～2006年9月30日	90年以上の歴史を持ちながら、関東在住の学生の多くにとっては余り馴染みのない宝塚歌劇団を教育材料として、学生が興味をもって自己の研究を行える機会を提供した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	組織行動研究の展開	単著	2003年	白桃書房	上田泰		
著書	会社入門	共著	2004年	多賀出版	上田泰・時間規夫		
著書	組織のセルフマネジメント	共著	2005年	白桃書房	上田泰・義村敦子・ 横田絵理		
翻訳	組織市民行動 (D.W. オーガン(ほか)著)	単訳	2007年	白桃書房	上田泰 (訳)		
その他	企業経営入門	共編著	2004年	多賀出版	相原修・上田泰 (編)		
III 学会等及び社会における主な活動							
経営情報学会							
日本情報経営学会 (理事)							
日本経営学会							
Academy of Management							
Decision Sciences Institute							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	内田 日出海	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 リアクション・ペーパーの採用		2003年～現在	各講義ごとに, 出席票を兼ねたリアクション・ペーパーにコメントないし質問を書かせ, 次の講義(あるいは学内web 当該科目欄上)で教員からのコメントや回答を伝えて, 教員と学生との間の双方向性の引き上げを試みた。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	<i>Les fruits de la récolte. Etudes à Jean-Michel Boehler</i>	分担執筆	2007年	Presses Universitaires de Strasbourg, France	Jean-François Chauvard et Isabelle Laboulais (編集代表)		
論文	ライン河航行とストラスブール自治港	単著	2003年	『成蹊大学経済学部論集』第34巻第1号	内田日出海		
論文	フランスのフリー・ゾーン(1): 制度的展開	単著	2006年	『成蹊大学経済学部論集』第37巻第1号	内田日出海		
翻訳	P. ギシヨネ著『フランス・スイス国境の政治経済史—越境, 中立, フリー・ゾーン』	共訳	2005年	昭和堂	内田日出海・尾崎麻弥子		
III 学会等及び社会における主な活動							
社会経済史学会幹事							
日仏経済学会(監査)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	太田 康信	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書 コーポレート・エコノミック・ダイナミクス		2008年1月31日	システム・ダイナミクスのソフトウェアである”ステラ”を用いて, 「企業の理論」を主軸としたマイクロ経済学の内容を動学化した各種モデルを展開し, 総合的な企業モデル構築のための体系書を目指した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	手解き コーポレート・ファイナンス	単著	2006年	学文社	太田康信		
論文	限界現在価値法(The Marginal Present Value Method)の提案:資産価値評価法としての相対的比較視点から	単著	2005年	成蹊大学経済学部論集	太田康信		
論文	減損会計における「投資の失敗」について	単著	2006年	成蹊大学経済学部論集	太田康信		
論文	金融工学におけるフィナンシャル・リスクとその縮減メカニズムについて 其のI	単著	2007年	成蹊大学経済学部論集	太田康信		
論文	金融工学におけるフィナンシャル・リスクとその縮減メカニズムについて 其のIII	単著	2008年	成蹊大学経済学部論集	太田康信		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本ファイナンス学会							
日本経営財務研究学会							
日本進化経済学会							
株式会社ミツウロコ非常勤顧問							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	大西 雅一郎	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 1年生対象の基礎演習		2007年4月1日 ～7月31日	前半では、テーマに関する基本文献を学生ごとに分担を決めて要約と補足的説明を行なった。後半ではグループを構成させ、自主的にテーマを選び、より詳細な調査に基づく発表をおこなわせた。各回ともに、全ての学生が他の発言者の言葉について、メモをとり、授業内容を的確に把握し、お互いに自分たちの意見や知識を豊かにしあえるような授業を指向した。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 浜松で開催された日本私立大学連盟主催の教員研修ワークショップに参加		2005年8月3日～5日	大学での専門教育への導入に当たる初年度教育のあり方について検討するワークショップに参加した。他大学での取り組み、特に基礎演習の実施方法について有益な意見交換と重要な資料の説明を受けた。別のワークショップでは、外国語教育、とりわけ初習外国語の教育上の課題について意見交換がなされた。全体会議及び討論会では、勉学意欲の向上に関する他大学の努力や、新入生に対する教育の困難さ及びその重要性に関する有益な指摘を知ることができた。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
翻訳	近代人の模倣	単訳	2003年	みすず書房	フィリップ・ラクー＝ラノルト		
翻訳	友愛のポリティクス	共訳	2003年	みすず書房	ジャック・デリダ		
翻訳	哲学的クロニクル	単訳	2005年	現代企画室	ジャン＝リュック・ナンシー		
翻訳	ダンスについての対話	共訳	2006年	現代企画室	ジャン＝リュック・ナンシー ほか		
翻訳	絵葉書 I	共訳	2007年	水声社	ジャック・デリダ		
III 学会等及び社会における主な活動							

所 属	経済学部	職 名	教 授	氏 名	大町 健	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 授業における学生の意見・質問カードの活用による双方向の授業の工夫		2003年4月 ～2008年1月	大教室の授業では、2回に一回、その他の授業では毎授業時、授業終了時に学生にその時間の授業に対する意見・質問を記入してもらい、次回の授業の冒頭で、前回の授業を復習しつつ主なものについて回答している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 授業における資料の作成		2003年4月 ～2008年1月	全ての授業において、毎授業時に授業のための独自の教材・資料を配付し、授業で活用している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『日本史史料(1) 古代』	共著	2005年	岩波書店	石上英一, 吉田恵二, 仁藤敦史, 大町健, 佐藤信, 加藤友康, 木村茂光		
論文	『日本の古代国家』における二元的構造論の克服と残存	単著	2003年	歴史学研究 782	大町健		
論文	「東アジアのなかの日本律令国家」『日本史講座2』	単著	2004年	東京大学出版会	大町健		
論文	「律令制科下の国司支配と国例」『律令制国家と古代社会』	単著	2005年	塙書房	大町健		
論文	「富豪「層」論」	単著	2006年	日本歴史 700	大町健		
III 学会等及び社会における主な活動							
歴史学研究会							
日本史研究会							

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	小田 宏信	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 講義科目での「資料読解演習」の試行		2005年度～現在	従来より、平常点評価の尺度を得るため、また授業の双方向性を高めるために、リアクションペーパーの提出を求めてきたが、これには、漠然とした感想や思いつきの質問が多く、とすれば「出席票」の役割しか果たしていない場合も散見され、十分な成果が得にくいと判断した。一方、小レポートを課しても講義内容の要約若しくはweb上での情報収集に終始するような状況が看取できた。 このため、通常時の課題をリアクションペーパーやテーマ指向の小レポートから、「資料読解演習」に順次切り替えている。「資料読解演習」とは、講義内容に関連して、統計グラフ、統計表、統計地図、新聞記事等を複数提示して、それを複合的に読解し考察を導かせるというものであり、時には、グラフ類や統計地図の作成の段階から受講者の手に委ねている。この第一義的な狙いは、スキルの向上にあり、受講者にも歓迎されているようである。しかし、全体的な授業計画のなかでいかに有機的に課題を組み込むか、また添削指導に多大な労力が必要なることに苦慮している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『地理学基礎シリーズ1 地理学概論』(上野和彦ほか編、朝倉書店刊)		2007年4月25日	大学の教職課程向けの新しいスタンダードな地理学の教科書として編まれたものである。同書のうち「生産の地理」を担当執筆した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「工場見学から何がわかるか」、雑誌『地理』第53巻第3号		2008年3月1日	工場見学は、地理教育のみならず、経済・経営教育における臨地教育において重要な地位にあると考えられる。そこで自らの経験・教育実践を踏まえて、工場内でのレイアウトや設備・人員配置等を観察することによって、当該企業における生産性向上の工夫や技術的なドメイン若しくは市場でのドメイン等を発見する際の着眼点を論じた。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 野外実習を軸に据えたゼミ運営の試行		2006年度～2007年度	夏季休暇中に特定の地域を訪れ、2泊3日ないし3泊4日で当該地域の産業経済や都市計画、地域政策に関わるフィールドワークを実施し、それを軸に、前学期及び後学期には事前・事後のインドアワーク(デスクワーク)を行い、班毎に報告書を作成するというゼミ運営を試行した。また、この他にも、都内の中小機械工場の臨地見学を行った。 教育上、一定の成果を得たとは確信しているが、学年暦上、調査合宿日程が組みにくいなどの困難に直面し、当面、上記のようなゼミ運営は休止予定である。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	現代日本の機械工業集積-ME 技術革新期・グローバル化期における空間動態-	単著	2005年	古今書院			
論文	産業地域論—マーシャルから現代へ—	単著	2004年	杉浦芳夫編『空間の経済地理』朝倉書店、pp. 24-52			
論文	Alternative Dimensions between Marshallian and Fordist Spaces in the Japanese Manufacturing Development: A Historical Geography of Mass Production Systems	単著	2005年	Annals of the Japan Association of Economic Geographers, 51, pp. 443-464			
論文	メトロマニラ南郊における日系製造業の集積・連関構造	単著	2006年	成蹊大学経済学部論集, 第37巻第1号, pp. 59-84			
論文	ロレーヌ地域における産業転換過程	単著	2008年	手塚章・呉羽正昭編『ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ』二宮書店, pp. 126-145			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本地理学会(編集専門委員)							
人文地理学会(協議員)							
経済地理学会(幹事・編集委員)							
日本地域経済学会							
日本中小企業学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	川越 俊彦	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) Multimedia Presentation (マルチメディアプレゼンテーション) 習得のための総合的 (理論・実践) 演習		2003年4月1日～現在	Multimedia Presentation (デジタル情報を活用したビジネスプレゼンテーション) の授業を2003年以降現在まで半期毎に実施してきた。これは講義と学生によるパソコン実習更にはビジネスプレゼンテーションの模擬体験を組み合わせたものであり、企画・調査・分析・文書化・プレゼンテーションを理論・実践両面から総合的に学習させることを目指している。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 プレゼンテーション実習のための実習マニュアルの作成 (プリントとして配布)		2003年4月1日～現在	プレゼンテーションのデジタル化のための実習に必要な実習マニュアルを作成、これを用いてPCを利用した実習を行っている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌 (書) ・ページ数等	編者・著者名		
論文	スハルト政権下のインドネシア農村開発政策の規定要因	単著	2003年	成蹊大学経済学部論集 34(1)	川越俊彦		
論文	Rural Development, Income Distribution and Poverty Alleviation: A Northeast Asian Perspective	単著	2003年	M.Nisanke and E.Aryeetey eds. Comparative Development Experiences of Sub-Saharan Africa and East Asia	川越俊彦		
論文	インドネシア農村開発の系譜：1965年以前-輸出農産物を中心として-	単著	2005年	成蹊大学経済学部論集 36(1)	川越俊彦		
論文	途上国地域における農用地資源の推移：概観	単著	2008年	成蹊大学経済学部論集 38(2)	川越俊彦		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	河路 武志	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「データ分析3」 ケース説例による実践的経営データの分析		2006年9月26日 ～2007年1月26日	この授業では、コンビニの経営分析や焼肉チェーン店の販売予測など、具体的に分かりやすいケース説例を用いて、実践的に経営データの分析を行った。理論的な学習のみでは理解しにくいデータ分析について、興味深いデータを用い、表計算ソフトで具体的に処理を行うことを通して、データ分析スキルを「体験的に理解する」ことを授業の狙いとした。授業の実施に当たっては、教材提供や課題提出に授業支援システムを活用してメディア・インタラクティブを強調する一方で、授業時の実習ではできるだけ直接の会話・指導を心掛けることによって、メディアと人とのバランスを採るよう留意した。また、毎回の実習を課題として提出させることで、学生の学習意欲を維持するとともに、教員が学生の理解度を把握することにも役立てることができた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「データ分析3」 授業支援システムと授業 Web サイトの組み合わせ		2006年9月26日 ～2007年1月26日	当該授業では、これまで授業 Web サイトを自作し、講義内容の提示と実習手順の説明に用いてきた。多岐にわたる講義内容と詳細な実習手順を効果的・効率的に提供するためには、電子メディアは非常に強力なツールである。しかし、授業 Web サイトによる情報提供は教員からの一方通行になりがちで、課題や質問等は電子メールに頼らざるを得ない状況であった。この問題点を改善するために、当該年度は、大学の授業支援システム It'sClass を併用した授業運営を行った。このことにより、受講生に対して、講義内容、実習ファイル、実習説明、ディスカッション、課題を統合した総合教材として提供することができた。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 アメリカにおける会計・情報教育の研修		2003年8月1日 ～2005年7月30日	2年間のアメリカにおける研究期間中、研究活動だけでなく、教育活動に役立つ各種研修を行った。研究受入校である University of Southern California では、Accounting School における会計・情報科目の授業を聴講し、教育方法の研修を行った。特筆すべきは、講義が非常に実践的であり、かつゲストスピーカーを多用している点である。教育機関の目的や実務慣例の日本差はあるものの、今後の授業計画に組み入れるべき課題である。また、America Accounting Association の全国大会・地域部会に参加した際には、研究発表だけでなく、教育プログラムにも出席した。教育方法の情報交換だけでなく、最新の IT 技術を活用した授業の普及活動など、多岐にわたる内容を体験することができた。日本の研究学会でも、教育活動の報告セッションなどが導入されるようにはなってきたが、より活性化がもたれられることを痛感した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	会計情報の現代的役割	共著	2005年	白桃書房	石塚博司ほか		
論文	経営企画部門の機能に関する実態調査	単著	2004年	成蹊大学経済学部論集	河路武志		
論文	個人情報漏洩事件に対する株式市場の反応	単著	2006年	管理会計学	河路武志		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本会計研究学会							
日本管理会計学会							
危機管理システム研究学会							
日本経営財務研究学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	北川 浩	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) インターンシップ準備セミナーにおけるグループ学習とその成果のプレゼンテーション。		2003年4月～現在	インターンシップの準備のための講座において、約60名の学生を6人ずつ10個のグループに分け、企業研究や与えられた課題について、各グループが討議をしながら成果物を完成させていく授業を企画した。授業の最後に各グループが全員の前でパワーポイントによる成果発表を行った。学生の自主性や協調性を高め、インターンシップ実習に取り組み心構えなどを形成するために非常に有効であった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 教科書 『経済のしくみと制度』の作成		2004年4月	経済学部の1年次生全員が履修する科目である「経済のしくみと制度」のテキスト。経済学の入門書として、理論、制度、実データを総合的に学習し、経済現象に対する思考力を涵養することを目的とした新しいタイプの教科書。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「大学カリキュラム改革とキャリア教育」(日本キャリアデザイン学会研究会発表)		2006年1月27日	キャリア教育の必要性、キャリア教育の系譜、一般的な枠組みなどを述べた後、成蹊大学経済学部におけるキャリア教育の成果に関する事例報告を行った。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 低学年(1,2年次)向けキャリア教育の企画、実践		2004年4月～現在	2004年度からキャリア教育が経済学部の正課授業の中に組み込まれ、その授業を企画運営してきた。1年次から3年次まで体系化されたキャリア教育を構築し、学生の社会性を育むと同時に進路選択に真剣に取り組むための心構えなどを醸成することに極めて重要な役割を果たしている。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	経済のしくみと制度	共著	2004年	多賀出版	井出, 井上, 北川, 幸村		
著書	マクロ経済理論入門	編著	2005年	多賀出版	北川, 幸村		
論文	人材フローとナレッジマネジメント	単著	2006年	Career Support			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
日本キャリアデザイン学会							
東京都職業能力開発協会(経験者交流プラザ) 基調講演							
東京都教育委員会進学問題委員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	近藤 正	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 国際連句セミナー		2007年9月	クロアチアの学生に連句を教えるセミナー				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 『伊勢原の心敬』		2006年5月	伊勢原における心敬の資料集				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 「京都市連句教育構想」		2007年12月	京都市をモデル都市として連句教育を展開する構想(提案)				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	集成落柿舎十一世庵主: 工藤芝蘭子	共著	2003年	京都: 落柿舎保存会	近藤蕉肝		
著書	撫子	共著	2004年	さいたま市: 浦和義仲寺婦人連句会	近藤蕉肝		
著書	伊勢原の心敬	共著	2006年	伊勢原: 伊勢原連句会	近藤蕉肝		
著書	芭蕉絶句の心: 福田真久追悼集	共著	2006年	京都: 落柿舎保存会	近藤蕉肝		
III 学会等及び社会における主な活動							
財団法人落柿舎保存会(評議員)							
宗教法人義仲寺保存会(評議員)							
連句協会(理事)							
京都府連句協会(参与: 京都国民文化祭全国連句大会準備委員)							
日本ペンクラブ(会員)							

所 属	経済学部	職 名	教 授	氏 名	ナルト ザブスラック	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要			
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) Developing independent learners using scaffolding to structure lessons and activities.		April, 2004-present		As the number of classes per term is limited, the goal should be to allow the students to become independent learners through structuring lessons around group activities which give students the ability to find their strengths and weaknesses and develop ways to continue learning on their own when the class is finished. As groups are responsible for teaching each other the material while I act as a resource and facilitator, it also helps the class become close and supportive of each other. A survey connected to their attitude toward study, their efforts and self-evaluation is conducted for each student to determine what effect the course has had on their motivation to continue learning.			
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) Oral Presentation "Reflections on Nature, Teaching and Learning"		1) November 4, 2004		1) A presentation discussing observations in nature that apply to the way we teach and help students to learn. In particular, how to use scaffolding in language classes and an explanation of different learning styles in acquiring a skill. At what stage does one decide if a skill has been learned?			
2) "Reading for Fun" Workshop		2) June 26, 2008		2) A workshop for elementary school students and parents to teach the importance of reading, the enjoyment of reading in English and the importance of rhythm and intonation in reading .			
4.その他教育活動上特記すべき事項							
I participate in post-graduate workshops during the summer in my field.		2003, July 2004, August 2006, August		Developing and Using Authentic Materials (Center for Language Education and Research)MSU, USA Teaching Cross-Cultural Communication (Intercultural Communication Institute) Pacific University, USA Pragmatics (Center for Advanced Research on Language Education) University of Mhinesota, USA			
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
III 学会等及び社会における主な活動							
Japan Parliamentary Debate Association							
Japan Association of Language Teachers (JALT)							
The Association of Teachers of English to Speakers of Other Languages (TESOL)							
SIETAR Japan							

所 属	経済学部	職 名		授 業		氏 名	新村 秀一	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動									
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要						
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 数学ソフト Speakeasy を用いた、数学から経営科学全般に関する「問題解決学」の実践		2004年4月1日 ～2007年7月20日	今日、私立文科系の学生の理数科目の能力の低下が指摘されている。大学においては、予備校などと連携し、補習など力を入れる取り組みも見られる。しかし、これらの対応は、時代の流れを理解していない間違った考え方である。大学は、社会への入り口であり、種々の問題解決学を教えることが重要になってきている。使、やすく廉価な数学ソフト Speakeasy (米国アルゴリズム研究所で開発) を用い、1) ローンの計算式 (等比級数から導出) を用い、金利によって、いかに借りられるローンの総額が異なるかをグラフに描いてシミュレーションさせたり、2) 乱数を発生させ、円の面積を求めたり、3) 複素数平面上で渦巻きを描き、部品の信頼性を理解させたり、4) 正規分布関数の微分を行い、それらをグラフ化し、統計の理解を促したり、5) 推移確率行列を 100 回掛け合わせ、100 年後の市場占有率の変化をグラフ化させたり、6) 鶴亀算から、連立方程式の解の求め方、行列演算と逆行列の関係を学生に Speakeasy を実際に操作させ、理解させることに努めている。学生には、これらの授業を通して感銘を受けたテーマに関して、自分で問題を設定し、解決する過程のレポートを宿題として最低 2 件提出することを課している。中には、ずいぶん内容の濃いレポートも散見されるようになった。						
2.作成した教科書教材参考書 「JMP による 統計レポート作成法」		2007年4月10日	2007年4月から、成蹊大学の情報教育用 PC 全台に JMP を導入した。既に、本学では SPSS を契約しているが、大学の PC でしか利用できず、自宅学習ができなかった。そこで、JMP の契約が成蹊大学の教職員と学生が自宅の個人用の PC にインストールできる内容とした。これにより、学生が自宅で学習できることになった。既に JMP に関しては、「JMP 活用 統計学とっておき勉強法 (講談社、2004)」の入門書を上梓しているが、中級レベルの詳しい統計手法の説明と操作法の解説書が、経済学部 2 年次担当の「情報科学 II」や大学院の「データ分析基礎研究」と博士後期課程の教科書として必要であり、出版することとした。これらの授業では、学生に一つのデータで統計手法を説明し、評価は学生が各自決めたデータで分析し、20 頁以上の統計レポートを提出させている。このため、テキストそのものが、統計レポートの手本になるよう心がけた。また、IP に優秀な学生レポートを掲示し、手本として利用できるようにしている。						
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「情報化時代における新しい教育 - 質の高いユーザー教育の提言 - 」 (計 算 機 統 計 学 15(2), 231-238)		2003 年度	ここ 30 年、統計、数理画像法、数学などの理数系の学習において、「素人(学生)から専門家までが使いやすく、専門家が必要とする機能をもつ統計、数理画像法、数学ソフトを用い、新しいユーザー教育を行える」ことを主張してきた。既に統計では、1977 年に日本に SAS を紹介し、学会発表、論文、雑誌への執筆、著書などで啓蒙活動を行ってきた。本研究論文はその後、統計分野において、従来の統計学から、統計ソフトを用いた実学としてのユーザーのためのデータ解析が独立し、今日日本の大学で地歩を固めたことを踏まえ、解説している。この内容に沿った研究発表もあわせて行っている。論文誌の形式上の発行年次は 2002 年であるが、刊行は実際には 2003 年度に行われた。						
4.その他教育活動上特記すべき事項 数理画像法ソフト LINDO の日本代表として、統計と同じく、実用の学問として大学教育現場への普及活動		2007年10月以降	1984 年以來、シカゴ大学ビジネススクールで開発された数理画像法ソフト LINDO 製品の普及と研究への利用を行ってきた。2007 年 10 月に日本の代理店が代理店権を返上することになり、長年の知人であるシカゴ大学ビジネススクールの L. Schrage 教授より新しい代理店の相談を受けた。その時点で同教授の名著を翻訳中であり、また自身の数理画像法の著書の出版 (これらは現時点では、いずれも出版社から従来の数理画像法の不人気で断られている)、日本における多くの大学ユーザーの便宜を考え、私が日本における LINDO JAPAN の代表になることが最適と判断した。日本における販売価格を米国と同一価格に設定し、大学用の破格の価格とライセンスを設定。これまで翻訳してきたマニュアルの無償開示、研究教育用資料の整備、などの基本方針を決め、実際の営業を 2 社に任せている。現在、数理画像法は、統計や数学以上に、現実の幅広い問題解決が行えることの啓蒙活動と研究に着手した。今後、統計ソフトによるデータ解析の教育が日本の大学に定着したように、在職期間中に「数理画像法による問題解決学」を定着させたい。						
II 研究活動									
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌 (書)・ページ数等	編者・著者名				
著書	JMP 活用 統計学とっておき勉強法	単著	2004 年	講談社・337 頁	新村秀一				
著書	JMP による統計レポート作成法	単著	2007 年	丸善・237 頁	新村秀一				
論文	New Algorithm of Discriminant Analysis using Integer Programming	単著	2004 年	IPSI2004 Pescara VIP Conference/1-18	新村秀一				
論文	改訂 IP-OLDF による IP-OLDF の問題点の解消	単著	2006 年	計 算 機 統 計 学, 31/45, 31-45	新村秀一				
論文	改定 IP-OLDF による SVM のアルゴリズム研究	単著	2006 年	オペレーションズ・リサーチ, 51/11, 702-707.	新村秀一				
III 学会等及び社会における主な活動									
日本オペレーションズリサーチ学会 (機関誌編集委員, 評議委員, 庶務理事, フェロー)									
日本計量統計学会 (評議委員, 貢献賞, 和文誌編集委員)									
International Statistical Institute (Elected Members of ISI)									
International Association for Statistical Computing									
日本統計学会									

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	鈴木 紘治	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 基礎演習		2008年4月～7月	毎回グリム童話のテキストの該当ページの物語につき、読後の感想を事前に書いてもらい、ゼミの時間は各学生がその感想文を発表し、それに基づいてディスカッションを行う。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	笑いと創造第三集	共著	2003年	勉誠出版	ハワード・ヒベット、 羽鳥徹哉 他		
著書	笑いと創造第四集	共著	2005年	勉誠出版	ハワード・ヒベット、 羽鳥徹哉 他		
著書	笑いと創造第五集	共著	2008年	勉誠出版	ハワード・ヒベット、 羽鳥徹哉 他		
III 学会等及び社会における主な活動							
大学英語教育学会							

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	鈴木 滋	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 地域スポーツクラブへのインターンシップに基づく、地域総合型スポーツクラブ設立、プロフェッショナルサッカークラブの設立の提言		2006年12月	武蔵野市に設立されたNPO法人武蔵野スポーツクラブへの3カ月間のインターンシップを実施し、実際の経験から地域に根差したスポーツクラブの必要性を認識させた。次に、スポーツ行政について武蔵野市から情報を得るとともに、地域の特性を認識(地域住民のスポーツに対する意識など)して、地域に適した総合型地域スポーツクラブ及びプロフェッショナルサッカークラブの設立計画の案を作成させた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 スポーツの技術習得のための映像を活用したコーチングシステム		2007年	映像分析ソフトを活用して、イメージトレーニング、自己フォーム分析から、スポーツ技術を的確に習得させるコーチングシステムの開発を手掛ける。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 コーチングから学ぶコミュニケーション		2007年9月21日	社団法人日本青年商工会議所アカデミー研修課において、「コーチングから学ぶコミュニケーション」というテーマで講演と実習を行った。コーチングと学びについて考え、適切なコミュニケーションを通して個人やチーム(グループ)を目標に向かって変えていく方法について理論の習得と実践による学習を行った。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 中学校部活動の支援による指導実践活動		2006年6月 ～2007年11月	武蔵野市及び練馬区の公立中学校における課外活動について、学生が指導の支援を行った。武蔵野市内の支援活動については、教育委員会との協力体制のもとに実施され、中学校部活の指導者不足に協力するとともに、学生はスポーツの指導実践を通してコミュニケーション能力やリーダーシップ能力を高めた。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	選手と指導者のためのサッカー医学	分担執筆	2005年	(財)日本サッカー協会医学委員会編 金原出版	鈴木滋		
論文	心拍数を用いたサッカー及びフットサルの授業展開	共著	2003年	大学体育, 30, 2, 19-22	中村大輔・鈴木滋		
論文	The effect of whole-body alternation current magnetic treatment on blood lactate concentration after high intermittent exercise	共著	2004年	Int J Sport and Health Science, 2, 205-210	Nakamura D. Suzuki S. and Wakamura T.		
論文	Daily changes of salivary secretory immunoglobulin and appearance of upper respiratory symptoms during physical training	共著	2006年	J Sports Med Physical Fit, 46, 152-157	Nakamura D. Akimoto T. Suzuki S. and Kone I.		
その他	P-042 Relationship of daily changes in salivary secretory immunoglobulin A and appearance of upper respiratory symptoms during soccer training	共著	2007年	Journal of Sports and Science & Medicine	Nakamura D. and Suzuki S.		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本体育学会							
日本体力医学会							
日本スポーツ法学会							
日本トレーニング学会							
日本フットボール学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	高橋 史郎	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 授業における質疑応答の活発化		2005年4月1日～現在	レポーターの報告内容に関して参加者に授業終了までに「質問書」を作成させる。レポーターは集計された質問の内容をカテゴリー別に整理し、次回以降の授業で回答を用意する。その回答に対してさらに質問がある場合、質問者が納得のいくまで回答準備の作業を繰り返す。質問・回答の評価は、原則として授業時間中に行うため、必然的に受講生の出席率も向上している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 企業による会計政策の実例集		2007年4月	テキストなどに収録しにくい「会計政策」の実例を紹介。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 受講生のニーズに応じた補助講座		2007年4月～現在	1年次生向けの「企業会計入門」で、授業計画上あまり時間を割くことができなかった「簿記」の検定試験対策を行いたい、というニーズに応じて補助講座を行っている。経済学部のみならず、他学部の資格取得希望者の参加も活発である。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	The Effectiveness of Extraordinary Accounting Numbers	単著	2005年	KICPA Journal			
論文	会計制度の変革と利益区分の変質	単著	2008年	Discussion Paper, Faculty of Economics, Seikei University			
論文	Re-evaluation of Korea's New Accounting Standards adopshon -With Special Reference to its Impact on APEC -	単著	2008年	成蹊大学経済学部論集(第38巻第2号)			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本会計研究学会							
アメリカ会計研究学会(AAA)							
日本経営財務研究学会							
経営行動研究学会							
非営利法人研究学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	中神 康博	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書 講義ノートの作成		2003年度～現在	毎回講義ノートを作成し, IT's class に掲載する。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	分権化と固定資産税の役割	単著	2004年	経済学の進路(嘉治佐保子その他編), 慶應義塾大学出版会, 第10章, pp. 265-304			
論文	コミュニティ構成と地方公共サービス支出	共著	2004年	住宅土地経済, No. 54, pp. 10-19	大重 斉		
論文	都市税制と経済効果	単著	2007年	住宅土地経済, No. 64, pp. 12-21			
論文	高齢化は教育費に影響するか?: 日本の義務教育費の場合	共著	2007年	教育の政治経済分析(中神康博・Tae Jong Kim 編) シーエービー出版, 第9章, pp. 207-249	井上智夫・大重 斉		
論文	地方税の選択と社会的厚生	単著	2007年	教育の政治経済分析(中神康博・Tae Jong Kim 編) シーエービー出版, 第11章, pp. 279-310			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
日本財政学会							
都市住宅学会							
日本不動産学会							

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	中西 寛子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「基礎演習」におけるグループ演習		2003年～2007年	「世論調査」を題材に、資料の集め方、発表の仕方、討論の仕方、レポートの書き方等を教える。実際に世論調査のアンケートを作成し、データの分析を行う。これらの作業は5人のグループで行い、それぞれ、「調査テーマ決め」「調査票作成」「データ回収」「データ入力・分析」「調査発表」のどれかを中心に仕事が振り分けられる。どのようなことを調査したいかはグループで決め、誰がどのようなことをするかもみんなで決める。大変忙しい授業内容であるが、一人残らず満足観をあたえられるよう工夫して授業を行っている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 統計学の基礎、多賀出版		2006年7月	「統計学基礎」のテキストである。数学をあまり好まない文系学生を対象としている。統計学を社会学としてとらえて執筆している点が特徴である。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 情報教育の中の統計教育—統計グラフコンクール入賞へ向けて—、第2回統計教育の方法論ワークショップ 統計教育の達成目標をさぐる—リテラシーから統計的推論力、課題解決力へ— (招待講演)		2006年3月	統計教育に必要な統計グラフに関する問題点について話をした。統計グラフコンクールでの入賞経験から今後の統計教育について提案をした。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 「東京都統計グラフコンクール」に参加させ、以下のよう な結果を得ている。 2004年：東京都統計協会会長賞 2005年：東京都知事賞、東京都統計協会会長賞(全国大会 佳作)、入選(全国大会佳作) 2006年：東京都知事賞(全国大会佳作)、東京都統計協会 会長賞(全国大会入選)、入選(全国大会入選)、他入選1作品 2007年：東京都知事賞、入選(全国大会入選)		2004年～2007年	統計グラフコンクールとは、東京都統計協会と東京都が共催で、都民の方への統計知識の普及向上と、統計の表現技術の研さんに資することを目的として、都内の児童、生徒、学生及び一般社会人を対象として、毎年実施しているコンクールです。このコンクールに参加することによって正しい統計グラフを理解することができるようになる。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	実用統計用語辞典	共著	2004年	オーム社	岩崎学, 中西寛子, 時岡規夫		
著書	統計学の基礎	単著	2006年	多賀出版	中西寛子		
論文	Tests of Hypotheses for the Distance between Populations on the Mixture of Categorical and Continuous Variables	単著	2003年	J. Japanese Society of Computational Statistics, 16, 1, 53-64	中西寛子		
論文	判別分析におけるクロスバリデーションの信頼性	単著	2005年	成蹊大学経済学部論集, 35, 1, 93-107	中西寛子		
論文	マハラノビス・タグチ・システムにおける実際の誤判別率	共著	2007年	品質, 37, 1, 101-106	宮川雅巳, 田中研太郎, 岩澤智之, 中西寛子		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本学術振興会(科学研究費委員会第1段審査委員)							
応用統計学会							
日本統計学会							
日本計算機統計学会							
日本品質管理学会(論文誌編集委員会委員, テクノメトリックス研究会主査)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	成道 秀雄	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書 税務会計の講義の教科書としては 編著 税務会計論 中央経済社 参考図書としては, 共編著 税務会計辞典 中央経済社 を使用		2008年4月	講義の内容は主に法人税法になるので, 実定法であることから, なるべく最近の判例などを紹介して講義を進めている。また, 最近の新聞記事を参考にして, 分かりやすい講義となるように努めている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	会計学大辞典	共編著	2007年	中央経済社	安藤英義, 成道秀雄 他		
著書	同族会社の行為計算の否認規定の再検討	共著	2007年	財経詳報社	武田昌輔, 成道秀雄 他		
論文	新リース会計基準と税務対応	単著	2008年	「税研」139 VOL. 21-N0. 4 日本税務研究センター	成道秀雄		
論文	ポイントカード制度の会計上及び税務上の取り扱い	単著	2008年	「税務事例研究」VOL. 102 日本税務研究センター	成道秀雄		
論文	新たな公益法人税制への要望	単著	2008年	「非営利法人研究会誌」VOL. 8 非営利法人研究会	成道秀雄		
III 学会等及び社会における主な活動							
税務会計研究会理事(事務局 1989年より現在に至る)							
税務大学校非常勤講師							
日本税務研究センター非常勤研究員							
日本税理士会連合会 税制審議会 特別委員							
非営利法人研究会常務理事							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	西藤 洋	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 視聴覚資料の活用		2003年～2007年	地球温暖化やコーポレート・ガバナンス等、授業で取り上げているトピックへの関心を喚起するため、たとえば排出権取引やエンロン経営破綻についての報道番組をみせ、感想をレポートにまとめ、提出させるという試みを続けてきた。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	On the Make-up of Ockham's Criterion of Efficient Causality	単著	2005年	Annals of the Japan Association for Philosophy of Science Vol. 14, No. 1	Hiroshi Nishifuji		
論文	George Berkeley on the Notion of Absolute Space	単著	2005年	成蹊大学経済学部論集 36 巻 2 号	Hiroshi Nishifuji		
論文	契約・委任・信託 — 会社法についてのノート —	単著	2006年	成蹊大学経済学部論集 37 巻 2 号	西藤洋		
論文	あるとみえるものは、たしかにあるか? — ニコラス・オートウルクールの横顔	単著	2007年	成蹊大学経済学部論集 38 巻 2 号	西藤洋		
III 学会等及び社会における主な活動							
科学基礎論学会							
日本経済学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	橋本 綱	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
その他	ネルヴァルの眼	単著	2008年	ネルヴァル手帖			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本フランス語フランス文学会							
ネルヴァルの会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	平尾 由紀子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「マイクロ経済学入門」と「企業と市場」の授業		2004年4月1日～現在	1年次配当の選択必修科目において、次の事を心がけた。(1)授業担当者4人が共同でシラバスを作成。(2)授業で配布した講義プリントと宿題(解答を含む)を、IT's class(成蹊大学授業支援インターネット・システム)に毎授業後に載せた。(3)授業では、理論の角解のほかに、新聞記事等から現実の経済現象を紹介するように努めた。(4)宿題を定期的に課し、採点した答案を学生に返却した。また、授業中に簡単な演習課題を随時課し、学生に授業をその場で理解させるよう努めた。(5)学生による授業評価を実施した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「マイクロ経済学事例集」、成蹊大学経済学部ディスカッション・ペーパーNo.78(教材)		2004年4月	マイクロ経済学に関連した日本の事例集を経済学部教員6人で執筆し、マイクロ経済学の授業で適宜紹介した(ただし学生には事例集を配布せず)。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 経済学部FD委員会		2004年度～2005年度	経済学部では、2004年度の経済学科・経営学科の統合とともに、新カリキュラムが導入された。経済学部FD委員会では、新カリキュラムの実施運営上の問題点と改善策について検討を重ねた。FD委員会で扱ったトピックとしては「GPAと成績評価について」、「新入生に経済学部5つのコースをどのように紹介して選択させるか」、「新カリキュラムにおける演習(ゼミ)の扱い」、「特別プログラム(1学年約40名の選抜プログラム)の募集と運営」などを含む。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Firms' Location Choice with Heterogeneous Consumers and Trend	共著	2004年	成蹊大学経済学部論集 35, 1, 113-121.	井上智夫, ©平尾由紀子		
論文	On the Cost Structure of the Japanese Property-Casualty Insurance Industry	共著	2004年	The Journal of Risk & Insurance, 71, 3, 501-530.	井上智夫, ©平尾由紀子		
論文	Values of Ex Ante and Ex Post Information in Cournot Duopoly	単著	2007年	成蹊大学経済学部 ディスカッションペーパー No.93			
論文	日本の法科大学院の経済分析	単著	2007年	『教育の政治経済分析』(中神康博・Taejong Kim編), CAP出版, 第6章			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
American Economic Association							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	藤垣 芳文	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 3年次と4年次の演習科目の連携		2006年4月～2008年	3年次ゼミ（「応用発展演習1・2」）と4年次ゼミ（「卒業研究」）を段階的に関連づけ、2年間に行うこれら3つのゼミを通して、同一学生を対象に、基礎学力養成・課題発見・課題研究・論文作成と順を追って指導し、卒業論文執筆にまで導いた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 講義ノートの作成と配布		2003年4月～7月	担当した全ての学部授業において、毎回、その回の授業の内容と使用したデータ・図表を掲載した8ページからなるシートを作成、印刷し、授業に出席したすべての学生に配布して、授業内容のより平易な伝達の助けとした。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌（書）・ページ数等	編者・著者名		
論文	企業間の相互作用とロトカ・ヴォルテラの微分方程式 (1)	単著	2005年	成蹊大学経済学部論集 35 巻 2 号	藤垣芳文		
論文	企業間の相互作用とロトカ・ヴォルテラの微分方程式 (2)	単著	2006年	成蹊大学経済学部論集 36 巻 2 号	藤垣芳文		
論文	Optimal Insurance Provision under Asymmetric Information	単著	2006年	成蹊大学経済学部論集 37 巻 1 号	Y. Fujigaki		
論文	温暖化防止と排出権ビジネス	単著	2007年	成蹊大学経済学部論集 38 巻 2 号	藤垣芳文		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
環境・政策学会							
アメリカ数学会 (The Mathematical Society of America)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	松本 貴典	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 視覚に訴えるような工夫 (スライド・ビデオ教材の使用)		2007年4月1日 ～12月31日	授業のたびごとに、毎回、具体的な証拠を提示するために、講義に必要な図表を配布した。また、「江戸期の気候が世界的に寒冷であった」ことの証左として、当時の絵画や太陽黒点数の推移をスライドで映写した。さらに、両大戦間期における日本経済の状況を学生に教えるために、当時の繁華街を写したフィルムや流行歌を流した。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 松本貴典『江戸の経済像——数量経済史が解き明かす新しい姿——』(集英社新書)を執筆中。		近刊	「江戸期の日本経済が近代の経済発展の基礎になった」という認識は、近年、学会でも主流になってきた。それを主流ならしめたのは、数量経済史の発展であり、その数量経済史がいかにか従来の「暗い停滞社会としての江戸時代」という姿を書きかえてきたかについて執筆中である。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 「成蹊大学春期公開講座——日本史の「 ^{こみか} 際——」における講師		2007年6月1日	「江戸期の日本経済が近代の経済発展の基礎になった」という認識は、近年、学会でも主流になってきた。それを主流ならしめたのは、数量経済史の発展であり、その数量経済史がいかにか従来の「暗い停滞社会としての江戸時代」という姿を書きかえてきたかについて講演した。その際には、図表、スライドを多用して、聴衆が聴講しやすいようにビジュアルに講演を進めることにも配慮した。ちなみに、講演会場はほぼ満席、聴講者からは好意的な感想が寄せられた。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『生産と流通の近像——100年市の日本——』	編著	2004年	日本評論社, 1～495頁	松本貴典		
著書	『近代日本における経済発展と地域経済』	単著	2005年	大阪大学博士学位請求論文, 1～283頁	松本貴典		
論文	近代日本における在来運輸業の全国展開——在来サービス産業の発展の一事例として——	単著	2004年	『大阪大学経済学』第54巻第3号, 193～218頁	松本貴典		
論文	近代日本における産業成長の需要・供給分析——商業・サービス業を事例として——	単著	2005年	『同志社商学』第56巻5・6号, 83～100頁	松本貴典		
論文	The Development of Traditional Industries in Modern Japan: A Statistical Exposition	単著	2006年	Socio-Economic History Society ed., The Role of Tradition in Japan's Industrialization: Another Path to Industrialization, Oxford University Press, pp. 45-71	松本貴典		
III 学会等及び社会における主な活動							
社会経済史学会(幹事・企画委員)							
独立行政法人経済産業研究所『通商産業政策史 第2期』執筆委員							
経営史学会							
企業家研究フォーラム							
数量経済史研究会(QEH)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	宮脇 俊文	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 客員教授として招聘されたミネソタ大学アジア言語文学 学科で開講した「比較文学」における授業評価で高得点を 獲得した。		2007年9月5日 ～12月21日	大学院生2名を含む16名のクラスで、村上春樹、その他の日本の現代作家の文学を中心 に、戦後アメリカの文化的影響下で日本の社会がどのように変容していったかを詳細 に検討した。アメリカ文学の作品を参照しながら、日本がアメリカの何にひかれ、何を 獲得し、また何を失っていったかを学生とともに考えた。多くの作品とともに読みなが ら、それにまず一定の解釈を講義したうえで、学生の個々の意見を聴取しながら、全体 で議論を進めた。成功の要因として、講義中心になることを避け、学生の意見を最大限 に引き出したことが挙げられる。また、レポートのテーマに関しても、一人一人と面接 を行い、学生がもっとも興味を抱く部分を引き出すことで、結果的にいいものが多く提 出された。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	レイ、ぼくらと話そう——レイモンド・カ ーヴァー論集	共編著	2004年	南雲堂	宮脇俊文・平石貴樹		
著書	英語の感覚と表現——共感覚表現の魅力 に迫る	分担執筆	2004年	三修社	宮脇俊文・吉村耕治 他13名 第10章		
著書	英米文学のリヴァーブ——境界を越える 意思	分担執筆	2004年	開文社出版	宮脇俊文・植野達郎・ 鈴江璋子 他11名、 第8章		
著書	村上春樹ワンダーランド	単著	2006年	イソップ社	宮脇俊文		
論文	日本人の魂を求めて——村上春樹作品に みる日本とアメリカ	単著	2006年	『英語青年』(2006年8月号)	宮脇俊文		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本アメリカ文学会(大会運営委員, 2007年8月まで)							
日本スコット・フィッツジェラルド協会(副会長)							
日本ヘミングウェイ協会(運営委員)							
サウンディングズ英語英米文学会(評議員)							
The F. Scott Fitzgerald Society							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	武藤 恭彦	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 小テスト		2005年度以降各年	講義系の担当科目では例年、簡単な小テストを授業中に課している。ただし、小テストと言っても理解度のチェックが主目的なので、学生相互間で相談したうえで解答させることにしている。毎回実施することは時間の関係で困難だが、ある程度までは出席状況のチェックにもなる。				
2.作成した教科書、教材、参考書 参考書執筆		2006年6月	「入門日本経済」(有斐閣)の「国際金融」の章を担当。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	入門日本経済(第3版)	共著	2006年	有斐閣	浅子 他12名		
論文	The Effective Demand Principle: A Suggested Interpretation	単著	2005年	成蹊大学経済学部論集	武藤恭彦		
論文	On the role of new entry in approaching the golden rule	単著	2007年	成蹊大学経済学部論集	武藤恭彦		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
American Economic Association							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	教授	氏 名	義村 敦子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミナール「応用発展演習 1.2」における実証研究の指導		2003年～2007年	前半では、ディベートやテキスト輪読を通じて学生の問題意識を醸成した上で、学生が自主的に構成した実習班ごとにアンケート調査の企画書を作成する。後半では、アンケート調査の配布・回収・データ分析について班ごとに経過を報告し、研究成果をまとめてパワーポイント形式で発表する。実習班ごとに調査研究報告書の提出も指導している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 1年次配当の「企業経営入門」用のテキスト『企業経営入門』のうち第5章「企業の人的資源管理」を分担執筆。		2004年	組織において最も大切な経営資源は「人材」とであるとみなし、人材のモチベーション向上を大きなねらいとしている人材マネジメント法を人的資源管理と呼ぶ。本章では、初習者向けに人的資源管理の基礎的な知見を得ることを目的としている。まず、労働力の構成、人的資源管理の領域、労働市場、関連する法律、人的資源モデルの歴史的発展、日本的経営などについて紹介した上で、具体的な人的資源管理施策として、ジョブデザイン、採用、人材配置、能力開発、給与、人事考課、福利厚生、労使関係について記述している。また、トピックスとして、フリーターの現状や情報化への人的資源管理の対応を取り上げている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 大人数の講義科目（「人間行動と組織」、「人事政策」、「人的資源管理」）における授業運営及び成績評価に関する工夫		2007年	<p><授業運営>教材及び配布資料：授業はパワーポイントを提示しながら進めている。授業の概略を示した資料を配布し、授業を聴きながら受講生が各自ノートを取るよう促している。毎回の配布資料は成蹊大学内のWEB教材システムを利用して受講生がアクセスできるようにアップロードしている。学生による授業評価結果も授業改善の参考にしている。</p> <p><評価方法>授業内で受講者自身が自分で調べてくる課題を与えている。その後、課題に関連した内容について実際に授業時間内に記述する小レポートを数回提出させている。数回のレポートと定期試験によって成績評価を実施している。</p>				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	企業経営入門	分担執筆	2004年	多賀出版	相原修・上田泰(編著)		
著書	組織のセルフマネジメント	共著	2005年	白桃書房	上田泰・義村敦子・横田絵理		
著書	基礎研究者の職務関与と人的資源管理	単著	2007年	慶応義塾大学出版会	義村敦子		
論文	研究開発人材の職務特性と態度及び研究業績 —ジョブデザインとセルフマネジメントに関する予備的考察—	単著	2003年	成蹊大学経済学部論集 第33巻第2号 189-209.	義村敦子		
III 学会等及び社会における主な活動							
産業・組織心理学会							
日本労務学会							
経営行動科学学会							
Academy of Management							

所 属	経済学部	職 名	特別任用教授	氏 名	幸村 千佳良	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 毎回レポート提出・採点の実践		2003年度～2007年度	講義科目（「現代の日本経済」、「日本の金融政策」、「経済のしくみと精度」、「マクロ経済学入門」）については毎時間講義終了前の10分間を授業内容についての要約、質問を記載する時間や課題の問題を解く時間に当て、その内容について、2, 1, 0点の採点を行い、平常点としている。その結果、学生の聴講態度は集中力を増し、内容についてもどのように学生に受け止められているかが分かる。誤解や質問がある場合には、次の講義の初めに解説を行っている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 井出・井上・北川・幸村著『経済のしくみと制度』多賀出版の改訂		2008年3月	2004年5月に出版した授業科目内容に則した教科書のデータを更新した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『経済学事始』第4版	共著	2008年	多賀出版			
著書	『経済のしくみと制度』	共著	2008年	多賀出版	井出多加子・井上智夫・ 北川浩・幸村千佳良		
論文	「日本のGDPの長期展望」	単著	2005年	日本評論社『経済セミナー』4月号			
論文	「19世紀イギリスの為替手形の4つの実例」	単著	2007年	成蹊大学経済学部論集	成蹊大学経済学部学会		
論文	「銀行のリスクと経営破綻」	共著	2007年	成蹊大学経済学部論集	成蹊大学経済学部学会		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
日本ファイナンス学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	特別任用教授	氏 名	高木 新太郎	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) コース演習 A (社会と環境コース)		2007年4月1日 ～2007年7月31日	<p>①4月28日に、谷津バラ園ー谷津干潟ーサッポロビール千葉工場見学 (船橋)</p> <p>②6月24日に、浅草の景観探索と墨田区の「気候変動」の講演会・パネルディスカッションに参加</p> <p>③6月21日にコース演習Eの学生と懇親会 (任意)</p> <p>①は、ラムサール条約に基づく谷津干潟を中心に自然環境でまとめた。 ②は、下町にとって重要な地球温暖化と伝統的下町の景観でまとめた。 ③は、他のゼミ生との交流で、情報交換になったと思う。</p>				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作のプリント等配布資料		2003年～現在	トピックス等も含めて関連資料の配布程度は行っている。「教育の経済学」という科目も担当しており、そこでは拙稿の教育関係の論文も利用する。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 墨田区の教育委員としての活動		2004年10月1日～現在	対象が学校教育 (小中学校)、生涯学習、文化財等が中心であるから、大学とは性格が異なる。しかし、生徒における問題、父兄と学校の関係、社会人の学習など無関係といえない領域もある。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌 (書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	経済統計	共著	2006年	新世社			
論文	特別区における学校選択制の影響の一例	単著	2004年	学術の動向, 第9巻第11号			
論文	93SNAの全体的特徴	単著	2005年	ECO-FORUM, Vol. 23, No. 2			
論文	SNAの現状と今後の方向	単著	2007年	計画行政, 第30巻第4号			
論文	国民経済計算の役割と方向性	単著	2008年	ECO-FORUM, Vol. 26, No. 1, 2			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本統計学会							
日本経済学会							
日本不動産学会							
環太平洋産業連関学会							
墨田区教育委員会委員・委員長							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	特別任用教授	氏 名	渡辺 健一	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「世界経済」の講義用ノートを、教員紹介欄にリンクさせる形で、ウェブ上に公開、以後毎年若干の改定を実施		2004年4月	『世界経済の課題と展望』のタイトルの下で研究・教科書のスタイル。全16章構成。欧州世界経済システム（近代資本主義経済）の生成と発展というウォーラステインの視点を軸に経済のグローバル化の進展とその中断、そして再度の復興として近年の世界経済を把握し、解説したもの。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『日本経済とその長期波動—21世紀の新体制へ』 多賀出版		2003年3月	担当授業科目「日本経済」の教科書として執筆。明治維新以来の日本経済の変遷を周期60年の長期波動の観点から整理したもの。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌（書）・ページ数等	編者・著者名		
著書	日本経済とその長期波動—21世紀の新体制へ—	単著	2003年	多賀出版	渡辺健一		
論文	19世紀の物価動向—コンドラチェフによる物価長波の検討を通じて—	単著	2003年	成蹊大学経済学部論集、第34巻第1号	渡辺健一		
論文	世界経済の分析枠組—世界システム論の観点—	単著	2006年	成蹊大学経済学部論集、第37巻第1号	渡辺健一		
論文	流動性選好説再訪	単著	2007年	成蹊大学経済学部論集、第38巻第1号	渡辺健一		
論文	教科書版 総需要・総供給分析	単著	2008年	成蹊大学経済学部論集、第38巻第2号	渡辺健一		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本国際経済学会							
日本経済学会							
危機管理システム研究学会							
The Royal Economic Society							
The American Economic Association							

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	井上 潔司	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 統計学基礎、基礎解析、情報分析演習3・4、 情報科学II、確率、基礎演習		2004年4月～現在	<p>基礎解析 確率では、自作プリントによって講義をすすめている。数学科目の性質上、講義より発言の方が多いためである。そこで講義の理解を助けるため、演習問題をとりよせ、学生を指名し、黒板で問題を解かせ、演習するという形式をとっている。また、自習用の演習問題を配布するようにし、講義を補充している。数回のレポート課題を課し、その中に授業の感想・要望を書かせ、それらを反映させるようにしている。</p> <p>統計学基礎では、自作プリント、テキストを用いて講義をすすめている。ある一定の内容をすすめると、復習をかねて、演習の時間を取り入れている。学生を指名し、黒板で問題を解かせ、演習するという形式をとっている。また、受講生が全員経済学部生であることを考慮し、自作プリントに基盤データをを用いるように心がけ、日録欄の記述を盛り込むなど、統計学が実際どのように使われているのかもあわせて示すようにしている。</p> <p>情報科学IIではC言語のプログラミング演習を行っている。授業中パワーポイントを用い、視覚的に理解しやすいように努めている。ほとんどの受講生が初学者であることを考慮し、ゆっくりと進め、プログラミングを構築できるように配慮している。また、ある段階でグループ学習を取り替え、班で大きなシステムの構築(検索エンジン等...)を行うようにし、簡単なプレゼンテーションを行わせるようにしている。ここでも、自作プリントを用いて講義を補充し、演習問題も豊富に配布している。</p> <p>基礎演習では入学期および1年生を対象に「生徒」から「学生」へとスライドさせることを努めている。授業中パワーポイントを用い、視覚的に理解しやすいように努めている。グループごとに分かれ、自分動興味あることを自由に調べ、まとめあげ、パワーポイントを用いたプレゼンテーションまでのプロセスを体感できるようにしている。学生をあらかじめ座長(司会)にし、プレゼンテーションを総括させている。その後、学生に自由に議論させ、また、毎回配布するコメントシートとともに発表者と双方が形態となるように心がけている。最後にレポートを書き上げるまでを指導している。</p> <p>情報分析演習3・4ではパソコンを用いて統計学基礎の基礎を学んでいる。授業中パワーポイントを用い、視覚的に理解しやすいように努めている。グループ学習によってすすめている。また、自由にテーマを調べ、調査結果を発表させている。最後にレポートを書き上げるまでを指導している。ここでも、自作プリントを用いて講義を補充し、演習問題も豊富に配布している。</p> <p>以上の講義科目で授業評価アンケートを実施し、講義の進め方、配布資料を反映させるようにしている。</p>				
2.作成した教科書、教材、参考書 補助プリント(全14回：統計学基礎、基礎解析、情報分析演習3・4、情報科学II、確率)		2004年4月～現在	<p>基礎解析では講義用テキスト「阪大 経済学部」を使用しており、このテキストの巻末に学生の理解の助けとなるよう、グラフ集を付録として与えた。また、毎回授業の理解の助けとなるように補助プリント(全14回)を使用し、演習教材としている。統計学基礎では授業の理解の助けに補助プリント(全14回)を用いている。ここでは、身辺で使われている統計を示すために、日録欄の切り抜きを添付するなど工夫をしている。情報分析演習3・4ではExcelを用いて統計学を行っており、Excel関数のまとめ、統計学の事例を示した補助プリント(全14回)を用いている。情報科学IIではC言語を用いたプログラミングの演習を行っている。受講生のほとんどが初学者であることもあり、サンプルプログラム例のせが補助プリント(全14回)を配布した。無理なく応用がつかうように演習問題も与えている。確率で数学的な考え方が身につくように、また、身近なところで見られる確率現象に興味をもってもらおう、補助プリント(全14回)を配布している。ここでは授業中に提示したレポートの解答を示したり、また、自習用の豊富な演習問題を与えている。</p>				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 FDワークショップ「～より良い授業の実践をめざして～」に参加		2006年8月7・8日	<p>2006年8月7・8日に静岡県浜松市(グラントホテル浜松)で行われたFDワークショップ「より良い授業の実践(社団法人日本私立大学連盟主催)」に参加した。各大学からの参加者と、授業の質的向上のための議論を行い、情報交換・収集ができた。また、報告書としてまとめ、その後、このワークショップでの内容を成蹊大学ホームページで、教員に対して発表し、紹介した。</p>				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Inoue, K. and Aki, S. A generalized Polya urn model and related multivariate distributions	共著	2005年	Annals of the Institute of Statistical Mathematics, Vol. 57, 49-59			
論文	Inoue, K. and Aki, S. Joint distributions of numbers of success runs of specified lengths in linear and circular sequences	共著	2005年	Annals of the Institute of Statistical Mathematics, Vol. 57, 353-368			
論文	Inoue, K. and Aki, S. On generating functions of waiting times and numbers of occurrences of compound patterns in a sequence of multi-state trials	共著	2007年	Journal of Applied Probability, Vol. 44, 71-81			
論文	Inoue, K. and Aki, S. Joint distributions of numbers of runs of specified lengths in a sequence of Markov dependent multistate trials	共著	2007年	Annals of the Institute of Statistical Mathematics, Vol. 59, 577-595			
論文	Inoue, K. and Aki, S. Joint distributions associated with compound patterns in a sequence of Markov dependent multi-state trials and estimation problems	共著	2007年	Journal of the Japan Statistical Society, Vol. 37, 285-298			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本統計学会(理事、幹事)							
統計関連学会連合(理事、会計)							

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	小林 めぐみ	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 英語リスニング (Intensive Listening) 授業における学生プレゼンテーション		2005年9月 ～2007年1月	1年生の英語2の学期末プロジェクトとして、英語の歌を利用した発表を企画。ペアか3人グループで身近な歌を題材に穴埋めのワークシートのプリント1枚を作成し、実際にその曲をクラスメートに聴かせて穴埋めをさせる聞き手参加型の発表(各グループ10～15分)で、穴埋めには授業で扱ったリスニングのポイント(例:r/lの区別、収縮形に注意する等)を設定させ、自らリスニングの練習課題を作成することでリスニングで注意すべき点をより能動的に意識させた。また歌や歌手についてのリサーチ結果やその曲への個人的感想も盛り込ませた。この発表でより明確な目的意識を持ってリスニングに取り組んでもらうだけでなく、ペアやグループで準備することによって英語による発表に伴う緊張感、負担を軽減し、学生間のつながりを促進するよう配慮した。なお、各グループが作成したワークシートは予め小冊子にまとめ発表当日に一斉配布。その小冊子は約12～14曲を含むクラスオリジナルの英語歌詞集としてクラス内の一体感、達成感を持たせた。評価は内容、構成、態度等を含めた10項目からなる評価シート(事前に提示)で実施。教員の評価プラスクラスメートからのコメントは発表後すぐに発表者に返却、フィードバックを実施。また発表に関する自己点検も行った。発表の指導は通常授業に並行して発表約1ヵ月前に教員がモデル提示として模擬プレゼンテーションを行った上、1週間毎に順を追って準備を進めさせる宿題を課し(シラバスにも日程を提示)、授業内でも短い個別対応を行うなど、きめ細かく指導した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 英語多読 (Extensive reading) の授業における多読用教材の作成		2005年4月1日～現在	2年次以上の英語多読授業に使用するワークシート、プリント資料他の作成。大学における多読の授業はまだ十分に確立されているとはいえず、数千冊におよぶ図書以外に「教材」はほとんど開発されていない。そのため成蹊大学国際教育センターにおける多読の共同研究に関連して、個人でも多読授業用のワークシート他を多数作成。特にオリジナルと思われるものは、多読授業内で行っている個別面談(読書計画の検討、多読の進捗状況の確認、多読あるいは英語学習全般における相談を受ける個別カウンセリング)を成功させるため個人の面談記録を効果的に残す記録シートで、場当たり的な面談ではなく計画性を持ったカウンセリングを行うよう配慮した。また継続して行われていく多読図書を選定のためと、指導の充実をはかるため、学生と同じように個人でも多読を行っているが(現時点でおよそ400万語程度)、その記録を学生にも閲覧可能にすべく準備中。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 JACET2007年 全国大会 実践報告 発表 「多読中心の授業と関連アクティビティ」		2007年9月6日	現在効果的な英語学習の1つとして多読(Extensive Reading)が注目を浴びているが、大学で多読を中心においた授業を正規の授業として扱っているところはまだまだ非常に少なく、多読中心の授業のコース設定方法が模索されている。特に多読関連アクティビティについては様々な方法が紹介されているものの、それをどのように年間の授業計画に組み込むべきか、またそれぞれのアクティビティが学生にどのように受け止められているのかについては明らかにされていない。そのため、8つの多読関連アクティビティに対する約140名の学生の評価をまとめ、多読の授業を活性化させる上で効果的なアクティビティを特定し、その結果を踏まえて多読アクティビティの効果的な導入法について発表報告した。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 新規科目 World Englishes 1, 2 の企画、実施		2005年4月～現在	世界において英語のノンネイティブスピーカーの数がネイティブスピーカーの数を上回ったとされる現在、様々な国の出身者が使用する英語に触れる機会が増加している。従来のアメリカ式英語またはイギリス式英語のみを規範とするのではなく、より広範囲に多種多様な英語が容認されつつあり、TOEICのテストなどでもオーストラリアやニュージーランドの英語も含まれるようになってきた。これを受けて、さまざまな英語の形態に慣れ親しむとともに、さらに日本人としての特徴を帯びた英語を使用してより積極的に世界に向けて発信していくことを可能にするための新授業を企画、実施した。英語にも方言があるという当たり前の事実が見落とされている中で本家イギリスに見られる英語方言に始まり、アメリカ英語、オーストラリア英語など主要なネイティブの英語を紹介した後、インドやシンガポールなど特に周辺のアジア諸国で使用されている英語に焦点を当てて、多様な英語の姿を紹介。中でも様々な国からの留学生をゲストスピーカーとして授業に招待し、実際に様々な形態の英語に触れるとともに、学生自身も英語を使用して話し合える実践的な機会を学期中2回ほど設定していることが最も特徴的といえる。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『文献からみる第二言語習得研究』 (社会言語学/リーディング共著担当)	編著	2005年	東京：開拓社	JACET SLA研究会		
論文	東京語における形容詞アクセントの変化とその要因	単著	2003年	『音声研究』7(2), 101-113.	小林めぐみ		
論文	Japanese University Students' Receptive Pragmatic Competence.	共著	2005年	JACET Bulletin, 40, 117-133.	佐野富士子他		
論文	大学における多読授業の役割と効果	単著	2006年	Seikei Institute for International Studies Working Paper Series, 1, 1-28.	小林めぐみ		
論文	留学生との交流を通して World Englishes の意義を教える試み	単著	2007年	Seikei Institute for International Studies Working Paper Series, 6, 1-22.	小林めぐみ		
III 学会等及び社会における主な活動							
JACET (大学英語教育学会)							
JACET SLA (第2言語習得) 研究会							
日本音声学会							
JALT (全国語学教育学会)							

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	鷹岡 澄子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) エコノメトリックスの授業における授業教材、課題などの電子ファイル化		2004年度～現在	初年度エコノメトリックスの授業後、履修学生から授業に対するフィードバックをもらい、教材や課題をすべてパワーポイントなどの電子ファイルとして授業前に IT'S Class にアップデートして配布した。学生にとって、必要以上にノートをとることに時間と労力を割かれなくてすむ、教材が整っている所以他の教科書やテキストをやみくもに揃えたり調べなくてすむという評価であった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 電子化した教材		2004年度～現在	エコノメトリックス (学部、大学院) の各回の授業テキスト・課題ファイルを電子化。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 オープンキャンパス体験講義講師		2007年7月	成蹊大学オープンキャンパス体験講義で「どうしてお金は必要なのか?」を講義した。高校生や一般市民を相手に、世界の紙幣を実際に用いて経済学や金融論を分かり易く、説明した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Verdicts and the Value of the Firm in Japan	単著	2004年	Economics Letters, Elsevier, Vol. 84, No. 1, pages 93-97	Sumiko Takaoka		
論文	The Effects of Product Liability Costs on R&D with Asymmetric Information	単著	2005年	Japan and the World Economy, Elsevier, Vol. 17, No. 1, pages 59-81	Sumiko Takaoka		
論文	Deregulation of Bank Underwriting Activities: Impacts in the Euro-yen and Japanese Corporate Bond Markets	共著	2005年	Mathematics and Computers in Simulation, Elsevier, Vol. 68, Issues 5-6, pages 529-538	C.R. McKenzie and Sumiko Takaoka		
論文	The Impact of Bank Entry in the Japanese Corporate Bond Underwriting Market	単著	2006年	Journal of Banking and Finance, Elsevier, Vol. 30, Issue 1, pages 59-83	Sumiko Takaoka and C.R. McKenzie		
論文	Product Defects and the Value of the Firm in Japan: The Impact of the Product Liability Law	単著	2006年	Journal of Legal Studies, University of Chicago, Vol. 35, No. 1, pages 61-84	Sumiko Takaoka		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
Econometric Societ							
American Law and Economics Association							
日本ファイナンス学会							
日本金融学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	田口 誠	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 演習におけるグループ研究及びプレゼンテーション		2003年度～2006年度	受講生が主体的に学ぶ意欲を持てるように、数名ずつのグループに分け、それぞれが興味を持つ内容にしたがって自主的にテーマ設定をおこない調査を進める。コース演習及び応用・発展演習では、特にプレゼンテーションやディスカッションの機会を多く作るように工夫している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作の資料配付		2003年度～2006年度	企業の環境マネジメント及び環境政策について体系的な知識を効率的に習得できるように、日常的に様々な分野の統計資料や最新のトピックに関する情報を収集し、講義ノートと合わせて配布している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	企業経営入門	分担執筆	2004年	多賀出版	田口誠(相原修・上田泰編)		
論文	社会的制度の構築と企業組織進化の関係性：環境保全のための制度を例として	単著	2004年	成蹊大学経済学部論集・34巻2号・pp.71-92	田口誠		
論文	自主的参加を基礎とした企業の環境保全活動：レスポンスブル・ケア・プログラムの背景・効果・課題	単著	2004年	成蹊大学経済学部論集・35巻1号pp.63-85	田口誠		
論文	表明選好法による環境政策の効果の計測	単著	2006年	成蹊大学経済学部論集・36巻2号・pp.139-153	田口誠		
その他	On the Application of the Behavioral Theory to Natural Environmental Issues	単著	2003年	Discussion Paper Series No.72 成蹊大学経済学部	田口誠		
III 学会等及び社会における主な活動							
環境経済・政策学会							
Association of Environmental and Resource Economists							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	時岡 規夫	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要			
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 講義科目での教材の開発		2004年4月1日～現在		毎回の講義に、Microsoft社のプレゼンテーションソフト、PowerPointを用いて作成した教材ファイルを用意した。提示用ファイルとは別に、学生にはキーワードなどを穴埋めするようにしたファイルを用意・プリントとして配布し、学生の理解を助ける工夫をした。			
2.作成した教科書、教材、参考書 『会社入門』		2004年4月1日～現在		経済学部コース準備科目「会社入門」のテキストであり、担当する複数教員の共著によりなる。さらに、担当する複数教員共同での、シラバス、テキストに基づき、Microsoft社のプレゼンテーションソフト、PowerPointを用いた教材ファイル、定期試験問題の作成を行った。			
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD講演会への参加		2007年9月20日		大学主催のFD講演会に参加した。			
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	実用統計用語事典	共著	2004年	オーム社	◎岩崎学・中西寛子・時岡規夫		
論文	Dynamic Optimality of Yield Curve Strategies	共著	2003年	International Review of Finance, Vol. 4, pp. 49-78	◎ Kobayashi, Takao, Akihiko Takahashi, and Norio Tokioka		
論文	年金の資産運用における海外投資の位置付け	単著	2004年	証券アナリストジャーナル, Vol. 42, pp. 66-76	時岡規夫		
論文	金利の期間構造モデルと為替リスクがある下での最適なグローバルポートフォリオ	単著	2007年	Discussion Paper No. 95, 成蹊大学経済学部	時岡規夫		
翻訳	リスクマネジメント	共訳	2004年	共立出版	三浦良造(訳者代表)		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
日本ファイナンス学会							
財団法人大学基準協会平成19年度大学評価委員会経済学系第3専門評価分科会委員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	野島 美保	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 専門講義科目における、IT 等を利用した参加型授業		2003 年度～2007 年度	講義形式の授業において、学生の参加を促す仕組みを IT を用いて模索している。まず、板書が見えないということのないように、自作プリントを配布し、視覚に訴えるようなパワーポイントやビデオ教材を毎回用いている。次に、受動的な学習に偏らないように、メール提出による宿題を数回実施・採点・表彰している。メール (IT) を利用することで、400 人規模の大人教講義でありながらも、参加型の形態を目指している。さらに、授業内容にそったワークを授業中に行っている。主に新聞記事やビデオ教材から出題した問題に対して、記述式で答えるものである。実際に頭と手を動かしてもらうことで、授業に参加しているという意識を、多くの学生にもってもらいたいと思う。優秀な解答は次週に発表・表彰し、優秀な学生のモチベーションの維持に配慮している。最後に、ホームページ (IT's Class) を用いて、授業中にはケアのできない学生に対して配慮を行っている。欠席者に対して、電子教材のダウンロードの仕組みや質問コーナーを用意している。さらに、ホームページ上で理解度チェッククイズを作成している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 企業経営入門に用いる入門教科書の作成		2004 年 7 月	企業経営入門：この授業に用いる 1 年生向けの入門教科書を、経済経営学科の専任教員で分担執筆して作成した。数年毎に改訂している。その他に、自作プリントを作成し、学生の理解に努めている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	オンラインゲームビジネスの基礎知識～ 産業構造とビジネスモデル	単著	2006 年	コンピュータエンターテインメント協会	コンピュータエンターテインメント協会オンラインコミュニティ特別委員会編集 野島美保著		
著書	井上哲浩・日本マーケティングサイエンス 学会編 「Web マーケティングの科学：リ サーチとネットワーク」	分担執筆	2007 年	千倉書房, 4 章 pp.127-163	野島美保		
論文	情報過多時代における情報選択とオンラ イン小売業の戦略マネジメント	単著	2005 年	博士学位申請論文, 東京大学	野島美保		
論文	仮想世界ビジネスの収益決定要因	単著	2007 年	『組織科学』第 41 巻, 第 1 号, pp.15-25.	野島美保		
その他	ゲーム産業の発展に向けて～カジュアル 化とオンライン化	単著	2006 年	経済産業ジャーナル, No. 427, pp. 24-25	野島美保		
III 学会等及び社会における主な活動							
経営情報学会							
組織学会							
日本オペレーションズ・リサーチ学会							
日本マーケティング・サイエンス学会							
Digital Games Research association							

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	挾本 佳代	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要			
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 現代日本のマスメディアを具体的に捉えさせるための工夫		2007年11月5日 ・12月17日		理論だけでは決して捉えられない日本のマスメディアの現状を具体的に伝えるために、授業内で出版社とスポーツ新聞社から2人のゲストスピーカーによる講演を依頼した。時代の波を作り上げていくかのような動きを常にしつづけるマスコミ内部の実情は、内部の人間にしかわからない。表には決して出てこないマスコミ内部の話をしてもらうことで、学生に、日本のマスメディアが社会でどのような働きをしているのかを感覚的に捉えてもらうことを試みた。			
2.作成した教科書、教材、参考書 社会経済思想を現代社会と関連づけて捉えさせるための工夫		2003年4月 ～2007年3月		社会経済思想史に登場してくるいくつかの思想家たちの考え方を、単にその思想家が生きた時代のトピックにあてはめて解説だけに終始するのではなく、いまなぜその思想家の考え方が必要とされているのかを重点的に学生に伝えることを試みた。まずできる限り、思想家の原典を翻訳であっても「読社」ことから始め、当時生きた人間の感覚をもってもらえるように努めた。そのために、各思想家の原典に関連したコピーを授業ごとに作成した。			
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 武蔵野地域五大学共同教養講座「現代の環境問題をどのように考えるか」講師担当 「自然と社会の関係性から(1)・(2)」		2004年9月25日 ・10月2日		現代の環境問題を、数値や対策・法案などの視覚的なものから検討していくことに加え、思想的にどのように捉えていったらいいのかを講演した。環境問題が顕在化する以前の近代社会で、この問題の発生の原因となる考え方や思想にはどのようなものがあったのか、それは現代社会ではどのように変質し蔓延しているのかを、平易に解説した。			
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	バーゾンズ・ルネッサンスへの招待——タルコット・バーゾンズ生誕百年を記念して	分担執筆	2004年	勁草書房、「第14章バーゾンズと20世紀の科学」、pp. 215-223	©富永健一・徳女彰(編著)・挾本佳代		
著書	手仕事の現在	分担執筆	2007年	法政大学出版局、「テキスタイル研究の視座——自然・文化・人間の関係から」、pp. 157-186	©田中優子(編著)・挾本佳代		
論文	共同体概念の再検討	単著	2004年	成蹊大学経済学部論集第35巻第1号、pp. 153-174	挾本佳代		
論文	日本の桑栽培面積の推移と世界の桑栽培の現状	単著	2006年	成蹊大学アジア太平洋研究センター、『アジア太平洋研究』30号、pp. 41-46	挾本佳代		
翻訳	スチュアート・ニューウェン『PR! 世論操作の社会史』	共訳	2003年	法政大学出版局	平野秀秋・挾本佳代・左古輝人		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本社会学会							
日本社会史学会							
日本スポーツ社会学会 2001年8月～2003年3月「スポーツする身体研究」プロジェクト参加							
社会学研究会							
マルサス学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	丸山 桂	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 演習における他大学との討論会		2003年4月1日 ～2005年1月31日	3年生向けの演習において、社会保障政策に関するレポートを作成した。このレポートをもとに他大学との学生との討論会を開催し、今後の社会保障政策についての具体的な提言を、セッション別で考える機会を設けた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『最新社会保障の基本と仕組みがよ～くわかる本』		2007年7月18日	担当する、年金の経済学、福祉の経済学、健康の経済学の副読本として執筆した。平易な表現に努め、独学でも社会保障の仕組みが分かるようになっている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 東京書籍、実教出版の高校の家庭科資料集の社会福祉分野の執筆		2003年4月1日～現在	高校の家庭科において、社会福祉分野が新たに取り入れられたことを受け、生徒及び教員向けの2種類の資料集を作成。日本の高齢化、社会保障制度の仕組みなどを概説した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	社会保障の新たな制度設計ーセーフティ・ネットからスプリング・ボードへ	共著	2005年	慶應義塾大学出版会	丸山桂		
著書	男女共同参画統計データブック	共著	2006年	ぎょうせい	丸山桂		
著書	家族の変容とジェンダー	共著	2006年	日本評論社	丸山桂		
著書	次世代のための家族政策の確立に向けて	共著	2007年	社会経済生産性本部	◎丸山桂・駒村康平		
論文	非典型労働者の被用者年金の適用問題と厚生年金適用拡大の影響	単著	2006年	「就業形態の多様化に対応する年金制度の研究」厚生労働省政策科学推進研究事業報告書	丸山桂		
III 学会等及び社会における主な活動							
生活経済学会							
日本財政学会							
日本家政学会生活経営学部会							
武蔵野市福祉総合計画アドバイザー委員							
男女共同参画会議 監視・影響調査専門調査会「高齢者の自立した生活に対する支援に関する監視・影響調査検討会」委員							

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	山崎 由香里	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミナールにおけるグループワーク(ディスカッションを通じた独創性の捻出及びプレゼンテーション技術の習得)		2003年度～2007年度	学生約5名から成るチームを編成し、経営学の体系的なテキストの中の1分野(マーケティング論や人的資源管理論等)を輪読させた後に、実例を用いて学んだ理論を分かりやすく説明・プレゼンテーションするための資料を作成させた。一連の作業において、少人数によるチームを編成させたことにより未発言者をなくし、全員がコミュニケーションをとる環境を整えた。経営学の中級レベルの体系的なテキストに関して、まず個人でレジュメを作成させたことで、文章・図表等の理解力、表現力を習得させた。個々のレジュメをチーム内で共有させ、互いの観点からのテキスト理解を促した。学んだ諸理論を他のチームに分かりやすく説明するための方法をディスカッションさせた。その際、実例を盛り込むために、様々な情報源(新聞記事、雑誌、Webサイト等)の検索・利用方法を紹介し、情報収集能力を養った。メンバーの協働を通じて、独創的なプレゼンテーションを作成することを重視した。プレゼンテーション作成にはパワーポイントを用いさせ、多様な情報機器、アプリケーションソフトウェア及びWebサイトを駆使してマルチメディアを扱えるよう、その手法を習得させた。また、各チームのプレゼンテーションに関して受講生全員でディスカッションさせ、チーム間のコミュニケーションを図った。最後に、チーム自身及び自分自身の反省点等をディスカッションさせ、今後の学習へのフィードバックを促した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「企業経営入門」		2004年度～2007年度	経済学部基幹科目「企業経営入門」のテキストである。全12章のうち、第4章「組織における人間の意思決定」と第10章「企業の経営財務分析」を執筆した。第4章では主に経営学における意思決定の理論を中心に取り上げると共に、近年の情報技術と組織の意思決定の関わりについて解説した。第10章では企業の財務諸表を活用して、個別企業の分析を行うテクニックを紹介すると共に、実際の様々な産業レベルの分析結果を紹介し、分析の応用可能性を示唆している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	企業経営入門	分担執筆	2004年	多賀出版	◎上田泰・相原修編著 (第4章・第10章担当執筆)		
論文	会計専門家の意思決定における確信度について	単著	2004年	成蹊大学経済学部論集 第34巻第1号	山崎由香里		
論文	The Effect of Confidence in Decision Making by Accounting Professionals	単著	2004年	Discussion Paper Series No. 77, Faculty of Economics SEIKEI University	山崎由香里		
論文	組織におけるリスク下の意思決定に対する感情の影響—先行研究にみられる感情設定方法に関する実証分析—	単著	2005年	経営情報学会 Vol.14 No.3	山崎由香里		
論文	組織の意思決定に対する感情ヒューリスティックスの影響に関する一考察	単著	2008年	成蹊大学経済学部論集 第38巻第2号	山崎由香里		
III 学会等及び社会における主な活動							
経営情報学会							
日本情報経営学会(旧オフィス・オートメーション学会)							
Academy of Management							
Society for Judgment and Decision Making							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	山本 晶	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミにおける企業との共同研究		2005年度～現在	グループに分かれ、オリックスグループ4社のマーケティング戦略を立案。最終回はオリックス・クレジットにて各社の担当者にプレゼンテーション。同様の取り組みを、フレッシュネスバーガー(2006年～2007年)、カルティエ(2006年度後期)、ハイネケン(2006年度後期)、ディズニー(2007年度前期)、シティバンク(2007年度後期)において実施。いずれの場合もマーケティング立案担当者の実務家から課題をもらい、研究分析の成果を担当者にプレゼンテーションしている。担当者の実務家の方からは高い評価を頂いた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作のプリントなど資料配布、経営学の事例のDVD		2005年度～現在	「会社入門」、「競争戦略」、「広告と市場」の講義において、自作のプリントを配布。教科書の内容に即した最新の企業の事例を紹介。また、さらに理解を深めるため、ワールド・ビジネス・サテライトなどのニュース番組を録画・編集。講義と関連する事例を紹介。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	消費者間ネットワークを利用したレコメ ンデーション・エージェント	共著	2007年	井上哲浩編著『Web マーケティングの科学ー リサーチとネットワークー』, 5章, 千倉書房	©山本晶・阿部誠		
論文	発信する顧客は優良顧客か?—サイトの訪 問動機とオンライン・ショップの購買履歴 データの分析—	単著	2005年	消費者行動研究, 11(1)・(2), 35-49	山本晶		
論文	顧客間インタラクションがサイト・ロイヤ ルティに与える影響—インターネット視聴 率データの分析—	単著	2006年	消費者行動研究, 12(1)・(2), 23-36	山本晶		
論文	クチコミのキーパーソンとその発見方法	単著	2008年	マーケティング・ジャーナル, 27(3), 125-131	山本晶		
論文	インフルエンサーの発見とクチコミの効 果～AIDEEES モデルの実証分析～	共著	2008年	マーケティング・ジャーナル, 28(1), 4-18.	©山本晶・片平秀貴		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本マーケティング・サイエンス学会							
日本消費者行動研究学会							
日本広告学会							
日本商業学会							
INFORMS							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	准教授	氏 名	吉田 由寛	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 体験を通して理解させるような工夫		2004年9月1日 ～2007年3月31日	抽象的な理論を、体験を通して理解させるように工夫した。例としては、授業中に「オークション」を行ったり、WEBを通して模擬的な「交渉」の実験を行ったり、実際に築地市場に見学に行ったりした。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「多変数関数における最適化問題」(自作の配布資料, 16ページ)		2004年9月1日	経済学部での「解析」のテキストとして作成した。経済経営研究科の「ミクロエコノミクス研究」での補助教材としても使用している。多くの図を用いて直感的に理解できるように工夫した。練習問題も掲載し、学生が自習できるように配慮した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Bertrand-Edgeworth Price Competition with Strictly Convex Cost Functions	単著	2005年	mimeo	Yoshihiro Yoshida		
論文	閉鎖社会の開放と社会規範の変化	単著	2007年	mimeo	吉田由寛		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経済学会							
American Economic Association							
国際学術雑誌レフェリー (5件)							

所 属	経済学部	職 名	講 師	氏 名	鈴木 恵美子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 語学と講義の組み合わせの工夫		2008年4月1日 ～7月31日	2年生の授業において次のような工夫をした。授業を2部構成とし、前半を文法・会話を中心とした語学、後半をスペインの文化についての講義にあてることでメリハリを持たせ、学生の集中力を持続させるように工夫した。語学部分では文法説明はごく簡単にし、クラスメイトと会話しながら自己表現できるようにする練習プリントを配布することで実践に重点を置いた。講義部分では、スペインの言語や文化の地域的多様性を眺めることを目的とした。音声・映像資料も使い、より理解を深められるよう配慮した。毎回コメントカードを記入させ、スペインの状況を日本の場合に引き寄せて考える機会をもてるようにした。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作のプリント		2008年7月14日	1年生の初習スペイン語の授業において次のような教材を作成した。語学は継続学習が効果的であることを考慮して、夏期休暇中に毎日少しでもスペイン語に触れる機会をもたせるためのプリントを前期末に配布した。カレンダー形式にし、1日の天気、出来事をメモ程度の簡単なスペイン語で記入させるようにした。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 東京外国語大学 21 世紀 COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」 会話モジュール 開発協力		2003年12月	多言語をベースとした e-learning 教材開発の一環として、スペイン語の会話モジュールの作成に協力した。「あいさつ」や「感謝」など基本的な 40 の機能について会話を作成し、ネイティブスピーカーによる実演場面を録画した。インターネット上で学習者は4つの角度(「ロールプレイ」、「音読」、「ディクテーション」、「コピーイング」)から目的に合わせて学べるようになっている。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	半島スペイン語の単純過去形と現在完了形—16 世紀の自伝体作品における使用を中心—	分担執筆	2004 年	くろしお出版 『スペイン語学論集：寺崎英樹教授受退官記念』, pp. 173-181	寺崎英樹教授受退官記念論文集刊行委員会(編)		
論文	植民地文書(16～18 世紀)における単純過去形と現在完了形	単著	2005 年	日本イスパニヤ学会, 『HISPANICA』, 49 号, pp. 67-82			
論文	HABER を含む経過時間表現と単純過去形・現在完了形(16・17 世紀を中心)	単著	2005 年	東京スペイン語学研究会, 『スペイン語学研究』, 20 号, pp. 85-103			
その他	西和中辞典(第2版)	分担執筆	2007 年	小学館	高垣敏博(監修)		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本イスパニヤ学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	経済学部	職 名	助 手	氏 名	伊藤 泰子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u> 経済学部教員の教材作成の補助・準備		2003年～現在	授業で使用する教材のコピー, 資料収集, 下調べ, パソコン入力等				
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
III 学会等及び社会における主な活動							

理 工 学 部

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	青木 正喜	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u> 大学院生に国際学会で発表するよう奨励している。		2005年~2007年	Masahiro Yasuno, Masayoshi Aoki: "Pedestrian Detection and racking in Far Infrared Images", Proceedings of 8th International IEEE Conference on Intelligent Transportation Systems (ITSC2005), pp. 131-136, 2005. 9. Yuki Wakabayashi, Masayoshi Aoki: "Traffic Flow Measurement Using Stereo Slit Camera", Proceedings of 8th International IEEE Conference on Intelligent Transportation Systems (ITSC2005), pp. 727-732, 2005. 9. Yasufumi Saeki, Masayoshi Aoki: "Driver monitoring using a far infrared camera", Proceedings of the IIEEJ Image Electronics and Visual Computind Workshop 2007. Noriya Toda, Masayoshi Aoki: "Driver's gaze detection", Proceedings of the IIEEJ Image Electronics and Visual Computind Workshop 2007.				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	遠赤外線カメラを用いた歩行者検出	共著	2005年	情報処理学会論文誌: コンピュータビジョン とイメージメディア, 47, No. SIG5 (CVIM13), 1-9	青木正喜・安田昇		
論文	ステレオスリットカメラを用いた車両形 状計測	共著	2005年	像電子学会誌, 34, 5, 628-635	若林悠機・青木正喜		
論文	2重スリットカメラを用いた車両検出	共著	2005年	画像電子学会誌34, 5, 620-627	片原俊司・青木正喜		
論文	Pedestrian Detection and racking in Far Infrared Images	共著	2005年	IEEE ITSC2005, 131-136	Masahiro Yasuno・ Masayoshi Aoki		
論文	Traffic Flow Measurement Using Stereo Slit Camera	共著	2005年	IEEE ITSC2005, 727-732	Yuki Wakabayashi・ Masayoshi Aoki		
III 学会等及び社会における主な活動							
画像電子学会 (会長)							
電子情報通信学会							
電気学会							
The Institute of Electrical and Electronics Engineers							
国土交通省 ASV (先進安全自動車) 推進検会 (座員)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	秋松 雅子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 英文和訳を避け、自分で作成した英問のワークシートを用いて、学生と一緒に考える演習形式の授業（学生に自ら記事を選ばせて、ワークシートを作成させることを最終課題にしている）		2003年～現在	基本的に、すぐ英和辞書で意味を調べてしまうのではなく、文脈や語形、品詞などを手がかりにして、大体の意味を考えさせ、同じ文章を何度も繰り返し読みながら、少しずつ内容を英語でそのまま理解させるような工夫をしている。特に、科学英語特講の授業（名称は変更したが、1995年開始）では、市販の教材ではなく、実際の科学関連記事をそのまま読めるようにするため、NatureやScienceなどの科学専門誌やTimeや英字新聞に掲載された科学関連の記事を扱い、ワークシートを作成して、演習形式で学生と一緒に英語で内容を考えていく。学生諸君からは、「英語に自信がついた」、「やる気が出た」、「内容が理系で興味もてた」、「大変だが集中できる授業」などの評価をいただいている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 理工系英語の新しい読み方（仮題）		2006年～現在	科学英語特講で使用するために作成した教材をまとめて、教科書・参考書（学生のみならず一般人も対象とした自習できる内容）として編集。当初、「Timeにみる科学の歴史」という題を設定していたが、コピー権使用料が高いため、内容をTimeに限らず、複数の科学関連雑誌も含めて記事を選定することに変更した。日本の科学の歴史をいくつかの時期に分けて、英語で科学を読みながら、日本の科学の発展、功績の歴史も同時に勉強できるような構成にする予定。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 理工学部新カリキュラムで、時代のニーズにあった新科目の企画・提案・実施		2004年10月～現在	理工学部発足に伴い、これまでの2年次必修科目の英語語彙III/IVを廃止して、テクニカル・コミュニケーションI/IIという新科目を企画、提案、実施している。科目の性質上、学科対応で内容を統一している。実施する前に、各学科を担当していただく先生方と数回ミーティングをして、内容を検討した。1年次には、国際教育センターが開講する科目を履修することになっていたため、2年次には、理工学部の学生に必要な理系の英語を（基礎として）勉強できる機会を残しておくことがこの科目を開講した目的である。コミュニケーションとは、オーラルに限らず、理系の学生にとって、将来必要となる文書作成や種々の文章を読み解く力もまたコミュニケーション力であるという観点からテクニカル・コミュニケーションという科目名をつけている。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌（書）・ページ数等	編者・著者名		
その他	Recent Media Studies in U.K.	単著	2007年	成蹊会学術教育研究助成報告書	秋松雅子		
III 学会等及び社会における主な活動							
社団法人日本時事英語学会会員							
大学英語教育学会会員							
「言語と人間」研究会会員							
外国語教育メディア学会会員							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	石郷岡 猛	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 授業中の小テスト実施による教育効果の改善		2003年4月1日 ～2007年3月31日	定期試験の他に、一学期に5回記述式の45分間の小テストを実施し、授業効果と学生の勉学意欲の向上に努めている。その成績は翌週の授業時間に一覧表として回覧し確認している。 また、科目によってはOCRカードによる回答方式を採用し、隔週で小テストを実施している。 成績の最終評価は定期試験の得点と小テストの平均点とを勘案して行っている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 エレクトロメカニクス実験指導書		2007年3月	エレクトロメカニクス実験Ⅱ及びⅢの実験指導書を作成した。特に、電気工学の素養が不十分な二年次生を対象としたエレクトロメカニクス実験Ⅱでは、記述の分かり易さに留意した。また、三年次生を対象としたエレクトロメカニクス実験Ⅲでは、専門性の高さに応じて記述を工夫した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 学園箱根寮における研究室夏期合宿		毎年実施	修士論文研究並びに卒業研究の中間発表を学園箱根寮において毎年8月に二泊三日で実施しており、研究の進捗状況の確認と今後の方針についてじっくりと時間を掛けて指導している。 また、当合宿においてはOBにも参加を呼びかけて、現役学生とOBとの情報交換・懇親にも役立っている。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	電力用交流の歴史 波形,周波数,相数の変遷	共著	2005年	電気学会誌, Vol. 125, No. 7, pp. 421-424	©山本充義, 石郷岡猛		
論文	Experimental Study on Effect of In-Rush Current of Superconducting Transformer	共著	2006年	IEEE Transactions on Applied Superconductivity, Vol. 16, No. 2, pp. 1473-1476	©Takeshi Ishigohka, Kenji Uno, and Sakio Nishimiya		
論文	Protection of LHD coils by intelligent observation of voltage signals	共著	2006年	Fusion Engineering and Design, Volume 81, Issues 20-22, pp. 2567-2570	©T. Ishigohka, T. Mito, S. Imagawa, N. Yanagi, H. Sekiguchi and S. Yamada		
論文	Quench Characteristic of Superconducting Transformer by Inrush Current	共著	2007年	IEEE Transactions on Applied Superconductivity, Vol. 17, No. 2, pp. 1931-1934	©S. Nishimiya, A. Ninomiya, T. Ishigohka, K. Arai		
論文	"Tolerance Current" of Bi-2223/Ag Coil	共著	2007年	IEEE Transactions on Applied Superconductivity, Vol. 17, No. 2, pp. 1611-1614	©H. Matsuura, A. Ninomiya, T. Ishigohka		
III 学会等及び社会における主な活動							
電気学会 超電導電力応用機器技術委員会委員							
電気学会 超電導応用機器設計基礎技術調査専門委員会委員							
低温工学協会 超電導応用研究会運営委員							
IEEE 会員							
新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO) ピアレビュー(評価委員)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	伊藤 郁夫	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) リメディアル教育の実施		2003年4月1日	2003年度より、工学部(2005年度より理工学部)全入学者を対象として物理プレースメントテストの責任者として計画の立案、問題作成、実施の全てに関わり、またそれに基づいたクラス分け作業及び授業計画の策定を行った。さらに、高等学校での物理未履修者を対象とした週3コマクラスを担当し、リメディアル教育を推進した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「Introduction to Mechanics」		2003年4月1日	高等学校での物理学未履修者向けに書いた導入用教科書。特に、力のつりあい、運動の記述、運動の法則について、例題も提示しながら、わかりやすい記述をこころがけた。この教科書は物理未履修者クラス(週3コマ)での「力学」の授業で使用された。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 文系学生向けの教養実験授業の導入		2004年4月1日	とくく教養では座学になりがちな文系学部における自然科学の授業において(文学部「文系のための科学A」)、学生実験のテーマを企画立案し、これを授業の中で実践した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	GLC Project	共著	2003年	KEK report 2003-7	ACFA, JHEPC, KEK		
論文	電子光子衝突における励起 Majorana ニュートリノ	単著	2007年	成蹊大学理工学部	伊藤郁夫		
翻訳	楽しめる物理問題200選	共著	2003年	朝倉書店	近重悠一、伊藤郁夫、 加藤正昭		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本物理学会							
American Physical Society							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	岩 崎 学	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 授業支援システム IT's class. の活用		2006年4月1日～現在	授業支援システム IT's class. を全ての授業、演習、卒研及び大学院のセミナーなどで活用し、演習問題への解答などの提示、レポートの提出、小テストの実施などを行っている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 岩崎 学 (2007) 確率・統計の基礎. 東京図書		2007年4月17日	2年次開講科目「確率論」及び「データ解析法」で使用するため、これまでの授業の内容をコンパクトにまとめて出版し、2007年度以降授業のテキストとして用いている。学生には予習・復習を強く要請している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 各大学における ICT 教育の情報収集		2006年4月1日～現在	学園情報センター長を併任したことに伴い、情報教育に関するシンポジウムなどに参加し、情報収集に努めている。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	確率・統計の基礎	単著	2006年	東京図書	岩崎学		
著書	統計的データ解析入門 単回帰分析	単著	2006年	東京図書	岩崎学		
著書	統計的データ解析入門 実験計画法	単著	2006年	東京図書	岩崎学		
論文	Less Conservative Distribution-Free Confidence Intervals and Tests for the Median	単著	2006年	Japanese Journal of Biometrics, 26, 2, 65-80	Iwasaki, M.		
論文	処置前後研究における平均への回帰とその周辺	共著	2007年	日本統計学会誌シリーズJ, 36, 2, 131-145.	岩崎学・河田祐一		
III 学会等及び社会における主な活動							
統計関連学会連合(理事, 連合大会運営委員会副委員長)							
応用統計学会(監事, 評議員)							
日本計量生物学会(理事, 評議員)							
日本行動計量学会(理事, 和文誌副編集長, 2008年度大会実行委員長)							
日本計算機統計学会(評議員)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	上田 徹	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 応用オペレーションズリサーチ		2007年9月27日 ～2008年1月10日	オペレーションズリサーチの様々な手法は手計算で済ませられるものはほとんど無い ためパソコンを使った授業とすることとし、助手の協力の下で毎回練習問題を解かせた。 レポート提出は時間内に限定せず、時間外での作成も認め、問題によっては要求条件が 完全に満たされるまで再提出させた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「オペレーションズ・マネージメント」		2006年4月15日	前期の「オペレーションズリサーチ」と後期の「応用オペレーションズリサーチ」の 教科書である。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	あたらしい情報数学	単著	2004年	牧野書店・151ページ	上田徹		
著書	オペレーションズ・マネージメント	単著	2006年	牧野書店・251ページ	上田徹		
論文	Estimation of Firms Efficiencies Using a Kalman Filter and Stochastic Efficiency Model	共著	2005年	JORSJ, Vol. 48, No. 4, pp. 308-317	T. Ueda and K. Hoshino		
論文	ハンドボールへのマルコフモデルの適用	共著	2006年	オペレーションズ・リサーチ, Vol. 51, No. 6, pp. 340-345	上田徹, 佐藤啓, 廣津信義		
論文	サッカー選手の DEA の視点からの評価	共著	2006年	オペレーションズ・リサーチ, Vol. 51, No. 10, pp. 655-661	廣津信義, 秋山大輔, 上田徹		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本オペレーションズリサーチ学会代議員・フェロー・表彰委員							
日本経営工学会							
電子情報通信学会							
日本統計学会							
日本行動計量学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	瓜生 芳久	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	ファジイ理論を用いた大型ヘリカル装置 超電導コイルシステムのクエンチ検出	共著	2005年	低温工学会, 低温工学 Vol. 40, No. 3	◎石郷碓猛, 二ノ宮晃, 瓜生芳久 他		
論文	A shaft-torsional phenomenon of customer's gas turbine generation system	共著	2006年	Proceedings of UPEC2006 Newcastle upon Tyne, U.K.	◎Masahiro Komatsu, Hiroyuki Iki, Yoshihisa Uriu 他		
論文	産業用電力系統への適用を考慮した系統 解析ツールと自家用ガスタービンモデル の開発	共著	2007年	電気学会, 平成19年電気学会電力エネルギー 部門大会論文集	◎小松正寛, 壺岐浩幸, 瓜生芳久 他		
論文	The Development of A Model of The Industrial Gas Turbine Generator on The Analysis Tool for The Power System Dynamics	共著	2007年	Proceedings of UPEC2007 Brighton, U.K.	◎Masahiro Komatsu, Hiroyuki Iki, Yoshihisa Uriu 他		
論文	離散型無効電力調整器群の効率運用を目的 とした動的最適潮流計算法	共著	2007年	電気設備学会・電気設備学会誌 Vol. 27 No. 9	◎壺岐浩幸, 瓜生芳久 他		
III 学会等及び社会における主な活動							
2002年度・2003年度: 電気学会, 電力・エネルギー部門, 副部門長							
2000年度・2001年度: 電気学会, 電力・エネルギー部門, 編集担当役員							
電気学会, 1974年より学生会員, 1978より正会員, 2005年より上級会員							
IEEE, 1979年より正会員							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	大倉 元宏	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) フレッシュマンゼミ(理工学部1年必修)におけるグループワーク		2007年4月～7月	12名の受講生を3名ずつのグループにわけ、多関節ロボットを使って、アプリケーションシステムを考案、開発させ、成果を全員の前でプレゼンテーションさせた。実機を使うので、臨場感があり、学生は高いモチベーションを保って授業に臨んだ。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「人間工学の百科事典」		2005年3月	人間工学にかかわる内容をほぼ網羅した百科事典としてはわが国最初の書物で、理工学部の選択科目「人間工学Ⅰ・Ⅱ」の参考書の一つとなる。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 全学部対象の総合教育科目の実施に参画し、時代のニーズをとらえた話題を提供した。		2007年10月12日～26日	全学部対象の総合教育科目「現代を生きる(身の回りの科学)」の実施に参画し、バリアフリー技術について文系学生にもわかりやすく講義した。我が国は高度高齢化社会に急速で向かっており、さまざまなバリアフリー技術が開発、実用化されているが、真のバリアフリー技術はユーザの特性にマッチしたものでなければならないことを強調した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	人間工学の百科事典	分担執筆	2005年	丸善	大久保堯夫他編		
論文	視覚障害者用道路横断帯の標準的敷設法に関する研究(2)	共著	2004年	労働科学, 80, 4, 160-170	大倉元宏, 小川洋, 古川俊一郎, 田内雅規, 北野正夫		
論文	CPSI(蓄積的疲労徴候インデックス)回答データの入力方法に関する研究	共著	2005年	人間工学, 41, 3, 161-166	渡邊真利, 池上敦子, 大倉元宏		
論文	周囲音が視覚遮断直進歩行に及ぼす影響	共著	2006年	人間工学, 42, 2, 119-125	大倉元宏, 三浦崇路, 富永友樹, 丸山雄大, 池上敦子		
その他	視覚障害者に対する化学品の危険有害性情報の伝達に関する調査・研究, GHSの分類技術とラベル理解度に関する調査研究	分担執筆	2006年	厚生労働科学研究費補助金, 労働安全衛生総合研究事業, 平成16年度～平成17年度総合研究報告書	大倉元宏 (主任研究者: 城内博)		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本人間工学会(評議員, 編集委員)							
日本交通科学協議会(理事)							
日本経営工学会							
日本心理学会							
日本応用心理学会							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	小川 隆申	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 机上でできる実験を交えた流体力学		2005年度～現在	<p>学術的な記述の多い流体力学を最近の大学生に教科書だけで理解させたり興味を抱かせたりするのは困難になってきている。そこで、教壇上でできる流体力学の実験をいくつか考案し、教科書による理論の説明と交えながら講義中に実演している。具体的には、マノメータ、ベルヌーイの定理、管摩擦、浮力などの実験である。</p>				
2.作成した教科書、教材、参考書 「基礎から学ぶ流体力学」		2007年9月20日	<p>「流体力学 I」、「同 II」に用いる教科書を執筆した。第一の特徴は流体力学の初学者にも理解しやすいよう、高校時代の力学から始め、その類推によって流体力学の本質を把握できるような構成にした。また、流体力学の現象を別の身近な現象に例えることによって理解を深めるような内容を盛り込んだ。</p>				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 学生主導型プロジェクト研究		2006年度～現在	<p>学生主導型プロジェクト研究として、複数の研究室にまたがる学生たちがチームを組み、「全日本学生フォーミュラ大会」に参加させている。これは学生自ら小型競技自動車を設計、製作、操作する自動車競技である。その過程において学生たちは講義で学んだ流体力学をはじめとする学問を設計に応用し、演習で学んだ製作技術で実際に車を完成させてゆく。これを通して学生たちは、理論と実践、さらにはプロジェクトマネージメントを体験を通して身につけてゆき、高い教育効果を上げている。</p>				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	「基礎から学ぶ流体力学」	共著	2007年	オーム社	飯田明由, 小川隆申, 武居昌宏		
論文	水素スタンドの安全技術	共著	2006年	日本AEM学会誌, Vol.14, No.3, pp.35-41	稲葉純一他及び 小川 隆申 (8 番目)		
論文	Numerical Simulations of Flame Propagation and DDT in Obstructed Channels Filled with Hydrogen-Air Mixture	共著	2007年	Proceedings of the Combustion Institute 31, pp.2463-2471	V. N. Gamezo, T. Ogawa, E. S. Oran		
論文	Flux-Corrected Transport Algorithms for an Adaptively Refined Cartesian Mesh	共著	2007年	AIAA Journal, Vol. 45, No. 1, pp.200-213	T. Ogawa and E. S. Oran		
その他	Deagration-to-Detonation Transition in Premixed H ₂ -Air in Channels with Obstacles	共著	2007年	AIAA paper 2007-1172	V. N. Gamezo, T. Ogawa, E. S. Oran		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本機械学会 (日本機械学会論文集出版部会 校閲委員, 関東支部宿議員)							
流体力学会 (学会誌「なが対」編集委員)							
日本航空宇宙学会							
日本火災学会							
米航空宇宙学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	小口 喜美夫	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 学生に体験させるような工夫 (実体験)		2007 年度	「情報通信」の授業において、学生の理解度をより深めるために ・ケーブルの模型等の現物を触らせ、実感する ・デモ装置を見学することで、学修した内容がどのように利用されているかを理解する。 ・学生個々に質疑応答かけ、回答を試みることにより自分の頭で「何故か」を考える、 などを実践している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作のプリント等配布資料		2007 年度	情報通信、情報通信網、情報伝送論、光通信工学特論の授業において、図表類を多く盛り込んだ自作のプリント等を配布資料として作成				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	Proceedings of SPIE Volume: 5281 Optical Transmission, Switching, and Subsystems, ISBN 0-8194-5176-2	編著	2004 年	SPIE	©Cedric F. Lam, Chongcheng Fan, Norbert Hanik, Kimio Oguchi		
著書	Proceedings of SPIE Volume: 5625 Optical Transmission, Switching, and Subsystems II, ISBN 0-8194-5579-2	編著	2005 年	SPIE	©Cedric F. Lam, Wanyi Gu, Norbert Hanik, Kimio Oguchi		
論文	“SD digital cinema distribution over a fast long-distance network”	共著	2004 年	KOSBE Journal of Broadcast Engineering, vol.9, no.2, pp.119-130	©T. Yamaguchi, D. Shirai, M. Nomura, K. Shirakawa, T. Fujii, T. Fujii, K. Oguchi		
論文	“Next-generation home networking and relevant technologies”	共著	2005 年	Proc. SPIE Vol. 5626, Network Architectures, Management, and Applications II, pp. 163-168	©K. Oguchi, K. Tojo, T. Okodo, Y. Tsuchida, T. Yamaguchi, and T. Murooka		
論文	“Next generation convergence home network”	単著	2006 年	Proc. of Next generation photonics and media technologies, pp.23-28	K. Oguchi		
III 学会等及び社会における主な活動							
独立行政法人情報通信研究機構 (NICT) 民間基盤技術研究促進制度 評価専門委員							
特定非営利活動法人デジタルシネマ・コンソーシアム 幹事							
電子情報通信学会 エレクトロニクスソサイエティ 和文論文誌編集委員会 委員長							
電子情報通信学会 著作権委員会 委員							
OptoElectronics and Communication Conference (OECC/I00C2007) General Affair Committee Chair							

所 属	理工学部	職 名		授 業		氏 名	甲斐 宗徳	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動									
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要						
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 1年生前期科目「フレッシュマンゼミ」におけるプログラミング初学者への演習型講義		2005年4月11日 ～2005年7月18日	毎年10名～12名に新入生がグループ分けされ、その1グループを担当する科目がフレッシュマンゼミである。ここでは、今後学科で始まるプログラミング関係の講義及び実験に先立って、プログラムを書きながらそのプログラムの動きが自然に思い浮かべられるようにするために、特別な教材を用いて演習形式で進めている。その教材は Nigari というもので、プログラムの動作が丸形や三角といった簡単なキャラクタの動きとしてすぐに視覚的に確認することができる。それらを使用する変数 x, y といったものがキャラクタの座標を示す属性となっているためにプログラムの動きが直接キャラクタの動きに密接しているのだから、それだけでなく、オブジェクト指向的な考え方が直感的にとらえられるようになっている。学生 1 学期のこの演習型講義を通じてプログラミングを体験し、最後に自分なりのストーリーでアニメーションを組み立て、そのプレゼンテーションを行う。						
2.作成した教科書,教材,参考書 2年生後期科目「デジタル回路II」における Power Point 教材		2006年9月21日 ～2007年1月11日	デジタル回路IIは制御論理論回路設計の基本を理解するための科目である。AND ゲートやOR ゲートといった基本論理素子を用いてどのように「記号」を実現するかということから始まり、各種トリップフロップの動作を Power Point を用いて作成した教材でアニメーションを交えて理解する。黒板上の説明だけでは分かりにくい信号の伝達の様子がアニメーションで表示されるため、信号の動きが非常に分かりやすくなるように工夫してある。また、カウンタ回路を題材にして、比較的複雑な制御論理論回路の設計手順も Power Point の資料を追っていくことで分かるように構成されている。またこの教材は Web ページでも閲覧できるようにした。						
3.教育方法・教育実践に関する発表,講演等 「プログラミング環境 Nigari - 初学者が Java を習うまでの案内役」という題目で情報処理学会論文誌に発表		2004年7月	初学者がプログラミングを学習する場合、一般に、最初は簡単な概念を学び、次第に高度な概念を習得するという順序を踏む。学習環境もその順序に沿ったものが用意できるとよい。最初は難しい概念を知らなくても使える、取り組み易い言語や環境を与え、学習が進むに従って、高度な概念も扱える Java 等の実用的な言語へ移行させるとよい。これによって、初学者にプログラミングに対する興味をもたせ、学習意欲を継続させることが可能であると考えられる。そこで、プログラミング学習の導入部において用いるのに適した言語 Nigari とその環境を開発した。Nigari の言語仕様は Java のそれを簡素化したものになっており、クラスやメソッドの宣言など、初学者にとって理解が難しいものを書く必要がない。一方、基本的な制御構造などは Java とほとんど同じ仕様である。Nigari の実行環境は、オブジェクトを自動的に可視化する機能をもつ。これによって、学習者のプログラミングへの意欲を向上させるだけでなく、オブジェクトの概念をも理解させることができる。						
4.その他教育活動上特記すべき事項 「Web 技術を用いたプログラミング学習環境の構築」という題目で成蹊大学工学研究報告に発表		2005年6月	プログラミングの学習は、ソースプログラムを書いて実行するまでを実際に行わないでは技術の習得がつかない。プログラムでは、同じ実行結果を得るのに可視化の記述も可能であるため、多くの e-learning システムが採用している選択式や、記入した解答が正解と完全一致する方式がほとんど考えられる。プログラムとして正しい論理構造になっていて、正しい結果を与えるプログラムであれば正解と判定する方法が必要である。そこで、本研究では学習者が穴埋めしたり作成したりしたプログラムについて、模範解答と完全一致で正解または不正解の判定をするのではなく、コンパイル及び実行して得られた出力結果によって正解を判断し、学習者に自由なプログラミングを可能にさせるようなプログラミング学習ソフトの開発を行った。サーバ側でコンパイル及び実行を行うと、同時学習者数が多くなるにつれてサーバにかかる負担が大きくなってしまふ。それを回避するため、コンパイル及び実行は、学習者が使用しているクライアント側で行うようにする。また問題を出題する教員にとっても便利ように、問題作成支援、配点決定支援、自動採点、学習者管理などの機能も持たせた。本システムは Java, C, C++ のプログラミングに対応でき、使用する学習者に基礎的なプログラミング能力を身につけることを目的としており、学科のプログラミング関連科目の自習用として、演習機能、レポート提出機能、シナリオ型試験機能を順次付加し、現在も開発作業を続けている。						
II 研究活動									
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名				
著書	PAT 認定試験 2 級 3 級標準教科書	共監修	2004年	オーム社	太田幸雄・甲斐宗徳・藤田真一・本多弘樹・武次護				
論文	プログラミング環境 Nigari - 初学者が Java を習うまでの案内役	共著	2004年	情報処理学会論文誌 プログラミング, Vol. 45, No. SIG9 (PRO22), pp. 25-46	長嶺山・甲斐宗徳・川合晶・日野孝昭・前島真一・鏡海彦				
論文	Web 技術を用いたプログラミング学習環境の構築	共著	2005年	成蹊大学理工学研究報告, Vol. 42, No. 1, pp. 51-55	井ノ本喜彦・甲斐宗徳				
論文	C 言語自動並列化トランスレータの開発	共著	2005年	成蹊大学理工学研究報告, Vol. 42, No. 1, pp. 41-49	美濃本一浩・甲斐宗徳				
論文	Implementation And Evaluation of Autonomic Distributed Processing System Using Mobile Agent	共著	2005年	Proc. of IEEE Pacific Rim Conference on Communications, Computers and Signal Processing (PACRIM' 05), pp. 237-240	Ryusuke Sasaki, Masatoshi Takubo, Munenori Kai				
III 学会等及び社会における主な活動									
電子情報通信学会									
電気学会 (JABEE 審査実行部会委員)									
情報処理学会									
Institute of Electrical and Electronics Engineers									
(社) 電子情報技術産業協会 (JEITA) 計算機システム技術専門委員会幹事									

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教 授	氏 名	加藤 明良	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	有機反応のメカニズム	単著	2004年	三共出版	加藤明良		
論文	Chemistry and Biochemistry of Insulin-Mimetic Vanadium and Zinc Complexes. Trial for Treatment of Diabetes Mellitus	共著	2006年	Bulletine of the Chemical Society of Japan, 79(11), 1645-1664	Sakurai H., Katoh A., Yoshikawa Y.		
論文	Improvement of Diabetes, Obesity and Hypertension in Type 2 Diabetic KKAY Mice by Bis(allixinato)oxovanadium(IV) Complex	共著	2006年	Biochemical & Biophysical Research Communications, 345, 945-950	Adachi Y., Yoshikawa Y., Yoshida J., Kodera Y., Katoh A., Sakurai H.		
論文	Bis(allixinato)VO Complex is a Potent Antidiabetic Agent: Studies on Structure-Activity Relationship for a Hydroxypyrrone-VO	共著	2006年	Journal of Medicinal Chemistry, 49(11), 3251-3256	Adachi Y., Yoshida J., Kodera Y., Katoh A., Takada J., Sakurai H.		
論文	Unusual Temperature Dependence of Enantioselectivity in Asymmetric Reductions by Chiral NADH Models	共著	2006年	Organic Letters, 8(10), 2067-2070	Saito R., Naruse S., Takano K., Fukuda K., Katoh A., Inoue Y.		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本化学会							
有機合成化学協会							
アメリカ化学会							
日本薬学会							
日本油学会							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	神田 芳文	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 複数教員の連携による講義と実験をセットにした授業運営		2007年4月1日 ～2007年7月31日	学科の最重要科目の一つであるC++プログラミング導入教育において、講義科目と実験科目をリンクさせることにより効率的にプログラミング能力が修得できるように工夫した上で、少人数教育により教育効果を高め、かつ質の高い教育を均質化して実践するため、新入生170名を9クラスに分け、各クラスに担当教員を配置し、統一した授業計画、シラバス、教材を全教員協議のうえ策定し、かつ毎回の授業終了後に教員相互で情報交換の場を設け、学習効果や教育上の問題点を各教員で共有できる状況の下で授業及び学生の成績評価を行った。				
2.作成した教科書、教材、参考書 教科書とマッチした自己学習型実習用教材		2006年9月26日 ～2007年1月31日 2007年9月25日 ～2008年1月31日	数値計算法においては、単に理論の理解だけではその学習目的を達成し得ない。アルゴリズムの十分な理解とそのプログラミングが不可欠である。理論的な学習内容の適切な教科書でプログラミングによる理論の実践までをきちんと述べたものは皆無である。そこで、実際に受講する学生のプログラミング能力と利用できる設備を考慮した自己学習型の実習用教材を独自に作成して利用することにより教育効果を高めた。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	軟式野球ボールの反発特性	共著	2003年	スポーツ工学シンポジウム2003 講演論文集, No. 03-12, pp. 119-124	◎神田芳文, 長尾裕史		
論文	Simulation of Oblique Impact of a Tennis Ball on a Rigid Flat Surface	単著	2005年	The Impact of Technology on Sport, ASTA, pp. 459-465	◎Y. Kanda		
論文	軟式野球バットの剛性が反発係数に与える影響	共著	2006年	スポーツ工学シンポジウム2006 講演論文集, No. 06-35, pp. 94-97	◎神田芳文, 鳴尾丈司, 木田敏彰		
論文	軟式野球ボールとバットの衝突シミュレーション	共著	2007年	日本機械学会論文集(C編), 73巻729 号, pp. 1307-1313	◎神田芳文, 鳴尾丈司		
論文	野球のバットとボールの衝突実験映像の自動画像処理	単著	2007年	スポーツ工学シンポジウム2007 講演論文集, No. 07-24, pp. 97-102	◎神田芳文		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本機械学会							
日本シミュレーション学会							
日本船舶海洋工学会							
International Sports Engineering Association							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	工藤 正博	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 台湾国立精華大学化学科における客員講師として講義を行った。		2008年3月5日～6日	講義テーマは“High Sensitivity Analysis of Organic and Bio Materials by Means of TOF-SIMS”であった。また Professor Y. C. Ling 教授の研究室セミナーにおいて“TOF-SIMS with Cluster Primary Ion Sources, …Trends and Future Developments”のタイトルで講演した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	“Proteins at Solid-liquid Interfaces”	共著	2006年	Springer	S. Aoyagi, M. Kudo		
著書	表面物性工学ハンドブック 二次イオン質量分析法 (SIMS)	単著	2007年	丸善	工藤正博 (分担)		
論文	Au クラスター一次イオン源を用いた TOF-SIMS 測定における二次イオン収率増大効果	共著	2006年	表面科学, Vol. 27, No. 7, 518-522	工藤正博, 他5名		
論文	Structure analysis of immobilized-bovine serum albumin by means of TOF-SIMS	共著	2006年	Analytical Biochemistry	M. Kudo, 他6名		
論文	Evaluation of secondary ion yield enhancement from polymer material by using TOF-SIMS equipped with a gold cluster ion source	共著	2006年	Appl. Surface Scie., Vol 252, 6547-6549	M. Kudo, 他5名		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本表面科学会 (理事)							
二次イオン質量分析国際会議国際委員会日本代表委員							
日本学術振興会第141委員会 (SIMS 新技術WG 座長)							
日本化学会							
日本分析化学会							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	窪田 悟	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 企業の第一線の技術者を招きNHKプロジェクトX風の講義を担当科目に導入		2007年1月12日, 2007年1月19日, 2008年1月11日, 2008年1月18日	2006年度より工業会(社)電子情報技術産業協会(JEITA)の協力を得て、学生のテクノロジーへの興味を喚起するために、企業で活躍する第一線の技術者に最先端の技術を担当科目の中で学生に対して分かりやすく解説してもらう活動を展開している。2006年度及び2007年度はシャープ株式会社と株式会社日立製作所の研究者にそれぞれ1コマずつ液晶ディスプレイとプラズマディスプレイの開発の歴史、表示原理、市場動向、今後の展望などについて解説いただいた。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 成蹊大学公開講座 生活を支え、豊かにする理工学と先端技術 第2回 情報社会の窓 電子ディスプレイの生態学 ー利用者中心のディスプレイ技術への視点ー		2005年6月4日	液晶ディスプレイを中心とする最新のディスプレイ技術の開発の経緯と、それらの技術が生活場面に浸透していく上での諸問題の改善プロセスについて企業との共同研究の成果をふまえて解説した。そして、ディスプレイ技術を例として、技術と人間生活とのかわり合いの側面について視角を広げて論考した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	ディスプレイの設計, 人間工学の百科事典	分担執筆	2005年	丸善	窪田悟		
論文	Measurement of light incident on mobile displays in various environments	共著	2006年	Journal of the Society for Information Display, Vol. 14, No. 11, pp. 999-1002	© Kubota, S., Okada, S., Sakai, E., and Fujioaka, T		
論文	家庭におけるテレビの観視条件	共著	2006年	映像情報メディア学会誌, 60巻, 4号, pp. 597-603	© 窪田悟, 嶋田淳, 岡田想, 中村芳知, 城戸恵美子		
論文	子供のテレビ視聴距離	共著	2007年	映像情報メディア学会誌, 61巻, 2号, pp. 234-236	© 窪田悟, 山川正樹, 中村芳知, 野本弘平, 城戸恵美子		
論文	有機ELディスプレイの画質評価	単著	2008年	映像情報メディア学会誌, 62巻, 1号, pp. 122-125	窪田悟		
III 学会等及び社会における主な活動							
映像情報メディア学会							
照明学会							
Society for information display							
液晶学会							
人間工学会(評議員)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	栗林 伸一	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) シミュレーションツールを用いた情報通信ネットワーク 演習		2006年4月～現在	情報通信ネットワークの講義内容の理解度を向上させるためには、実際のネットワーク装置を操作・使用し、講義で学んだ機能を体験することが望ましい。しかし、1クラス60名～70名のクラスでそれを実施することは困難である。そのため、シミュレーションツール(OPNET)を使用し、実際の情報通信ネットワークをパソコン上で擬似しながらも実際のネットワークで実現される機能を体験できるシステムならびにテキストを作成した。学生に対するアンケートも毎回実施しており、その結果からも講義で学んだ内容の理解向上に大変役立っている。また、類似の取り組みを実施している他大学との情報交換も実施し、内容のレベル向上にも取り組んでいる。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 「基本プログラミング・基本プログラミング実験テキスト」2007年度版		2007年4月	理工学部・情報科学科の専門必須科目である”基本プログラミング・基本プログラミング実験”のテキストであり、配列機能ならびにそれに関連する例題の追加を共同講義担当者と共に作成した。さらに、学生にできる限りわかりやすい表現となるよう見直しも実施し、テキストに反映させた。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 情報通信ネットワーク分野関連講義における最新技術動 向の紹介		2005年4月～現在	情報通信ネットワーク分野は技術革新が早く、技術動向ならびに世の中の動向を常に把握しておくことが大変重要である。そのため、毎週講義の中で最新動向を最新トピックスとして学生に紹介している。その際、背景についても説明し、理解を深める努力を実施している。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Capacity dimensioning of VPN Access links for elastic traffic in the hose model	共著	2004年	IEICE Trans. Commun., Vol. E87-B, No. 1, pp. 132-141, 2004	© K. Ishibashi, M. Ishizuka, M. Aida and S. Kuribayashi		
論文	Measurement-based evaluation of TCP throughput	共著	2004年	IEICE Trans. Commun., Vol. E87-B, No. 12, pp. 3637-3649	© M. Ishizuka, M. Aida and S. Kuribayashi		
論文	Efficient ID transmission method in RFID networks	共著	2006年	APCC2006	© S. Kuribayashi, S. Tsumura and M. Tanabe		
論文	Optimal LSP selection method in MPLS networks	共著	2007年	Pacrim07	© S. Kuribayashi and S. Tsumura		
論文	Delayed resource allocation method for a joint multiple resource management system	共著	2007年	APCC2007	© S. Tsumura and S. Kuribayashi		
III 学会等及び社会における主な活動							
電子情報通信学会							
情報処理学会							
IEEE (Communication Society)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	小島 紀徳	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 大学教育高度化推進特別経費, 教育・学習方法等改善支援 経費-教育・学習方法等の改善, 「エコテクノロジー開発 のための化学工学的基礎・装置・システム研究」採択, 実施		2005 年度 ～2008 年度	科学の進歩に伴い生み出された諸技術は, 様々な, 特に環境・資源問題に大きなひずみをもたらし, 諸問題を生じせしめている。これらの問題は, 「工学」が, 単に「新規性」を追求するだけでは決して解決することはなく, 俯瞰的思考の下で「従来技術」をも含め「目的に即して組み合わせ」ることにより, 初めて糸口が見えるものである。このような観点からの教育・研究を, 「化学」に対応する「工学」として戦後作り上げられた「化学工学」を中心として実施することが目的である。 「化学工学」は, 石油化学導入の際, 従来の化学に欠落していた因子を再構築した学問であるが, 昭和40年代の公害問題解決に向けての大きな技術的原動力ともなってきた。現在, エネルギー資源を含むさまざまな地球環境問題がクローズアップされる中, 化学工学の俯瞰性を用い, 環境(すなわち広義な人類生存)をまず第一義におき, これに向け大学や企業でどのような基礎研究を実施してゆくべきかを明らかにしてゆくとともに, その過程を学生とともに考えながら進めてゆくものである。 有害物質やCO ₂ などの除去・分解・無害化・隔離・固定, ごみ問題などやエネルギー技術(太陽エネルギー, バイオマス, 化石燃料の利用技術及びそれに関するガス化装置解析や速度測定など), 製造プロセスにおける環境影響が懸念される例えば材料製造プロセス(半導体・液晶などの汎用材料製造の高効率化, 環境・エネルギーに関わる材料としての有効利用など)やリサイクル・分離プロセスなども対象とし, 包括的俯瞰的に概観し, 対策の是非を考え, かつ研究対象ともする。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 化学工学会編(小島紀徳・曾根邦彦責任編集) 「環境プロセスエンジニアリング」, 丸善, 174p., 2006. 1. 30		2006年1月30日	本学非常勤講師である, 曾根氏, 田原氏他と執筆。環境改善のための, プロセスエンジニアリング事例を概説。この教科書は, 現在, 同じ名称の講義で使用している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 化学工学会関東支部主催「基礎化学工学講習会」		2003年11月 2004年11月 2005年11月 2006年11月 2007年11月	第8回 第9回 第10回 第11回 第12回 企業の若手あるいは異分野の技術者向けに, 化学工学の基礎を講習。反応工学を担当。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	「エネルギー・環境キーワード辞典」日本 エネルギー学会編(編集委員長)	共編著	2005年	コロナ社	小島紀徳		
論文	加圧流動層を用いた石炭チャーのCO ₂ ガ ス化速度の測定	共著	2005年	化学工学論文集, 3, 466-469	小島紀徳(1番目)他5名		
論文	人工的団粒形成土壌の物理性評価	共著	2005年	農業土木学会論文集, 73, 231-236	小島紀徳(1番目)他4名		
論文	テトラメトキシシランからトリメトキシ シランへの気相転換	共著	2005年	化学工学論文集, 31, 115-117	小島紀徳(1番目)他4名		
論文	Gas Phase Production of Fine SiO ₂ Particles from Tetramethoxysilane	共著	2006年	Studies in Surface Science and Catalysis, 159, 733-736	Kojima, T. (1番目)他6名		
III 学会等及び社会における主な活動							
化学工学会(庶務理事, リエゾン委員, 論文誌エディター, 夢化学-21委員会委員長, 代議員, 環境部会長)							
日本エネルギー学会(会誌編集委員長, 理事)							
日本沙漠学会(副会長, 理事, 評議員)							
資源素材学会							
日本海水学会(評議員, 編集委員)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	近 匡	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 視覚に訴えるような工夫 (パワーポイント・スライド・ビデオ教材の使用)		2005年4月1日～現在	教材ビデオを視聴させたり, パワーポイントを使った視覚情報を含む授業をおこなったり, java アプレットによるシミュレーション結果を提示・解説している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作のプリント等配布資料		2005年4月1日～現在	パソコン実習科目におけるマニュアルを作成・配布している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	New Results from GRACE/SUSY at 1-Loop	共著	2006年	Nuc1.Phys.Proc.Suppl.157 157-161	J. Fujimoto, T. Ishikawa, M. Jimbo, T. Keneko, T. Kon, Y. Kurihara, M. Kuroda, Y. Shimizu		
論文	Two-body and three-body decays of charginos in one-loop order in the MSSM	共著	2007年	Phys.Rev.D75:113002	J. Fujimoto, T. shikawa, Y. Kurihara, M. Jimbo, T. Kon and M. Kuroda		
論文	素粒子反応の自動化 ―GRACE システムの現状―	共著	2007年	日本物理学会誌 Vol.62, No.5, 2007, 320-328	栗原良将, 安井良彰, 近匡, 加藤潔		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本物理学会							
アメリカ物理学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	齋藤 洋司	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) プリント作成・配布 教育用ビデオ教材の利用 実物の提示 演習の実施		2003年度～現在	集積回路工学・電子物性工学・半導体基礎工学において使用				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 教科書「電気回路の講義と演習」の執筆		2007年4月	電気回路において一部使用している。例題を多く取り入れて理解を深める。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	プラズマレスドライエッチングによるシリコン表面処理とその光・電気変換素子作製プロセスへの応用	単著	2007年	Biomedical Thermology, vol. 26, No. 3	齋藤洋司		
論文	大気圧リモートプラズマ表面処理を用いた濡れ性改善効果のガラス基板依存性	共著	2005年	材料の科学と工学 vol. 42, No. 4, pp. 229-231	齋藤洋司, 平山拓, 須崎三徳, 津田欣範		
論文	A Study on the Reaction Between Chlorine Trifluoride Gas and Glass-Like Carbon	共著	2005年	Applied Surface Science vol. 240/1-4 pp. 381-387	Y. Saito, T. Nishizawa, and M. Hamaguchi		
論文	Thermal Stability of Lanthanum Oxynitride Ultrathin Films Deposited on Silicon Substrates	共著	2006年	Jpn. J. Applied Physics vol. 45, No. 12, pp. 9197-9199	N. Kawada, M. Ito and Y. Saito		
論文	Honeycomb-textured structures on crystalline silicon surfaces for solar cells by spontaneous dry etching with chlorine trifluoride gas	共著	2007年	Solar Energy Materials and Solar Cells vol. 91, pp. 1800-1804	齋藤洋司, 平山拓, 須崎三徳, 津田欣範		
III 学会等及び社会における主な活動							
応用物理学会							
電気学会ユビキタス志向ナノマテリアル・プロセス技術調査専門委員会委員							
日本放射光学会							
炭素材料学会							
日本材料科学会 (理事・第2企画委員会委員長)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	佐々木 成明	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 理工学部の2年次準必修科目「熱物理学」、3年次専門選択科目「ナノテクノロジーⅠ」「ナノテクノロジーⅡ」(2006～2007年度)における総合評価において、90%前後の学生から「満足」「非常に満足」の評価を受ける。		2006年度～2007年度	<p>「熱物理学」は、物質生命理工学部の準必修科目として多くの学生が受講すると同時に、学生が身に付けておくべき最低限の物理化学的、物理的基礎知識を伝授する必要がある基幹科目である。本科目は、将来ナノ、バイオ、環境など幅広い分野を選択する多様な学生が受講するため、基礎事項を確実に身に付けさせる努力をしている。すなわち毎回「基本事項」の洗い出し、及び現在どのような位置にいるかを明確に何度も繰り返し伝える事で、学生のモチベーションを保つ努力をしている。</p> <p>また、専門科目「ナノテクノロジー」では、材料、バイオ、IT、環境の基礎技術である事を、様々な事例を挙げて伝えている。しかし結局は専門的な事実を伝えねばならず、これは分野外の学生には難度が高くなるのは必須なため、イメージを重視して、プロジェクターやビデオを駆使して「難しさ」「敷居の高さ」を感じないよう腐心している。</p>				
2.作成した教科書、教材、参考書 教科書「ナノトライボロジー」を執筆する：2008年1月脱稿		2007年度	<p>学部講義科目「ナノテクノロジーⅠ」「ナノテクノロジーⅡ」を、初等的な研究教育の場とみなし、難解な先端技術や成果を出来るだけ平易な言葉で学生に伝える工夫をしている。また、研究室における研究教育においても、常に最先端研究の論文を読み、必要な情報をかみくだいて研究室学生に与える努力をし、また、新聞などに掲載された興味ある事象をテーマに選んで学生の興味を引く工夫をしている。</p> <p>2003年4月にナノテクノロジー研究室の第一期生を迎え、それ以来の研究成果と研究教育の成果として「ナノトライボロジー」を執筆し、本分野では稀少な教育のコンテンツとして資する書籍を森北出版より発行の予定である。</p>				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 指定校推薦高校開拓のための出張説明(2003～2004)、オープンキャンパスにおける研究室見学説明(2003～2006)、「ナノテクノロジー概論」の杉並高校体験講義(2004～2005)、進学EXPOでの公開講義(2005)、埼玉私立高校での出張模範講義(2006)、富山県立高校の研究室見学での講義(2006)、一日体験科学教室講義(2005～2007)などでの発表・講演から、入学者を開拓した。		2003年度～2007年度	<p>本学赴任の翌年2003年以来、毎年、指定校推薦高校開拓のための出張説明(2003～2004)で、本学教育方法に関する説明を行った。他にもオープンキャンパスにおける研究室見学説明(2003～2006)、「ナノテクノロジー概論」の杉並高校体験講義(2004～2005)、進学EXPOでの公開講義(2005)、埼玉県私立高校への出張講義(2006)、富山県立高校の研究室見学での講義(2006)、一日体験科学教室講義(2005～2007)などでの発表を行ってきた。出張模範講義当時高校2年生だった学生が、私の講義を聞いて成蹊大学への志望を固め、2008年4月に本学入学を果たした事を本人の口から聞いた時、教育方法を高校教員に訴え、入学者を開拓する教員の義務が少しでも果たせたと考えた。</p>				
4.その他教育活動上特記すべき事項 研究室学生3人が、国際会議 ICSF2007においてExcellent Poster Awardを受賞し、更にその業績を元に2007年度成蹊大学賞(学術部門)をナノテクノロジー研究室として受賞した。		2007年度	<p>大学院教育は研究のスタートであると同時に、より高度な就職活動のスタートである。研究発表の練習を通じて、分かり易く他人に伝えるプレゼンの仕方を口頭発表、レポート報告の両面から継続的に指導し、就職において役に立つ工夫を行っている。更に論文や角説を読ませ、幅広い知識・視野を身に付けさせると同時に、修士論文作成に必要なプログラム作成などのテクニックを身に付ける指導を並行して行っている。データのまとめ方、発表の仕方を身につけてもらうため、随時研究の進捗報告をしてもらい、教員サイドから軌道修正のための指示などを与えている。これらの成果の集大成として、研究室の院生全員(9名)が国際会議 ICSF2007に参加し(発表総数13件)、うち3人(修士1年1名、修士2年2名)がExcellent Poster Awardを受賞した。更にその業績を元に2007年度成蹊大学賞(学術部門)をナノテクノロジー研究室として受賞した。</p>				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	ナノテックのための物理入門 (2007.4「大学生協・理工書ベスト100」 51位)	分担執筆	2007年	共立出版	佐々木成明、三浦浩治		
論文	Superlubricity of C60 Intercalated Graphite Films 平成18年度日本表面科学会論文賞	共著	2005年	e-J. Surf. Sci. Nanotech. 3, 21-23	K. Miura, D. Tsuda, N. Sasaki		
論文	Fabrication of C60 Intercalated Graphite Films and Its Superlubrication Properties 2006年度トライボロジー学会論文賞	共著	2006年	J. Jpn. Soc. Tribol. 50, 553-556	K. Miura, D. Tsuda, N. Sasaki		
論文	Atomic-Scale Ultralow Friction — Simulation of Superlubricity of C60 Molecular Bearing	共著	2007年	J. of Phys.: Conference Series 89, 01200101-0120010	N. Sasaki, N. Itamura, K. Miura		
論文	Simulation of Nanoscale Peeling and Adhesion of Single-Walled Carbon Nanotube on Graphite Surface	共著	2008年	e-J. Surf. Sci. Nanotech. 6, 72-78	N. Sasaki, A. Toyoda, N. Itamura, K. Miura		
III 学会等及び社会における主な活動							
社団法人 日本表面科学会 (～2007年12月：講演大会委員会 委員, 2008年1月～：学術講演会委員会 委員長)							
国際会議 ISSS-5 トピカルセッション「ナノトライボロジー」 (セッションチェア)							
新世代研究所「単一スピントロニクス」プレ研究会 (2007年4月～：委員)							
日本トライボロジー学会 マイクロマンのトライボロジー第3種研究会 (委員)							
社団法人 電気学会 「量子ビームによるナノ機能組織化とその評価技術調査専門委員会」 (委員)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	里川 重夫	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 物理化学 I の授業・演習の進め方		2007 年 4 月 1 日 ～7 月 31 日	<p>受講者が講義内容をよく理解し、実践できるように以下の項目を実践した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書やプリントを用い口頭で説明するのではなく、講義内容の要点を文章化して板書した。 ・項目ごとに演習問題の取り組み方（主に方法論や考え方）を中心に説明した。 ・演習問題を多く準備し、主に演習は宿題（平常点）として次の講義の最初に提出させた。 ・平常点として宿題を重視することで、実践的な計算能力の向上を図った。 ・演習問題・試験問題は全て数値計算であり、正確な計算や単位換算ができるように指導した。 				
2.作成した教科書、教材、参考書 物理化学演習問題プリント		2007 年 4 月 1 日 ～7 月 31 日	<p>以下の項目の演習問題プリントを作成した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・化学熱力学 I ・化学熱力学 II, 相平衡 ・希薄溶液 ・化学平衡 ・反応速度 				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	「バイブライン」水素・燃料電池ハンドブック (本間琢也編)	分担執筆	2006 年	オーム社, pp 824-828	里川重夫		
論文	Adsorptive removal of dimethylsulfide and t-butylmercaptan from pipeline natural gas fuel on Ag-zeolites under ambient conditions	共著	2005 年	Appl. Catal. B Environmental, 56, 51-56	S. Satokawa, Y. Kobayashi, H. Fujiki		
論文	Mechanistic study on adsorptive removal of t-butanethiol on Ag-Y zeolite under ambient conditions	共著	2006 年	J. Phys. Chem. B, 110, 22570-22567	K. Shimizu, N. Kobayashi, A. Satsuma, T. Kojima, S. Satokawa		
論文	Mechanism of adsorptive removal of tert-butanethiol under ambient conditions with silver nitrate supported on silica and silica-alumina	共著	2007 年	J. Phys. Chem. C, 111, 3480-3485	K. Shimizu, S. Komai, T. Kojima, S. Satokawa, A. Satsuma		
その他	水素供給インフラ	単著	2005 年	日本機械学会誌, vol.108, No.1045, 16-17.	里川重夫		
III 学会等及び社会における主な活動							
化学工学会 (環境部会幹事)							
触媒学会 (出版委員, 関東地区幹事, 各種研究会世話人)							
ゼオライト学会 (編集委員)							
日本化学会							
日本セラミックス協会							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	杉山 賢二	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) C言語プログラミングによる画像処理演習		2007年度	画像処理とコンピュータプログラミングは、従来別科目であり、前者は講義のみで、後者は一般的な課題に対するプログラミングの演習であった。そこで、「情報科学プロジェクト実験」においては、講義内容とプログラミング課題を一体化した専用の教科書を用い、画像処理の内容とプログラミング技術の両方を学べる様にした。これにより、実際の処理結果画像を見ながら画像処理について学べ、明確な目的を持ってプログラミング手法を習得することが可能になった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「実践 映像信号処理 -C言語を使って体感する-」		2008年3月18日	本書は、一般的な映像機器で使われている信号処理技術を対象とし、その研究開発や設計を行う上で必要となる基礎技術を学べるようにしたものである。映像信号自体の性質をよく理解してもらうため、映像信号を静止画像と動画画像に分け、個々の映像信号処理技術を体系的に解説した。近年の映像機器で使われる技術は概ね網羅し、理論的な解説を行うのみでなく、良い結果を得るためのノウハウも示した。そして、本書の最大の特徴として、読者自身が映像信号処理実験をソフトウェア処理で行うため、その課題と解題に多くのページを割いた。 本書は、情報科学プロジェクト実験及び卒業研究で教科書として用いているが、画像処理関係の科目でプログラミングの演習を含めて広く教科書として利用できる。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	JPEG・MPEG 完全理解	共著	2005年	コロナ社	杉山賢二・半谷精一郎		
著書	実践 映像信号処理 -C言語を使って体感する-	単著	2008年	コロナ社	杉山賢二		
論文	Motion Compensated Frame Rate Conversion Using Normalized Motion Estimation	共著	2005年	Proceedings of IEEE 2005 Workshop on Signal Processing Systems (SIPS'05), FP19	©Kenji Sugiyama, Takayuki Aoki, and Seiichiro Hangai		
論文	Prediction of Subjective Picture Quality Using Motion Activity for Different Picture Rate	共著	2007年	Proceedings of International Workshop on Image Media Quality and Its Application, P-1, pp. 105-108	©Kenji Sugiyama, Naoya Sagara, Junichi Nakagawa, and Sinsuke Harada		
その他	Encoder, Decoder, Encoding Method and Decoding Method for Color Moving Image and Method of Transferring Bitstream of Color Moving Image	単発明	2006年	~USPTO, United States Patent No. 7,003,036~	杉山賢二		
III 学会等及び社会における主な活動							
電気情報通信学会(イメージメディアクオリティ研究会幹事、Fundamentals Review誌編集委員、画像符号化シンポジウム実行委員会委員、システムセキュリティ英文論文誌編集委員、東京支部学生会顧問)							
映像情報メディア学会(編集委員会 論文部門委員、放送技術研究委員会 委員)							
Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) (Member of Consumer Electronics Society, Signal Processing Society)							
情報理論とその応用学会							
総務省 戦略的IT情報通信研究開発推進制度(専門評価委員)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	滝沢 國治	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) フレッシュマンゼミ		2005年4月～現在	この授業では、物質生命理工学科の新入生受講者は10名程度の小グループに分かれ、毎週異なる教員の講義を受ける。講義目的は、学習の動機づけや目標提示であり、講義内容は高校の授業の復習、研究室紹介、先端研究紹介など様々である。私は、受講者を光システム計測研究室に案内し、光学や光エレクトロニクスのデモンストレーション、簡単な実験及び基礎知識と社会との結びつきなどを講義している。デモンストレーションでは、レーザ、種々の光学結晶、レンズ、プリズム、回折格子などを提示し、実際に触れてもらう。実験では、2枚の偏光フィルムの間に液晶やプラスチックを挟んで、無色透明な物質が様々な色に変化する様子を観察させ、複屈折、偏光及び液晶の基本動作などを理解させている。また、液晶テレビを受講者の目の前で分解し、産業界において物理学と化学の融合が進んでいることを示し、本学科の設立の意義を理解させている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 平成14年度光情報教育研究専門委員会報告書(財団法人光産業技術振興協会編)		2005年4月～現在	我が国の大学における光学教育に関するアンケート調査結果、海外大学における光情報教育の訪問調査結果、応用物理学会・日本光学会主催の学術会議Optics Japan 2002, 2003におけるシンポジウム開催報告などをまとめ、我が国の光情報教育の課題とその対策を示した。また、これと並行して、光情報教育の現代化に向けた副教材(CD版)を作成した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 (財)光産業技術振興協会の人材育成研究委員会の下部組織として設立された光情報教育専門委員会に委員として参加し、我が国の大学における光学教育の課題とその改善策を検討し、光学教育の現状把握、魅力ある光学教育のための提言、魅力ある光学教科書・副教材の提案などを行った。		2001年4月 ～2004年3月	<ol style="list-style-type: none"> 1) 我が国の大学における光学教育に関するアンケート調査の実施 2) 海外大学における光情報教育の訪問調査 3) Optics Japan 2003におけるシンポジウム開催(大学における光情報教育を考えるー教育現場からー) 4) 光情報教育の現代化に向けた副教材のための資料提供(「魅力ある光情報教育のためにー副教材へのヒントー」) 5) 私立大学における光学教育の現状紹介(Optics Japan 2003) 				
4.その他教育活動上特記すべき事項 成蹊大学公開講座講演記録をインターネット掲載		2003年4月～現在	「新しいテレビのかたちー撮る・送るそして観るー」(スモールワールド学術文庫)				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	Photonics in Broadcasting Technology	編著	2006年	Research Signpost (India)	Takizawa, K et al.		
論文	反射干渉法の測定精度改善とLiNbO ₃ 結晶の電気光学係数r ₂₂ の測定	共著	2006年	電子情報通信学会論文誌12, J. 89-C, No. 12, 1124-1127	米倉和也・金蓮花・滝沢國治		
論文	Design Considerations of a Television Camera Detecting Oil Slicks on the Sea	共著	2006年	Optical Review, 13, 5, 361-370	Takizawa, K, Toshida, Y and Saito, N		
論文	High accuracy and high sensitivity measurements of the electrooptic effect in undoped and MgO-doped LiNbO ₃ crystals	共著	2006年	Optical Review, 13, 3, 161-167	Takizawa, K and Yokota, Y		
論文	Fast and Simultaneous Measurement of Both Birefringence and Azimuth Angle Using a Y-Cut LiNbO ₃ Phase Modulator	共著	2006年	Japanese Journal of Applied Physics, 45, 6A, 5244-5247	Jin, L, Yonekura, K and Takizawa, K		
III 学会等及び社会における主な活動							
Optical Metrology, Optoelectronics, Display, Image Sensor, Optical Materials(Electrooptic Crystals, Liquid Crystal)応用物理学会							
日本光学会							
電子情報通信学会							
映像情報メディア学会							
日本液晶学会							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	滝沢 誠	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 情報システム工学演習		2003年4月 ～2007年3月	前任の東京電機大学で行っていたデータベースシステムに対する SQL によるデータ操作の演習とこれを用いたプログラム演習である。特に、演習の自動化を行い、演習課題の発行、提出、採点を自動化するシステムを開発した。また、課題は、すべての学生に異なったものが与えられるとともに、学生は進捗度により上位の課題が与えられるものである。				
2.作成した教科書、教材、参考書 データベース管理システム		2003年4月 ～2007年3月	データベースシステムの講義で用いた ppt ファイルである。データベースシステムの歴史から説き起こし、基本となる概念、理論から、実際の種々のアルゴリズムを分かり易く解説している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 情報工学特別研究		2003年4月 ～2007年3月	情報システム工学専攻の大学院生全員に、研究成果を国際会議 IEEE ICDCS, IEEE AINA, IEEE ICPADS, IEEE ISORC, ICPP, DEXA, NBiS 等で full paper での発表を行い国際的に高い評価を得た。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Service-Oriented Cooperation among Trustworthy Peers	共著	2006年	Journal of Interconnection Networks (JOIN), Vol.7, No.4, pp.507-533	Watanabe, K. and Takizawa, M.		
論文	Three Dimensional Broadcast Protocol for Wireless Networks	共著	2007年	Proc. of the 36th International Conference on Parallel Processing (ICPP' 2007), CD-ROM	Parachuri, V., Duresi, A., Barolli, L., and Takizawa, M.		
論文	A Mobile Agent Model for Fault-Tolerant Manipulation on Distributed Objects	共著	2007年	International Journal of Cluster Computing (IJCC), Vol.10, No.1, pp.81-93	Tanaka, Y., Hayashibara, N., Enokido, T., and Takizawa, M.		
論文	Distributed Multi-Source Streaming Models in Peer-to-Peer Overlay Networks	共著	2007年	Journal of Simulation Modelling Practice and Theory, Vol.15, No.4, pp.426-464	Enokido, T., Tanaka, Y., Barolli, V., and Takizawa, M.		
論文	Ranking Factors in Peer-to-Peer Overlay Networks	共著	2007年	ACM Transaction on Autonomous and Adaptive Systems (TAAS), Vol.2, No.3, pp.11:1-11:26	Watanabe, K., Enokido, T., and Takizawa, M.		
III 学会等及び社会における主な活動							
IEEE Computer Society (Board of Governors 2006-2008; Golden Core Member, Senior Member, Technical Committee on Distributed Processing (TCDP) International Advisory Member, International Conf. on Distributed Computing Systems (ICDCS) (Steering committee member, Workshops co-chair), International Conf. on Advanced Information Networking and Applications (AINA) (Founder and Steering committee Chair), International Conf. on Parallel and Distributed Systems (ICPADS) (Steering Committee Member, Award chair))							
ACM (member)							
情報処理学会(フェロー) (論文誌シニア査読委員) (マルチメディア通信と分散処理(DPS)研究会アドバイザー)							
DEXA Association (International Conference on Network-based Information Systems (NBiS), Founder and General co-chair), the 2nd International Conf. on Availability, Reliability and Security (AREs2007) (General co-chair))							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	田中 潔	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 授業毎の小テストの実施		2005年4月～現在	授業毎に小テストを実施し、評価をマークシートで点数化し、さらに評価結果を次の授業に反映させる。				
2.作成した教科書、教材、参考書 授業の教科書を作成		2004年3月	授業で用いる教科書を作成し、上梓した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	フレンドリー物理化学	共著	2004年	三共出版	田中潔・荒井貞夫		
論文	Application of Benzoyl-Substituted Hemithioindigo as a Molecular Switch in Porphyrin-Quinone Recognition	共著	2005年	Supramolecular Chemistry, 17, 8, 637-642	K. Tanaka, K. Taguchi, S. Iwata, and T. Irie		
論文	Proton- and metal cation-enhanced excited state intramolecular proton transfers of 2-(2-hydroxyfluorophenyl)benzoxazole having imidazole moiety	共著	2006年	J. Fluorine Chem., 127, 8, 1073-1078	K. Tanaka, K. Sano, T. Katoh, S. Iwata, K. Nemoto, and T. Kurushima		
論文	Novel photoinduced cyclization of pentafluorophenylhemithioindigo	共著	2007年	J. Fluorine Chem., 128 (10) 1094-1097 (2007).	K. Tanaka, K. Kohayakawa, T. Irie, S. Iwata, and K. Taguchi		
論文	Application of 2-Pyridyl Substituted Hemithioindigo as a Molecular Switch in Hydrogen Bonded Porphyrins	共著	2008年	J. Org. Chem., 73 (10), 3768-3774 (2008).	K. Tanaka, K. Kohayakawa, S. Iwata, and T. Irie		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本化学会							
アメリカ化学会							
有機合成化学協会							
国際複素環化学会							
国際ポルフィリン化学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	田中 俊光	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 講義と演習の併用		2007年4月 ～2008年1月	学生の講義後の漠然とした理解感を納得性の高い理解度まで高めるために、講義の区切り毎に演習を実施し、演習時間内の個別質問への対応、演習を通しての学生自身による理解不可能箇所の具体的認識、学生達の理解度把握などはかり、講義効率の改善をはかった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作プリントの配布		2007年4月 ～2008年1月	市販の参考図書では説明が無いかあるいは不十分な部分の補強、及び板書だけでは伝わりにくい各講義の全体的位置付けにおける学生の認識向上をはかるため、自作プリントを必要の都度配布して、強調と固定をはかった。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 "Testimonial for JEOL lectureship"		2007年6月11日	Lecture entitled "The pursuit of realizing quiet and comfortable sound from noise of machinery"				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	機械工学便覧用システム編「環境システム」	共著	2008年	日本機械学会・231ページ	田中俊光(編集・企画 他8名) 田中俊光(著者 他61名)		
論文	修正モード歪エネルギー法による制振構造の振動解析	共著	2004年	日本機械学会論文集(C)70,(693), p.1285-11292, 2004	上田宏樹, 田中俊光, 岡田徹, 井上喜雄		
論文	3点マイクロホン法による油田種特性調法の開発(油圧配管系の減衰特性の計測)	共著	2004年	日本機械学会論文集(C)70,(694), p.1651-1656, 2004	木村康正, 田中俊光, 上田員弘, 中島 一		
論文	Development of Technique to Improve the Sound Insulation of Double-leaf Walls with Air-space Using Microperforated Sound Absorbing Plate	共著	2006年	Proceedings of Inter Noise 2006, 10pages, (2006)	Kazuki Tsugihashi, Toshimitsu Tanaka, Hiroki Ueda		
論文	微細多孔アルミ箔で構成される吸音パネルの開発	共著	2007年	日本機械学会・第17回環境工学総合シンポジウム2007講演論文集, p.39-41, 2007	山田隆博, 田中俊光, 山極伊知郎, 堀尾正治, 松田博		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本機械学会(フェロー, 評議員, 環境工学部門長(2004年度), 環境工学部門第一技術委員会委員, 校閲委員)							
日本騒音制御工学会(理事, 認定技師資格審査委員会委員)							
自動車技術会(音質評価部門委員会委員)							
日本音響学会(編集委員会委員, 英文誌 Associate editor)							
日本応用数学会 評議員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	近重 悠一	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 理学基礎実験の新設		2005年4月1日 ～2006年3月31日	2005年度から発足した理工学部の新規カリキュラムに基づき、それまで別々の科目であった物理学実験と化学実験をあわせた理学基礎実験を新設し担当した。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 「成蹊大学理工学部(理学基礎実験)」		2005年4月1日	成蹊大学理工学部が発足するにあたり、新規に設けられた理学基礎実験の教科書を担当者共同で編纂した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	平成 15 年度武蔵野市寄付講座 グローバル環境—通信, ネットワーク, 地球環境—の変化	編著	2004 年	成蹊大学工学部	山口正義・山中義昭・二宮洸三・近重悠一		
論文	Salt Neutrino Detector for Ultrahigh-Energy Neutrinos	共著	2004 年	Springer Verlag・Phys. Atom. Nucl. 67:2050-2053	M. Chiba et al		
論文	Measurement of Attenuation Length for Radio Wave in Natural Rock Salt Samples Concerning Ultra High Energy Neutrino Detection	共著	2005 年	World Scientific・Int. J. Mod. Phys. A21S1:25-29	M. Chiba et al		
論文	Structure Function of Excess Charge in Rock Salt	共著	2005 年	World Scientific・Int. J. Mod. Phys. A21S1:50-54	Y. Watanabe et al		
論文	Electric Field Strength of Coherent Radio Emission in Rock Salt Concerning Ultra High-Energy Neutrino Detection	共著	2006 年	American Institute of Physics・AIP Conf. Proc. 847:491-493	Y. Watanabe et al		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本物理学会							
アメリカ物理学会							
ヨーロッパ物理学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	坪村 太郎	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 学生実験における平衡定数算出のテーマの発案と実践		2007年4月1日	3年次対象の学生実験において、吸収スペクトル変化より平衡定数を見積もる新たなテーマを考案した。金属イオンと無機イオンの反応の際の吸収スペクトルの変化を測定し、手計算とエクセルによる解析の2つの方法によって平衡定数を見積もることとした。実際に2007年より物質生命実験の1つのテーマとして使用している。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 学生実験用テキストの作成		2007年4月1日	前項で示したテーマに関するテキストを作成し、配布した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 演示実験を取り入れた無機化学講義の実践		2003年4月 ～2008年3月	無機化学I及び無機化学IIの講義において、錯体の生成反応、酸素の常磁性の演示、ハロゲン元素の酸化性などの演示を行っており、机上の学問では得られないインパクトを与えることに成功したと考えている。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	“Structure and luminescence of a dinuclear copper complex bridged by a diphosphine ligand.”	共著	2004年	Chem. Lett., 33, 678-679.	T. Tsubomura, N. Takahashi, K. Saito and T. Tsukuda		
論文	“Synthesis, Structure, Spectroscopic Properties, and Photochemistry of Homo- and Heteropolynuclear Copper(I) Complexes Bridged by the 2,5-Bis(2-pyridyl)pyrazine Ligand”	共著	2005年	Inorg. Chem., 44, 6373-6378.	T. Tsubomura, S. Eroto, S. Endo, T. Tamane, K. Matsumoto, and T. Tsukuda		
論文	“Synthesis and Luminescence of New Cu(I) Complexes Containing a Binap Ligand and a Diimine Ligand”	共著	2006年	Bull. Chem. Soc. Jpn., 79, 288-290.	K. Saito, T. Tsukuda, T. Tsubomura		
論文	“A series of luminescent Cu(I) mixed ligand complexes containing 2,9-dimethyl-1,10-phenanthroline and simple diphosphine ligands.”	共著	2006年	Dalton Trans., 2006, 4444-4448	K. Saito, T. Arai, T. Tsukuda, and T. Tsubomura		
論文	“Strongly Luminescent Palladium(0) and Platinum(0) Diphosphine Complexes”	共著	2006年	Inorg. Chem, 47, 481-486 (2008).	T. Tsubomura, Y. Ito, S. Inoue, Y. Tanaka, K. Matsumoto, and T. Tsukuda		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本化学会							
錯体化学会							
光化学協会							
米国化学会							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	富谷 光良	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 講義「計算ナノ物理」		2007年4月11日 ～7月18日	<p>工学部から理工学部への移行に伴い、私の場合、担当科目のほとんどをスクラップアンドビルドすることとなった。その中で特に、新科目「計算ナノ物理」については、あえて板書中心で行う講義体系ではなかなか伝授が難しいとされる内容・手法を取り入れた。</p> <p>具体的には、1年時での力学、基礎電磁気学の内容を発展させたナノサイエンス、非線形系に関する内容をコンピュータ教室を用いて、講義すると同時にその場で簡単なプログラミングを伴う実習を行った。化学反応、量子効果、カオス性等に関する理解を促すことを重点としているので内容は抑えることとし、代わりに実習によりより深い理解を促すことを目的とした。</p>				
2.作成した教科書、教材、参考書 「基礎物理 I - 運動・力・エネルギー」、金原 稔、 金原 勲、富谷 光良、魚住 清彦、高橋 雅工 著 実教出版		2005年11月	<p>物理学の基礎である力学について、基礎的内容に重点をおき、平易な記述をすることで、理工系学生に必要な最低限の知識と、物理学特有の思考方法、問題設定の仕方などの習得をめざして執筆をした。また、読むだけでなく手を動かして問題に取り組むことが、物理学を理解していく上で大変重要である。そこで、努めて例題やドリル問題、演習問題を充実させることとした。</p> <p>執筆に当たっては、出版直後にはスタートする新理工学部における学生の教育に使用することも強く意識して、内容のレベル等の調整に努めた。</p>				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 教職科目「地学実験」		2007年12月1, 2日	<p>理工学部教職科目としての理科実験科目の一つ「地学実験」を立案・担当した。関東地方では晴れる確率の高い冬季の週末に、一泊二日で群馬県立ぐんま天文台まで学生を引率し(例年十余名)実際に天体観測を行うものである。天文台の150cm反射式望遠鏡を使用し恒星のスペクトル解析を行い、恒星の温度天体までの距離の測り方についての理解を得ることを目的とする。</p>				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	Satellite Image Classification Using Modified Counter-Propagation	共著	2003年	Advances in Spatial Analysis and Decision Making, World Scientific, 89-97	Mitsuyoshi Tomiya, Seitaro Kikuchi		
著書	専門基礎ライブラリー「基礎物理 I 運動量・力・エネルギー」	共著	2005年	実教出版	金原稔, 魚住清彦, 金原勲, 高橋雅工, 富谷光良		
論文	A Large Number of Higher-Energy Eigenvalues of a Huge Dimensional Matrix for a Quantum Chaotic Study of a Quartic Potential	共著	2005年	Computer Physics Communications, 169, 313-316	Mitsuyoshi Tomiya, Naotaka Yoshinaga, Shoichi Sakamoto and Aki Hirai		
論文	Quantum Dynamical Approach to Electron Transfers in DNA-Molecular Nanowires	共著	2007年	Journal of Physics: Conference Series 59	S. Sakamoto, Y. Ohmachi, M. Tomiya		
論文	Quantum Dynamical Study of Electron Transport in 2D Nanostructure under External Field	共著	2007年	AIP Conf. Proceedings in Materials Physics and Applications 893, 581-582	S. Sakamoto, Y. Ohmachi, M. Tomiya		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本物理学会							
日本リモートセンシング学会							
計測自動制御学会							
電子情報通信学会							
The American Physical Society							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	丹羽 明	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 視覚に訴えるような工夫 (パワーポイント・ビデオ教材の使用)		2006年4月～現在	インダストリアルエンジニアリング ab ノ授業内容をパワーポイントで作成し、適宜ビデオ教材を用いる。				
2.作成した教科書、教材、参考書 エレクトロメカニクス実験Ⅲb 実験テキスト		2007年9月～現在	50名程度の学生を6班に分け、1つのテーマで半年の実験を行い、班ごとの成果を皆の前で発表する。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 3 大学教員共同による授業教材の検討		2003年4月～現在	月1回程度3 大学教員による授業教材の検討会開催。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	組立品の接触関係分析と全ての組立順序の導出方法-組立品の構造が一軸構造の場合-	共著	2004年	IE レビュー, 45, 3, 80-85	©篠田心治・丹羽明		
論文	A Fundamental Study of a Method in Designing 3-Dimensional Computer Graphics of Assembly-Type Works	共著	2005年	Proceedings of 18th International Conference on Production Research, 8	©Shinoda, S. and Niwa, A.		
論文	基本変換に着目した組立作業の3次元CG活用法の提案	共著	2005年	日本設備管理学会誌, 17, 2, 91-97	©篠田心治・丹羽明		
論文	A Basic study for creating 3D CG animation of an assembly work	共著	2006年	Proceedings of the 11th International Conference on Industrial Engineering Theory, Applications, and Practice, 913-918	©Yamanaka, H. Matsumoto, T. Shinoda, S. and Niwa, A.		
その他	組立順序導出システム	共著	2007年	特願2007-066708号, 2007.3.15 (特許)	©丹羽明, 篠田心治, 川瀬武志		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経営工学会							
日本オペレーションズリサーチ学会							
日本設備管理学会(評議員)							
日本IE協会							
Insititute of Industrial Engineers							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	馬場 茂	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書 基礎物理 2 電磁気・波動・熱 (実教出版, 専門基礎ライ ブラリ) 金原 稔, 吉田貞史, 和田直久, 矢口裕之, 江馬 一宏, 馬場 茂 共著		2006年10月	理工学部物質生命理工学科専門選択科目「基礎物理学演習」及び「応用物理学演習」 のテキストである。力学及び初等電磁気学の履修を済ませた学生を対象とするが、既習 部分の復習をかねながら、より広く深く確実な知識とするために、ドリル問題を多く配 して、予習・復習の助けになるようにしてある。問題の解答は、インターネットで参照 することができる。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	薄膜工学 §4.2 機械的性質	分担執筆	2003年	丸善, pp. 244-266	金原稔, 白木靖寛, 吉田貞史 編, 全20名		
著書	薄膜ハンドブック (第2版), 4-7-1 機械 特性 付着	分担執筆	2008年	オーム社, pp. 523-525	日本学術振興会薄膜第 131委員会 編		
論文	Two critical events observed on Cu films on glass substrate in the micro-scratch test	共著	2005年	Adhesion Aspects of Thin Films & Coatings(VSP), vol. 2, pp. 203-213	©S. Baba, Y. Yamaguchi, T. Nakano		
論文	Dielectric Breakdown during Secondary Electron Emission Measurement of Sputter-Deposited MgO Films	共著	2006年	Jpn. J. Appl. Phys. vol. 45, no. 10A, pp. 7875-7878 (2006)	©T. Nakano, T. Fujimoto, D. Nakada, S. Baba		
その他	真空製膜による薄膜の密着性—密着に及 ぼす各種因子と改善方法—	単著	2007年	表面技術, vol. 58, no. 5, pp. 275-279 (2007)			
III 学会等及び社会における主な活動							
応用物理学会 (薄膜・表面分科会)							
表面技術協会 (副会長, 理事, 材料機能ドライプロセス部会幹事)							
真空協会 (スパッタ&プラズマ部会顧問)							
AVS (American Vacuum Society)							
塗装技術協会 (理事)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	原 節子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 担当科目である「食品化学」における研究発表会の実施		2003年度～2007年度	3年次科目である「食品化学」において、個人あるいは数名のグループによる研究発表会を実施した。これにより、学生は自ら選択したテーマについて主体的及び自主的に学び、さらにその成果の発表を通じてプレゼンテーション技術を習得した。発表会について授業評価においても多くの学生が「有益な体験」と記述していた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「油脂・脂質の基礎と応用」		2005年4月1日	担当科目である「応用化学輪講」「天然物応用化学特論」「食品化学」における参考書として、これらの科目の理解に必要な油脂と脂質に関する基礎知識を収録した「油脂・脂質の基礎と応用」を分担執筆した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 安全・防災に対する意識の向上		2003年度～2007年度	2003年度～2006年度においては「実地演習及び安全管理」の安全管理部分の講義を担当し、学生の安全・防災に対する意識の向上に努めた。また、救命救急措置については健康支援センター長の櫻井先生に専門的な立場からの講義をお願いした。2007年度から担当した「安全管理」においては半期にわたり、安全、防災、環境保全に関する講義を行った。この中で学生実験及び研究室における卒業研究実験の危険に関するフィールドワークを実施し、学生の問題意識の向上に努めた。その結果、危険物取り扱い責任者及び応急手当普及員の資格を多くの学生が取得するに至った。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	油脂・脂質の基礎と応用-栄養・健康から工業まで-	分担執筆	2005年	日本油化学会編	原節子 分担執筆		
論文	Evaluation of Anti-Oxidative Activities of South African Herbal Tea and Grape Seed Extracts	共著	2005年	J. Oleo Sci., 54, 627-632	©S. Hara, R. Fukasawa, T. Nakano, Y. Totani		
論文	Preparation of Novel Structured Lipids	共著	2005年	J. Oleo Sci., 54, 473-479	©S. Hara, A. Kanda, Y. Totani		
論文	Evaluation of Heat-Deteriorated Oils(PartI) TLC-FID Method for Determining Polar Compounds Content	共著	2006年	J. Oleo Sci., 55, 167-172	©S. Hara, E. Ogawa, Y. Totani		
論文	油脂類の酸化防止とその評価法	単著	2007年	FRAGRANCE JOURNAL	原節子		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本化学会							
日本油化学会(評議員, 規格試験法委員, 学術専門委員, 関東支部常任幹事, 年会実行委員他)							
財団法人日本油脂検査協会(理事)							
日本脂質栄養学会(理事)							
American Oil Chemist's Society							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	廣田 明彦	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) DVD 教材の利用, ダイキャスト法による製品の提示		2006年10月～現在	工作機械の進展の歴史的経緯と実際の機械加工作業や各種切削加工技術の要点を映像を用いて説明し, 製造業におけるマザー・マシンの役割を認識させることにした。また, 身の回りにある製品の事例として自動車の機関部品を提示して, 座学で学んだ事項を確認させるようにした。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 自作プリントによる授業内容の補足		2003年～現在	機械設備・装置を利用した製造過程の概要説明に対しては, プロジェクターと配布プリントの併用によって実物を出来る限り理解しやすい状況を作っている。低学年次での授業であり, 高校の授業とは異なることを理解してもらうことに努めている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD 講演会, 研修会への参加		2007年～現在	大学FD 委員会が企画した講演会, 研修会に参加し, 大学のおかれている現状の認識を深めるとともに, 対話型双方向授業の方法等についての研修を受け, 教育活動に生かすべく努めている。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	ボールエンドミル切削における切りくず生成状態と切削抵抗の予測(第1報)―球体部の切れ刃形状と切削模型―	共著	2003年	精密工学会誌, 69, 3, 396-401	笠原和夫, 広田明彦, 笹井洋介		
論文	ボールエンドミル切削における切りくず生成状態と切削抵抗の予測(第2報)―計算結果と実験結果との比較検討及び幾何的相似性に基づく切削抵抗の予測―	共著	2003年	精密工学会誌, 69, 4, 524-529	笠原和夫, 広田明彦, 笹井洋介		
その他	難削材料のドリル加工における切れ刃形状の最適化	共著	2006年	平成 13～15 年度科学研究費(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 1-127	広田明彦, 笠原和夫		
その他	Merchant の切削模型に基づく傾斜切削機構の検討	共著	2006年	2006 年度精密工学会春季大会学術講演会講演論文集, 287-288	広田明彦, 笠原和夫		
その他	斜面のボールエンドミル加工における工具挙動と仕上げ面生成機構の解析(第1報)	共著	2007年	2007 年度精密工学会春季大会学術講演会講演論文集, 907-908	笠原和夫, 広田明彦, 斎藤雅和		
III 学会等及び社会における主な活動							
精密工学会							
日本機械学会 校閲委員							
日本塑性加工学会							
砥粒加工学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	三角 正明	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 材料力学Ⅰ, 材料力学Ⅱ, 材料力学Ⅲの講義において, ①講義内容を学生に体感させる工夫をした。 ②毎講義の最後に小テストを実施した。 ③講義3回に1回の宿題を出してレポートを提出させた。 ④講義中の質問には質問点を与えて質問を奨励した。 ⑤質問点, 小テスト, レポート, 中間テストの得点を学生に開示した。		2003年4月1日 ～2008年7月31日	①講義内容に対応させて, 受講学生の全員一人一人に自分の手の力のみでやれる実験をやらせて材料の強さと破壊様式を体験させ, 座学との関係を実感させた。 ②毎講義の最後に講義内容に関する10分間の小テストを実施し, 採点したものを次週に返却して講義内容の理解を自分で確認させた。 ③レポートの課題は, 各学生毎に数値の異なる問題を与えた。答の数値が違うので, 学生同士のコピーはできないようにした。 ④積極的な授業への参加を評価して, 1回の質問に3点を与えた。 ⑤中間試験をした後で全得点現況の表を与えて自分の得点状況を確認させ, 期末試験への勉強意欲を持たせるようにした。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 新聞記事等も活用した, 自作の配付プリント		2003年4月1日 ～2008年7月31日	最近の新聞報道の中で関連があり教科書を補足するもの, 及び学生からの質問に詳しく答えるプリントを作って配付した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	形状記憶合金の応用展開	分担執筆	2006年	シーエムシー出版			
論文	中炭素鋼のねじり疲労挙動に及ぼす平均応力の影響	共著	2004年	日本材料学会「材料」・Vol. 53, No. 2			
論文	ねじり疲労におけるき裂成長及び寿命に及ぼす静的引張りの影響	共著	2004年	日本材料強度学会誌, Vol. 38, No. 3			
III 学会等及び社会における主な活動							
社団法人・日本機械学会・材料力学部門							
社団法人・日本材料学会・疲労部門委員							
日本材料強度学会(評議員)							
日本ばね学会							
社団法人・日本消防放水器具工業会(認定委員会・委員長)							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	村上 仁己	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
その他	放送・通信連携による新ビジネスの開拓— キャリアからの提案—	単著	2005年	月間民放	村上仁己		
その他	Autonomous Decentralized Control in Ubiquitous Computing	共著	2005年	IEICE TRANSACTIONS on Communications VOL. E88-B No. 12 Dec. 2005 pp. 4421-4426	Akira Yamaguchi, Masayoshi Ohashi and Hitomi Murakami		
その他	ワンセグ放送への期待—キャリアの悩み, 期待 喜び—	単著	2006年	AURA 第175号 特集 2006年テレビの行方 フ ジテレビ編成制作局調査部	村上仁己		
その他	Handset power games—Wireless service providers have seen the future and thefuture is mobile TV to your handset. So what does that mean for portable fuel cells?	単著	2006年	The FUEL CELL REVIEW	村上仁己		
その他	携帯電話用組み込みソフトウェア開発の 実践的教育における産学連携の課題	共著	2007年	情報処理学会 採録	伊藤, 渡辺, 樽松, 村上, 他		
III 学会等及び社会における主な活動							
映像情報メディア学会							
電子情報通信学会							
情報処理学会							
NICT 評価委員							
TTC 普及委員会委員長							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	山崎 章弘	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	“Separation process of HFCs and SF6 from the gaseous mixtures with nitrogen by the surface diffusion mechanism through porous inorganic membranes”, J. Membrane Sci., vol. 282, 442-449	共著	2006年	J. Membrane Sci., vol. 282, 442-449	K. Shiojiri, Y. Yanagisawa, A. Yamasaki, F. Kiyono		
論文	超音波を用いた金属粒子生成還元反応に対する微細気泡の添加効果	共著	2007年	ケミカルエンジニアリング, vol.52, 8号	竹田智, 山崎章弘, 柳沢幸雄		
論文	“Numerical and experimental study on the dissociation process of methane hydrate under water flow - Part I. Dissociation at pressures above the three-phase (H-V-Lw) coexisting line”	共著	2007年	AIChE J. vol. 53, 262-274	W. Sean, T. Sato, A. Yamasaki, F. Kiyono		
論文	“Numerical and experimental study on the dissociation process of methane hydrate under water flow - Part II. Application of the dissociation rate constant to the dissociation by depressurization in the two- phase (Lw-V) region”	共著	2007年	AIChE J., vol. 53, 2148-2160	W. Sean, T. Sato, A. Yamasaki, F. Kiyono		
論文	“Direct observation of the effect of sodium dodecyl sulfate (SDS) on the HCFC-22 hydrate formation in a static mixer”	共著	2007年	Chem. Lett., vol. 36, 1212-1213	H. Tajima, Y. Nakajima, J. Otomo, H. Nagamoto, A. Yamasaki, F. Kiyono		
III 学会等及び社会における主な活動							
化学工学会 (環境部会幹事)							
アメリカ化学工学会							
アメリカ化学会							
エンジニアリング振興協会 研究評価委員							
「建築用断熱材フロン回収・処理技術調査」委員会委員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	弓削 康平	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Two-scale finite element analysis of heterogeneous solids with periodic microstructures」Computers and Structures, No82, pp593-606, 2004. 1	共著	2004年	日本機械学会論文集 Vol. 69-687-A, pp1613-1620	Kazumi Matui, Kenjiro Terada, Kohei Yuge		
論文	Three-Dimensional Human-Head Model Using VOXEL Approach Developed for Head-Injury Analysis	共著	2004年	SAE Transactions Journal of Aerospace, PaperNo. 2004-01-2134.	Susumu Ejima, Tetsuya Nishimoto, Kohei Yuge, Kohei Tomonaga, Shigeyuki Murakami, Hiroaki Takao		
論文	衝撃荷重を受ける骨組み構造のトポロジー最適設計	共著	2006年	自動車技術会論文集 Vol. 37, No1, pp125-130	弓削康平, 永井栄啓, 原山勝臣		
論文	Impact Injury Analysis of the Human Head	共著	2006年	Book of Abstract, FIJITA2006, pp507	Dai Watanabe, Kohei Yuge, Tetsuya Nishimoto, Shigeyuki Murakami, Hiroyuki Takao		
論文	薄肉鋼構造の衝突最適設計 —エネルギー吸収能の最大化—	共著	2007年	日本計算工学会, 計算工学論文集, Vol. 2007, No. 20070010	津金澤洋平, 小林薫, 弓削康平		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本計算工学会 (理事)							
自動車技術会 (評議員)							
日本機械学会							
日本造船学会							
日本シミュレーション学会							

所 属	理工学部	職 名	教授	氏 名	渡辺 一衛	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「システム分析序論」における教授方法		2007年4月～7月	「システム分析序論」は理工学部情報科学科2年生前期科目であり、準必修科目となっているためほとんどの学生が履修しており、2クラスに分けて授業を行っている。そのため、授業内容が1回目と2回目でも多少異なってしまうことがあった。そこで、研究室の学生とともに、まず授業項目の確認を行い、講義内容を整理してそれまでの授業順序や内容の再構成を行った。次に、それらの項目を授業回数に準じて区分けし、毎回多少なりとも演習が入るように時間配分をした。さらに、これまで板書が多く、その内容にずれがあったため、記入用ノートを作成した。このノートは、大まかな内容は記入されているが、重要なポイントは板書を書き写す必要があるようになっており、学生が手を動かして記入し、確認していく方法をとっている。このことにより、2回のクラスで内容のずれがほとんど無くなり、従来の「ノートを取るのが大変である」という評価アンケート結果に対応できた。パワーポイントの授業では学生は単に眺めて終わってしまうことが多いので、板書中心との折衷効果が出たと思われる。学生アンケートの結果も良好で、この方法を他の科目に広げていきたい。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「数理工学実験、数理科学実験」における「生産システム設計」に関するeラーニング		2003年度～現在	数理工学実験は、工学部2年生の後期科目であり旧学科の選択科目、数理科学実験は理工学部2年生の後期科目であり、新学科の後期選択科目である。旧学科では70名から多いときには90名程度履修し、新学科では50名前後が履修している実験科目である。このうちの2回分(90分×2時限×2回)として表記の授業を開発した。生産場面を学校内で表現することは大変難しいが、体験的な授業を行いたいという狙いから、仮想工場を想定し、工程設計のラインバランシングの内容を学ぶこととした。それ以前も紙の上で実験・実習を行ってきたが、問題解決、体験授業、協調学習の内容を取り入れ、EMS(Education Management System)、シミュレーション、Webやコミュニケーションシステム等の情報技術を利用してこれを実現した。特に、協調学習については、2つの遠距離にある工場の生産現場のライン長と生産計画を立てるプランナーの役割を学生に演じてもらい、生産現場も考慮した生産計画を立てるといった内容で体験的に生産計画の意味を理解させている。工場間のやり取りは現在ではチャットシステムを利用しており、更新内容を保存し学生はそれに基づいてレポートを書き、教員側ではその内容により次年度の改善の検討ができる。講義の区切りごとに小テストの実施、アンケート、レポートなどにより授業内容に関してPDCAのサイクルを回し改善している。なお、授業の開発は青山学院大学総合研究所との共同研究で行っており、実質的な開発は本研究室助手の寛宗徳氏の功績が大きい。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「JABEE 経営工学関連分野審査講習会」における講演		2007年9月29日	経営工学関連学会協議会(FMES)は経営工学関連の7つの学会から構成されており、その活動のひとつにJABEE(Japan Accreditation Board for Engineering Education)に関する活動がある。この活動はFMES/JABEE委員会が担当しており、その普及活動として標記講習会を開催した。この講習会によりJABEEプログラムの審査において、オブザーバーとして参加ができ、その経験により翌年以降で審査員として参加できるようになる。講師陣として8名の講演者に内容を各50分程度に分担し、「審査における全般的な留意点」という項目で講演した。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 「インターンシップ」科目の立ち上げ		2006年度～現在	2004年度より従来の工学部から理工学部へ組織変更され、学科編成の改革とともにカリキュラムも大幅に変更された。これまでにない種類の新設科目として、学生のキャリアパスのひとつに位置付けられるインターンシップ科目を立ち上げることとし、その企画立案を行った。この科目は、理工学部3学科が全て共通の内容となるように配慮されている。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	サイバーマニュファクチャリング	分担執筆	2004年	青山学院大学総合研究所AMLIIプロジェクト	サイバーコンカレントマネジメント研究会		
著書	ビジネス・キャリア検定試験標準テキスト 生産管理プランニング2級(生産システム・生産計画)及びオペレーション2級(作業・工程・設備管理)計2冊	分担執筆	2008年	中央職業能力開発協会	中央職業能力開発協会編 ◎渡辺一衛 武岡一成監修		
著書	ビジネス・キャリア検定試験標準テキスト 生産管理プランニング3級及びオペレーション3級計2冊	分担執筆	2008年	中央職業能力開発協会	中央職業能力開発協会編 ◎渡辺一衛 武岡一成監修		
論文	eラーニングによる協調型学習の設計法と「生産システム設計」授業への適用	共著	2005年	日本教育工学会論文誌 Vol.29, No.3 pp349-358	寛宗徳、山田哲男、高橋道哉、◎渡辺一衛		
論文	eラーニングによる「生産システム設計」に関する授業内容の開発	共著	2005年	電気学会論文誌, Vol.125, No.4, pp653-659	寛宗徳、山田哲男、高橋道哉、◎渡辺一衛		
III 学会等及び社会における主な活動							
文部科学省科学技術・学術審議会専門委員会(委員)							
日本設備管理学会(理事)							
武蔵野市社会教育委員会(委員)							
日本経営工学会(監事)							
スケジューリング学会(理事)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	特別任用教授	氏 名	若林 功	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 解析科目の再構成		2005年以降	学部改編に伴い、理工学部全学生に数学の基礎力を付けるために、従来1年次に1年間で教えていた内容を、十分に時間をとり1年半かけて、すなわち、2年次前期迄かけて学習するようにと科目構成の変更を学部へ提案し、実施した。すなわち、従来の解析Ⅰ、解析Ⅱに対して、解析Ⅰ、解析Ⅱ、解析Ⅲを設置することとした。解析Ⅲにおいては、これを必修科目とする学科では、解析Ⅰ、解析Ⅱと同様に、演習の時間を別に設けて、学生が十分に勉強できるようにした。なお、この変更に伴い、部分方程式の初歩を解析の内容に加えた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 解析Ⅱ、線形数学Ⅰの補充テキストの作成		2005年8月、 2006年3月	解析Ⅱ補充テキスト「微分方程式」及び「微分方程式略解」の作成。学部改編に伴い、解析Ⅱの内容を変更し、微分方程式の初歩を1年次後期のこの科目で教えることになった。従来使用していた教科書はそのまま使うこととし、微分方程式については教科書に記載がないので、補充テキストとして作成した。補充テキストには演習問題も載せ、学生の勉強の助けとして、同時に演習問題の解答を別冊「微分方程式略解」として作成した。線形数学Ⅰ補充テキスト「複素数と複素平面」の作成。複素数と複素平面は理系学生にとって必修の項目であるが、近年高等学校では複素平面については教えられていないので、補充テキストを作りこれを教えることとした。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	On a Family of Cubic Thue Equations with 5 Solutions	単著	2003年	Acta Arithmetica, 109, 285-298	I. Wakabayashi		
論文	Number of Solutions for Cubic Thue Equations with Automorphisms	単著	2007年	Ramanujan J. 14, 131-154	I. Wakabayashi		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本数学会							
アメリカ数学会							
フランス数学会							

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	池上 敦子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 授業毎の小テスト・確認テストの実施		2006年4月～現在	前回の授業内容を復習すると同時に、当日の授業への円滑な導入のために、毎授業の初めに10～15分程度の小テスト形式の演習を行っている。解答は、一部の学生に板書させ、それを採点する過程を説明しながら、各自の解答を赤ペンで採点させる。採点結果を集め、正しく解答できているか、正しく採点できているかをチェックしている。また、重要な問題は、形を変え複数回出題することにより、十分な理解を深める工夫をしている。これらは、内容は全く異なるものの、基本プログラミング、アルゴリズムとデータ構造IとII、それぞれにおいて、おこなっている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作の配布資料の利用とWEBへの公開		2006年4月～現在	1年生に対する基本プログラミングでは、自作のプログラム例や教科書に載っていないポイント等をまとめた資料を作成し(授業中のパワーポイント資料にすると同時に)学生に配布し、重要なポイントや、レポートや課題等をWEB上にも公開している。同様に、2年生のアルゴリズムとデータ構造Iにおいても、アルゴリズムを実装した例や問題データ等を配布すると同時にWEB上に公開している、また、3年生のアルゴリズムとデータ構造IIにおいても、洋書を学生用に訳してまとめた資料を作成して配布している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 他大学大学院における非常勤講師(集中講義)		2008年1月	東北大学経済経営学専攻博士前期課程「産学連携による実践型人材育成事業」における講義パート：イノベーションをマネジメントするための経営戦略の「情報価値論」の集中講義を、統計数理研究所の北川源四郎所長、樋口知之副所長、土谷隆教授とともに担当した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	A Subproblem-centric Model and Approach to the Nurse Scheduling Problem	共著	2003年	Mathematical Programming, Vol.97, No.3, pp.517-541	Atsuko Ikegami, Akira Niwa		
論文	Scheduling doctors for night duty	単著	2004年	Modeling Efficiency & Quality in Health Care (Proceedings of the 29th Meeting of the EURO Working Group on Operational Research Applied to Health Services), pp.135-145	Atsuko Ikegami		
論文	CFSI(蓄積的疲労指標インデックス)回答データの入力方法に関する研究	共著	2005年	人間工学, Vol.41, No.3, pp.161-166	渡邊真利, 池上敦子, 大倉元宏		
論文	ナース・スケジューリング-調査・モデリング・アルゴリズム-	単著	2005年	統計数理, Vol.53, No.2 pp.231-260	池上敦子		
論文	Bounds for staff size in home help staff scheduling	共著	2007年	Journal of the Operations Research Society of Japan, Vol.50, No.4 (招待論文)	Atsuko Ikegami, Aki Uno		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本オペレーションズ・リサーチ(学会誌編集委員)							
日本人間工学会(評議委員)							
Mathematical Programming Society							
日本情報処理学会							
日本経営工学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	岡本 秀輔	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 出席カードを用いた小テスト		2007年4月 ～2008年1月	出席カードの裏面を使い簡単な演習問題を毎回行うようにすることで、授業内容の確認をさせるようにした。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 「応用プログラミングテキスト」		2007年9月	1年次後期必修科目の「応用プログラミング」の講義用テキストを執筆、この科目は「応用プログラミング実験」と進度をそろえているので、プログラミング実験のヒントとなる例題を中心として構成している。また、1年次科目であるためにプログラムの省略はほとんどせずに、紙面の例題を入力するだけで動作が確認できる内容を心がけた。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 「小学生にも使える対話型アニメーション記述言語 Islay」		2007年3月2日 ～3月3日	小学校における情報教育のあり方の検討と実践を目的とした Open School Platform プロジェクトに参加し、その成果を「平成18年度Eスクエア・エポリューション成果発表会」(主催:経済産業省 財団法人コンピュータ教育開発センター)において発表した。岡本は表記の原稿の筆頭として執筆し、共著者である茨城大学工学部鎌田教授により発表を行った。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 研究室開発ソフトウェアを用いたプログラミング教育		2005年4月～現在	状態遷移図を用いることで、物事の論理的なつながりとプログラミングとの関係をつかむことを目標とする授業を1年前期「フレッシュマンゼミ」において行っている。この授業の中で、上記3であげた Islay という研究室で開発したソフトウェアを使い、ほぼマウスだけの指定で行える対話型アニメーションプログラミングの演習を実践している。テキストエディタを用いることのない直感的なインターフェースによって、丸と矢印から構成される状態遷移図を作成する。これによりプログラミングにおけるさまざまな工夫に集中できることを確認している。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	ソフトウェア分散共有メモリにおけるアクセス履歴に基づくホーム移動	共著	2004年	情報処理学会論文誌: コンピューティングシステム, Vol. 45, No. SIG 6(ACS6), pp. 66-74	©岡本秀輔, 阿部拓弥		
論文	状態遷移図に基づく対話型アニメーション作成ツールの提案	共著	2005年	情報処理学会論文誌: プログラミング, Vol. 46, No. SIG 1(PRO 24), pp. 19-27	©岡本秀輔, 鎌田賢, 中尾隆司		
論文	対話型アニメーション作成ツールにおけるGBA用プログラムコードの生成手法	共著	2005年	情報処理学会シンポジウムシリーズ, Vol. 2005, No. 4, pp. 29-30(査読付きインタラクティブ発表)	©山本瑞秋, 米倉達広, 岡本秀輔		
論文	A Network Game Based on Fair Random Numbers	共著	2005年	IEICE Transactions on Information and Systems, Special section on CyberWorlds, Vol. E88-D, No. 5, pp. 859-864	©M. Kamada, K. Kurosawa, Y. Ohtaki, S. Okamoto		
論文	状態遷移図に基づくビジュアル Web ブラウザ・プログラミングの提案	共著	2006年	電子情報通信学会和文論文誌 D, Vol. J89-D, No. 10, pp. 2246 - 2250	©山本瑞秋, 米倉達広, 岡本秀輔, 鎌田賢, 荒木俊郎		
III 学会等及び社会における主な活動							
情報処理学会							
電子情報通信学会(2種サイバーワールド研究会専門委員)							
日本ソフトウェア科学会							
IEEE Computer Society							
ACM							

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	小方 博之	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ものづくりに対する動機付け、及び論理的文章を書く訓練に関する工夫		2005年～現在	ものづくりに対する動機付けを行うために指定の重量を支えることのできる紙製の橋を製作させている。製作の際には、橋の重量をできるだけ軽くするように指示し、学生たちが独自の工夫をこらすように促している。製作した橋は全員の前で重量測定し、耐荷重実験を行っている。更に、行った独自の工夫を特許明細の形でまとめるよう課題を出している。特許明細の書き方を学ぶことによって、論理的文章を書く訓練となり、また理系では欠かせない特許をはじめとする知的所有権の理解につなげていくことをねらっている。明細は個別に添削し、修正すべき点をインタラクティブに説明することにより、論理的文章を書くことに対する学生の理解が深まるよう工夫している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「新版 機構学入門」(共著)		2004年4月30日	理工学部専門科目の「機構学及び機械要素」の教科書である。従来の「機構学入門」(井原・松田著)を抜本的に改編し、初学者に解りやすく、より深い学習を進める際の道しるべとなる教科書をめざした。そのために、内容を精選し、図表が豊富で数式が少なく、簡潔でわかりやすい文章となるように工夫を凝らした。特に自分の担当した章では、企業等に依頼をして、実物の写真をできるだけ多く集めて掲載するよう意識した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 武蔵野市 土曜学校 成蹊大学ロボット教室 講師		2005年～現在	小学生のものづくり体験と工学に対する興味の醸成のために、武蔵野市の要請に応じて、夏休みにロボット教室を実施している。教室は講義、研究室見学、及び実習から成る。講義では映像やクイズを多用して小学生のロボットに対する興味を引き出すように工夫している。また、実習では参加者にロボットキットを与え、実際に手を動かしてもらっている。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	新版 機構学入門	共著	2005年	日新出版	松田孝(編著)、野飼亨、曾我部雄次、轟直佳明、小方博之、佐藤元有(共著)		
論文	CCDカメラによる作業手順認識を利用した実技評価システム	共著	2005年	日本テスト学会誌 Vol. 1, No. 1, pp. 41-50	©小方博之、五十嵐俊介		
論文	状態認識の不確実性を考慮した実技評価システム	共著	2006年	日本テスト学会誌 Vol. 2, No. 1, pp. 101-111	©小方博之、山本紗恵子		
論文	Analyzing and Evaluating Robot Motion Algorithm for Sweeping Task	共著	2006年	Mechatronics for Safety, Security and Dependability in a New Era, Elsevier, pp. 93-96	©Yuki Saito, Akinori Ezawa, Yusuke Fukumoto, Hiroyuki Ogata and Akira Torige		
論文	人間の動作データを用いたスキルの自動評価	共著	2007年	日本テスト学会誌 Vol. 3, No. 1, pp. 49-58	©小方博之、河合岳、山本紗恵子		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本テスト学会 理事, 第6回大会 実行委員長							
日本機械学会 関東支部関東学生会 会員校役員							
精密工学会 学術講演会(春季・秋季) オーガナイザ							
日本行動計量学会 第36回大会 実行委員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	笠原 和夫	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 図を豊富に取り込んだ教材		2006年10月～12月	2006年度前期に開講の「弾・塑性学」の教材作成に当たり、説明図を多く取り込み理解のし易さに配慮した。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 「エレクトロメカニクス実験Ⅰ」実験テキスト		2007年9月	実験テーマ「モデリングマシンによる加工」を執筆。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	ボールエンドミル切削における切りくず生成状態と切削抵抗の予測(第1報)ー球体部の切れ刃形状と切削模型ー	共著	2003年	精密工学会誌, 69巻, 3号, pp.396-401	笠原和夫, 広田明彦, 笹井洋介		
論文	ボールエンドミル切削における切りくず生成状態と切削抵抗の予測(第2報)ー計算結果と実験結果との比較検討及び幾何的相似性に基づく切削抵抗の予測ー	共著	2003年	精密工学会誌, 69巻, 4号, pp.524-529	笠原和夫, 広田明彦, 笹井洋介		
その他	難削材料のドリル加工における切れ刃形状の最適化	共著	2006年	平成13～15年度科研費(基盤研究(C)(2))報告書, pp.1-127	広田明彦, 笠原和夫		
その他	斜面のボールエンドミル加工における工具挙動と仕上げ面生成機構の解析(第1報)	共著	2006年	2007年度精密工学会春季大会学術講演会講演論文集, pp.907-908	笠原和夫, 広田明彦, 齋藤雅和		
その他	CNC旋盤による加工での加工精度向上について	共著	2007年	2007年度精密工学会秋季大会学術講演会講演論文集, pp.659-660	笠原和夫, 広田明彦		
III 学会等及び社会における主な活動							
精密工学会							
日本機械学会							

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	柴田 昌明	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 出席カードを用いた小テスト		2003年度～2007年度	担当科目「電磁気学」は、網羅する領域分野が広く、かつ、それぞれの小分野ごとの知識蓄積が必要な内容といえる。そこで、7章構成の科目内容において各章終了時に小テストを実施した。章ごとの重要ポイントを中心とした問題を出題したことにより、授業進捗に応じた理解と知識の蓄積を促すことができた。それと同時に、学生の理解度を把握することができ、学生の実力に対応した授業難度に調整することができた。				
2. 作成した教科書、教材、参考書 「モーションコントロール」		2004年12月20日	島田 明 編著 (4名による協同執筆)、(株)オーム社発行、ISBN: 4274200051、電気学会・オーム社の共同企画による教科書シリーズの一つであり、本学理工学部エレクトロメカニクス学科3年次配当の専門選択科目「モーションコントロール」の教科書。				
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項 全国大学電気系教官会議への参加		2003年8月1日	全国の国公私立の大学の電気系の学科の連携組織で、各大学の学科から代表者が出席して討議する場である同会議に参加し、事例研究やパネルディスカッション等を聴講した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	センサの知能化とシステムの高度化最新技術	分担執筆	2007年	電気学会	柴田昌明 他		
論文	Non-delayed visual tracking of a moving object with target speed compensation	共著	2007年	IEEE International Conference on Mechatronics	© Masaaki Shibata・Nobuaki Kobayashi		
論文	ステレオビジョンロボットを用いた移動対象に対する追従法	共著	2007年	電気学会論文誌, 127-D, 6, 643-650	©小林伸彰・柴田昌明		
論文	ハンドアイビジョンシステムのための近似型窺視動作制御法	共著	2007年	電気学会論文誌, 127-D, 6, 651-652	©市川麻里子・元木聡・柴田昌明		
論文	A study of optimal angle of color vector for optical flow extraction	共著	2007年	SICE Annual Conference 2007, International Conference on Instrumentation, Control and Information Technology	© Masaaki Shibata・Tomoki Yanagisawa		
III 学会等及び社会における主な活動							
電気学会 上級会員：産業応用部門研究調査運営委員会1号委員、産業応用部門産業計測制御技術委員会2号委員、モーションコントロールの先進応用協同研究委員会 委員長、環境適応型モーションコントロール協同研究委員会、センサシミュレーションによるシステムの多機能化協同研究委員会 委員、産業応用部門大会 論文委員会 委員、東京支部 学生員委員会 委員							
精密工学会							
日本ロボット学会							
Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) : Industrial Electronics Society 論文委員会 委員, International Conference on Advanced Motion Control 論文委員会 委員							
電子情報通信学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	鈴木 誠一	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 教職科目における実験指導		2006年9月～現在	高校理科教員のため、生物の実験講義を実施。臨海指導によって、生物実験における観察の大切さを理解してもらう。また、生徒が考える講義を作る際の手がかりとなることを狙っている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「電磁気学」日新出版		2006年	電磁気学をわかりやすく解説するための基礎的教科書。主に Maxwell 方程式から電磁界とその波動について解説。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	電磁気学	共著	2006年	日新出版	中川美紀雄, 鈴木誠一, 他2名, 4番		
その他	“A Novel Electrohydrodynamics Pump for Conductive Solution Using Asymmetric AC Field”		2003年	The 7th Conference on Miniaturized Chemical and Biochemical System, 1, pp.515-518			
	“Non-Invasive Long Term Monitoring of Skin Thermal Resistance Using Thermal Insulation Method”		2006年	ISBME2006, Bangkok			
	“Improvement of Auditory Localization by Tracking Head Motion”		2007年	International Conference on Information and Computer Engineering 2007, Kitakyushu Japan			
III 学会等及び社会における主な活動							
電気学会							
生物物理学会							
生体医工学会							
IEEE							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	鳥毛 明	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u> 学生主導型プロジェクト「ロボコン活動」の運営		2003 年度～2007 年度	学生が主体となって, ロボットの開発を行う活動を企画し, 対外的にロボットコンテストに参加することを目標とする活動を企画して, 学生に参加者を募りロボコンに参加している。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
その他	2 足歩行ロボットのエネルギー消費の解析 ～消費エネルギーの少ない遊脚軌道の探索～	共著	2007 年	ロボティックス・メカトロニクス講演会 2007	©鳥毛明, 大橋高雄		
その他	地形傾斜角度を考慮したパワーアシスト車いすの開発	共著	2007 年	ロボティックス・メカトロニクス講演会 2007	©馬場道子, 鳥毛明, 藤沼康仁		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本機械学会							
計測自動制御学会							
日本ロボット学会							
自動車技術会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	中野 有紀子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) プロジェクト型の研究指導		2005年10月 ～2008年3月(前職まで)	グループで1つのシステムを構築する課題を与え、学生同士がプロジェクトのメンバーとして協力し合い、学生自身がプロジェクト管理を行う実践的な教育を実施した。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 「認知的ユーザインタフェース」の講義コンテンツの作成		2005年10月 ～2008年3月(前職まで)	認知心理学の実験事例を豊富に取り入れ、授業の中で簡易的な実験を実施し、学生の理解を深める教材を工夫して作成した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 中野有紀子, 塚原渉, 中川正樹, 黒須正明 題目: 欧米におけるHCI教育の動向 掲載誌: 情報処理学会誌 情報処理, Vol. 48, No. 11, pp. 1242-1250, 2007年11月.		2007年11月 (前職まで)	欧米の大学のユーザインタフェース設計・評価技術者の養成プログラムを視察し、その報告を情報処理学会誌に掲載				
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD研修会への参加		2008年4月	FD研修会に参加し、学生への接し方、質問への答え方などをワークショップ形式で学んだ。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	Modeling Human-Agent Interaction Using Bayesian Network Technique, New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI 2007 Conference and Workshops, Miyazaki, Japan, June 18-22, 2007, Revised Selected Papers.	分担執筆	2007年	Lecture Notes in Computer Science, pp. 5-12	©Nakano, Y., Murata, K., Enomoto, M., Arimoto, Y., Asa, Y., and Sagawa, H		
著書	エージェントによるしぐさと視線のコミュニケーション	分担執筆	2007年	人と共生するエージェント 3.2 節, 東京電機大学出版	山田誠二(編)・中野有紀子		
著書	Attentional Behaviors as Nonverbal Communicative Signals in Situated Interactions with Conversational Agents	分担執筆	2007年	Engineering Approaches to Conversational Informatics, John Wiley & Sons Inc.	In Nishida, T. (Ed.)・ ©Nakano, I. Y., and Nishida, T.		
論文	Cards-to-Presentation on the Web: Generating Multimedia Contents Featuring Animated Agents	共著	2006年	the International Journal on Multimodal Interfaces, Vol. 1No. 1, pp41-48, Springer Press.	©Nakano, Y. I., Murayama, T., Okamoto, M., Kawahara, D., Li, Q., Kurohashi, S., & Nishida, T.		
論文	会話エージェント-会話コンテンツ伝達のためのユーザインタフェース	共著	2006年	人工知能学会誌 特集:「会話情報学」, pp150-155.	©中野有紀子 西田豊明 Igor S. Pandzic		
III 学会等及び社会における主な活動							
電子情報通信学会 HCG ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会 副委員長							
電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーションⅢ小特集号(英文論文誌D) 編集委員(2007)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	久富 寿	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 新聞記事の活用		2006年4月1日～現在	最新の情報を学生に理解させるため、新聞記事や雑誌のコメントなどを例に挙げ、各々考え方をまとめさせた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作のプリント等配布資料		2006年4月1日～現在	講義で配布するプリントをノートに添付できる大きさにしている。板書とプリント添付により、学生のノートが単位取得後に教科書として使用できるような工夫をしている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 平成19年度FD推進会議参加		2007年8月6～7日	新任専任教員を対象として、現代社会において期待される大学教員像について、参加者全員で意見交換する機会が静岡県浜松市で開催された。私立大学専任教員として、担当正課科目の授業力向上を図るとともに、各大学の個性ある教育理念に関する理解を深め、カリキュラム運営や学生支援活動などに積極的に貢献していくことの重要性についても、FDの観点から総合的に考える機会となった。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Identification of an alternative splicing transcript for the resistin gene and distribution of its mRNA in human tissue.	共著	2004年	Eur J Endocrinol. 151:151-4.	Nihira T, Nagao K, Kameyama K, Nakai H, Fukumine N, Ozabe K, Kitaro S, Hisatomi H		
論文	Expression of hTERT mRNA in a mortal liver cell line during S phase without detectable telomerase activity.	共著	2005年	Int J Mol Med. 15:683-8.	Nagao K, Ohyashiki JH, Ohyashiki K, Tabata K, Takai K, Kameyama K, Kitano S, Kawano K, Hibi N, Kanamaru T, Hisatomi H		
論文	Quantitative relationship between functionally active telomerase and major telomerase components (hTERT and hTR) in acute leukaemia cells.	共著	2005年	Br J Cancer. 92:1942-7.	Ohyashiki JH, Hisatomi H, Nagao K, Honda S, Takekuni T, Zhang Y, Sashida G, Ohyashiki K		
論文	Improved method of plasma 8-Isoprostane measurement and association analyses with habitual drinking and smoking.	共著	2006年	World J Gastroenterol. 12:5846-52.	Kitano S, Hisatomi H, Hibi N, Kawano K, Harada S		
論文	Isolated erythrocythemia: a distinct entity or a sub-type of polycythemia vera?	共著	2007年	Jpn J Clin Oncol. 38:230-2	Ohyashiki K, Kiguchi T, Ito Y, Gotch A, Tsuchi T, Miyazawa K, Kimura Y, Hisatomi H, Ohyashiki JH		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本癌学会							
日本消化管学会							
日本血液学会							
日本分子生物学会							
がん分子標的治療研究会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	准教授	氏 名	武藤 健一郎	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「スポーツの科学」における教育内容・方法の工夫		2005年4月1日 ～2007年3月31日	理工学部からの新規開講の「トレーニングの科学」では、パワーポイント資料作成とともに、視覚的効果のある授業を行っている。また毎回スポーツトレーニングについての講義だけでなく体験（体カトレーニング、メンタルトレーニング、技術トレーニングなど）をさせ、学生の教養を高めるための工夫をしている。また毎回、それらに関する自己の生活への応用へのレポートを課し、学生の理解の確認と出席率向上への工夫をしている。これらのことは授業評価にも反映され、ほぼ高い値で評価されている。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 2007年度武蔵野地域五大学教養講座「生活に密着した理工学と科学技術」スポーツと眼：何を見て行動をとるのか		2007年7月21日	理工学部開催で行われた2007年度の武蔵野地域五大学教養講座「生活に密着した理工学と科学技術」において、「スポーツと目：何を見て行動をとるのか」というテーマで公開講座を担当した。概要としては視機能の説明から、スポーツにおける眼の役割をとおり、眼の重要性を説き、視機能のトレーニングの紹介を行った。				
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	剣道の歴史	編著	2003年	(財)全日本剣道連盟	杉江正敏ほか15名		
その他	不思議かみ合わせの剣道効果—かみ合わせとマウスピース、打突の研究と工夫—	単著	2007年	剣道時代3月号, 136-139	武藤健一郎		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本体育学会							
日本武道学会							
日本武道学会剣道専門分科会(幹事)							
身体運動文化学会							
日本スポーツ教育学会会員							

所 属	理工学部	職 名	講 師	氏 名	戸谷 希一郎	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) キーワード出席票の導入		2008年4月1日 ～7月31日	授業出席票を兼ね、毎回、授業内容のトピックに関するキーワードを指定した感想文の提出を求めた。これにより、学生の出席状況を知るとともに理解度を随時、把握しながら授業を進めた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『糖鎖科学の新展開』		2005年8月19日	糖鎖に関する研究を行っている国内の化学者、生物学者、物理学者が一同に会し、関連項目のトピックについて執筆した糖鎖科学全般を扱った専門書。大学院生及び一般の研究者向けの内容である。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Synthetic substrates for an endoplasmic reticulum protein folding sensor, UDP-glucose: glycoprotein glucosyltransferase	共著	2005年	Angewandte Chemie International Edition, 44, 7950-7954 (2005).	©Kiichiro Totani, Yoshito Ihara, Ichiro Matsuo, Hiroyuki Koshino, Yukishige Ito		
論文	High-mannose-type glycan modifications of dihydrofolate reductase using glycan-methotrexate conjugates	共著	2006年	Bioorganic Medicinal Chemistry, 14, 5220-5229 (2006).	©Kiichiro Totani, Ichiro Matsuo, Yoshito Ihara, Yukishige Ito		
論文	Substrate specificity analysis of endoplasmic reticulum glucosidase II using synthetic high-mannose-type glycans	共著	2006年	The Journal of Biological Chemistry, 281, 31502-31508 (2006).	©Kiichiro Totani, Yoshito Ihara, Ichiro Matsuo, Yukishige Ito		
論文	VIPL has sugar-binding activity specific for high mannose-type N-glycans, and glucosylation of the α 1,2 mannotriosyl branch blocks its binding	共著	2007年	Glycobiology 17, 1061-1069, (2007).	©Daisuke Yamaguchi, Norihito Kawasaki, Ichiro Matsuo, Kiichiro Totani, Hideto Tozawa, Naoki Matsumoto, Yukishige Ito, Kazuo Yamamoto		
論文	Effects of macromolecular crowding on glycoprotein processing enzymes	共著	2008年	Journal of the American Chemical Society 130 (6), 2101-2107 (2008).	©Kiichiro Totani, Yoshito Ihara, Ichiro Matsuo, Yukishige Ito		
III 学会等及び社会における主な活動							

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	伊 東 拓	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	An Efficient Method for Implicit Surface Reconstruction with Attributes	共著	2005年	In Proceedings of ICNAAM 2005, pp. 280-283, Rhodes	Taku Itoh, Susumu Nakata, and Takashi Kitagawa		
論文	Implicit Surface Reconstruction of 3D Objects: Preconditioned Iterative Methods for the CSRBF-Type Linear Systems	共著	2006年	Electronics and Communications in Japan, Part 3, Vol. 89, No. 4	Taku Itoh, Takashi Kitagawa, and Susumu Nakata		
論文	MPU 法に基づく色情報付き陰関数曲面の生成	共著	2006年	電子情報通信学会論文誌, Vol. J89-D, No. 6, pp. 1391-1402	藤本大地, 伊東拓, 仲田晋, 北川高嗣, 岡将史, 田中寛		
論文	多重連結領域数値等角写像の Padé 近似を用いた電荷点配置法	共著	2006年	日本応用数学会論文誌, Vol. 16, No. 3, pp. 149-164	呂毅斌, 伊東拓, 櫻井鉄也		
論文	An Application for Reconstructing Surfaces from 3D Scattered Point Data for Use on Dual-Core Systems	共著	2007年	In Proceedings of ICNAAM 2007, pp. 275-279, Corfu	Taku Itoh, and Yoshifumi Kanda		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本応用数学会(正会員)							
情報処理学会(正会員)							
電子情報通信学会(正会員)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	岩 田 理	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 理学基礎実験		2005年度～現在	実験実習のみではなく、理論的な計算指導や、レポートの添削フィードバックの内容を盛り込んだ。				
2.作成した教科書、教材、参考書 理学基礎実験テキスト・理学基礎実験補助テキスト		2005年度～現在	理学基礎実験のテキスト（化学）の部分を作成した。補助テキストは、初めて実験を受ける学生が実験の記録を記述するノートの書き方を詳細に説明している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌（書）・ページ数等	編者・著者名		
論文	Novel Photochromic Behavior of Benzylhemithioindigo Based on Photodimerization.	共著	2004年	Chem. Lett., 33(7), 848	Kiyoshi Tanaka, Kazuto Taguchi, Satoru Iwata, and Takeyuki Irie		
論文	An intermolecular quine shuttle based on porphyrin-quinone recognition.	共著	2005年	J. Porphyrins and Phthalocyanines, 9(4), 262	Kiyoshi Tanaka, Kazuto Taguchi, Satoru Iwata, and Hiroto Obara		
論文	Application of Benzoyl-Substituted Hemithioindigo as a Molecular Switch in Porphyrin-Quinone Recognition.	共著	2005年	Supramolecular Chem., 17(8), 637	Kiyoshi Tanaka, Kazuto Taguchi, Satoru Iwata, and Takeyuki Irie		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本化学会							
日本武道学会							

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	浦崎 浩平	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 学生実験、演習の指導		2005年4月 ～2007年3月	安全面も含めて実験内容を細かく説明した上で、実際の実験中においても適宜注意、指示を与えた。レポート課題については、実験終了後にヒントを与え、提出されたレポートは、なるべく詳細なコメントを加えた上で再提出させることで、より深く理解させるとともに、脱落者がでないように配慮した。必要に応じてHPを使って回答を提示した。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	9. Catalytic Activities and Coking Resistance of Ni/perovskites in Steam Reforming of Methane	共著	2005年	Appl. Catal. A., 286, 23-29	©K. Urasaki, Y. Sekine, S. Kawabe, E. Kikuchi, M. Matsukata		
論文	7. Hydrogen Production via Steam-Iron Reaction Using Iron Oxide Modified with an Exceedingly Small Amount of Palladium and Zirconia	共著	2005年	Appl. Catal. A., 288, 143-148	©K. Urasaki, N. Tanimoto, T. Hayashi, Y. Sekine, E. Kikuchi, M. Matsukata		
論文	6. Hydrogen Production by Steam Reforming of Ethanol Using Cobalt and Nickel Catalysts Supported on Strontium Titanate	共著	2005年	Chem. Lett., 34, 668-669	©K. Urasaki, K. Tokunaga, Y. Sekine, E. Kikuchi, M. Matsukata		
論文	A Novel Method for Hydrogen Production from Liquid Ethanol/Water at Room Temperature	共著	2008年	Chem. Commun., 78-79	©Y. Sekine, K. Urasaki, S. Asai, M. Matsukata, E. Kikuchi, S. Kado		
論文	Hydrogen Production by Steam Reforming of Ethanol over Co/La _{1-x} Sr _x BO ₃ (B = Al, Cr, Mn, Fe) Catalysts	共著	2008年	J. Jpn. Petrol. Inst., 51, 83-87	©K. Urasaki, Y. Fukuda, Y. Sekine, M. Matsukata, E. Kikuchi		
III 学会等及び社会における主な活動							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	加藤 信彦	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u> 物質生命実験における説明用資料の作成		2006年4月 ～2007年12月	担当テーマにおける学生の内容理解の充実及び、レポート作成補助のために、テキスト以外に説明用のスライドの作成を行った。資料作成以前と比べ、学生の実験作業効率の向上及び理解度の向上が確認できた。(実験作業の監督及びレポートの評価により)				
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Theoretical study on the effect of solvent and intermolecular fluctuations in proton transfer reactions	単著	2004年	AIP Conf. Proc. 708, 755-756	N. Kato, T. Ida, and K. Endo		
論文	Structure analysis of immobilized-bovine serum albumin by means of TOF-SIMS	共著	2006年	e-Journal of Surface Science and Nanotechnology, 4, 614	Satoka Aoyagi, Makoto Dohi, Nobuhiko Kato, Masahiro Kudo, Shinichi Iida, Miyako Tozu, and Noriaki Sanada		
論文	Au クラスター一次イオン源を用いた TOF-SIMS 測定における二次イオン強度増大効果	単著	2006年	表面科学, 27(9), 518-522	工藤正博, 相本健一, 加藤信彦, 青柳里果, 飯田典子, 山本公		
論文	Simulation of resonant X-ray emission spectra of ethylene and benzene molecules	共著	2006年	Chemical Physics Letters, 426, 53-56	T. Ida, N. Kato		
論文	Evaluation of secondary ion yield enhancement from polymer material by using TOF-SIMS equipped with a gold cluster ion source	単著	2006年	Applied Surface Science, 252, 6547	K. Aimoto, S. Aoyagi, N. Kato, N. Iida, A. Yamamoto and M. Kudo		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本表面科学会							
日本コンピュータ化学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	小柳 文子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 視覚に訴えるような工夫 (パワーポイント・スライド・ビデオ教材の使用)		2005 年度～2007 年度	電気工学技術英語 (芝浦工業大学) では JABEE 取得のための必修科目として、英語によるプレゼンテーションの習得、基本的な技術マニュアルの読解、作成、英語論文の理解を目指した。従ってプレゼンテーションの習得では、実際の学会用プレゼンを演示したり、学生のプレゼンテーション発表のためのグループ学習、並びにコンテストなどを行った。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 KEK (高エネルギー開発研究機構) への見学		2003 年度～2007 年度	研究室の主要なテーマである物質の起原についての理解を深めてもらう意味から、毎年筑波研究センターにある KEK(高エネルギー研究開発機構) への見学会を行っている。 KEK では、B ファクトリー、LHC、陽電子加速器などの最先端の研究を見学するとともに、研究者との触れ合いによって高度な技術や知識に学際的な刺激と興味を持ってもらうように努力している。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Decision of the CEV Infrastructure Priority Order Using Genetic Algorithm	共著	2006 年	IEEE Vehicle Power and Propulsion (VPP) Conference CD-ROM, pp.1-6 September, 2006, Windsor, UK	©Koyanagi F., Aida Y., Kon T. and Yokoyama Y.		
論文	箱根彫刻の森美術館における時間指定お勧め経路表示システム	共著	2006 年	成蹊大学理工学部研究報告, Vol. 43, No.2, pp.1-8	©小柳文子, 東山新, 近匡		
論文	A New Configuration Approach for Refueling Stations of CEV from the View Point of Economy and Social Benefit	共著	2006 年	EVS-21, Monte Carlo, Monaco No.C1-329, pp.1-11	©Koyanagi F., Aida Y., Kon T. and Yokoyama Y.		
論文	ロジスティックモデルから求めた音楽 CD 売上げ予測	共著	2007 年	成蹊大学理工学部研究報告, Vol. 44, No. 1, pp. 55-61, 3. 2007	©小柳文子, 近匡, 総田有三		
論文	GA/SA 混合型アルゴリズムを用いた CEV 専用インフラストラクチャ最適配置	単著	2007 年	第 26 回エネルギー・資源学会研究発表会講演論文集, No. 4, pp.1-6, 6. 2007	小柳文子		
III 学会等及び社会における主な活動							
電気学会 (自動車統合電源システム調査専門委員, 男女共同参画推進特別委員会委員)							
IEEE (Power Engineering Society member)							
エネルギー・資源学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	坂本 昇一	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 初学者向けの物理シミュレーション計算機プログラムの開発		2003年4月1日 ～2008年3月31日	取り扱う基底関数の数が膨大になり、行列の対角化による系の固有状態を求める計算が複雑になる量子系の計算プログラムを量子力学の初学者でも扱えるようにモジュール化し、実際に1次元、2次元、3次元系におけるシミュレーションが実行可能なレベルに達するように工夫した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 物理シミュレーション計算機プログラムの作成と視覚化		2003年4月1日 ～2008年3月31日	物理シミュレーションの数値的な計算結果を出力するプログラムを作成した。物理現象の理解を深めるために数値データを視覚化して表示できるようにした。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Numerical analysis of transition temperature in Bose-Einstein Condensation	共著	2003年	Pysica B P329	©Shoichi Sakamoto, Shigeto Ichino, Hideki Matsumoto		
論文	Capacitive and inductive effects in multi-Josephson junction model in high T _c superconductors	共著	2003年	Pysica C P388	©Hideki Matsumoto, Shoichi Sakamoto, Satoshi Katoh		
論文	Stochastic Mechanical Approach to Electron Transfer in Acene Molecules	共著	2004年	Thin Solid Films 464&465 P433	©Shoichi Sakamoto, Mitsuyoshi Tomiya		
その他	シミュレーションによるナノデバイスの物性予測	単著	2007年	材料の科学と工学 44 巻5 号P2			
その他	ナノマテリアルの電子物性シミュレーション	単著	2007年	材料の科学と工学 44 巻5 号P8			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本物理学会							
粉体工学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	相良 直哉	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
III 学会等及び社会における主な活動							
電子情報通信学会							
情報処理学会							
映像メディア学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	菅沼 秀樹	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	「林野火災応急対策シミュレーション」モデルの検証—各務原市林野火災を例に—	共著	2004年	日本林学会誌, 86巻4号, pp.337-348	◎菅沼秀樹, 安部征雄, 吉武孝		
論文	乾燥地におけるデジタル航空写真解析による林分バイオマス推定手法の検証	共著	2006年	写真測量とリモートセンシング, 45巻3号, pp.12-23	◎菅沼秀樹, 安部征雄, 谷口雅彦, 山田興一		
論文	植生指数と植生分類による乾燥地の林分バイオマス推定の有効性の検討	共著	2006年	日本リモートセンシング学会誌, 26巻2号, pp.95-106	◎菅沼秀樹, 長谷修平, 安部征雄, 田内裕之, 小島紀徳, 山田興一		
論文	Shrub-land biomass estimation method for application to remote sensing	共著	2006年	Journal of Arid Land Studies, Vol.15, No.4, pp.259-262	◎Hideki Suganuma, Yukuo Abe, Hajime Utsugi, Hiroyuki Tanouchi, Toshinori Kojima		
論文	Stand biomass estimation method by canopy coverage for application to remote sensing in an arid area of Western Australia	共著	2006年	Forest Ecology and Management, Vol.222, pp.75-87	◎Hideki Suganuma, Yukuo Abe, Masahiko Taniguchi, Hiroyuki Tanouchi, Hajime Utsugi, Toshinori Kojima, Koichi Yamada		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本沙漠学会編集委員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	菅谷 麻希	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 理学基礎実験のTA		2005年9月～1月	学生が実験課題を理解できるよう質問や技術指導には個別または少数名ずつで対応した。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 SPP 事業 「教員研修 (学校で簡単に教えることができる組換え DNA 実験)」 での技術指導		2004年8月23日・24日, 2005年8月23日・24日	文部科学省による「組換えDNA実験指針」の告示(平成14年1月31日)以降, 中学・高校で遺伝子組換え実験を行うことが出来るようになったが, 現場の大多数の先生方はそれに関する知識と経験が乏しく, 実際に行うのは極度に難しいことと思いをしているのが現状である。本研修では, 現職の先生方に組換え DNA 実験の基礎知識と組換え DNA を用いての形質転換実験を体験してもらい, その意識を変えることにより, 今後, 理科教育の現場ですぐにでも本実験を実践してもらうことをねらいとした。また, 教員の組換えDNA実験に関する正しい理解と専門的知識を深めることを通じて, 将来の日本を担う生徒たちに対してバイオテクノロジーに関する科学的で正しい理解の普及を図った。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Tailoring the Peptide-Binding Specificity Of An RNA by Combinations of Specificity-Altering Mutations	共著	2008年	Nucleosides, Nucleotides and Nucleic Acids, Volume 27 Issue 5, Pages 534 - 545	Maki Sugaya, Futoshi Nishimura, Akira Katoh, Kazuo Harada		
論文	Facile detection of specific RNA-polypeptide interactions by MALDI-TOF mass spectrometry	共著	2008年	Journal of Peptide Science Volume 14 Issue 8, Pages 978 - 983	Maki Sugaya, Ryota Saito, Yuriko Matsumura, Kazuo Harada, Akira Katoh		
論文	Amino acid requirement for the high affinity binding of a selected arginine-rich peptide with the HIV Rev-response element RNA	共著	2008年	Journal of Peptide Science Volume 14 Issue 8, Pages 924 - 935	Maki Sugaya, Norikazu Nishino, Akira Katoh, Kazuo Harada		
III 学会等及び社会における主な活動							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	佃 俊明	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Luminescence of Copper(I) Dinuclear Complexes Bridged by Diphosphine Ligands	共著	2006年	Bull. Chem. Sci. Jpn., 2006, 79, 288.	Toshiaki Tsukuda, Ayaka Nakamura, Takashi Arai and Taro Tsubomura		
論文	A series of luminescent Cu(I) mixed ligand complexes containing 2,9-dimethyl-1,10-phenanthroline and simple diphosphine ligands	共著	2006年	Dalton Trans., 2006, 4444	K. Saito, T. Arai, Toshiaki. Tsukuda, and T. Tsubomura		
論文	Energy-Transfer Process in Crystals of Chiral and racemic double complex salts of [Co(ethylenediamine) ₃][Tb(2,6-pyridinedicarboxylate) ₃]	共著	2007年	Bull. Chem. Soc. Jpn, 2007, 80, 1140	Munetaka Iwamura, Toshiaki Tsukuda and Makoto Morita		
論文	Magnetic Interactions in a Series of Paramagnetic Ln(III) Complexes with a Chelated Imino Nitroxide Radical	共著	2007年	Polyhedron, 2007, 26, 3175	Toshiaki Tsukuda, Takayoshi Suzuki, Sumio Kaizaki		
その他	トピックス “二座ホスフィンが配位した銅(I)錯体の発光特性—高効率, 長寿命発光を目指して”	単著	2003年	化学と工業, 2003年, 56巻, 第6号	佃俊明		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本化学会							
錯体化学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	中野 武雄	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 物質生命 (物理) 実験, 実験準備		2006年4月	馬場教授及び実験担当各教員と連携し, 新学部のカリキュラムに対応した実験テーマ12項目を準備した。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 物質生命 (物理) 実験 I・II・III テキスト		2006年4月	「原子の励起とエネルギー準位」及び「半導体とpn接合」の項目を分担した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	ディスプレイ・光学部材における薄膜製造技術	分担執筆	2007年	情報機構, 第5章 第5節「スパッタリング研究における新展開」	星陽一; 他45名(45番目)		
論文	Gas Pressure Effects on Thickness Uniformity and Circumvented Deposition during Sputter Deposition Process	共著	2006年	Vacuum, 80, 7, 647-679	T. Nakano, S. Baba		
論文	Dielectric Breakdown Phenomena during Secondary Electron Emission Measurement of Sputter-Deposited MgO Films	共著	2006年	Jpn. J. Appl. Phys., 45, 10A, 7875-7878	T. Nakano, T. Fujimoto, D. Nakada, S. Baba		
論文	スパッタリング製膜プロセスの研究における最近の展開	単著	2007年	真空, 50, 1, 3-8	中野武雄		
論文	窒化チタンの反応性スパッタ製膜における真空環境の影響	共著	2007年	真空, 50, 4, 291-293	中野武雄, 星堅一郎, 馬場茂		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本真空協会 編集部会 幹事							
日本真空協会 スパッタリング及びプラズマプロセス技術部会 幹事							
8th International Symposium on Sputtering and Plasma Processes, Exective Committee member							
電気学会 メタルスパッタプラズマの高度化調査専門委員会 委員							
9th International Symposium on Sputtering and Plasma Processes, Exective Committee member							

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	二ノ宮 晃	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 学生実験用設備の改善と装置台数の増設		2007年9月	実験して得られる現象を把握するための設備として、PCを利用してデータを取得し、これの視覚化を行っています。毎年台数を増やしており、2007年度に6台増設し、4現象から7現象までの特性を一度に取り込み画面表示してデータを保存することが可能な設備を作成し、広く実験に役立たせています。現在、合計台数は18台で、ソフトウェアライセンスは20台です。				
2.作成した教科書、教材、参考書 学生実験指導書		2007年3月、9月	毎年、学生実験のテキストを手分けして改訂している。2007年度時点では、エレクトロメカニクス実験Ⅰ、Ⅱの改訂を実施した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 大学院生と共に国際会議に参加		2007年8月	研究室教授が指導された大学院生を連れて超伝導関係の国際会議に参加、学生の発表を支援すると共に、自身も1件の研究発表を行う。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Acoustic emission and disturbances in central solenoid model coil for International Thermonuclear Experimental Reactor	共著	2004年	Cryogenics 44, 15-27	K. Arai, A. Ninomiya, T. Ishigohka, et al		
論文	ファジー理論を用いた大型ヘリカル装置超電導コイルシステムのクエンチ検出	共著	2005年	低温工学, 40巻 3号, 93-99	安達弥真人, 二ノ宮晃, 瓜生芳久, 石郷岡猛, その他5名		
論文	AE Measurement of the LHD Helical Coils	共著	2005年	IEEE Transactions On Applied Superconductivity, Vol. 15, No. 2, 1423-1426	T. Ishigohka, T. Tsuchiya, Y. Adachi, A. Ninomiya, et al		
論文	Application of Peltier-Current-Lead for Reduction of Heat Leakage in Helium-Free-Magnet	共著	2005年	Transactions of the Materials Research Society of Japan, Vol. 30, No. 2, 527-530	Makoto Hamabe, Susumu Mizutani, Atsushi Sasaki, et al		
論文	Pulse height analysis on the balance voltage and acoustic emission signals for the LHD superconducting coils	共著	2006年	Science Direct, Fusion Engineering and Design 81 2561-2565	N. Yanagi, K. Seo, S. Imagawa, et al		
III 学会等及び社会における主な活動							
電気学会							
低温工学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	波多野 滋子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 学生実験において、より良いレポートを書かせる工夫		2003年度～現在	学生実験において、より良いレポートを書かせるために、詳しいコメントを加えると同時に質問に答え、提出回数にこだわらず、レポートを返却した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 エレクトロメカニクス実験Ⅰ・Ⅱ		2003年度～現在	エレクトロメカニクス実験Ⅰ・Ⅱの実験書				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	ポアラス吸気ダクトとヘルムホルツレゾネータ併用による車内音の音質改善効果-吸気系の対策効果について-	共著	2005年	自動車技術会論文集, Vol. 36, No. 3	©橋本竹夫・波多野滋子・ 学者者2名		
論文	映像とシート振動が車内音に与える影響について	共著	2006年	環境工学シンポジウム pp. 53-56	©波多野滋子・橋本竹夫		
論文	"Effect of visual scenery and seat-floor vibration to the perception of sound quality of car interior noise Part2: multiple regression model for the sound quality evaluation"	共著	2006年	Proceedings Inter-Noise2006, No. 205	©波多野滋子・橋本竹夫・ Sung-Hwan Shin		
論文	Cough sound as a symptom for health disorder for elderly people	共著	2006年	Proceedings Inter-Noise2006, No. 208	©Sung-Hwan Shin・ 波多野滋子・橋本竹夫		
その他	小型トラック車内音長時間暴露時のシート振動が眠気に及ぼす影響について	共著	2007年	騒音制御 vol. 31, No. 5	©波多野滋子・橋本竹夫		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本機械学会							
自動車技術会							
日本騒音制御工学会							
日本音響学会							

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	埜 大	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Improvement on the Accuracy of the Polynomial Form Extrapolation Model in Distributed Virtual Environment	共著	2007年	The Visual Computer, Springer Berlin/Heidelberg, vol. 23, no. 5, pp. 369-379, DOI 10.1007/s0037-007-0109-8	©D. Hanawa, T. Yonekura		
その他	Vital Information Sensing System Technologies and Experiments in the Next Generation Convergence Home Network	共著	2007年	Proc. of The 2nd International Symposium on Medical Information and Communication Technology 2007 (ISMICT'07), TS6-2 (CD-ROM)	©K. Oguchi, Y. Okazaki, S. Terada, Y. Kakishima, S. Yamakawa, D. Hanawa		
その他	On an Analysis of Pass Play in a Virtual Ball Game	共著	2007年	IEEE Proc. of International Conference on Cyber Worlds 2007, pp. 187-193	©K. Osato, Y. Kawano, T. Yonekura, D. Hanawa		
その他	A Multiuser Communication Environment with High Sense of Presence in the Next Generation Home Network	共著	2007年	Proc. of Taiwan-Japan Joint Conference on Communications Technology 2007, pp. 16-18	©D. Hanawa, A. Kono, S. Yamakawa, S. Terada, K. Oguchi		
その他	Traffic Management for Prioritized Information in the Next Generation Home Network	共著	2007年	Proc. of the Asia-Pacific Optical Communication Conference 2007, Conf. 6784-92 (CD-ROM)	©S. Yamakawa, S. Terada, K. Tojo, Y. Okazaki, Y. Kakishima, D. Hanawa, K. Oguchi		
III 学会等及び社会における主な活動							
電子情報通信学会 (マルチメディア・仮想環境基礎(MVE)研究会幹事補佐, 英文論文誌D「Human Communication III」小特集号編集委員, FIT2007 査読委員)							
日本バーチャルリアリティ学会(査読委員)							
IEEE							
ACM							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	松村 有里子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Development of fluorescent microgel thermometers based on thermo-responsive polymers and their modulation of sensitivity range	共著	2005年	J. Mater. Chem, 15, 2796-2800	K. Iwai, Y. Matsumura, S. Uchiyama, A. P. deSilva		
論文	Synthesis and thermo-responsive behavior of fluorescent labeled microgel particles based on poly(N-isopropylacrylamide) and its related polymers	共著	2005年	Polymer, 46, 10027-10034	Y. Matsumura and K. Iwai		
論文	Thermo-responsive behavior and microenvironments of poly(N-isopropylacrylamide) microgel particles as studied by fluorescent label method	共著	2006年	J. Colloid Interface Sci., 296, 102-109	Y. Matsumura and K. Iwai		
論文	Mass spectrometric and theoretical studies on the fragmentation mechanism of protonated molecules and molecular radical cations of organometallic compounds with Si-C, Si-Si, Ge-C and Ge-Ge bonds	共著	2006年	Surf. Interface. Anal., 38, 1650-1653	T. Takeuchi, Y. Shirai, Y. Matsumura, K. Iwai, T. Matsutani, J. Ohshita, A. Naka		
論文	Photon Force-Induced Phase Transition Dynamics of Single Hydrogel Nanoparticles in Water	共著	2007年	Acta Physica Polonica A, 112, S-57-S-70	C. Hosokawa, Y. Matsumura, H. Yoshikawa, K. Iwai, H. Masuhara		
III 学会等及び社会における主な活動							
高分子学会							
日本化学会							

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	村松 大吾	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) (早稲田大学にて) 大学3年生の前期科目であるプロジェクト演習の研究室での実験テーマの立ち上げ		2004年4月 ～2006年7月	3年生が3週間単位で研究室を回り、研究を体験するプロジェクト研究という授業があり、所属する研究室の実験内容の立案・準備・対応を行なった。具体的にはオンライン文字認識やオンライン署名認証の実験を立ち上げ、学生に実際に文字や署名を入力してもらうことでそれぞれの技術の体験、基本原理を知った上で自らそれらを改良する手法の考察、そしてそれらを纏めてのプレゼンテーション、の指導を行なった。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	A Markov Chain Monte Carlo Algorithm for Bayesian Dynamic Signature Verification	共著	2006年	IEEE Transactions on Information Forensics and Security	©Daigo Muramatsu, Mitsuru Kondo, Masahiro Sasaki, Satoshi Tachibana, Takashi Matsumoto		
論文	ユーザ共通 Fusion モデルを用いたオンライン署名認証	単著	2007年	電子情報通信学会論文誌 D, Vol. J90-D, No. 2, pp. 450-459	©村松大吾, 本郷保範, 松本隆		
論文	モンテカルロ法を用いたオンライン署名認証	共著	2007年	ヒューマンインターフェース学会論文誌, Vol. 9, No. 2, pp. 191-200, 2007	©村松大吾, 加藤雄大, 松本隆		
論文	Transmembrane Structure Predictions with Hydropathy Index/Charge Two-Dimensional Trajectories of Stochastic Dynamical Systems	共著	2007年	Journal of Bioinformatics and Computational Biology, vol. 5, issue 3, pp. 669-692	©Takashi Kaburagi, Daigo Muramatsu, Takashi Matsumoto		
論文	Effectiveness of Pen Pressure, Azimuth, and Altitude Features for Online Signature Verification	共著	2007年	2nd International Conference on Biometrics, Lecture Notes in Computer Science Vol. 4642, pp. 503-512, 2007	©Daigo Muramatsu, Takashi Matsumoto		
III 学会等及び社会における主な活動							
IEEE							
電子情報通信学会							
日本テスト学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 教	氏 名	吉田 清隆	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 研究室の大学院生との自主ゼミの実施		2005年4月1日 ～2007年3月1日	テスト理論, 医療統計学など, その時の大学院生の興味(研究テーマ)に関する標準的な書籍をピックアップし, 自主セミナーを実施することにより, 学生の知識の向上とともに向学心の促進を図る。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 PowerPoint による補助資料の作成		2006年4月1日～現在	2年次開講科目「応用プログラミング(再)」において既存のテキストの他に, 要点をコンパクトにまとめた補助資料を PowerPoint 作成し, 効率の良い講義の実現を図った。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	統計的データ解析入門 線形代数	共著	2006年	東京図書	岩崎学, 吉田清隆		
論文	多変量t母集団におけるMANOVAの次元検定について	共著	2003年	計算機統計学, 16, 2, 21-29	吉田清隆, 今井英幸, 佐藤義治		
論文	Upper Limits for Criteria for Tests of Dimensionality under Elliptical Populations	共著	2004年	Communications in Statistics, Theory and Methods, 33, 11, 2799-2816	Yoshida, K., Imai, H. and Sato, Y.		
論文	稀な事象の生起確率に関する統計的推測 -Rule of Three とその周辺-	共著	2005年	計量生物学, 26, 2, 53-63	岩崎学, 吉田清隆		
論文	不完全データに基づく1PLモデルにおける困難度パラメータの推定	共著	2006年	日本テスト学会誌, 2, 1, 65-73	吉田清隆, 渡辺琢也, 岩崎学		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本統計学会							
日本数学会							
日本行動計量学会							
応用統計学会							
日本テスト学会							

所 属	理工学部	職 名	助 手	氏 名	板村 賢明	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Theoretical Simulation of Atomic-Scale Peeling of Single-Walled Carbon Nanotube from Graphite Surface	共著	2006年	e-J. Surf. Sci. Nanotech., 4, 133-137	N. Sasaki, A. Toyoda, H. Saitoh, N. Itamura, M. Ohyama and K. Miura		
論文	Nanomechanical Studies of Superlubricity	共著	2007年	Current Nanoscience., 3, 105-115	N. Sasaki, N. Itamura, D. Tsuda and K. Miura		
論文	Superlubricity of Fullerene Intercalated Graphite Composite	共著	2007年	Jpn. J. Appl. Phys. 46, 5269-5274	K. Miura, D. Tsuda, N. Itamura and N. Sasaki		
論文	Simulation of Atomic-Scale Ultralow Friction of Graphite/C60/Graphite Interface along [1010] Direction	共著	2007年	Jpn. J. of Appl. Phys., 46, L1237-L1239	N. Sasaki, N. Itamura, and K. Miura		
論文	Simulation of Nanoscale Peeling and Adhesion of Single-Walled Carbon Nanotube on Graphite Surface	共著	2008年	e-J. Surf. Sci. Nanotech., 6, 72-78	N. Sasaki, A. Toyoda, N. Itamura, K. Miura		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本物理学会							
日本表面科学会							

所 属	理工学部	職 名	助 手	氏 名	伊藤 正英	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書 「専門教育用計算機システム 利用の手引き —2004 年度版—」(愛知県立大学情報科学部) の一部		2003 年 11 月~12 月	出身大学にて計算機演習室の学生アシスタントを務めた際、次年度の利用の手引きの一部執筆を担当した。担当部分は GNU PLOT というグラフ描画ツールの利用方法についてである。計算機演習室を利用する学生が、実験データをグラフ表示したり、文書整形システム LaTeX で利用可能なグラフを作成したりするための情報をまとめた。自ら経験してきたことなので、学生の視点で、分かりやすくかつ便利な情報のある内容になるよう心がけて執筆した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	劣駆動マニピュレータのフィードバック線形化における特異点を回避する最適運動計画法	共著	2005 年	計測自動制御学会論文集, Vol. 41, No. 8, pp. 652-659	©伊藤正英・戸田尚宏		
論文	IDA-PBC 法による 3 関節劣駆動マニピュレータの制御	共著	2007 年	計測自動制御学会論文集, Vol. 43, No. 9, pp. 788-797	©伊藤正英・戸田尚宏		
翻訳	劣駆動マニピュレータのフィードバック線形化における特異点回避	共著	2004 年	第 4 回計測自動制御学会制御部門大会, pp. 517-520, 北九州	©伊藤正英・戸田尚宏		
その他	IDA-PBC 法による 3 自由度劣駆動平面マニピュレータの制御	共著	2007 年	第 7 回計測自動制御学会制御部門大会, 論文番号: 063-2-3, 東京	©伊藤正英・戸田尚宏		
その他	Control of a three-joint underactuated planar manipulator —Interconnection and damping assignment passivity-based control approach	共著	2007 年	the Sixth International Workshop on Robot Motion and Control (RoMoCo '07), Bukow Dwork, Poland; Lecture Notes in Control and Information Sciences (LNCIS) 360, Springer-Verlag, London, pp. 109-118	©伊藤正英・戸田尚宏		
III 学会等及び社会における主な活動							
2005 年 3 月~9 月 愛・地球博 (愛知万博) 長久手町おもてなしボランティア							
2008 年 3 月 (~2010 年 3 月) 電気学会 産業計測制御技術委員会 モーションコントロールの先進応用に関する協同研究委員会 (MCAA) 幹事補佐							

所 属	理工学部	職 名	助 手	氏 名	大久保 雅文	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 隔週程度での小テスト・確認テストの実施と速やかな解説		2003年4月1日～現在	講義後に小テストを実施して理解度の確認を行った。テスト実施の次の授業の初めに答案を返却して解説を行った。解説後、答案を再回収しながら個別に対応して次回以降のやる気を出させる努力をした。				
2.作成した教科書、教材、参考書 教科書の内容を補足する資料の配布		2003年4月1日～現在	教科書に不足しているものを補足資料として作成し配布した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	ノートン則の応力指数の特性	共著	2005年	日本学術会議第54回理論応用力学講演会講演論文集	◎三田俊裕, 三角正明, 大久保雅文		
論文	高周波焼入焼戻し材の疲労に伴う表面圧縮残留応力の挙動	共著	2005年	日本機械学会山梨県講演会講演論文集	三角正明, 大久保雅文, 森田亮, 阿知波一起, 川崎一博		
論文	ゴムメタル線材のねじり疲労特性	共著	2006年	日本材料学会第55回学術講演会講演論文集	三角正明, 大久保雅文, ◎吉田真志		
論文	ラジカル窒化後ショットピーニングした SNCM435 鋼の超高サイクル疲労	共著	2006年	日本機械学会 2006 年度年次大会講演論文集	◎三角正明, 大久保雅文, 中山健太		
論文	SNCM439 鋼の軽衝撃付与超高サイクル疲労試験	共著	2007年	日本機械学会山梨県講演会講演論文集	三角正明, 大久保雅文, 曾田健嗣, 秋田聡志, 伊田英正		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本機械学会							
日本材料学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 手	氏 名	堀口 淳司	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
その他	創意的卒業研究: ソーラーカーの設計と製作	共著	2003年	成蹊大学工学研究報告 Vol. 40 No2	弓削康平, 堀口淳司, 渡辺大, 石井貞行		
その他	バッテリーカーの設計・製作とレース活動	共著	2005年	成蹊大学理工学研究報告 Vol. 42 No1	堀口淳司, 弓削康平		
III 学会等及び社会における主な活動							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	理工学部	職 名	助 手	氏 名	水町 忠弘	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) コンピュータプログラミングの授業における復習と出席 向上の工夫		2007年9月24日 ～2008年1月21日	授業開始時に前回の復習となる小テストを行い、所定の時間後に周囲の学生同士で答 案を交換し、相談したり教科書を見ながら自己採点を行う。1 時限のスタートから授業に 集中できることを狙った。				
2.作成した教科書、教材、参考書 エレクトロメカニクス実験 IIIb		2007年9月20日	学生が実験の目的や内容を理解し、グループごとに計画を立てて実験が進行できるよ うに作成した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	経営のためのオペレーションズリサーチ 入門	共著	2007年	現代図書	斎藤文・水町忠弘		
論文	直接金融による資金調達を中心とした投 資プロジェクトの収益性評価モデル	単著	2003年	IEレビュー, 44, 2, 73-78	水町忠弘		
論文	生産ラインの効率化のための累積流量図 とガントチャートの活用	共著	2004年	IEレビュー, 45, 5, 95-101	稲田周平・水町忠弘・ 橘秀範・田中俊作		
論文	Economic Evaluation of Multiple Investment Alternatives under Uncertainty Using Graphic Representation	共著	2006年	Industrial Engineering & Management Systems, 5, 2, 76-83	Kono, H. and Mizumachi, T.		
論文	Safety Analysis under Uncertainties for Investment Alternatives over Multiple Periods using the Total-Cost Unit-Cost Domain	共著	2008年	Journal of Japan Industrial Management Association, 58, 6, 411-422	Kono, H. and Mizumachi, T.		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本経営工学会							
日本オペレーションズリサーチ学会							
日本設備管理学会							

所 属	理工学部	職 名	助 手	氏 名	門馬 正	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 電気電子工学実験Ⅱ “ GPIB を用いた素子特性測定” の新設		2003年4月1日 ～2006年7月31日	手動操作により測定を行う方式とは異なる測定システムを導入した。パーソナルコンピュータに組み込んだ GPIB ボードを用いて、電圧計や電流計等のデータを読み取る測定システムである。測定プログラムについては講義演習等で講義を聴く機会がなく、学生自身が作成する初めての測定プログラムとなる。測定プログラムの習熟度を高めるため班単位でのディスカッション時間を設けた。また、班を 3 人構成とし脱落者を生じないように配慮した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 電気電子工学実験Ⅲ “ アナログ信号のコンピュータ入出力” の新設		2004年4月1日 ～2007年3月31日	デジカメ写真を多用したテキストを作成し、時系列データの理解を深められるようにした。従来、授業や演習で行われていないパーソナルコンピュータのインターフェース領域を主テーマにした実験である。実験では各個人別にプログラムの命題を与え、自ら考える能力を育てることに力点を置いた。それゆえ実験テキストとは別に視覚上の効果を考慮したテキストを作成し、時系列な信号波形の理解を心がけた。また、実験結果の報告はレポート提出だけではなく、班単位での口答発表会を行った。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 SEMI FPD Expo 2003, SEMI FPD Expo 2004 に展示		2003年4月9日 ～11日, 2004年4月7日 ～9日	東京ビックサイトで開催される SEMI FPD Expo はフラットパネルディスプレイ関係の展示会で、展示会場内に教育関係ブースがあり、他大学と共に研究成果等のパネル展示及び説明を行った。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 CE 受入側保安責任者		2005年4月1日 ～2007年3月31日	理工学部で教育研究に使用する超低温液化ガス(Cold Evaporator:CE)の保安責任者で、高圧ガス保安法の適用を受ける設備である。液体窒素の使用にあたっては、教育研究上の安全を確保することを最優先の目的とし、液体窒素の取り扱い方等の情報宣伝活動及び CE 設備の安全管理を行った。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
その他	C0F3 処理 Poly-Si 表面の光学的評価	共著	2004 年	第 51 回応用物理学関係連合講演会 No. 28p-P4-9	門馬正, 小菅雄史, 齋藤洋司		
その他	Optical Properties of Polycrystalline Silicon Surfaces for Solar Cells Treated with Chlorine Trifluoride Gas	共著	2005 年	International Conference on Electrical Engineering (ICEE2005), No. PS3-05	T. Kosuge, T. Momma, Y. Saito		
その他	New Method for Measurement of Glow Discharge Rate (Pg) on Inter-Glow-Arc Flip-Flop Transition	共著	2005 年	27th International Conference on Phenomena in Ionized Gases (27th ICPIG), No. P3-9	M. Nogaki, T. Kaneda, Y. Gotoh, D. Harigane, T. Momma, Y. Kawada, Y. Suginuma		
その他	Chlorine-trifluoride-textured Crystalline Silicon Solar Cells with Antireflective Nitride Films	共著	2006 年	International Conference on Electrical Engineering (ICEE2006), No. PS1-ME-07	H. Yamazaki, T. Kosuge, T. Momma, Y. Saito		
III 学会等及び社会における主な活動							
応用物理学会							

文 学 部

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	浅見 和彦	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 日本文学演習における文学研究の実践と工夫		2003年4月1日～現在	文学部3, 4年生30名ほどの演習。毎回, 2～3名の報告者を決め, 報告者は事前研究を数度にわたって行い, その成果を毎度30枚(A3)ほどの報告書を作成する。演習の当日, それに基づき, 約4時間にわたって報告, 質疑を行う。報告者は2週連続して担当する。それらの過程の中で, 文学の可能性に迫る。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 宇治拾遺物語・十訓抄		2007年12月30日	小林保治との共著。小学館発行。中学校, 高校などでよく読まれる説話文学の教科書。読み易さを優先して, 口語訳を最初に掲出し, 原文を後掲する。古典文学の普及を目指した企画に基づいた出版。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 シンポジウム「中世の風景・景観・環境」		2003年5月24日	中世文学学会大会(於 聖徳大学)で保立道久, 田淵向美子の二氏とともに行ったシンポジウム。現代の混迷する環境・景観問題に中世文学の立場からどのように教育・研究していくかの発表と討論。なお, その概要は「中世文学」(第49号 平成16年3月)に既に掲載されている。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 「日本古典文学・旅百景」 NHKカルチャーアワー 文学の世界		2008年1月5日 ～3月29日	NHK第2放送で全13回にわたって放送されたもの。毎週土曜日, 午後9時30分から10時まで(翌週月曜日午前10時40分から11時10分に再放送)。京都, 江戸, 鎌倉, 平泉など古典文学の舞台を原文を参照しつつ, 紹介, 歴覧した。多くの視聴者から好意的な感想をいただいた。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	壊れゆく景観-消えてゆく日本の名所-	共著	2006年	慶應義塾大学出版会	川村晃生, 浅見和彦		
著書	日本古典文学・旅百景	単著	2008年	NHK出版	浅見和彦		
論文	伴大納言の出自—東国文学史稿(8)	単著	2007年	成蹊国文	浅見和彦		
論文	東国の「論理」, 東国の「道理」—東国文学史稿(7)	単著	2007年	文学部紀要	浅見和彦		
その他	古事談抄選釈(四)	共著	2008年	成蹊人文研究	浅見和彦		
III 学会等及び社会における主な活動							
中世文学会(委員)							
説話文学会(委員)							
東アジア文化会議							
NHK文化センター講師							
朝日カルチャーセンター講師							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	新屋 重彦	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミナールにおいて個別のテーマに即した指導をゼミナール学生と共同で行うような方法をとっている。		2003 年度～現在	ゼミナールにおける発表者の内容を共有するためのコメントを決め、それぞれが批判的に共有できるようなゼミナールに努めている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 毎回独自のプリントの作成		2003 年度～現在	教材としてのプリントを作成・配布し、これについてレスポンスペーパーを提出させて理解を深められるよう努めている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD 講演会への参加等		2003 年度～現在	FD 講演会に参加したり、関連する文献を読み、質の高い教育を目指している。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『辺線のアジア』	共著	2007 年	明石書店 24-57	阿部年晴、綾部真雄、 新屋重彦		
論文	生活の中に福音がひびくイエスのわき腹を見つめて	単著	2008 年	オリエンズ宗教研究所 福音宣教 66-71			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本宣教会							
「宗教と社会」学会(編集委員)							
カトリック神学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	池上 裕子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	中近世移行期の土豪と村落	編著	2005年	岩田書院	池上裕子・藤木久志 他		
著書	永原慶二の歴史学	編著	2006年	吉川弘文館	池上裕子・池享 他		
論文	日本における近世社会の形成	単著	2006年	『歴史学研究』821. 2-12	池上裕子		
論文	越後国阿賀北の「安田領検地帳」について	単著	2006年	『成蹊大学一般研究報告』38. 1-34	池上裕子		
その他	武士や被官のいる戦国の村	単著	2006年	『千葉史学』49. 82-101	池上裕子		
III 学会等及び社会における主な活動							
歴史学研究会							
日本史研究会							
史学会							
歴史科学協議会							
文化審議会文化財分科会第三専門調査会委員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教 授	氏 名	揖 斐 高	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要			
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 日本文学入門Ⅱにおける変体仮名習得のための工夫		2007年9月 ～2008年1月		1年生用の演習科目である日本文学入門Ⅱにおいて、古典文学作品を本格的に読解するために必要になる変体仮名の習得のため、独自の変体仮名ドリルを作成した。そして、まずそのドリルを自習させて変体仮名の基本を覚えさせた。その後、比較的簡単に読みやすい江戸時代の絵本である赤本や黄表紙を翻読用のテキストとして授業時間中に読ませて変体仮名に馴れさせ、学期の後半には西鶴の浮世草子の板本コピーを配布し、それらがまよ読めるようになるまで練習させた。学期末には小テストを行って達成度を見たが、意欲のある学生ならば半期の授業でも変体仮名がかなりのレベルまで読めるようになったことが確認できた。			
2.作成した教科書、教材、参考書 日本の古典—江戸文学編		2006年3月20日		放送大学のラジオ授業科目「日本の古典—江戸文学編」の印刷教材として、鈴木健一と共同編集し、そのうちの「第1章 総論」「第4章 旅」「第13章 ノンフィクション」「第15章 異国」を執筆した。日本近世文学の概要と面白さを啓発するためのテキストとして編集したものであり、本学日本文学科の1年生用の授業科目である「日本文学入門」のテキストとしても用いた。			
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 シンポジウム「日本語日本文学研究の未来—博士課程の目指すもの」		2008年3月1日		熊本県立大学大学院の日本語日文学専攻に博士後期課程が設置されたのを記念して開催されたシンポジウムにパネラーとして招聘されたもの。文学部の日本語日文学科及び大学院の日本語日文学専攻の教育・研究のあり方と未来の可能性について意見を述べ、討議した。			
4.その他教育活動上特記すべき事項 講演「蜀山人大田南畝の実像—文人・役人・家庭人」		2008年3月8日		東京都新宿区原宿の太田記念美術館の「蜀山人大田南畝展」の開催に先駆けて行われた公開講座での講演。江戸時代後期に漢詩・狂歌・狂詩・戯作など幅広いジャンルで活躍し、伝説化された文人でもあった大田南畝の実像を多面的に捉えた、一般の人々を対象にした啓蒙的な内容のものである。			
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	漢詩文集(新日本古典文学大系明治編)	共著	2004年	岩波書店	揖斐高・入谷仙介 他		
著書	日本の古典—江戸文学編	共編著	2006年	放送大学教育振興会	揖斐高・鈴木健一		
著書	詩本草	単著	2006年	岩波書店	揖斐高		
論文	賀茂真淵の和歌添削—自筆本『真淵評草廬和歌集』を通して	単著	2006年	『国語と国文学』83巻8号, 16ページ			
論文	海棠の花、蘭の香—近世後期女流詩一斑	単著	2007年	『文学』隔月刊8巻3号, 14ページ			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本近世文学会(常任委員)							
俳文学会							
東京大学国語国文学会							
独立行政法人人間文化研究機構国文学研究資料館(運営委員)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	大熊 昭信	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書 Milestone English Reading, 新興出版社啓林館 Milestone English Reading Teacher's Manual 新興出版社啓林館, (1~286 頁) (共著) (同上の指導書)		2006 年 4 月	平成 16 年 4 月から使用する文部省検定済み教科書高英 B の教科書 (1~159 頁) を, 5 名の共著者の編集長として著述し, あわせてその指導書も作成した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	「ロレンスの言説の政治学——『息子たちと恋人たち』をめぐって」	単著	2004 年	『成蹊大学一般研究報告』第 35 巻第 1 分冊, 1~28 頁			
論文	「独裁者と服従とイエローベリル——ロレンスの『アーロンの杖』をめぐって」	単著	2004 年	『成蹊英語英文学研究』第 9 号, 1~26 頁			
論文	「ロレンスの『失踪した女』と言説の政治学」	単著	2005 年	『成蹊大学文学部纪要』第 40 号, 127~154 頁			
論文	「ロレンスの根源的記号活動——その詩の解釈をめぐって」	単著	2006 年	『成蹊英語英文学研究』第 10 号, 9~62 頁			
論文	「物語の生成——開高健をめぐって」	単著	2007 年	『成蹊英語英文学研究』第 11 号, 1~28 頁			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本英文学会							
日本ロマン派学会							
IASIL 学会							
大塚英文学会							
20 世紀英文学研究会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	奥野 昌宏	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 演習(ゼミ)において、教科書を使用する前期授業では予習レポートを、テーマ発表を中心とする後期授業では発表にたいするコメントペーパーを毎回全員から提出を求める。		2003年度～2007年度 4月～7月 9月～1月	左記方策により、学生の授業への参加意識の向上並びに理解促進及び関心の涵養を図る。同時にこのことをとおして、教員が学生の理解度や勉学意欲の実状をより的確に把握し、教育の適正化に結び付けることができる。				
2.作成した教科書、教材、参考書 講義科目の独自教材プリントの作成		2003年度～2007年度 4月～7月 9月～1月	各講義科目に対応した独自の教材を作成・配布し、これに基づいて授業を進めることで、授業内容の理解促進を図っている。また授業内容に関連する時宜にかなった話題も適宜取り上げ、ビデオや新聞記事等も使用しつつ学生の社会的関心の触発に努めている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD講演会への参加		2007年9月20日	大学主催のFD講演会に参加し、教育の質向上を図った。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	マス・メディアと冷戦後の東アジア—20世紀末北東アジアのメディア状況を中心に—	編著	2005年	学文社	奥野昌宏(編著), 著者8名		
著書	日韓の相互意識の実状とメディア	単著	2008年	『ニュース報道と市民の対外国意識』 慶應義塾大学出版会 155-176ページ	伊藤陽一・河野武司(編)		
論文	대한/대일 의식의 현상과 미디어의 역할 — 미래의 한일 관계를 향해서	単著	2005年	『東西言路』(韓国外国語大学校言論情報研究所) 第20号 PP.63-79			
論文	日韓両国民の相互意識とメディアの役割 — 新たな関係の構築に向けて —	単著	2007年	『成蹊大学文学部紀要』 第42号 85-102ページ			
その他	対韓・対日意識の現状とメディアの役割	単著	2005年	『メディアと韓日関係』(韓国外国語大学校言論情報研究所セミナー論集)			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本マス・コミュニケーション学会(編集委員)							
日本社会学会							
日本社会情報学会							
国際行動学会(副会長・理事)							
International Association for Media and Communication Research							

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	小野 尚美	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「英米文学科 教職についた卒業生の会」の企画及び開催		毎年8月の第1週目の 土曜日	本研究会は、成蹊大学を卒業して英語科教員になった人々、英語科教員を目指して勉強している在学生及び英語教育に関心のある人々の教職受験のための勉強、英語指導方法、学生指導などについての情報交換の場を大学として提供し、英語教育の向上の助けをしようという英米文学科の教員の熱意により始めた研究会である。毎年、成蹊大学を卒業して英語科の教員になった卒業生に講演を依頼するなど、この会の企画を担当している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『Sharing of Values and Feelings—みんなで分かち合おう、地球市民』(株)英進社 ISBN978-4-87252-089-7		2007年10月1日	この英語教材は、大学生の英文読解における躓きを取り除くための有効な読解ストラテジー使用を可能にする教材モデル開発と指導法研究「認知過程の分析に基づき言語処理能力を高めるためのリーディング教材モデルの開発研究」(平成12-13年度科学研究補助金研究)と「学力差による読解方略の違いを取り入れた高校英語教材モデルの開発と指導法の改善研究」(平成14-16年度科学研究補助金研究)の結果を基に作成された。辞書を引き語の意味を調べ、文解析を行いながら英文読解を行うという従来の読解法は、必ずしも英文読解能力を伸ばすものではないと考えられる。むしろ、既習語彙及び文法についての知識を活用し、躓きを取り除く練習問題を解きながら効果的な読解ストラテジーを習得できるよう指導すべきであるという考え方を基に、構成されている教材である。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 『躓き研究から得られたリーディング指導への示唆』 ELEC 同友会 英語教育学会・リーディング研究部会公開研究会にて特別講演 於：東洋英和女学院		2005年7月19日	英語を外国語として学んでいる日本人学習者の多くが英文読解過程でよく躓く原因として、語彙と文法があげられる。そこで、平成12年から14年にかけて行った日本人英語学習者の読解過程分析研究(「認知過程の分析に基づき言語処理能力を高めるためのリーディング教材モデルの開発研究」—平成12-13年度科学研究費補助金研究)から得られたリーディングにおける躓きの原因について述べるとともに、そこから示唆された指導方法について発表した。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール研究開発校：(私立)法政大学第一中・高等学校指導アドバイザー		2006年4月 ～2009年3月	(私立)法政大学第一中・高等学校は、文部科学省から「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(通称SELHD)」に指定され、「多元的なTBL(Task-based Learning:タスク中心学習)の導入により英語コミュニケーション能力の飛躍的向上を実現する授業法、教材、カリキュラムの開発及び授業実践に関する研究」を研究課題としている。そこで、その指導アドバイザーとなり、年に数回の公開授業の参観をし、意見交換を行っている。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	英語の「授業力」を高めるために—授業分析からの提言—	共著	2005年	三省堂・54-62頁	高梨庸雄, 他8名		
著書	言語科学の百科事典	共著	2006年	丸善株式会社・204-205, 208-209, 212-213, 214-215, 224, 230-231, 244-245頁	鈴木良次編, 他73名		
論文	The relationships among Vocabulary Knowledge, Strategy Use, L2 Reading Comprehension and Proficiency	共著	2005年	成蹊英語英文学研究 第9号67-88頁	小野尚美, 他4名		
論文	学力差による読解方略の違いを取り入れた高校英語教材モデルの開発と指導法の改善研究(平成14-16年度科学研究費補助金研究-基礎研究C-研究成果報告書)	共著	2005年	(株)精丹社 制作・44-62頁	緑川日出子, 他4名		
論文	リスニングを取り入れた英文読解指導	単著	2006年	成蹊大学教職課程年報, 第15号, 10-15頁	小野尚美		
III 学会等及び社会における主な活動							
TESOL(Teachers of English to Speakers of Other Languages)							
JACET(大学英語教育学会)							
英米文化学会							
日本認知科学学会							
英語授業研究会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教 授	氏 名	門口 充徳	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミで実施したアンケート調査の集計において、ホームページを作成し、必要なデータの入力と分析に役立てた。		2006年4月1日	調査データのクリーニング、単純集計、クロス集計といった課題があり、これをゼミ生が分担しながら作業を行った。また、この結果は、ホームページ上で発表した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 担当している講義科目については、自作のプリントを配付し、授業内容の理解に役立てた。		2007年4月1日	板書の時間を節約し、説明のための十分な時間を確保できた。また、特に必要な部分についての補足説明は板書を行うことで、学生に注意を喚起することができた。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	双分組織と社会構造 (1) —ボロロ社会における空間の構造化—	単著	2003年	成蹊大学文学部紀要	門口充徳		
論文	双分組織と社会構造 (2) —ボロロ社会における親族構造と交叉イトコ婚—	単著	2004年	成蹊大学文学部紀要	門口充徳		
論文	双分組織と社会構造 (3) —ボロロ社会における2と3の通約可能性—	単著	2005年	成蹊大学文学部紀要	門口充徳		
論文	デュルケムのトーテミズム論とレヴィ=ストロースの批判	単著	2006年	成蹊大学文学部紀要	門口充徳		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本社会学会							
日本社会史学会							
早稲田社会学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	木内 剛	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「教育原論Ⅱ」での、映像番組の活用		2007年9月～12月	人間の発達、人間と能力、教育改革、教育行政と教育の管理、いじめなどのテーマに関して、現実の姿の映像を見せることによって、関心を高め、事実によって既成概念を突き崩して、リアルな認識を得させた。事後の感想文には、満遍なく発見の満足感が書かれていた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『教育実習ハンドブック』の編著		2004年3月31日	教職課程必修科目「教育実践研究」のテキストであり、教育実習に臨む前に、基本的に必要な目的、方法、課題、全体の過程等を学ばせるとともに、実習における教材研究の進め方、生徒の見方、指導案の書き方について、各自の教科・科目・分野に応じて自学できるようにした。また、実習終了後の研究成果のまとめ方、発展的な実践研究のすすめ方について手引きとなるようにした。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 学習意欲を高める社会科の教育実践の発表		2005年10月2日	日本教育方法学会大会シンポジウムにて、標記の発表を行い、他のシンポジストやフロアーと討議を行った。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 現職教諭十年経験者研修講師		2003年8月12日 2004年1月7日8月12日 2005年1月12日8月12日 2006年1月7日	山梨県教育研修センターの依頼により、県立高校で地歴科または公民科を担当する教諭の十年経験者講習の実践研究指導にあたった。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	教育実習ハンドブック	分担執筆	2004年	学文社 63ページ	◎柴田義松, 木内剛		
著書	教育の方法と技術	共編著	2005年	学文社 31ページ	◎柴田義松, 木内剛		
論文	学習意欲を高める社会科の授業	単著	2006年	教育方法35(日本教育方法学会編) 14ページ	木内剛		
論文	オーストラリアの社会と教育 —クインズランド州に滞在して	単著	2008年	成蹊大学教職課程指導室年報第17号 13ページ	木内剛		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本教育学会							
日本社会科教育学会							
日本教育方法学会							
日本カリキュラム学会							
日本教師教育学会(常任理事)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	久保田 篤	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「実践漢字講座」におけるゲストスピーカーの活用		2006年11月	財団法人日本漢字能力検定協会に出張講義を依頼し、漢字の特質や、企業が求める漢字能力、日本漢字能力検定の内容などの点について、担当者に話をしてもらった。講義後に学生に感想を書かせたところ、いつもの大学の授業とは異なる内容で新鮮だった、大変興味深かったとする者が多かった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「新訂 日本語の歴史」		2005年3月20日	文学部日本文学科専門科目(選択必修)「日本語の歴史B」のテキストであり、室町時代の日本語、江戸時代前期の日本語、江戸時代後期の日本語について解説した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 時代のニーズに合った新科目の企画・実施		2006年4月～現在	日本語力錬成科目のうち、「実践漢字講座」の企画を行って、ふさわしい担当者を考えるとともに、1クラスを担当して、社会が求めている漢字能力を身につけることを目的とした新科目を実施している。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	新訂 日本語の歴史	分担執筆	2005年	放送大学教育振興会	近藤泰弘・月本雅幸・杉浦克己		
論文	仮名遣い史における近松浄瑠璃本の位置	単著	2003年	武蔵野文学 第51集			
論文	滑稽本を資料とした日本語研究について	単著	2004年	日本語学 第23巻第12号			
論文	片仮名本『因果物語』の仮名表記について	単著	2008年	成蹊国文 第41号			
その他	新編 新しい国語	分担執筆	2005年	東京書籍			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本語学会							
訓点語学会							
近代語学会							
東京大学国語国文学会							

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	下河辺 美知子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 演習 I, II, III, IV (3, 4 年生) における卒論指導 (報告書の提出、添削返信、及び卒論発表会、卒論合評会)		2007 年 5 月 ～2008 年 1 月	卒論指導は 5 月より開始し、執筆中の 4 年生のみでなく、次年度に卒論をひかえた 3 年生にも卒論ができあがっていく過程を演習の授業内で体験させている。4 年生には 7 月と 9 月に中間報告書を書かせる。一回目の分については夏休み中に添削し自宅へ返送。二回目の分をもとに 10 月に個人面談。その後、卒論レジメを書かせ、全員分を印刷し小冊子を作成。11 月はじめに卒論発表会を催して一人 15 分 (発表 10 分質疑応答 5 分) ずつ発表し、学生同士でレスポンスをかわしあい自分の卒論内容についての意識を高めていく。12 月の卒論提出後、コピーを交換し合い、互いの卒論についての評価・コメントシートを作り 1 月の合評会で交換しあう。3 年生はそれによって自分の卒論の準備にスムーズに入っている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『トラウマの声を聞く――共同体の記憶と歴史の未来』		2007 年 4 月 1 日	文学部英米文学科専門必修科目「アメリカ文学史 I, II」の参考テキストとして使用。「歴史」という概念を再考するきっかけとし、記憶が共同体にとってどのように記録されていくかについての洞察をうながす。本書の中から一章を選びレポートを課す。提出させ、教員が評価した後、アットランダムに配布し、自分のところにたまたま来た報告書 (レポートを書いた本人の名前は記名してある) にたいして、レスポンスペーパーを書かせる。それを再び集め、レポートを書いた本人に渡す。学生としては、教員からの評価にくわえ、同じ課題について書いた他のクラスメートからのレスポンスを受け取ることができる。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 コミュニケーション学会関東支部における講演		2007 年 6 月 1 日	講演タイトル「トラウマについての研究成果を教育・研究にいかにかかすか」				
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD 講演会への参加		2007 年 9 月 20 日	大学主催の FD 講演会に参加し、教育の質向上を図った。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌 (書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	トラウマの表象と主体	共著	2003 年	新曜社	森茂起・下河辺美知子・ 中井久夫・西澤哲・ 加藤幹幹朗・港道隆他		
著書	埋葬と亡霊―トラウマ概念の再吟味	共著	2005 年	人文書院	森茂起・下河辺美知子・ 中井久夫・高橋哲哉・ 白川美也子・港道隆他		
著書	トラウマの声を聞く――共同体の記憶と 歴史の未来	単著	2006 年	みすず書房	下河辺美知子		
論文	アメリカ国家のメランコリー――記号の バイオニア J. バトラーのスピーチアクト	単著	2006 年	現代思想, 2006 年 10 月号	下河辺美知子		
論文	「核」の空間 / 言語の空間 ―― containment と deterrence のレトリック	単著	2008 年	アメリカ研究 特集:核の空間 42 号	下河辺美知子		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本英文学会 (評議委員)							
日本アメリカ文学会 (東京支部副議委員)							
日本アメリカ学会 (評議委員, 編集委員)							
日本ナサニエル・ホーソーン協会							
Modern Language Association							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	石 剛	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	増補版・植民地支配と日本語	単著	2003年	三元社	石剛		
著書	現代中国の制度と文化	編著	2004年	香港社会科学出版社	石剛		
著書	日本の植民地言語政策研究	単著	2005年	明石書店	石剛		
論文	近代東アジアの言語政策と言語意識	単著	2004年	シンガポール国立大学東アジア研究所『東亜論文』45号	石剛		
III 学会等及び社会における主な活動							

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	高田 昭彦	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「現代社会の諸問題」において、聴講生が問題設定をし、学生に問いかける授業をしたこと。		2006年6月18日	一人の学生が日本の外交政策として、重武装中立（核兵器保有）を提言したことに対して、50代から70代の女性3人の聴講生が反発し、憲法9条の改正をめぐる戦争を知らない現在の学生たちの意見を聞きたいと申し出があり、彼女らが問題提起者となり、授業で討論することを許可しました。彼女らの資料及びこちらからの新聞資料などから、「集団自衛権の行使、憲法9条の改正」についての彼女らの問いかけと、重武装側の学生からの問いかけを行い、フロアの学生も含めて熱い議論が行われました。講義を普通に聴いている側からの積極的な行動は、マスコミも注目し、その日の授業は、翌日の『朝日新聞』では武蔵野版と多摩版に、『読売新聞』では武蔵野版で、写真を含めて紙面の半分を取る大きさと報道されました。				
2.作成した教科書、教材、参考書 前期「現代社会の諸問題」と後期「現代社会の理論」において、今まさに生じている社会問題に取り組むことのできる独自の教材をつくったこと。		2006年度、2007年度	前期「現代社会の諸問題」において、『朝日』、『毎日』、『読売』、『日経』の4紙のシリーズ記事や社説から、格差問題、環境問題、人口減少問題、働き方の問題などテーマごとに記事をまとめ、独自の教材をつくったこと。後期「現代社会の理論」において、『中央公論』、『文藝春秋』、『世界』、『論座』などの総合雑誌から、同様の方法で論文をまとめ、独自の教材にしたこと。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 「トピックセミナーD」において、地域のまちづくり活動に密着し、地域住民から直接まちづくりのノウハウを教えももらったこと。		2007年度	武蔵野市ではコミュニティセンターの運営委員会が担当区域のまちづくりを進めている。そのうちのひとつである「けやきコミュニティセンター」を対象に、地域のイベント、地域通貨（エト）研究会に参加して地域活動の実態に触れると共に、現代表と元事務局長2人にインタビューした。書物を読社座学に限ることなく、授業も現場で行うなど、臨場感豊かな教育を行った。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	市民運動の新しい展開	単著	2003年	『都市問題』8月、69-84ページ			
論文	市民・NPOによる「公的空間」の創造	単著	2004年	『都市問題』8月、3-34ページ			
論文	市民運動の現在	単著	2004年	文化書房博文社、『社会運動研究入門』、80-110ページ	帯刀・北川編		
論文	武蔵野市におけるコミュニティづくり	単著	2006年	風間書房、『公助・共助・自助の主税』、17-63ページ	成蹊大学文学部学会編		
論文	Governance and Community Management of Public Assets: The Experience of Musashino, Japan	共著	2007年	"Review of Asian Pacific Studies"	Gavin Parker		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本社会学会							
環境社会学会							
日本NPO学会							
埼玉県NPO懇話会(座長)							
武蔵野市第6期コミュニティ市民委員会(委員長)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	竹内 敬子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「基礎演習Ⅰ・Ⅱ, 演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」		2007年4月 ～2008年3月	演習Ⅰ・Ⅱでは、学生自身による報告をさせる他、毎回、テキストの理解度を深め、著者の意見に対する自分の見解を持つ手助けになるような問題リスト(毎回20題くらい)を作成し配布し、授業内でそれに基づくグループディスカッションを行っている。また、演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは、それぞれの学年に応じた「研究の方法」に関するプリントも毎回配布し、適宜課題を与え、実際の作業を通じて、自ら調査研究し発表出来る能力を身につけさせる工夫をしている。演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは、メンバーのMLを作成し、個人研究・卒論に関する質問にML上で対処することにより、学生間で研究の方法上、多くの者が直面する問題への対処についての情報を共有出来るようにしている。				
2.作成した教科書,教材,参考書 「イギリスの歴史と文化A・B」		2007年4月 ～2007年3月	毎回自作のプリントを配布している。「イギリス人とサッカー」など、「イギリスの歴史と文化」を理解する上で役立つ映像資料を解説する「コラム」を設け、学生が授業内容に興味を持てる内容にする工夫をしている。「コラム」で紹介した映像の一部(10～15分程度)を実際に見せる時間も設けたり、残りの部分を各自が授業外の時間で見られるよう教材を図書館に預けるなどの工夫もしている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表,講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 HPの作成		2003年4月～現在	HPを作成し、学生への情報発信に役立っている。これは卒業生との交流にも役立っており、4年間にことまらない広い意味での教育にも役立っている。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	国際文化研究の現在—境界・他者・アイデンティティ(「イギリス工場法と女性労働者—1870年代前半のウェスト・ヨークシャー地域を事例として」を担当)	共著	2005年	柏書房	松浦弘義他		
著書	『西洋史の新地平—エスニシティ・自然・社会運動』(「第13章 1875年デューズベリー・ストライキと女性労働運動」を担当)	共著	2005年	刀水書房	佐藤青隆他		
著書	『イギリス近現代女性史入門』(「第4章第2節 イギリス工場法史研究が拓く視界—ジェンダー視点からの挑戦」を担当)	共著	2006年	青木書店	川村貞枝他		
論文	Forgotten Sisters: Factory Legislation and Gender in England, c. 1870-1900	単著	2007年	Ph. D, the University of Manchester			
III 学会等及び社会における主な活動							
社会政策学会							
社会経済史学会							
日本西洋史学会							

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	田辺 春美	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) WBT システム「もも吉」を利用した文学部英語教育の実践		2003年4月 ～2006年3月	文学部1, 2年全員を対象とした英語教育において, WBT システム「もも吉」を利用し, 特にリスニング力の養成に力点を置きながら 4 技能を総合的に伸ばす授業を実践した。その際に, 教材とシラバスを統一し, プレイスメントテストにより能力別クラス編成を行い, 統一された教材とシラバス, 評価のもとで効率の良く学力を向上させた。また, 「もも吉」での個人学習による選択科目として e-Learning English 科目を設け, 英文法の基礎, TOEFL, TOEIC 対策, 多読など徹底的な訓練を行った。1 年次履修後には約 20 点, 2 年次履修後までには 40 点 TOEFL-ITP が上昇しており (データは英米文学科の場合), 学習効果がみられた。学生アンケートや期末試験の結果と照らし合わせると, 成績上位群の学生は基本的な学習習慣を身につけており, 自立した学習スタイルをもっているのが非常に効果があったことがわかった。他方, 成績下位群の学生は学習したことを定着させるために, さらなる援助が必要であろう。この取組みの成果は, 「授業を WBT システム「もも吉」を利用した文学部英語教育の実践と効果-必修外国語科目「英語 I, II, III, IV-CO」と選択科目 e-Learning English の場合-」(共著)『成蹊英語英文学研究』10/149-79 を参照。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 「英語史 I, II」における学生用テキスト作製		2003年4月 ～2006年3月	古英語, 中英語, 初期近代英語のテキストは, 一般の英語史の教科書に掲載されているものでは語彙の解説が不十分であり, 学生は自分の学力で読み進むことが困難である。そこで, 本学の学生に適切なテキストのサンプルを抜粋し, 学生の学力で原典を読むことができるように詳細なグロスアリーをつけて配布した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 WBT システムによる e-Learning English 科目の実践とその効果 (共)		2005年9月	第 44 回(2005 年度) 大学英語教育学会全国大会で発表				
4.その他教育活動上特記すべき事項 語学学習における e-Learning の有効活用について		2007年6月	ニューエデュケーションエキスポのセミナーにおいて, 本学文学部で実践している e-Learning を活用した英語教育について講演を行った。WBT サーバー内の教材は集中型と分散型と 2 通りに有効活用することにより, 機器を無駄なく利用して学習効果をあげることができることを主張した。集中型とは必修の授業時に同時に教材を学習させる授業を指すが, 別枠の選択科目である e-Learning English 科目では学生は自由に好きな時間に教材にアクセスできる。このような二重の体制により, 大いに学習効果をあげることができる。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	The Ancrene Wisse—A Four—Manuscript Parallel Text Preface and Parts 1-4.	共編著	2003 年	Peter Lang	Tadao Kubouchi, Keiko Ikegami et al. (8 members, 5th)		
著書	The Ancrene Wisse—A Four—Manuscript Parallel Text, Parts 5-8 with Wordlists	共編著	2005 年	Peter Lang	Tadao Kubouchi, Keiko Ikegami et al. (8 members, 5th)		
論文	OED2-CD に見る give up -ing 構造の歴史的発達	単著	2004 年	『成蹊英語英文学研究』(大学・研究所等紀要, 8/ 79-98	田辺春美		
論文	Prefixed Verbs and Simple Verbs in AB Language 『実験音声学と一般言語学 城生 伯太郎博士 還暦記念論文集』	単著	2006 年	東京堂出版, 443-53	Harumi Tanabe		
論文	Mid and with in Ancrene Wisse Manuscript Texts Revisited, 中尾佳行他編 『テキストと言語 池上恵子教授記念論文集-』	単著	2007 年	英宝社, 143-57	Harumi Tanabe		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本英文学会							
日本中世英語英文学会 (評議員, 編集委員)							
近代英語協会 (理事)							
英語コーパス学会							
日英・英語教育学会 (運営委員長)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	中里 明彦	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ①授業における視聴覚資料の提示, ②授業におけるPC, インターネットの活用		2003 年度～現在 (②については 2005 年度)	①毎年度担当している「アメリカの歴史と文化A」及び「アメリカの歴史と文化B」において、パワーポイントによる提示を实践。歴史の理解を促進するため、地図・グラフ、組織図、写真・人物肖像画等を示すことにより歴史を実感させるよう心掛けている。同科目を含む講義においては、ビデオや音声テープ・CDなども利用している。 ②「国際社会セミナー」において、毎時間 New York Times (インターネット版) を教材として読ませるとともに、パワーポイントを使用した報告・発表を学生に指導。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 「アメリカの歴史と文化A」「アメリカの歴史と文化B」における配布資料		2003 年度～現在	同科目において毎年度配布する史・資料 (プリント) は、製本されてはいないが、アメリカ史 (2004 年度にあつてはアメリカ大統領選挙) に関する資料集として一般に十分通用しうる内容のものとして自負している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌 (書) ・ページ数等	編者・著者名		
III 学会等及び社会における主な活動							
アメリカ学会							
西洋史学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	灘光 洋子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	West Meets East: How Chinese Perceive and Interpret Japanese Communicative Behaviors	単著	2003年	日本コミュニケーション研究者会議 PROCEEDINGS, 13, pp. 1-41	Y. Nadamitsu		
論文	医者のパッドニューステリング・ストラテジーについての一考察: 模擬患者演習の事例をもとに	単著	2004年	Speech Communication Education, 17, pp. 51-70	灘光洋子		
論文	社会構築主義が異文化コミュニケーション研究に与える影響についての一考察: 方法論を中心として	単著	2006年	成蹊英語英文学研究, 10, pp. 133-147	灘光洋子		
論文	阿蘭陀通詞の歴史的貢献とマージナル性について: 異文化コミュニケーションの仲介人としての位置付けを中心として	単著	2007年	Human Communication Studies, 35, pp. 77-91	灘光洋子		
翻訳	女が医者になるとき: 医者と患者に見られる権力・地位・ジェンダーの構図	単訳	2004年	かつえ秋葉いいのるず・永原浩行訳編 『ジェンダーの言語学』 (pp. 49-82) 明石書店	灘光洋子		
III 学会等及び社会における主な活動							
多文化関係学会 (理事)							
異文化コミュニケーション学会 (査読委員)							
日本コミュニケーション学会							
異文化間教育学会							
日本通訳学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	浜田 雄介	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) リアクションペーパーを利用した学生による小講義と討議		2007年9月25日 ～2008年1月8日	各テキストごとに、(1) 最初に学生は初読の感想をリアクションペーパーに書く。(2) 教員はすべての学生のそれを要約していくつかの項目ごとにまとめ、一覧にして学生に配る。(3) 項目ごとに、学生の代表者を決め、代表はその項目に属する意見を適宜関係づけつつ自らの読みを発表する。(4) 発表に対して全員でディスカッションをする。(5) 教員が、適宜補足やまとめ、講評をする。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作資料プリント 学生のリアクションの要約プリント		2007年4月17日 ～2007年7月17日	入手の難しい作品を扱ったので、テキストも含め、必要に応じてプリントを作成した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD 講演会参加		2007年9月20日	成蹊大学で行われたFD 講演会に参加した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	明治・大正・昭和の大衆文化	共著	2008年	彩流社	◎日比野啓		
論文	少年探偵小説における足跡	単著	2003年	『新青年』趣味	浜田雄介		
論文	乱歩をはぐくんだもの 明治名古屋の読書空間	単著	2004年	国文学 解釈と鑑賞(別冊)	浜田雄介		
論文	ミステリー・SF一仮説のドラマツルギー	単著	2008年	国文学 解釈と鑑賞(別冊)	浜田雄介		
その他	子不語の夢―江戸川乱歩小酒井不木往復書簡	編集	2004年	皓星社	江戸川乱歩 小酒井不木 (浜田雄介編)		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本近代文学会							
昭和文学会(幹事・編集委員)							
東京大学国語国文学会							
『新青年』研究会							

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	林 廣 親	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミナール形式の授業の性格を生かした総合力育成の段階的教育方法の研究		2003年4月～現在	二年生まではグループによる発表を原則として、資料の収集整理とそれを前提とした作品研究へのアプローチの力を培うことに教育の重点を置く。その場合学生にその作業の意味を十分理解させ、情報収集の技術と研究対象の分析(読み解き)を最終的には一人でこなせることが目標であることを自覚させつつ授業を進める。発表者以外の学生には毎回対象となっている作品について400字のメモを授業のはじめに提出することを義務づける。これは毎回回収し評価を下して次回返却する。学期を通じて見た場合S～Dにいたる評価の変化が学生にとってはおのずから学修の励みになることをねらったものである。三年生以上のゼミでは原則としてグループ発表はこなさない。ただしメモの提出は同様である。4年生には3年の12月に於ける要領説明会をへて、春休みにプレ卒論を書かせ、秋には授業時間外の指導として卒論中間発表会を催している。通例二日間朝から晩までの集中学習になるが、これには3年生も出席を義務づけている。ただし大学のカリキュラムではこれらはカウントされない授業であり、出席の強制は難しい。				
2.作成した教科書、教材、参考書 1 『国語国文学研究の成立』 2 自作プリント		1 2007年 2 2003年4月～現在	1 放送大学の大学院用テキスト 2 ゼミナール形式の授業では、データ収集の方法、研究の進め方、発表要領についてのプリントを適宜用意する。また発表資料の見本を数種類配布して説明し、発表に備えさせる。講義科目では、毎回の講義内容のスケルトンを作成し、必要な資料をつけて配布している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD関連		2007年4月～現在	学部のFDのための基本資料として、FD関連の書物を収集し、系統的整理とFD研究にむけた準備を進めている。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	20世紀の戯曲 II 現代戯曲の展開	共著	2003年	社会評論社	西村博子・井上理恵・林廣親他		
著書	国語国文学研究の成立	共著	2007年	放送大学教育振興会	長島弘明・猪狩友一・近藤泰弘・屋名池誠・林廣親		
論文	岡田八千代「黄楊の櫛」を読む - 鴉外・李太郎の影 -	単著	2005年	演劇学論集 日本演劇学会紀要 43	林廣親		
論文	木下圭太郎『食後の唄』注釈・作品論(6)	共著	2006年	成蹊大学一般研究報告 37-1	有光隆司・小林幸夫・松村友視		
論文	志賀直哉「或る朝」ノート - (初めて小説が書けた)とはどういうことか-	単著	2007年	成蹊国文	林廣親		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本近代文学会(評議員・編集委員)							
日本演劇学会							
歌舞伎学会							
東京大学国語国文学会(評議員)							
昭和文学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教 授	氏 名	堀内 正樹	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要			
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 視覚と聴覚に訴えるような工夫 (パワーポイントと CD 音源、個人ホームページの利用)		2003年4月15日 ～2007年12月20日		毎回の授業にはパワーポイントで作成したオリジナル教材を用い、別途電子化したファイルドワークに基づくオリジナル音源を併用した。またパワーポイントを個人ホームページにリンクさせ、参考文献等の紹介に用いることによって、授業の格段の効率化を図った。			
2.作成した教科書、教材、参考書 『講座 世界の先住民民族—ファースト・ピープルの現在— 04 中東』(松井健と共編) 明石書店		2007年1月20日		文学部国際文化学科専門科目「民族誌」の補助テキストである。			
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 『やわらかな中東—多文化・多民族・多宗教共生の先進世界』「国際協力機構 (JICA) 主催連続セミナー『おしえて! 中東のこと』第1回セミナー講演」(国際協力機構広尾センター「JICA 地球ひろば」)		2007年8月3日		授業内容を補充する講演であり、学生にも開放して参加させた。			
4.その他教育活動上特記すべき事項 成蹊大学春期公開講座講師		2004年6月		演題:「イスラム社会と国際化」。			
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	国際文化研究の現在	共著	2005年	柏書房。(pp.19-50)	堀内正樹、松浦義弘ほか7名。1番目		
著書	講座 世界の先住民民族—ファースト・ピープルの現在— 04 中東	共編著	2006年	明石書店	堀内正樹、松井健編		
著書	世界の砂漠—その自然・文化・人間	共著	2007年	二宮書店	堀信行・菊地俊夫編		
著書	アラブ世界におけるネットワーク型社会システムの維持メカニズム—地域的人間関係の生成・持続・変容に関する実証的研究	編著	2007年	日本学術振興会提出。平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書	堀内正樹編		
その他	Metrical Aspect of Arab-Andalus Music in Morocco : the relation between music and poem.	単著	2004年	Mediterranean World XVII, Hitotsubashi Univ, Tokyo. pp.155-172.	Horiuchi Masaki		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本文化人類学会 (機関誌編集委員)							
日本中東学会							
比較家族史学会							
日本アフリカ学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	正岡 和恵	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) WBT システム「もも吉」を利用した文学部英語教育の実践		2003年4月 ～2006年3月	文学部1, 2年全員を対象とした英語教育において、WBT システム「もも吉」を利用し、特にリスニング力の養成に力点を置きながら4技能を総合的に伸ばす授業を実践した。その際に、教材とシラバスを統一し、プレイスメントテストにより能力別クラス編成を行い、統一された教材とシラバス、評価のもとで効率の良く学力を向上させた。また、「もも吉」での個人学習による選択科目としてe-Learning English 科目を設け、英文法の基礎、TOEFL、TOEIC 対策、多読など徹底的な訓練を行った。1年次履修後には約20点、2年次履修後までには40点 TOEFL-ITP が上昇しており(データは英米文学科の場合)、学習効果がみられた。学生アンケートや期末試験の結果と照らし合わせると、成績上位群の学生は基本的な学習習慣を身につけており、自立した学習スタイルをもっているのが非常に効果があったことがわかった。他方、成績下位群の学生は学習したことを定着させるために、さらなる援助が必要であろう。この取組みの成果は、「授業をWBT システム「もも吉」を利用した文学部英語教育の実践と効果-必修外国語科目「英語I, II, III, IV-C0」と選択科目 e-Learning English の場合」(共著)『成蹊英語英文学研究』10/149-79 を参照。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Some Thoughts on Pastoral	単著	2003年	成蹊大学英語英文学研究, 7, 69-82	正岡和恵		
論文	Shakespeare's Use of Pastoral in <i>The Winter's Tale</i>	単著	2004年	成蹊大学英語英文学研究, 8, 149-173	正岡和恵		
論文	コッペリア・カーンとシェイクスピアにお けるフェミニズム批評	単著	2005年	成蹊大学英語英文学研究, 9, 57-66	正岡和恵		
翻訳	クレオパトラという記号	共訳	2003年	ありな書房	正岡和恵他1名		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本英文学会							
シェイクスピア学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	松浦 義弘	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	国際文化研究の現在—境界・他者・アイデンティティ	共著	2005年	238頁	成蹊大学文学部国際文化学系編		
論文	「ジェルミナルのドラマ」とは何だったのか—革命政府とパリ民衆—	単著	2005年	『一橋大学社会科学古典センター Studyb Series』No. 53	松浦義弘		
論文	地方史研究の意味とはなにか	単著	2006年	『歴史学研究』No. 816, 43-50頁	松浦義弘		
論文	フランス革命におけるパリの民衆食糧をめぐる騒擾を中心として	単著	2007年	『専修大学歴史学研究センター年報』第4号, 26-40頁	松浦義弘		
論文	リヨンの革命と「サン=キュロット」	単著	2007年	『史学雑誌』第116編第6号	松浦義弘		
III 学会等及び社会における主な活動							
歴史学会							
日仏歴史学会							
Societe des Etudes Robespierriistes							
朝日カルチャーセンター講師							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	三浦 國泰	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	ヘルメスの変容と文学的解釈学の展開－ ヘルメネイン・クリネイン・アナムネーシ ス－	単著	2005 年	風間書房	三浦國泰		
論文	風土性と脱境界－『風土』の文化解釈学的 考察－	単著	2003 年	成蹊大学文学部国際文化学科編(柏書房)	三浦國泰		
論文	恋の病と芸術の根源－エロース, 死の美 学, 精神の分婭－	単著	2005 年	成蹊大学人文叢書3	三浦國泰		
翻訳	健康の神秘 (H.G. ガダマー著)	単訳	2006 年	法政大学出版局	三浦國泰		
翻訳	芸術の真理 (H.G. ガダマー著)	単訳	2006 年	法政大学出版局	三浦國泰		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本独文学会							
ブレーメン館会員							
『ひろの』(財団法人 ドイツ語学文学振興会) 編集委員							

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	牟田 悦子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「教職総合演習」におけるゲストスピーカーの活用		2007年9月 ～2008年1月	教職課程科目「教職総合演習」において、障害理解教育をテーマに演習を行った。その中で、自閉症のある子どもをもつ親でもあり、地域で障害のある子どもの放課後活動にとりくんでいる保護者、及び、中学校の通級指導教室でLD、ADHD等のある生徒の教育にとりくんでいる教師をゲストに招き、障害についての当事者の視点、教師の視点を理解した上で、どのように障害を理解すればよいかを検討させた。その上で、教育実習で担当する教科ごとにグループをつくり、中学生への障害理解を目的とした授業案の作成に取り組ませた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 教科書「生徒理解・指導と教育相談(学文社)」の作成		2007年5月15日	教職課程授業科目「生活指導論」、「教育相談」で使用する教科書を編集出版。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 川崎市特別支援教育コーディネーター研修		2007年8月20日	川崎市の小・中学校で特別支援教育コーディネーターとして活動をしている教師のステップアップ研修の中で、発達検査等を活用して発達障害のある子どもの見立てを行うことをテーマに講演を行った。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 特別支援教育士の養成		2007年4月 ～2008年3月	2007年4月から全国の小・中学校で本格実施されている特別支援教育を支える人材育成のために、特別支援教育士資格認定協会の理事として、特別支援教育士養成講座の講師、資格認定、倫理規定の作成などを行った。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	学校心理士による心理教育的アセスメントの方法	分担執筆	2004年	北大路書房・講座学校心理士-理論と実践 2 学校心理士による心理教育的援助サービス・1章	牟田悦子		
著書	LD・ADHDの理解と支援—学校における心理臨床活動と軽度発達障害	編著	2005年	有斐閣	牟田悦子		
著書	家庭・社会との連携	分担執筆	2006年	日本文化科学社・軽度発達障害の教育・13章	牟田悦子		
著書	障害児教育の現状と将来展望	分担執筆	2006年	学文社・現代の教育危機と総合人間学・10章	牟田悦子		
著書	特別支援教育の理論と実践 I 概論・アセスメント	共編著	2007年	金剛出版	上野一彦・牟田悦子・宮本信也・熊谷恵子		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本LD学会(副会長)							
川崎市総合教育センター専門員							
横浜市教育委員会特別支援教育支援チーム委員							
川崎市発達障害者支援体制整備検討委員会(副委員長)							
武蔵村山市難聴・言語障害・情緒障害学級入級指導委員会(学識経験者)							

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	ガイ モーロ	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
1 Fieldwork project teams	2007年4月1日 ～2007年12月31日	1 Learners create working teams that study methodology, design research projects, negotiate cooperation with outside schools and manage fieldwork activities. Data analysis and conclusions are presented in research report format.					
2 Student-generated syllabus	2003年4月1日 ～2007年1月31日	2 Learners caucus to choose themes (in the case of authentic materials such as video or news) or discussion chapters in the case of language textbooks) that are sequenced by the instructor to create the course syllabus.					
3 Student-generated grading system	2003年4月1日 ～2007年1月31日	3 Learners assemble and discuss the mix of assignments, texts, presentations and other criteria that will determine grades, then weight these items in consultation with the instructor.					
4 Classroom observations	2005年4月1日 ～2006年1月31日	4 Learners make an individual obserfation of an actual native speaker lesson at the university. Using a specific goal, they collect data, write a short observation report, and discuss their data in small groups.					
5 Peer editors and peer teaching	2005年4月1日 ～2007年1月31日	5 Learners read and edit the writing of other students, including editing conferences. In addition, student teams prepare topics from the textbook, lecture and answer questions about the material.					
2.作成した教科書, 教材, 参考書		2003年4月1日 ～2007年1月31日	Content articles in English often require custom-designed worksheets to make the material comprehensible to second language learners. Many of these worksheets, created over a number of years, are notable for the way they intervene in the reading process to "scaffold learning" by directing attention and thought to help make the concepts salient and the organization of the article clear. Informal research to compare scores on comprehension questions show that groups using these worksheets come away with greater gains in comprehension.				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
III 学会等及び社会における主な活動							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	森 雄一	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 日本語学演習Ⅰ・Ⅱにおける、日本語学研究方法の修得と高度な日本語力養成の融合教育		2004年度(学外研究)を除く毎年度	担当科目である日本語学演習Ⅰ・Ⅱにおいて、多様な形式の日本語文書を作成する技術及び高度な日本語語彙力を持つためのトレーニングを毎時行なった。その際、日本語学研究と切り離すのではなく、日本語文書の諸スタイルの由来と効果的な文書となる要因を分析させ、また高度な日本語語彙の習得とともにその意味分析・形態分析を行わせることにより、高度な日本語力養成と日本語学の研究を融合したかたちでの教育が可能になった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『ケーススタディ日本語の表現』(おうふう) 分担執筆		2005年11月10日	大学生向け日本語学・日本語表現テキストである『ケーススタディ日本語の表現』(おうふう)の「21章換喩」・「22章提喩」を執筆した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 日本文学科専門科目としての日本語力錬成科目の立案と運営		2004年4月1日	日本語力錬成科目(2004年度より)を日本文学科所属の他の教員とともに立案し、運営にあたった。従来よりある、書く・話す能力の育成をはかる科目(「日本語を正しく話す」「文章表現を磨く」)だけでなく、漢字検定試験を意識した「実践漢字講座」と情報化社会に適応した日本語力育成をはかる「日本語・日本文学のためのコンピュータ」を錬成科目のなかから組み入れたことにより、日本文学科生には新鮮な科目群としておほむね好評であった。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	隠喩・換喩・提喩の関係をめぐって	単著	2003年	『日本認知言語学会論文集』第3巻	森雄一		
論文	問題群としてのレトリック	単著	2004年	『レトリック連環』(風間書房)	森雄一		
論文	国語辞典と比喩現象	単著	2006年	『成蹊大学文学部誌』第41号	森雄一		
論文	Synecdoche:Toward a New Classification	単著	2006年	『日本認知言語学会論文集』第6巻	森雄一		
論文	隠喩・提喩・逆隠喩	単著	2007年	『メタファー研究の最前線』(ひつじ書房)	森雄一		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本認知言語学会(大会実行委員)							
日本語学会							
表現学会							
日本語文法学会							
日本認知科学学会							

所 属	文学部	職 名	教授	氏 名	米山 三明	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 学会における口頭発表: 「語彙化のパターンから見た英語の構造」		2004年11月14日	日本英語学会第22回大会のシンポジウム「構文・語彙の意味と構造について: 英文法教育に生かす方途を探る」における発表。本シンポジウムは、大学においてFDが重要な課題となっている現在、英語学・言語学の研究で得られた知見を英文法教育・英語教育に生かすにはどのような方法が考えられるかという視点から組まれたもので、講師の一人として、語彙化のパターンから見た英語の構造について、英語教育とのかかわりを考えながら論じた。研究活動の4番目に記載した論文「移動表現から見た英語の構造: 語彙化の問題を中心にして (1), (2)」は、この発表の一部に基づくもので、「新しい教室英文法」というシリーズの一環として執筆したものである。				
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	英語学文献解題 意味論	共著	2005年	研究社	山中桂一・原口庄輔・今西典子・米山三明(他)		
論文	Locatives and VP-Constituency	単著	2004年	成蹊英語英文学研究 第8号 27-37	Yoneyama, M.		
論文	Lexicalization Patterns and Path Expressions	単著	2005年	言語研究の宇宙: 長谷川欣佑先生古稀記念論文集 (開拓社) 303-315	Yoneyama, M.		
論文	移動表現から見た英語の構造: 語彙化の問題を中心にして (1), (2)	単著	2005年	英語教育 (大修館書店) 10月号 63-65, 11月号 63-65	米山三明		
論文	Resultatives and Motion Expressions	単著	2008年	成蹊英語英文学研究 第12号 83-93	Yoneyama, M.		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本英語学会 [理事 (2007年12月~), 評議員 (1989年4月~), 編集委員長 (2005年12月~2007年11月)]							
日本英文学会							
日本語学会							
日本認知言語学会							
Linguistic Society of America							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	特別任用教授	氏 名	大久保 洋子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ビデオ・DVDを用いて、視覚に訴えるような工夫を行った。		2003年5月1日 ～2007年1月20日	福祉に関する授業では、「ノーマライゼーション」,[自立支援・介護予防]などに関する国内外の現状・現場の映像が、理解を深めようとするときに重要な役割を果たす。特に、理想モデルの提示とわが国の課題を考えさせるために、自身がスウェーデンの現地で数年にわたって撮影したものを編集して授業に活用した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 なぜする どうする 高齢者体操 —スウェーデンに学ぶ高齢者の自立促進— 改訂版第10刷, 第11刷		2005年6月1日 2006年10月1日	地域福祉(特に高齢者福祉と介護予防)を実践させるために、ひとの老化、ADLとQOLの関係、生きがいと自己実現の認識と理解を深めるためのテキストとして発行。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 第5階日本通所ケア研究大会 講師 於広島県福山市		2007年11月18日	全国のデイサービスにおける介護士を対象とする全国大会において、「高齢者の介護予防・自立支援のためのADL体操」と題する講演を行った。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	ADL体操で元気はつらつ—家庭で気軽に できる脳とからだところの活性化—	単著	2006年	(株)リヨン社 127ページ			
著書	成蹊大学人文叢書 4 公助・共助・自助 のちから—武蔵野市からの発信— 第二 章共に生きる福祉と生涯学習 65～144 ページ	共著	2006年	(株)風間書房 258ページ	©成蹊大学文学部学会編 高田昭彦 大久保洋子 見城武秀 飯塚邦彦 中江桂子		
著書	なぜする どうする 高齢者体操 —スウェーデンに学ぶ高齢者の自立促進 — 改訂版第11刷	単著	2006年	ADL対応型高齢者体操研究会 179ページ			
論文	ADL対応型高齢者体操の実証的研究:呼吸 筋・平衡機能、栄養状態及びQOLの評価	共著	2005年	東京女子医科大学看護学部 平成15年度～ 平成16年度科学研究費補助金(基礎研究B) 研究成果報告書) 80ページ	©會田信子・大久保洋子 他		
その他	伊勢崎市 介護予防促進調査報告書	単著	2006年	群馬県伊勢崎市 62ページ			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本社会学会会員							
日本体育学会会員							
日本スポーツ社会学会会員							
ADL対応型高齢者体操研究会 会長							
武蔵野スポーツ振興事業団 理事							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	特別任用教授	氏 名	佐藤 バーバラ	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 歴史分野の博士論文執筆の方法論及び具体的手法につい ての講演		2007年12月5~7日	オーストラリアのシドニー大学において, オーストラリア各地の大学院に在籍する歴史専攻の博士課程学生に対し, 資料批判の仕方, 読み解き方, また執筆にかかわるまでのプロセスなどについて, 3日にわたって講義した。				
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	<i>The New Japanese Women: Modernity, Media, And Women in Interwar Japan</i>	単著	2003年	Duke University Press	Barbara Sato		
著書	Gendering Modern Japanese History	共著	2004年	Harvard University Press, pp. 99-130	Barbara Malony and Kathleen Uno, eds.		
著書	日常生活の誕生—戦間期日本の文化変容	共著	2007年	柏書房 pp. 7-12, 74-106	バーバラ佐藤 編		
著書	関西モダニズム再考	共著	2008年	思文閣出版, pp. 154-183	竹村民郎 鈴木貞美 編		
著書	明治・大正・昭和の大衆文化	共著	2008年	彩流社, pp. 135-175	成蹊大学文学部学会 編		
III 学会等及び社会における主な活動							
国際日本文化研究センター共同研究員							

所 属	文学部	職 名	特別任用教授	氏 名	鈴木 健二	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 新聞記事等の活用		2003年度～現在	現代社会科学の教育では、現在進行中の出来事について学生に理解を深めてもらうことも大きな柱の一つと考えられる。それも学生自身が自ら考え、自ら調べることが肝要である。私の担当するゼミでは、毎週、学生にテーマを選ばせ、学生自身に新聞・雑誌の中からそのテーマに沿った記事を収集させ、自分の意見を付記させて発表させている。「自分で選ぶ」「自分で調べる」「自分の意見をまとめる」ことをモットーに、学生の積極的な姿勢を引き出す努力をしている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 作文の添削		2003年度～現在	3年生のゼミでは、作文の添削を行っている。課題を出し、1週間後に提出させる方法と、その場で時間を区切って書かせる二つの方法をとっている。作文・論文の書き方に関する本は多数あるが、私は独自の教材を作り、短期間で学生の作文能力が高められるよう指導している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 成蹊大学アジア太平洋研究センター所長として、国際シンポジウム「日本の保守」をはじめ、30回を超える講演会・拡大研究会を実施した。		2007年6月16日	国際シンポジウム「日本の保守」は、ジェラルド・カーチス（コロンビア大学教授）、崔相龍（高麗大学教授）、新藤兵（都留文科大学教授）、梶川海（北京大学講師）をパネラーに、フロリアン・クルマス（ドイツ・日本研究所長）をコメンテーターとして招き、実施された。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌（書）・ページ数等	編者・著者名		
著書	地方テレビ局は生き残れるか	単著	2004年	日本評論社 246p	鈴木健二		
著書	Nation-states and Media: The Question of National Identity	編著	2007年	明石書店 300p	Suzuki Kenji 他9名		
著書	デジタルは「国民=国家」を溶かす	単著	2007年	日本評論社 226p	鈴木健二		
論文	危機にさらされる「マスメディア集中排除原則」	単著	2003年	世界 720号 pp125-133	鈴木健二		
論文	Separation of 'Nation' and 'State'	単著	2007年	成蹊大学文学部紀要 42号 pp29-51	Suzuki Kenji		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本マスコミュニケーション学会							
国際メディア研究振興理事							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	岩田 淳子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 心理学A・B		2004年4月1日～現在	OHC やプリントを使用する他、簡単な実験やチェックリストを行うなど、体験を通して、日常的な事象に結びついた基礎的な心理学の知見を学ぶことができるよう配慮している。毎回レスポンスシートで簡単な課題や質問を提出させ、相互交流に努めている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「生徒理解・指導と教育相談」 牟田悦子編 学文社		2007年5月15日	教職課程科目「教育相談」のテキスト。教育心理学、生活指導論の参考文献としても使用され、教職課程の心理学領域について系統的に学習できる。各項に参考文献が示され学生の主体的な勉学意欲にも対応している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 東京都公立学校教員 10 年経験者対象大学講座「カウンセリング」講師		2004年9月, 2005年9月	東京都教育委員会が在職10年に達した学校教員に対して行っている必修研修に位置づけられる講座。児童生徒理解についての講義（親とのかかわり、事前課題で提出された質問への応答含む）と、バズセッションによる事例検討、カウンセリング実習を行った。				
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌（書）・ページ数等	編者・著者名		
著書	教育心理学(教育学のポイント・シリーズ)	分担執筆	2005年	学文社	柴田義松・宮坂瑠子編、 牟田悦子、岩田淳子、 宮下孝広、菊池けい子		
著書	発達障害のある学生支援ガイドブック-確 かな学びと充実した生活をめざして-	分担執筆	2005年	ジアース教育新社	徳永豊・佐藤克敏編、 柘植雅義、高橋知音、 岩田淳子他		
著書	生徒理解・指導と教育相談	分担執筆	2007年	学文社	牟田悦子編・岩田淳子・ 菊池けい子		
論文	10年目教員の「生徒理解とカウンセリング 的対応」について-10年経験者研修「大 学講座」の実践から-	単著	2005年	教職課程年報第14号	岩田淳子		
論文	「発達障害のある学生への支援」	単著	2006年	『臨床心理学』Vol.6(3)	岩田淳子		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本学生相談学会（理事）							
日本心理臨床学会							
日本LD学会（研究委員会ワーキンググループ委員）							
日本児童青年精神医学会							
日本電話相談学会（監事）							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	遠藤 不比人	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミの運営方法		2008年4月1日 ～7月31日	新入生に英文学研究の初歩を教えるために自分自身の編著を使用し、2名ずつのグループに分けて、1章の半分を要約させ、かつコメントをつけさせた。昨今狭義の文学研究から広義の文化研究に発展した英文学研究の初歩——特にジェンダーやエスニシティ研究の初歩——を知るのに、この方法がきわめて実践的であった。特に学生がプレゼンテーションをするための前提知識の欠如を慮り、各章の導入として90分程度の講義、及び学生の発表の直後に足りない部分を補ったりし、かつ各書が終了後すぐにリアクション・ペーパーを提出させたことが効果的であった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 教科書		2007年2月;2003年7月	上記のように狭義の文学研究から広義の文化研究に発展しつつある現在の英文学研究を学部生に導入するための教科書がなかなかないという現状を鑑みて、慶應義塾大学出版会から共編著として『愛と戦いのイギリス文化史 1900-1950』を上梓し、上記のゼミで使用した。また、文学テキストを読解するための批評理論に関する便利な教科書がやはり不足しているという現状認識から、講談社選書メチエから『知の教科書——批評理論』を共著として上梓した。両者とも好評で再版をしていることを付記する。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 上記の2冊の教科書の上梓がそれに該当すると考える。							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	知の教科書——批評理論	共著	2003年	講談社選書メチエ	◎丹治愛(編集), 田尻芳樹 遠藤不比人他著		
著書	愛と戦いのイギリス文化史 1900-1950	共著	2007年	慶應義塾大学出版会	◎武藤浩史, 川端康雄, 遠藤不比人 大田信良編著		
著書	転回するモダン——イギリス戦間期の文化と文学	共著	2008年	研究社	◎遠藤不比人, 大田信良, 加藤めぐみ, 河野真太郎, 松本朗編著		
論文	サディズム/メランコリーの倫理——メラニー・クラインを読むジュディス・バトラー	単著	2006年	『I. R. S——ジャック・ラカン研究』第5号	遠藤不比人		
論文	Radical Violence Inside Out: Woolf, Klein and Interwar Politics	単著	2006年	Twentieth-Century Literature 52.2	Fuhito Endo		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本英文学会(編集委員)							
日本ロレンス協会(評議員)							
日本ヴァージニア・ウルフ協会(例会委員・協会30周年記念出版編集委員長)							
日本ラカン協会							
日本英文学会関東支部(理事)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	川村 陶子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 国際文化セミナーの開催		2006 年度, 2007 年度	国際文化学科教員及び学生との共同企画により, 正規授業で扱われない国・地域をテーマとした連続企画(講演会, 映画会等)を開催。文学部振興予算事業。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書 『国際文化研究の現在』(柏書房)		2005 年	国際文化学科教員と作成した論文集。学科1年生向け必修授業「国際文化研究の現在」参考書として使用				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 国際交流実践授業の開催		2006 年度, 2007 年度	国際文化学科教員, 国際教育センター日本語講師及び一般の学部生・大学院生との共同企画で, 成蹊大学で日本語を学ぶ外国人留学生・聴講生と日本人学生と一緒にフィールドワーク・ディベート等を行う機会を設けた。文学部振興予算事業。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	戦後日本の国際文化交流	共著	2005 年	勁草書房	戦後日本国際文化交流研究会(著), 平野健一郎(監修)		
著書	国際文化研究の現在	共著	2005 年	柏書房	成蹊大学文学部国際文化学科		
論文	The Study of International Cultural Relations of Postwar Japan	共著	2006 年	日本貿易振興機構アジア経済研究所 Discussion Paper No. 49	青木(岡部) まき, 川村陶子, 牧田東一		
論文	The Study and Practice of International Cultural Relations: A Japanese Approach? to International Relations	単著	2006 年	日本国際政治学会 50 周年記念研究大会報告ペーパー	川村陶子		
その他	新・国際政治経済の基礎知識(「国際関係と文化」「文明の衝突論」の項)	分担執筆	2005 年	有斐閣	田中明彦, 中西寛(編)		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本国際政治学会(将来構想検討委員)							
日本ドイツ学会							
日本国際文化学会(理事, 編集委員)							
日本平和学会							
日本文化政策学会(理事)							

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	喜岡 淳治	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 毎年、与えられた教育科目において、教育内容の点検を行い、新しい内容を加える必要のないか、古い内容で削除しなければならないものはないかをチェックしている。なお、授業評価として、成蹊大学は、共通のフォーマットで年2回、前期と後期の授業終了時期に実施している。		2004年3月, 7月 2005年3月, 7月 2006年3月, 7月 2007年3月, 7月 2008年3月, 7月	毎年、基本となる授業については、学生がどのように理解したのか、どのくらいの関心をもって講義を聞いてくれたのかを理解するために、授業評価を活用している。いつも注目している点は、学生がわたし自身の授業を受けて、さらに発展的なことを学習したいと考えたかという項目である。これが他の項目と比べると率が低いのである。授業の中で学生に、学習した内容を考察するために課題を与えたり、さらに新しい内容を開発して調べたりすることが求められていると考える。授業評価の各項目についてそれぞれを集約すれば自分なりの授業の特徴が理解できると考えている。さらに、できる限り、五段階評価による授業評価のみならず、学生自身による、授業の良かった点や改善点という、自由記述形式での評価を書くようにお願いをし、それを重要視している。最近、ある授業でワークショップ形式の授業スタイルを入れるようになった。それを好む学生と、極端に拒む学生がいることが判明した。教職関係の授業の場合、他人とのコミュニケーションを図ってもらいたいという目的があるので、できる限り、授業においても他の受講生との交流を深めいき、授業運営を進めていきたいと考えている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 柴田義松・木内剛編著『教育実習ハンドブック』学文社の第6章の第一節から第五節の、教科外指導の観察と参加を執筆した。		2004年3月	2002年度の学習指導要領の改訂の背景、「特別活動」の改善点、学級活動への参加、生徒会と行事、教科外指導における心構えに関して、考察した。『教育実習ハンドブック』という書籍は、教育実践研究という授業科目の教科書である。教育実践研究という授業は、3年次、4年次において教育実習にいく学生の事前指導の授業である。教育実習において、学習指導、生徒指導、事務的な活動等、学生が教育実習校において、どのような教育活動を行い、生徒や先生とどのようなコミュニケーションを交わして行動するのかについて、チェックを行いながら実習の事前の授業は展開する。その基礎・基本について網羅した書籍である。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 日本教材学会において、「説明文の読解における予告文と逆接の接続詞の活用」について、発表を行った。その発表内容は、「教材学研究 第15巻」(日本教材学会)に掲載した。		2004年3月31日	教科書教材の例を挙げ、予告文を用いた授業のやり方、その場合の授業の進め方等について、逐一丁寧に説明をしながら発表を行った。逆接の接続詞の場合については、子どもたちが逆接の接続詞について、誤解している例をあげながら、その例と正しい例の両方を取り上げて、なぜ「逆」接とこのかについての発表を行った。これは、国語科教育法に関わる学生へ教授していた内容をまとめたものである。教育内容だけではなく、教育方法に関わるものを含んでいる。説明的な文章を子どもたちに教える場合に、その文章の書き方に注目し、予告文があり、その予告に応えるように話が展開しているのならば、その書き方に合わせた読み方を行い、さらに、その説明のときに作者の主張がどのように展開しているのかを、特に逆接の接続詞を用いて解説をした論文である。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 授業づくりネットワーク春の大会という研究会を毎年3月に成蹊大学で開催している。これは、小学校・中学校・高校の先生や授業づくりに関心のある方が、日頃の研究成果を発表し合い、それを共有していくものである。		2004年3月 2005年3月 2006年3月 2007年3月 2008年3月	大学の学生にも研究会開催に向けて、手伝わせることを含めて参加させ、教師になるための準備をさせている。学生にとっては、このように現場の先生方とのコミュニケーションの場と、教員への道への手がかりとして大いに活用させている。この授業づくりネットワークという民間教育団体との協力により、年間に5回教師力アップセミナーも開催している。これは、教員が普段から力をつけたいと考えている個別の項目について、特別に講師の先生をお呼びして、講習を開いている。このセミナーにも学生が積極的に参加をし、徐々に力を蓄積していつか、このセミナーの集大成が、左記の授業づくりネットワークの春の大会である。この大会では、約30の講師の先生がセミナーを開催している状況である。基本的には、春休みに開催し、新年度に向けて新しい学年の実践を目標にした研究会となっている。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	文学作品を精密に読む―書き込みの発表からディベート的討論へ―	単著	2004年	成蹊大学「教職課程年報」第13号 pp.16-27	喜岡淳治		
論文	国語教育におけるレトリックの世界―鈴木清隆氏による「ことば遊び」リレーの授業を手がかりに―	単著	2004年	成蹊大学文学部学会編『レトリック連環』風間書房 pp.157-183	喜岡淳治		
論文	説明的文章の読解における、予告文と逆接の接続詞の活用	単著	2004年	日本教材学会『教材学研究』第15巻 pp.9-12	喜岡淳治		
論文	導入発問の条件とは何か―井上靖『しるばんば』(教材名「赤い夷」)を読む―	単著	2005年	成蹊大学文学部学会「成蹊大学文学部紀要」第40号 pp.115-126	喜岡淳治		
論文	国語科教師の専門的力量的の形成―東京都立学校教員10年経験者研修を踏まえて―	単著	2006年	成蹊大学文学部学会「成蹊大学文学部紀要」第41号 pp.105-117	喜岡淳治		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本国語教育学会							
日本語教育学会							
日本教師教育学会							
全国大学国語教育学会							
日本教材学会(会報編集委員・理事)							

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	木谷 眞理子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「日本文学入門」における、絵画を用いた授業		2007年4月1日～現在	文学部日本文学科専門科目「日本文学入門」は、新入生25名程度を対象とする、半ば演習形式の授業である。『伊勢物語』を題材にして、文学研究の初歩を教えている。この授業の特徴は、絵画を用いることである。『伊勢物語』は新入生にとって、高校時代に学んだ、なじみのある作品。『伊勢物語』なら知っている、という思い込みを砕いて、作品と向きあい、考え、調べることへと導くためには、『伊勢物語』を描いた絵画を用いることが有効である。なぜならまず、画像に興味を抱く学生が多いからであり、また、『伊勢物語』は知っていても、その絵画化作品を知っている学生はほとんどいないため、なじみの物語に新たな光をあてていくことが可能となるからである。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「日本の芸術」の配布プリント		2004年4月1日～現在	文学部総合教育科目「日本の芸術」は、物語絵画についての授業である。配布プリントは、講義の概要、図版、課題から成る。講義の概要を記して配布するのは、授業中、ノートをとることよりも、絵画をよく見ること集中してほしいからである。絵画はパワーポイント等を使って映写するが、重要な作品については復習できるようなプリントに刷って配布する。絵画をよく見てもらうためには、問題を考えさせることが効果的である。たとえば、本来の画像に対し、左右を反転させたり、一部のモチーフを消去したり、といった操作を加え、適当な問題を設定して、プリントに刷って配布、答案を提出してもらおう。そうすることで、絵画における右と左や、或るモチーフの存在意義などについて、考えてもらうことができるのである。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 武蔵野地域自由大学講座講師		2006年10月16日～11月20日(全6回)、 2007年9月20日～10月25日(全6回)	武蔵野地域自由大学とは、武蔵野市と武蔵野地域の五大学(成蹊大学、亜細亜大学、東京女子大学、日本獣医生命科学大学、武蔵野大学)が連携して生涯学習の機会を提供する市民大学。その自由大学生を対象とする特別無料講座が、武蔵野地域自由大学講座である。2006年度と2007年度の2年度にわたり、講師を務めた。2006年度のテーマは「日本文学を訪ねて——源氏物語の世界——」、2007年度のテーマは「日本文学を訪ねて——源氏物語の人々——」であった。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	六条院の玉鬘	共著	2006年	『人物で読む源氏物語13 玉鬘』勉誠出版、281～291頁	室伏詔監修・上原作祐編集		
著書	鈴虫巻の女三宮	共著	2006年	『人物で読む源氏物語15 女三の宮』勉誠出版、253～267頁	室伏詔監修・上原作祐編集		
論文	源氏物語と食	単著	2007年	『成蹊国文』第40号、1～14頁	木谷眞理子		
論文	総論 源氏絵概説	単著	2008年	『國文學 日本語・日本文学・日本文化——解釈と教材の研究』第53巻1号、28～39頁	木谷眞理子		
論文	夕霧巻と食	単著	2008年	『成蹊大学文学部紀要』第43号、1～11頁	木谷眞理子		
III 学会等及び社会における主な活動							
中古文学会							
東京大学国語国文学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	見城 武秀	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 基礎演習におけるグループワークの活用		2004年4月1日～現在	1・2年生を対象とする基礎演習で研究のために必要な基礎知識・技能を確実に身につけさせるため、4～5名を単位とするグループワークを活用した。具体的には、「大学生の学力低下」や「格差社会」といった包括的テーマをこちらで設定した上で、各グループに、より焦点を絞り込んだテーマを考えさせ、文献の収集から発表の構成、プレゼンテーションソフトを使った発表資料の作成までをグループ内で分業しつつおこなわせた。グループワークという方式をとることで、履修生たちは間接的にはあれ、自分一人で取り組んだときよりもはるかに広い範囲の文献に触れ、また他人との議論を通じて自らの考えを相対化し、深めていくことが可能になった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 講義及び基礎演習におけるオリジナルプリントの活用		2003年4月1日～現在	講義では毎回オリジナルプリントを作成し、講義内容の理解促進を図るとともに、講義内では触れなかった関連テーマにも学生の関心を広げるよう心がけた。また基礎演習では文献の探し方や読み方、引用・参照の仕方や議論の組み立て方、口頭での発表の仕方など、研究の方法全般についてまとめた資料を配付し、履修生が授業内外で適宜参照できるようにした。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「MELL EXPO2008」における「メディアリテラシー実習」に関する展示		2008年4月26日～27日	メル・プラッツ及び東京大学大学院情報学環主催のイベント「MELL EXPO2008」において、文学部開講科目「メディアリテラシー実習」の概要及び成果に関する展示をおこなった。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 文学部開講科目「メディアリテラシー実習」の企画・運営		2005年4月1日～現在	大学と地域とが連携しておこなう新しいタイプの体験型授業として、「メディアリテラシー実習」を企画し、2005年度より担当している。この授業は、本学の位置する武蔵野市・三鷹市で活躍している情報関連のNPO法人、第三セクターの協力を得ながら、履修生に(1)テレビ番組制作、(2)ウェブサイト制作、(3)ラジオ番組制作を体験させ、完成した作品をそれぞれ(1)地元ケーブルテレビ局、(2)インターネット、(3)地元コミュニティFMを通じて実際に地域に向けて発信するという内容のものである。このような体験を通じて、学生はそれぞれのメディアがもつ表現上の特性や完成した作品の背後にある情報の編集過程にあらためて目を向けることになる。また同時に、地域で活動する人びとと一緒に地域について取材し、表現することで、これまで漠然と眺めてきた「大学のありコミューティ」に対する関心を高めることにもなる。市民活動が盛んで、コミュニティメディアにもめざましい武蔵野・三鷹地域に位置する本学の特徴を生かした授業であり、学生の満足度もきわめて高いことが授業評価アンケートからうかがわれる。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	社会情報学ハンドブック	分担執筆	2004年	東京大学出版会	吉見俊哉・花田達朗		
著書	シリーズ社会情報学への接近 3 情報秩序の構築	共著	2004年	早稲田大学出版部	鈴木秀美・岩村充ほか6名(7番目)		
著書	モバイルコミュニケーション-携帯電話の会話分析	共著	2006年	大修館書店	山崎敬一・菅清子ほか12名(10番目)		
著書	公助・共助・自助のちから-武蔵野からの発信	共著	2006年	風間書房	高田昭彦・大久保洋子・見城武秀・飯塚邦彦・中江桂子		
著書	メディア・コミュニケーション学	共著	2008年	大修館書店	橋本明・松田真佐・小平さち子・辻大介・南田勝也・三浦麻子・森謙俊・見城武秀		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本マス・コミュニケーション学会							
日本社会学会							
関東社会学会							
武蔵野三鷹ケーブルテレビ株式会社番組審議会委員							
武蔵野商工会館地域情報コーナーの在り方検討委員会委員長							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	権田 建二	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 大教室における講義授業		2007年9月1日～現在	新入生 150 名程度に向かって、パワーポイントによるスライドやビデオ教材を用いて講義を行った。出席者全員の出席をとることはもちろんのこと、毎回講義内容についてリアクション・ペーパーを書かせた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 オリジナルプリントの作成		2005年4月1日～現在	講義では毎回オリジナルプリントを作成し、講義内容の理解促進を図るとともに、講義内ではふれなかった関連テーマに学生が関心をもつよう心がけた。ゼミでは、レポートの書き方についてまとめた小冊子を配った。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD 講演会への参加		2007年9月20日	大学主催のFD 講演会に参加し、教育の質向上を図った。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『ミステリーが生まれる』	共著	2008年	風間書房	©浜田雄介		
論文	「リチャード・ライトの『ネイティブ・サン』における分裂というテーマ」	単著	2003年	『アメリカ文学』64号	権田建二		
論文	“Deconstructing Criminal Law: Theodore Dreiser's <i>An American Tragedy</i> and 'I Find the Real American Tragedy'”	単著	2006年	<i>Metropolitan</i> 50号	権田建二		
論文	「トルーマン・カポーティとその時代」	単著	2006年	『成蹊英語英文学研究』10号	権田建二		
論文	「ぶらさがった足の記憶—トルーマン・カポーティと『冷血』」	単著	2006年	『英語青年』2006年12月号	権田建二		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本アメリカ文学会							
日本英文学会							
アメリカ学会							

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	モリス ジャマール	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミではプラグマティクスに焦点を合わせる。特に文化比較コミュニケーション理論、英語と日本語の類似点と相違点の比較に興味あり。			生徒達どのように日本語と英語では丁寧語を使うのか比較対照する。 会話はグライス共同原理を用いて勉強する。またどのように会話が組み立てられるか調べる (conversation management)。 目的は好ましい会話を会得することによって、より効果的な英語を使えるようになることを助ける。				
2.作成した教科書、教材、参考書 ダ ファンデーション リーディング ライブラリ (共著 ジャマール&ウエアリング) 出版社:ハインレ&ハインレ			この計画は完成するまでに3年かかる。7レベルに分けられ42冊からなる(各レベルごとに6冊づつ)。42話を書く事に加え、またスチューデントワークブック(7冊)、ティチャーズブック(7冊)、解釈本を執筆監督をすることも含め、全計画のシリーズ編集者として従事する。 全シリーズは70ISBN以上あり、米国会図書館に置いてある。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 オックスフォード大学出版社・ディビッド イングリッシュ ハウス Certificate in Teaching English to Japanese 日本人に英語教育を教えるコース			この1日コースは年2回行われ、東京、名古屋、福岡、大阪、札幌で開催された。私はこのコースの4人の教師トレーナーのうちの1人でした。私の授業はコミュニケーションアクティビティの目的と作り方、クラスの操縦方法にわたった。 2003年から2007年の間、のべ28日開催された。コースはとても人気があり、現在迄に日本全国3,500人以上の教師を養成した。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 ティチャートレーニングツアー:中国 2006&2007 & MICELT, 2004			2003年から2007年にかけて重要な仕事の中の一つは、中国の英語教師に講演するために招待された事である。中国のいくつかの都市を訪れ、大学等で英語教育についてプレゼンテーションした。これまでにこの仕事のために中国を3回訪れた。もう一つの重要な仕事は、2004年に、マレーシアにおける主力な英語教師コンフェレンスのMICELTでプレナリースピーカーとして選ばれた事である。 これは個人的、職業的の両方からも名誉なことであった(約2,000人が出席した)。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	Top-Up Listening Series	編著	2003年	ABAX Press	Series Editor: M. Jamall. Co-Writers: C. Cleary, B. Holden, T. Conney		
著書	The Foundations Reading Library	共著	2006年	Heinle & Heinle	M. Jamall & R. Waring		
III 学会等及び社会における主な活動							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	庄司 宏子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 卒論ガイダンス		2007年2月	春休み期間中、担当するゼミの4年生の学生を集めてガイダンスを開き、卒論に関する日程、卒論のテーマの設定の仕方、論文執筆の上での注意事項、参考文献の探し方・入手方法、論文を書く上で準拠すべき形式等について指導した。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項		随時	他大学研究紀要論文集の学外査読委員を担当した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『かくも多彩な女たちの軌跡:英語圏文学の再読』(第1章「感受性の共和国——建国期アメリカの『誘惑』をめぐるテキストを説く」を執筆)	単著	2004年	南雲堂	庄司宏子		
著書	『病と文化』(「メスメリズムと女性の神経症的身体——19世紀半ばのアメリカ中産階級の形成とその不安」を執筆)	単著	2005年	風間書房	庄司宏子		
論文	「ホーソーンの『緋文字』に現れた共感のダイナミズム	単著	2006年	「成蹊英語英文学研究」第10号	庄司宏子		
論文	「共感とメスメリズム——『ブライズデール・ロマンス』に見られるセンチメンタリズムの欲望」	単著	2006年	「アメリカ文学」(日本アメリカ文学会東京支部会報)	庄司宏子		
論文	「メスメリズムの身体の解体——Oliver Wendell Holmesの『Elsie Venner』に見るセンチメンタリズムと医学言説」	単著	2007年	「成蹊英語英文学研究」第11号	庄司宏子		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本アメリカ文学会							
お茶の水女子大学大学院英文学会							
The Modern Language Association of America (the American Literature Section)							
日本英文学会							

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	中江 桂子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 指導学生全員への卒業論文の個別指導		2003 年度～2007 年度	学部 3,4 年生の、それぞれ 10 人ほどのゼミを構成している。10 人という人数のポリシーは、教員が目が行き届く学生指導を実践するためには必要なクラスサイズであると考えている。その指導学生全員に、卒業論文を執筆させるために、2 年間をかけて、それぞれの研究関心から生まれる個別の研究テーマを考えさせ、最終的に卒業論文として勉強を仕上げるよう指導している。学生一人一人に、それぞれの知的関心や個性を掘り下げ、自分が取り組むべきオリジナルなテーマを発見させることは、たいへんに苦労が多いが、ひとりひとりに適切な教育を実現するためには必要不可欠なプロセスであると考えている。そして、それを最終的に文章に著わすという実践は、知的な実践作業としても、コミュニケーション能力の向上のためにも、また、人生に向き合う力を身につけさせるためにも、たいへん重要な教育の形であり、大学教育の本分がここにあると考えている。				
2.作成した教科書,教材,参考書 『自助・公助・共助のちから』の執筆		2006 年 4 月	この書籍は、大学が所在している武蔵野市の地域で、どのような市民の活動が根付き、それが社会の活性化をもたらしているのかについての、実際の調査にもとづく報告である。この本は、成蹊大学文学部現代社会学科の教員の有志で共著したものである。現代における大学は、大学として閉鎖的であるべきではなく、社会や地域に開かれた教育の姿を求められるべきであるが、そのような時代の要請に対応して、この本では、地域の重要性と地域文化の可能性を、武蔵野地域の中にありながら大学としてその価値を論じるという試みをしたものである。この本の教育的意味は少なくとも 2 つあると考える。第一は、地域の中の大学として、地域市民に学ぶ姿勢と地域市民に啓蒙していく姿勢を、ともに著したことであり、これは地域と大学が協調して未来を創造していけるのだというメッセージにもつながっていることである。教育が教育現場だけで閉じるのではなく、社会が人間を教育していく責任もあるのだということを、社会に向けて発信していることは意味が大きい。第二は、自分の親しい仲間内で閉じてしまいがちな若い世代を、多様な人間が混在して生きている地域の姿に目を向けさせることができることである。これは教育の中身と同等以上に学生の豊かな人間性の育成のために必要なことである。その両面から、大学のなかで人間を育てていくことが仕事である大学人として、この本の執筆は重要であった。				
3.教育方法・教育実践に関する発表,講演等 NPO インターンシップの制度構築		2006 年度～2007 年度	文学部の学部課程のなかで、NPO や NGO を対象としたインターンシップの制度を構築した。これは大学教育を教室に縛り付けてのみいるのではなく、社会のなかの実践を通して大学の中での学びを社会の中で生きていく力へと、発展させていくための新しい教育形態として生まれたものである。家庭の中で、また、大学の中で、今まで守られ続けて生きてきた学生に、社会人として求められる責任や、人間としての信頼関係を維持しはぐくんでいくことの重要性を、言葉ではなく実践を通じて身につけさせることができる、重要なプログラムであると考えている。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 ゼミ学生の優秀卒業論文表彰 2 件		2005 年 3 月及び 2008 年 3 月	卒業論文指導をゼミ生全員におこなっている。成蹊大学文学部現代社会学科では、その年度に提出された卒業論文のなかで、特に優秀と認められる卒業論文について学科表彰を行っている。学科表彰は各年に一人、あるいは不在の年もある。表彰の候補論文については複数の教員による査読がおこなわれ、その結果を学科会議で了承してはじめて、表彰が行われる。私のゼミからは、2005 年及び 2008 年の 3 月に、一人ずつ、優秀卒業論文の表彰者が誕生した。これは、論文個別指導の成果のあらわれであり、教育者としての励みにも誇りにもなっている。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『自助・共助・自助のちから』	共著	2006 年	風間豊房 『自助・共助・自助のちから』第 5 章 「文化を伝え地域を動かす」 217-253 頁	大久保洋子・高田昭彦・飯塚邦彦・見城武秀・中江桂子		
論文	楽しむことへの強迫 ―テレビによる文化変容の一試論―	単著	2005 年	現代風俗学研究第 11 号 62-72 頁	中江桂子		
論文	スポーツマンシップの起源 ―社会史的考察―	単著	2006 年	スポーツ社会学研究 14 号 47-58 頁	中江桂子		
論文	法と法則の二元論へのとまどい ―デュルケムの方法論的混乱をめぐって/モンテスキュー論再考―	単著	2007 年	成蹊大学文学部紀要 42 号 103-125 頁	中江桂子		
翻訳	消費文化とポストモダニズム 下巻	共訳	2003 年	恒星社厚生閣 21-37 頁	M. フェザーストーン		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本社会学会							
社会思想史学会							
日本マス・コミュニケーション学会							
日本スポーツ社会学会(理事・『スポーツ社会学研究』編集委員長)							
国際行動学会(理事)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	墓田 桂	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゲストスピーカーの招聘		随時	「国際関係論特講」、「演習」、「国際協力論」といった授業において、国際機関や NGO などで活躍する人々を講師として招聘し、それぞれの活動の一端を紹介してもらった。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 研究 (フィールドワーク) で得られた情報や知見を授業に還元		随時	スリランカ、ザンビア、カンボジアなど、調査・研究で訪れた国の現状をスライドショーとともに紹介した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『国内避難民と国際法』	共著	2005 年	信山社, 第 2 章「国内避難民問題に対する国連の対応」(73 頁-119 頁)を担当			
論文	「国内避難民 (IDP) と国連 -国際的な関心の高まりの中で-」	単著	2003 年	『外務省調査月報』2003 年第 1 号			
論文	「スリランカにおける国内避難民問題」	単著	2007 年	『アジア太平洋研究』(成蹊大学アジア太平洋研究センター編) No. 32			
論文	「難民問題の恒久的解決としての難民定着の可能性 -ザンビアの事例とともに-」	単著	2008 年	『成蹊大学一般研究報告』第 40 巻			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本国際連合学会							
日本平和学会 (事務局長兼理事)							
強制移住研究国際学会 (International Association for the Studies of Forced Migration)							
外務省 ODA 評価調査アドバイザー (2007 年度)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	日比野 啓	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 学習支援サイト「ひびのがくしゅう」その他の構築・運営		2004年4月1日 ～2007年12月31日	指導ゼミ・講義受講者のためのウェブサイト「ひびのがくしゅう」(http://univ.khibino.net/)を構築・運営し、英語学習のしかた、ゼミのレポート課題などを随時掲載した。また、姉妹サイトとして直接予約システム「ひびのよてい」(http://schedule.khibino.net)を運営し、オフィスアワーは定かことまらず、ゼミ発表や講義内容についての質問を学生が気軽にできるように、直接予約システムを構築し、ウェブ上でオンラインで授業の予約ができるようにした。				
2.作成した教科書、教材、参考書 成蹊大学Web-Based Learning System「もも吉」Ver.2 開発、運用及び教材作成		2003年4月1日 ～2007年12月31日	2002年度に運用を開始した成蹊大学 Web-Based Learning System 「もも吉」に新たな機能をつけかわせた Ver.2をシステムインテグレータ社及び内田洋行社の協力により開発、2003年度より運用開始した。これまでのWBTの問題点として、「自習」教材を導入することが難しい・紙テストの再現が難しい・ネットワーク環境以外での運用が想定されていないという三点が挙げられるが、これらの点を改善した。すなわち「もも吉」Ver.2では、3つの受験モード(自学自習/小テスト/定期試験)を用意し、用途に合わせて教材を利用できるようにし、選択式問題の他、空所補充問題も対応別解も対応、さらに確信点も可能にすることに加え、ネットワーク外での教材作成が可能となるように開発した。「もも吉」Ver.2は現在までのまで継続して運用され、文学部の英語授業において最も重要なものとして位置づけられている。また、市販の辞書学習用ビデオ教材を著作権情報をとりながら文学部の学生のレベルに合わせて適宜変更してハードディスク上に保存し、十種類以上の教材をいつでも使用できるようにしている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 New Education Expo2004「英語教育におけるe-learningの可能性を探る：成蹊大学文学部の例」 講演		2004年6月3日	大阪マーチャンダイズ・マートにおけるNew Education Expo2004開催中に発表した「英語が使える日本人のための就職観望セミナー」において、「英語教育におけるe-learningの可能性を探る：成蹊大学文学部の例」と題して、1時間の講演を行った。前年度New Education Expo2003において、高等教育機関におけるWBTの効果的な活用法として、従来のWBTには様々な機能が付加した成蹊大学Web-based Learning System「もも吉」を開発したことを紹介し、語学教育において効果的な教育法とされるVOD(Video on Demand)をどのようにWBTと連携させていくかを考察したのを引き続き、2004年度にバージョンアップした「もも吉」ver.2でどのような点を改善し、また実際に運営した効果測定などの数値を紹介した。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 英語ICo チームティーチング及びコーディネーター		2004年4月1日 ～2007年12月31日	文学部一年生必修の英語科目である英語ICoにおいて、教材・指導方針・成績評価基準などの共通化をわかり、全16クラス共通のシラバスを作成した。またコーディネーターとして、期末試験作成のとりまとめなどを担った。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	からだはどこにある?—ポップカルチャーにおける身体表象	共編著	2004年	彩流社、第1章第1・2節(pp.9-18)・第5章(pp.119-143)	◎日比野啓・三浦玲一・村山敏樹ほか		
著書	20世紀英語文学辞典	分担執筆	2005年	研究社、Paul Green, George S. Kaufman, Albert Maltz, Eugene O'Neill, William Saroyan, Federal Theatre Project 等の項目を執筆	◎上田和夫・渡辺利雄・海老根宏ほか		
著書	明治・大正・昭和の大衆文化—「伝統の再創造」はいかにおこなわれたか	編著	2008年	彩流社、序章(pp.1-21)・第四章(pp.177-231)	◎日比野啓・浜田雄介・本間正幸ほか		
論文	奴らは drummer、やくざな drummer—アメリカ演劇に見る「セールスマン殺し」の儀式—	単著	2003年	『英語青年』第149巻第6号	日比野啓		
論文	日本のメタシアター：『八〇年代小劇場演劇』神話の解体をめざして	単著	2003年	『日本演劇学会紀要』第41号	日比野啓		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本演劇学会							
日本アメリカ文学会(東京支部支部運営委員2004年度-2006年度)							
日本英文学会							
Association for Theatre in Higher Education							
International Federation for Theatre Research							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	准教授	氏 名	吉田 幹生	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「日本文学入門」		2005年～2007年	履修者が1年生であることに鑑みて、90分の授業時間を、前回実施小テストの解答解説・当該時間におけるテーマの解説・当該時間のテーマに関する問題演習(小テスト)というように分割し、学生たちの集中力がとぎれることなく持続するように意を配った。また、授業の脱落者が出ないように、小テストの内容を学生のレベルを加味して作成したり、著しく出来の悪い学生には躰いたポイントを個別に朱筆するなどの配慮をした。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「日本古代文学史」		2006年	日本古代文学の具体的な作品に触れることができるように、基本事項の解説だけでなく、主要場面を抜粋したプリントを作成した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 FD講演会への参加		2007年9月20日	講演会に参加した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	〈人の心〉から〈我が心〉へ—『蜻蛉日記』 試論	単著	2004年	中古文学, 74, 43-53	吉田幹生		
論文	〈しるしの杉〉と『蜻蛉日記』	単著	2005年	朱, 48, 250-258	吉田幹生		
論文	六条御息所の生霊化	単著	2005年	人物で読む源氏物語 六条御息所 224-232	吉田幹生		
論文	若菜巻の紫の上—「世」への傾斜と「憂し」 の不在—	単著	2006年	成蹊国文, 39, 11-21	吉田幹生		
論文	『古事記』における男と女—このみ再考—	単著	2007年	成蹊大学文学部紀要, 42, 17-28	吉田幹生		
III 学会等及び社会における主な活動							
上代文学会							
中古文学会							
東京大学国語国文学会(評議員)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	講 師	氏 名	小林 盾	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 地域(武蔵野市)におけるランダムサンプリング調査		2006年4月1日 ～2007年1月31日	社会調査士課程の一環として社会調査実習にて、22～70歳の武蔵野市民を対象として、ランダムサンプリング調査を行った。回収率が51.5%と、郵送調査のなかでは高かった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『成蹊大学社会調査実習 2006年度報告書：第1回地域と生活に関する武蔵野市民調査』		2008年3月1日	社会調査実習の成果を、報告書にまとめた。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「大学における社会調査教育の実践例(1)：成蹊大学における社会調査士課程への取り組み」		2008年9月4日	行動計量学会の特別セッション「社会調査士資格：これまでの経緯と今後の展望」にて発表。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 ゲストスピーカーの活用		2005年10月1日 ～1月31日	現代社会研究の基礎にて、ボランティアについて学習する際、NPOの職員の方にゲストスピーカーとして参加してもらった。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	社会をモデルでみる：数理社会学への招待	編著	2004年	勁草書房	土場学・小林盾・佐藤嘉論・ 数土直紀・三隅一人・ 渡辺勉編		
著書	社会学の古典理論：数理で蘇る巨匠たち	共著	2004年	勁草書房	三隅一人編(第4章執筆)		
論文	近代組織におけるフリーライダーの抑制	単著	2007年	理論と方法, 22巻2号, 205-225ページ	金井雅之・小林盾・ 大浦宏邦		
論文	学歴か縁故か：初職と転職への効果	単著	2008年	成蹊大学文学部紀要, 43号, 121-134ページ	小林盾		
論文	Estimation of Exit Behaviors	共著	2008年	統計学, 94号, 26-35ページ	藤山英樹・小林盾・ 小山友介・大浦宏邦		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本社会学会(研究活動委員会幹事委員, 国際交流委員会委員)							
日本数理社会学会(監事, 日米数理社会学会議オーガナイザー)							
American Sociological Association (Newsletter Editor of Section on Rationality and Society)							
International Sociological Association							
日独先端科学シンポジウム オーガナイザー(日本学術振興会主催, 2006年11月3～5日, ドイツ・ハイデルベルク)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	文学部	職 名	助 手	氏 名	阿部 暁帆	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	模索するエコロジカル・フェミニズム— Morrison と “extreme” な人々	単著	2004 年	『成蹊人文研究』 第 12 号 pp. 77-89.	阿部暁帆		
論文	『タール・ベイビー』における家父長制の 崩壊と自然の復権—カリブの島とスト リート家の人々をめぐって	単著	2005 年	『成蹊人文研究』 第 13 号 pp. 17-28.	阿部暁帆		
論文	『タール・ベイビー』における “Brier Rabbits” のゆくえ—セザールの「ネグリチ ュード」から「クレオール化」へ	単著	2006 年	『成蹊人文研究』 第 14 号 pp. 43-59.	阿部暁帆		
論文	「美」, ファンキネスと双極性—Toni Morrison の <i>The Bluest Eye</i>	単著	2007 年	『成蹊人文研究』 第 15 号 pp. 1-16.	阿部暁帆		
論文	<i>Tar Baby</i> におけるカリブの自然と女—エ コロジカル・フェミニズムからの考察	単著	2007 年	日本アメリカ文学会東京支部 『アメリカ文学』 68 号 pp. 34-40.	阿部暁帆		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本英文学会							
日本アメリカ文学会							

法 学 部

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教 授	氏 名	安部 圭介	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要			
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 法律学科必修科目「憲法I」の担当		2004年度～現在		判例を素材とした双方向的なディスカッションを取り入れた授業を実施するとともに、過去10年分の各種公務員試験の憲法の問題に目を通し、学生の学習上の相談に応じて実質的な指導も行った。幅広いニーズに対応するため、授業時間外の研究室での指導にも力を注いだ。			
2.作成した教科書、教材、参考書 速効！憲法ノート (第1回～第24回)		2005年8月 ～2007年7月		「受験ジャーナル」誌上に憲法の重要論点の解説を連載した。各号とも上記授業の柱となる教材として活用した。この連載は、2008年3月に1冊の教科書として刊行した(「速効！憲法ノート」DTP出版)。			
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 上記2の単著としての刊行に向けた取りまとめ、内容の見直し		2007年8月 ～2008年3月		1冊の教材としてまとめるための整理を行った。			
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	生命倫理と法	共著	2005年	弘文堂	樋口範雄・土屋裕子(以上編者)・安部圭介ほか、22名		
著書	歴史のなかの政教分離:英米におけるその起源と展開	共著	2006年	彩流社	大西直樹・千葉真(以上編者)・安部圭介ほか、9名		
論文	公共的訴訟における一部勝訴と弁護士費用の敗訴者負担:名目的損害賠償のみを得た原告の弁護士費用をめぐって	単著	2005年	リーガル・エイド研究11号25-49頁	安部圭介		
論文	アメリカ型連邦制の現在:その人権保障へのインプリケーションを中心に	単著	2006年	比較法研究67号7-32頁	安部圭介		
論文	差別の禁止の基礎にあるもの:アメリカ法における「平等」からの示唆	単著	2007年	法律時報79巻3号37-42頁	安部圭介		
III 学会等及び社会における主な活動							
日米法学会(評議員、雑誌編集幹事)							
比較法学会							
キリスト教文化学会							
初期アメリカ学会							
日本公法学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	安西 明子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u> ブリッジブック民事訴訟法 (共著)		2006年2月5日					
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	新民事救済手続法	共著	2006年	法律文化社	◎井上治典, 中島弘雅		
著書	ADR	共著	2007年	有斐閣	和田仁孝		
論文	「専門訴訟」における争点形成と審理方式	単著	2004年	成蹊法学60号	安西明子		
論文	公正な争点形成のための審理・判断手法	単著	2008年	民事紛争と手続理論の現在 法律文化社	安西明子		
その他	法中という宗教上の地位の確認を求める 訴えが法律上の争訟に当たるとされた事 例	単著	2004年	私法判例リマークス28号	安西明子		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本民事訴訟法学会 役員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	遠藤 誠治	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 担当している講義科目「現代の国際関係」「国際政治学Ⅰ」「国際政治学Ⅱ」「平和研究」におけるレジュメ・資料の作成と配布		2003年度～2007年度	担当している講義科目の全てにおいて、学生に配布するための詳細なレジュメその他の資料をほぼ毎回作成し、学生の利用に供したのみならず、IT'sClassにおいて常にダウンロード可能な状態にした。				
2.作成した教科書、教材、参考書 川崎修・杉田淳編『現代政治理論』(有斐閣、2006年)に第11章「国境を超える政治の理論——グローバルゼーション、デモクラシー、リベラリズム」(261-289頁)を寄稿した。		2006年	政治学教育において現代政治理論の展開を正確に伝えることは不可欠であるが、その分野に関する概説書は欠けていた。川崎修・杉田敦という二人の強力な編者によって進められたこの企画の中で遠藤は扱うことが困難な国境を超えた政治を考える視座を読者対象である大学2～3年生にわかりやすく解説した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『グローバル対話社会——力の秩序を超えて——』	共著	2007年	明石書店	遠藤誠治・小川有美編		
論文	『危機の20年』から国際秩序の再建へ——E.H.カーの国際政治理論の再検討』	単著	2003年	『思想』第945号、2003年1月号、46-66頁	遠藤誠治		
論文	『冷戦後の紛争』とグローバルゼーション』	単著	2003年	広島市立大学広島平和研究所編『人道危機と国際介入』有信堂、43-66頁	遠藤誠治		
論文	『国際政治における規範の機能と構造変動——自由主義の隘路』	単著	2004年	藤原昶一・李鍾元・古城佳子・石田淳編『国際政治論座3』東京大学出版会、45-104頁	遠藤誠治		
論文	『世界秩序の変動と平等——グローバルゼーションと平等指向の自由主義の再生』	単著	2006年	日本政治学会編『年報政治学2006-I 平等と政治』木鐸社、41-64頁	遠藤誠治		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本政治学会							
日本国際政治学会							
日本平和学会							
International Studies Association							
British International Studies Association							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	加藤 節	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 講義・演習とも常にレジュメを用意し、学生の理解が進むように工夫するとともに、質問の時間を意識的に設けて、学生の疑問を解くことに努めた。		各年	学生による授業評価を行った。				
2.作成した教科書、教材、参考書 各授業毎にレジュメを用意した。また、教材は必要に応じて印刷して配布した。		各年					
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 日本学術会議政治学委員会主催の公開シンポジウム「学術は軍縮をどう推進できるか」において、主として「政治教育」の観点から講演を行った。		2007年9月22日					
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	『政治与人』	単著	2003年	北京大学出版社	加藤節		
著書	『政治学を問いなおす』	単著	2004年	筑摩書房	加藤節		
論文	「国民・群衆・暴徒」	単著	2003年	『思想』(岩波書店)	加藤節		
論文	「同時代史考-政治思想からの問い(12回)」	単著	2004年 ～2005年	『世界』(岩波書店)	加藤節		
翻訳	『総合二論』	単訳	2007年	岩波書店	ジョン・ロック		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本政治学会(理事)							
日本政治思想学会							
日本平和学会							
日本学術会議会員							
南原繁研究会(代表)							

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	亀嶋 庸一	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	20世紀政治思想の内部と外部	単著	2003年	岩波書店	亀嶋庸一		
論文	安藤英治の「内なるウェーバーの旅」(安藤「聞き手」・亀嶋【編】・今野元【訳】『回想のマックス・ウェーバー』所収)	単著	2005年	岩波書店, 243-267	亀嶋庸一		
論文	20世紀の「思想変容」とその後-シュミットとアレント再論-	単著	2005年	成蹊法学, 61, 472-458	亀嶋庸一		
論文	マックス・ウェーバーにおける戦争と政治-《宗教社会学》への試論として(日本政治学会編『年報政治学 2007-1 戦争と政治学』所収)	単著	2007年	木鐸社, 11-34	亀嶋庸一		
論文	マックス・ウェーバーの思想世界-《20世紀》への問い(『現代思想 臨時増刊号 総特集マックス・ウェーバー』所収)	単著	2007年	青土社, 28-44	亀嶋庸一		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本政治学会							
政治思想学会(理事)							
成蹊大学思想史研究会(事務局)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	川澄 英男	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 学習・プレゼンテーション研究		2003年4月1日 ～2006年3月31日	学習の発表・プレゼンテーションを学生に課し、与えられた課題について、もし自分が教壇に立って教えるとしたら何処に重点を置き何に注意するかを常に念頭に置くように指導し、課題の理解と問題点の発見を促した。さらに、英文を読ませ、その内容について各自がどのような考えを持つかを発表させ、英語として英文を情報獲得のための手段であり、活用すべきものであることを徹底的に体得させた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「多様な英文48章」の作成		2005年4月1日 ～2007年3月31日	多様な文体の英文に接するため、エッセイ、小説、文学、新聞、雑誌、政治、経済、法律関係のテキストなどから、英文としてまた内容的にも適切なものを収集し教材を作成し活用した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「学生の学習状況と今後の課題」に関する発表		2006年11月26日	学習の意義を見出せないでいる学生、大学とは何かを理解できないでいる学生などの現状分析と、学習評価のあり方を含めて、いかに本来の大学教育を実践していくべきかの提案と議論。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 「英文読解の一つの方向」研究		2006年4月1日 ～2008年3月31日	昨今様々な問題が生じているが、社会に出る前の4年間の大学での教育において、人の心を理解し思いやる力を身につけさせることが極めて肝要なことと思われる。そのために、人の文章を読む、即ち英文を精読するという緻密な読解を通して、作者の心が一体どこにあるのか、真に言わんとする事は何かを把握するという、高度な英文解釈を試みた。そしてそれに伴って、作者の意識の流れと英文構造の相関関係を解明し、正しく英文を理解する技術と能力が得られるよう、特に意を注いだ。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	ディケンズ鑑賞大辞典	分担執筆	2007年	南雲堂	川澄英男		
論文	American Notesのスタイル	単著	2004年	成蹊法学 第59号	川澄英男		
論文	ディケンズを聴くアメリカ(1) " (2) " (3)	単著	2004年 2005年 2007年	成蹊法学 第60号 " 第61号 " 第65号	川澄英男		
その他	『チャールズ・ディケンズの謎』	単著	2004年	ディケンズフェローシップ日本支部年報 第27号	川澄英男		
その他	ディケンズ『アメリカ紀行』 大井浩二『旅人たちのアメリカーコベツト、クーパー、ディケンズ』	単著	2006年	ディケンズフェローシップ日本支部年報 第29号	川澄英男		
III 学会等及び社会における主な活動							
Ralph Waldo Emerson Society, U.S.A.							
Dickens Fellowship							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	金 光 旭	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	中国における司法改革の動向	単著	2005年	有斐閣, ジュリスト, 1288号, 128-135頁	金光旭		
論文	違法性の意識	単著	2007年	成文堂, 責任論とカード犯罪, 91-109頁	西田典之編		
論文	日本刑法における実行行為	単著	2008年	北京大学出版社, 中外法学2008年第3期, 234-245頁	金光旭		
論文	中間処遇及び刑執行終了者に対する処遇	単著	2008年	有斐閣, ジュリスト, 1356号, 142-151頁	金光旭		
論文	危険運転致傷罪	単著	2008年	有斐閣, 刑法判例百選II各論(第6版), 14-15頁	西田典之他編		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本刑法学会							
日中刑事法研究会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教 授	氏 名	小林 登	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 講義科目：商法Ⅱ，商法Ⅲ		2006年10月～現在	2006年10月の海外研究からの帰国後、講義科目としては商法Ⅱ，商法Ⅲを担当しているが、学生にできるだけ具体的な問題点の所在を理解させるため、特に判例における事実関係を重視して説明するようにしている。また、学生に法的な問題点について自己の頭で考えさせるために、訓練の一環として講義に際し適宜当てて発言させることにしている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「現代商法入門」(第7版)		2006年10月20日	商法に関する基本的なテキストとして、1996年以来発行し、その後の法律の改正に合わせて改訂を行ってきたものである。第7版では、2005年における商法改正及び会社法の制定に基づく改訂がなされている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 運送法改正研究会への参画		2007年1月～現在	今後の商法の改正として予定されている運送法における問題点の整理と検討を、東大、早稲田大、中央大、法政大、上智大における研究者と共同で現在行っている。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	Japanese Insurance Law (International Encyclopaedia of Laws)	共著	2004年	Kluwer Law International	Kobayashi, N. et.al.		
論文	船舶運行情の主体と補助者	単著	2003年	商事法務・海法体系	小林登		
論文	船舶先取特権をめぐる諸問題	単著	2004年	損害保険研究65巻3・4号	小林登		
論文	船主責任制限法3条1項の責任制限債権に関する一考察	単著	2004年	商事法務・商事法への提言	小林登		
論文	フランスにおけるスペース・チャーター論について	単著	2007年	商事法務・企業法の理論(下巻)	小林登		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本海法学会(理事)							
日本空法学会(理事)							
日本私法学会(理事)							
日本保険学会							
(財)日本海法会(理事)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	小原 隆治	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	これでいいのか平成の大合併	編著	2003年	コモンズ	小原隆治		
著書	日韓の地方自治と地域開発	共編著	2005年	第一書林	小原隆治・趙文富		
著書	岩波講座都市の再生を考える 2 都市の ガバナンス	共著	2005年	岩波書店	植田和弘・神野直彦・ 西村幸夫・間宮陽介編, 小原隆治ほか7名執筆(掲 載5番目)		
著書	大都市のあゆみ	共著	2006年	東京市政調査会	東京市政調査会編, 小原隆治ほか8名執筆 (掲載8番目)		
著書	平成大合併と広域連合	共編著	2007年	公人社	小原隆治・長野県地方自治 研究センター		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本行政学会							
日本地方自治学会(理事, 企画委員長)							
日本政治学会							
豊島区自治推進委員会委員							

専任教員の教育・研究業績

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	境 広志	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
(表 24)							
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	スポーツ中の効果的な眼の使い方を導く 言葉がけについて	共著	2006年	成蹊大学一般研究報告第37巻	境広志・清水裕		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本体育学会							
日本テニス学会							
ランニング学会							
関東地区大学テニス研究会(幹事・会計)							
(表 25)							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等				
日中成人スポーツ交流事業(文部科学省国庫補助事業)	中華人民共和国(広州市)	2007年6月29日 ～7月4日	日本体育協会からの派遣選手として, 中国代表選手とのテニスの 試合をする。				

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	里村 和秋	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) CALL 教室におけるビデオ通話ソフト Skype を利用しての チームティーチングと e- learning の実践による Blended learning の実践		2007 年					
2.作成した教科書, 教材, 参考書 ドイツ語インターネット学習システムの作成		2007 年	http://online-deutsch.manabu3.com/				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 授業支援ソフトの組み合わせによる効果的な外国語授業 の展開の試み		2007 年 7 月 7 日	19 年度全国大学 IT 活用教育方法研究発表会				
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	ドイツ文法へのアプローチ	共著	2004 年	郁文堂	里村和秋・馬上徳		
論文	ヘルマン・ヘッセの『荒野の狼』論 ―欲望の構造と自己認識の問題について―	単著	2007 年	「成蹊法学」 第 65 号	里村和秋		
論文	複数のソフトウェアとチームティーチングによる効果的な外国語授業の試み	単著	2007 年	IT 活用教育方法研究 第 10 巻 第 1 号 2007 年 11 月 社団法人 私立大学情報教育協会	里村和秋・ Oliver Bayerlein		
論文	現実と虚構の対位法 ―アルトゥール・シュニッツラーの 『緑のオウム亭』について―	単著	2008 年	「成蹊法学」 第 67 号	里村和秋		
翻訳	「荒野の狼」 (ヘルマン・ヘッセ全集 13 巻 編集責任)	単著	2006 年	臨川書店	里村和秋		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本独文学会							
東北ドイツ文学会							
日本ヘルマン・ヘッセ研究会(事務局 担当)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	塩澤 一洋	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 全ての講義で学生たちに「オピニオンペーパー」を記載させ、コメントを書いて次週に返却		2003, 2004, 2005, 2007 年度	毎回の講義の最後に、当日の講義内容を応用した「クイズ」を出す。学生たちはそれに対する解答を「オピニオンペーパー」に記載する。さらにそのオピニオンペーパーには、疑問、質問、意見、その他何を書いてもいいことになっており、学生たちからの多彩な意見や質問が集まる。私は個々のオピニオンペーパーに対してコメントを書いて次回に返却するとともに、その講義の始めに前回の「クイズ」の解説とオピニオンペーパーに書かれた質問に対する解説を行う。これによって100人〜400人といった大人数が出席している教室においても、双方向性を表現している。				
2.作成した教科書、教材、参考書 民法の全体及び各要点の作図方法の統一		2007 年度	従来、日本全国の各教科書、各教員でまちまちであった民法各制度の図を、民法全体を通して一貫したものとし、図による体系を構築した。その上で、自分が担当する民法の各講義で教材として用いることによって、ともすると全体像が見えにくくなる民法の構造に対する理解度を向上させた。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 カンボジア王立ブノンベン法経大学における法学教育研究会においてカリキュラムの編成について講述		2004 年 3 月	カンボジア王国に対する法整備支援の一環として、王立ブノンベン法経大学の教授陣に対し、法学教育のカリキュラム編成やその意義などについて講述。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 複数学年にまたがるゼミを毎年開講		2003, 2004, 2005, 2007 年度	毎年全学年に対してゼミを開講し、その一部を複数学年にまたがるゼミとすることによって、上級生の「教えるチカラ」と下級生の「問うチカラ」とともに涵養している。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	知的財産権事典	共著	2004 年	丸善・77〜78 頁	半田正夫、牧野利秋、盛岡一夫、角田政芳、三浦正広編著		
著書	DVD-ROM で学ぶ「知的財産」入門	共著	2004 年	PHP 研究所・東京大学先端科学技術研究センター『DVD-ROM で学ぶ「知的財産」入門』Disc 3	生越由美、塩澤一洋		
論文	知的・文化的に豊かな地域社会の形成	単著	2004 年	ぎょうせい・ガバナンス 40 号・84〜85 頁	塩澤一洋		
論文	著作権法の創造性・序説	単著	2006 年	『知的財産権法と競争法の現代的展開(紋谷暢男教授古希記念論文集)』・591〜612 頁	塩澤一洋		
その他	法律家が見る IT 業界	単著	2003〜2006 年	アスキー・月刊アスキー・毎月連載(全45回)	塩澤一洋		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本私法学会							
著作権法学会(幹事)							
日本工業所有権法学会							
法とコンピュータ学会							
特定非営利活動法人日本カンボジア法律家の会 理事							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	瀬戸 一夫	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u> 公開講座 (成蹊大学) 「古代ギリシアの民主政と自然観」		2006年5月27日	古代ギリシアの民主政が発展する重要な一面として, 自然論 (初期ギリシア思想) が担った役割を解説し, 現代社会と現代科学の関係をあらためて問い直す新たな材料とした。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌 (書) ・ページ数等	編者・著者名		
著書	時間の民族史—教会改革とノルマン征服の神学	単著	2003年	勁草書房	瀬戸一夫		
著書	知識と時間—古代ギリシアの文化相対主義	単著	2003年	勁草書房	瀬戸一夫		
著書	科学的思考とは何だろうか—ものつくりの視点から	単著	2004年	勁草書房	瀬戸一夫		
著書	神学と科学—アンセルムスの時間論	単著	2006年	勁草書房	瀬戸一夫		
著書	時間の思想史—アンセルムスの神学と政治	単著	2008年	勁草書房	瀬戸一夫		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本哲学会							
日本科学哲学会							
ヘーゲル学会							
日本フィヒテ協会							
政治思想史学会							

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	曾田 厚	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 法学教育における本質論の重視							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
その他	「占有法」 Savigny, Das Recht des Besitzes		2006 年	成蹊大学図書館	大学図書館 貴重書 解説集 作成委員会 編		
III 学会等及び社会における主な活動							

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	富田 武	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 新授業科目「戦後史総合」の提唱と実践		2007年9月 ～2008年3月	本学学生が入学前に日本史、世界史のいずれしか学ばず、それも多くの場合戦後史まで習っていないため、専門科目を教えることも困難だという経験的認識から、国際教育センター提供学部横断科目の一つとして「戦後史総合」を設けるよう提案し、自ら最初の授業を担当した。科目の正式名称は「世界と日本（第二次世界大戦後の世界と日本）」で、14回の授業に4回ビデオを入れて視覚に訴え、また講師が1945年生まれであるため経験談で裏打ちしながら、リアルな、生きた戦後史を語る事ができたと思っており、学生の授業評価でも好評であった。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	後藤新平訪ソと漁業協約交渉	単著	2005年	成蹊法学, 第61号, 19-58頁	富田武		
論文	1929年の日ソ漁業交渉	単著	2005年	ロシア史研究, 第77号, 36-52頁	富田武		
論文	スターリン批判と日本の左翼知識人	単著	2006年	季刊 現代の理論, 第9巻, 179-193頁	富田武		
論文	後藤新平と日露協会	単著	2007年	季刊 環, 第30巻, 310-327頁	富田武		
論文	満州事変前後の日ソ漁業交渉	単著	2007年	歴史学研究, 第834号, 47-63, 80頁	富田武		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本政治学会							
日本比較政治学会							
ロシア史研究会							
『季刊 現代の理論』編集委員							
20世紀ロシア社会研究協会(モスクワ) 国際評議員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教 授	氏 名	西崎 文子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 視覚に訴えるような工夫 (ビデオ教材の利用)		2003 年度～現在	授業ではレジュメ、資料の配布を行っている。また、歴史の講義には、ビデオ教材を利用。				
2.作成した教科書、教材、参考書 『戦後アメリカ外交史』(佐々木卓也編、有斐閣) 『アメリカ外交とは何か』(岩波書店)		2002 年 2004 年	第一章の執筆を担当したが、このテキストは版をかきね、今年度中に改訂版が出る予定。 テキストとして書かれたものではないが、他大学を含め、広くアメリカ史・外交史の授業 に使われている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	アメリカ外交とは何か	単著	2004 年	岩波書店	西崎文子		
著書	アメリカ外交と 21 世紀の世界	共著	2006 年	「第一章 歴史的文脈 ウィルソン外交の伝 統」 担当 昭和堂	西崎文子、五十嵐武士、佐 々木卓也、小野沢透、他 4 名		
論文	"The Genealogy of American Internationalism"	単著	2004 年	Post Cold War Europe, Post Cold War Asia, VU University Press, Amsterdam	Ruud Janssens and Rob Kroes, ed		
論文	ポスト冷戦とアメリカ	単著	2006 年	『グローバリゼーションと帝国』(シリーズ アメリカ研究の越境、ミネルヴァ書房)	紀平英作・油井大三郎編		
論文	ポスト冷戦時代再考－「歴史の終焉」を信 じる前に	単著	2007 年	「論座」5 月号 44－53 頁			
III 学会等及び社会における主な活動							
日本アメリカ学会 (理事)							
日本国際政治学会 (評議員)							
日本アメリカ史学会 (編集委員代表)							
日本政治学会 (理事)							
Organization of American Historians							

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	西村 美香	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) IT's Class を利用して一人の学生につき半年に2~3回 の小レポート提出		2003 年度~2007 年度	授業内容について、毎回課題を出して小レポートを提出させ、その内容について講評 することで、学生をつまづきやすい点について再度詳しく説明し、大規模教室でも 双方向で学生とやりとりができるように心がけた。それと同時に、平常点として最高20 点を与え、大人数(例年300~600人の受講生)でありながら筆記試験と平常点とのバラ ンスをとるようにした。				
2.作成した教科書、教材、参考書 作成したレジュメの配布		2003 年度~2007 年度	現在、行政学お活字になる頃には古いといわれるほどで、教科書として指定するだけ では不十分である。そこで教科書的なものを1冊指定して(西尾勝著『新版 行政学』 有斐閣)図書館に相当数置いてもらったが、基本的にはレジュメを中心に時事問題を織 り込みながら、随時参考になる話題の書を紹介しながら授業を進めてきた。レジュメで は、何を学ぼうとしているか目的意識を持ってもらうために、単元ごとにそのテーマに 対する自分の考えを書く欄をつくり、そのテーマを終えると授業によってどう考えが変 わったかを書かせる欄も作っている。それによって学生達が授業をどのように受け止め ているかをチェックするとともに、授業内容をもとに「自分はどう考えるのか」と、行 政について考えることを奨励している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 ゼミでは討論活性化のためにレジュメ作りから発表、討 論、行政の現場へのインタビューの仕方などメールや面談 によって細かく指導している。		2003 年度~2007 年度	大教室での講義とは違い、ゼミでは一人一人が積極的に参加して討論を活性化できる よう、レジュメ作成段階からメールや面談で学生と細かく打ち合わせを行っている。夏 休みなど報告準備の時間が長い場合には、行政の現場を訪問するよう奨励し、アポイント メントの取り方や礼状の書き方まで指導している。発表や討論においては「発言しな ければ欠席扱いにする」というルールの下で、討論のポイントや自分の意見をまとめる ためにどのようにすればよいかについて絶えず助言し、全員発言でのゼミの活性化を行 っている。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	公務員制度改革と労働基本権問題	単著	2003 年	『都市問題研究』第55巻第1号	西村美香		
論文	地方公務員制度における任用の多様化・弾 力化の限界	単著	2004 年	東京市政調査会『都市問題』第95巻第12号	西村美香		
論文	集番付管理で替わるもの-オーストラリア連邦 公務員における分権的職員数管理の事例-	単著	2005 年	(財)行政学管理研究センター『季刊 行政管 理研究』第110号	西村美香		
論文	韓国における地域開発政策と地方自治	単著	2005 年	第一書林『日韓の地方自治と地域開発』第5章	小原隆治・趙文富 編著		
論文	官民イコールフットィング? ニュージー ランド公務員の労働政策	単著	2007 年	(財)行政学管理研究センター『季刊 行政管 理研究』第118号・第120号	西村美香		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本行政学会(理事)							
総務省・官民人事交流推進会議専門部会委員							
総務省 地方公共団体における人事評価の活用等に関する研究会委員							
日本都市センター 都市分権政策センター委員							
全国市長会・日本都市センター・東京市政調査会(道州制と都市自治体に関する検討会委員)・大都市”にふさわしい行財政制度のあり方についての懇話会委員)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	光田 剛	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 授業毎回の質問・メッセージシート		2003 年度より毎年度	講義科目で、毎回、学生に質問・メッセージシートを配布し、回収した。その回ごとの学生の理解度、プレゼンテーションのミスなどを理解し、次回以降の授業に役立てた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 ホームページ上での教材公開・配布		2003 年度より毎年度	講義科目では、毎回、教材（授業レジュメ）を作成し、個人ホームページ（ http://www.nk.rim.or.jp/~tmitsuta/seikei/ 、現在は閉鎖、2007 年度は IT's Class を利用）上で公開した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌（書）・ページ数等	編者・著者名		
著書	中国国民政府期の華北政治	単著	2007 年	御茶の水書房、368 頁	光田剛		
論文	華北抗戦と国民党政権	単著	2005 年	『民国後期中国国民党政権の研究』、中央大学出版部、36 頁	中央大学人文科学研究所 (編)/研究グループ代表： ◎齋藤道彦		
III 学会等及び社会における主な活動							
中国社会文化学会							
日本現代中国学会							
日本平和学会							
史学会							
歴史学研究会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	宮村 治雄	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 教科書・プリント・講義の三つの要素を組み合わせる工夫を、放送大学での授業と並行して試みている。		2005年4月～現在					
2.作成した教科書, 教材, 参考書 『日本政治思想史―「自由」の観念を軸として―』(放送教育振興会刊2005.5)教科書。		2005年5月	古代から近代までの日本の政治思想史を、「自由」というコトバの用例を手がかりに通観した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 放送大学での講義を通じて多様な世代の人と接しながら、授業内容の伝わり方について考えてきた。		2005年9月～現在					
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	日本政治思想史―「自由」の観念を軸として―	単著	2005年	日本放送教育振興会全320頁	宮村治雄		
論文	福沢諭吉における「専横」と「自由」	単著	2007年	福沢諭吉協会 『福沢諭吉年鑑』34 69-101頁	(福沢諭吉協会編) 宮村治雄		
論文	リベラリズムをめぐる「回想」と「思索」 ―松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男回顧談』 を讀む―	単著	2008年	岩波書店 『思想』2008.5	宮村治雄		
その他	「藤田省三対話集成第3巻」解説	単著	2007年	みすず書房2007.5 355-367頁	宮村治雄		
その他	「萩原延壽集1 馬場辰猪」解説	単著	2007年	朝日新聞社 376-391頁	宮村治雄		
III 学会等及び社会における主な活動							
政治思想学会(理事)							
東京女子大学 丸山眞男文庫顧問							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	宮本 光雄	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 演習科目におけるグループ研究と個別研究		2003年4月1日～現在	演習科目の参加者を3～4名ずつのグループに分け、各週のテーマに興味をもったグループに研究発表をしてもらう。発表するグループは参加者全員にレジュメを配付する。発表するグループ以外の参加者には当該テーマについてのレポートを授業の前日までにメールで提出してもらい、そのうえで、ディベートに加わる。 4年次生の演習科目では、参加者が独自にテーマを設定して研究発表し、最後にそれをゼミ論集としてまとめて印刷する。				
2.作成した教科書、教材、参考書 プリント教材の配付		2003年4月1日～現在	授業では授業の理解を助ける手段として、まず、授業の目的と全体計画を記したプリントを配付し、そのうえで、毎週授業内容のレジュメを配付し、さらに、資料を配付する。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 ビデオ教材やメール通信の活用 夏期ゼミ合宿を行う		2003年4月1日～現在	授業にテレビ放送等の録画をビデオ教材として活用する。 演習科目では、ディベートを行う。また、メールで質問に答えたり、そのほかの問題でもメールで学生とコミュニケーションをとる。さらに、懇親会を催したり、夏季の授業休みには、合宿を行い、長時間の授業を行うとともに、学生間の親睦を深める。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	EU 統合は深化化する	単著	2004年	潮8月号	宮本光雄		
論文	欧州憲法の思想と課題	単著	2004年	日本国際政治学会研究大会	宮本光雄		
論文	ユロテラリズムとマルチテラリズム - 国連体制の将来	単著	2006年	成蹊法学 63号	宮本光雄		
論文	ポーランドとEU	単著	2006年	日本EU学会年報 26号	宮本光雄		
論文	占領と抵抗の対話を求めて - EU とパ レスティナ問題	単著	2008年	成蹊法学 67号	宮本光雄		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本政治学会							
日本国際政治学会							
日本EU学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	山田 崇人	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 近年注目を浴び始めた教授法の導入		2004年4月1日～現在	ここ2, 3年大いに注目を浴び始めた, SSS方式多読 (Extensive reading) をいち早く紹介し, 国際教育センター提供科目として正規のカリキュラムの中に取り入れた。大学の正規のカリキュラムでこの多読を実施したのは, 日本ではおそらく成蹊が最初である。				
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	Lyrical Ballads における Wordsworth の 聖書への言及について	単著	2003年	成蹊法学第56号, 204-224	山田崇人		
その他	書評 笠原明彦編『地誌から叙情へ—イギ リス・ロマン主義の源流をたどる』	単著	2006年	イギリスロマン派研究第29・30合併号, 109-114	山田崇人		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本英文学会 (事務局長, ホームページ担当)							
イギリス・ロマン派学会 (企画運営委員)							
日本多読学会							

所 属	法学部	職 名	授 課	氏 名	湯山 トミ子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ICTを活用した中国語音声教育の効果的、効率的な方法に関する教授法の研究		2003年4月1日 ～2007年7月31日	中国語学習において重要な不可欠となる音声教育の効率的、効果的な方法に関する教育研究。単音節孤立語、声調言語の特徴をもつ中国語は、一字一音一義を原則とし、一文字のもつ発音の意義が重く、基本発音の習得の如何がその後の中国語学習そのものを左右する重要な要素となる。なかでも最終的に意味の弁別を担う声調感覚の習得は、中国語入門、基礎段階における音声学習の核となるばかりでなく、その後の中国語学習すべての基盤となる点で、とりわけ重要である。本研究では、短期間に、確実に、声調感覚を身につけ、正しい発音を習得する為の効果的、効率的な教育方法を検討し、再考し、新たな方法論の創出を目指した。内容的には、非声調言語を母国語とする日本人学習者の発音習得において重要な習得課題となる声調感覚の養成に有用な補助手段となる ICT (Information and Communication Technology) の活用を重視した。なお、本研究の具体的研究成果として、2002 年度より開発を始めた中国語音声教育 DB システム (汎用版、2002～2006 年度科学研究費補助金研究成果公開促進費による開発成果、中上級者・専門家を対象とする音声、声調波形表示機能付大型中国語教育 WEB システム、2002 年度私立大学情報教育協会情報教育方法研究会奨励賞受賞)、並びにその発展となる現代 GP (「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」以下現代 GP とする) 採択プロジェクト“游”(項目 4 参照) が挙げられる。				
2.作成した教科書教材参考書 中国語基礎教育の為の基本 3 コンテンツの連係制作 【『発音の基礎』・『発音と語法の基礎』・『マルチメディアビジュアルディクショナリー』】		2003年4月1日 ～2007年7月31日	コミュニケーション力の育成に配慮した中国語基礎教育の為のコンテンツの制作 (紙面、電子媒体 DVD、WEB)。大学教養課程において、中国語学習者にもっとも多く見られる学習動機、習得目標は、聞き、話せるコミュニケーション言語としての中国語習得である。当該コンテンツは、聞き、話せるコミュニケーション言語の習得に不可欠な音声学習を重視した中国語初級者の為のコンテンツである。具体的には、基礎発音・発音と語法・語彙力増強の三つの基本内容により構成されている。発音 (『中国語の発音 (基礎編)』) は、非声調言語であり、かつ使用音域の狭い平仮な発音音域を基本とする日本語を母国語とする日本人学習者の中国語学習に配慮し、「点から線へ」(単音節→多音節、単語→フレーズ→文) へと展開する声調感覚の養成を目指している。『発音と語法の基礎』は、声調感覚重視の発音学習を基礎に、学習者が正しい発音の定着を図りながら基本文法を習得していくことを目指し、発音と語法学習の有機的連係を図るものである。さらに、『マルチメディアビジュアルディクショナリー』(2008 年度業績制作中) は、表意文字を基本とする中国語学習において、とすれば文字学習に比重がちな日本人学習者の語彙力の増強を図ることを目指しており、視覚効果を活用し、楽しみながら単語学習を行うことができる。なお、発音については、項目 1 に挙げた中国語音声教育 DB システム汎用版 (中上級者・専門家向け、音声、声調波形表示機能付大型中国語教育・学習 WEB システム) に、初級基礎学習者向けコンテンツを追加した簡易入門版の追加制作も行っている (2006 年)。				
3.教育方法・教育実践に関する発表講演等 ICTを活用した中国語基礎教育 (中国語 e-Learning システム“游”)に関する成果発表、紹介、学術報告		2007 年	音声教育を重視し、コミュニケーション能力の育成を図る中国語 ICT 教育システム“游”を考案し、非専門分野における中国語基礎力の養成とその活用を目指した。“游”は、中国語の言語学的特徴、大学教養課程における中国語教育の時間的制約に呼応して考案された総合的な教育、学習システムである。発音、発音と語法、語彙力の増強を目指す基本 3 コンテンツに加え、学習者がシステムに対して返答者にとまる受身型の学習を越えて、学ぶ主体として自らの教育を創造しうるエンドユーザー能動型教育システム——自動応答機能を備えた学習プログラムの機能を有している。この機能は、中国語教育にとまらず、ICT を活用した教育システムとしての特徴——教える為のツールから学ぶ為のツールへの転換、学ぶ主体の創造により教える手、学び手とともに教育主体となりうる双方向教育を実現できる点で独自の意義を有している。これらの諸特徴について、具体的に紹介する事例報告、学術報告を行い、学術方面では、日本 e-Learning 学会 2007 年秋季学術講演会審査員特別賞を受賞するなど、社会的に高い評価を得た。また“游”は項目 1・4 に記すように、大学教育改革の先進モデルとして、2006 年文部科学省大学教育改革事業現代 GP に採択されており、2006 年度大学教育改革プログラム合同フォーラムにおいて事例代表校に選ばれ、取組事業報告を行った。そのほか、「e-Learning WORLD 2007-Expo & Conference」(第 7 回 主催同慶実業委員会)の依頼により、同会議での事例報告、紹介ブースでの紹介 (e-school 第 3 回学校教育 IT 総合展)を行い、さらに“游”主催のフォーラムを二度開催し、事業内容、システム紹介と実践デモンストラーション、使用講習会を行った。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 文部科学省大学教育改革プログラム現代 GP 応募・採択		2006 年	グローバル化の進む現代世界で、英語に次ぐ第二の国際言語として中国語の需要が高まり、世界とアジアの人的交流に重要な役割を果たしている。こうした社会的な需要の増大を背景に、近年、大学において、中国語の学習希望者が増加しており、さらにその大半が聞き、話せるコミュニケーション言語としての習得を望んでいる。しかし、教養課程における第二外国語のもつ授業時間数の削減、声調言語としての中国語としての特徴などに阻まれ、学習者の望む学習目的が必ずしも実現されていない。こうした教育の現状に立ち、ICT を活用した中国語教育研究の立場から、教育改革を目指し、平成 18 年度現代 GP テーマ 6 部門「ニーズに基づく人材育成を目指した e-Learning Program の開発」に応募し、採択された。採択されたプロジェクトの正式名称は、「進化する教養教育と国際化新人材の育成—基礎力活用型中国語コミュニケーション能力育成展開プラン“游”」で、現在、全国の大学における教養教育改革先進モデル校として、文部科学省代 GP 事業補助金による財政支援を受け、2008 年度の最終完成を目指して開発を進めている最中である。2006 年度から行われた当該プロジェクトの開発成果は、それまでの既開発成果とともに、本学の中国語教育システムとして部分的に試用し、際立った教育成果が確認されている。本プロジェクトの実現は、アジアとの協働性が求められる日本において、選好がちな非専門分野における中国語人材の育成、成果に乏しいとの批判を受けやすい教養課程における語学教育、音声学以外に難易度が高いといわれる声調言語の習得、並びに中国語基礎教育の進化、発展に対して、有用かつ画期的な意義を示すものと評価できる。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行年	発行所・掲載誌 (書) ・ページ数等	編者・著者名		
著書	『家族の変容とジェンダー』第 12 章「撫養と瞻養—中国における扶養システムと親子観」	共著	2006 年	日本評論社	瀬地山角・小浜正子ほか 10 名 12 番目)		
著書	『近代中国における子ども観の社会的な研究—子ども・家族・社会』	単著	2006 年	科学研究費成果報告書(基礎研究 C)	湯山トミ子		
論文	『愛と復讐の断片——魯迅の“性の復讐”と“生の定立”』(日本語) ; 『愛と復讐の断片——魯迅の“性的復讐”と“生の定立”』(中国語)	単著	2006 年	『成蹊法学』第 65 号 (日本語) ; 『魯迅跨文化的対話—記念魯迅逝去 70 周年国際学術討論会論文集』 大象出版社 (中国語)	湯山トミ子		
論文	『“心有靈犀一点通”——路谷虹児的創作世界与魯迅的共鳴; “愛、浪漫与生活的回旋曲”』(中国語)	単著	2006 年	『記念魯迅定居上海 80 周年国際学術検討会論文集』上海魯迅紀念館編	湯山トミ子		
論文	『中国語 e-Learning システム“游”——構想と開発について』(日本 e-Learning 学会 2007 年秋季学術講演会審査員特別賞)	共著	2007 年	『日本 e-Learning 学会 2007 年秋季学術講演会予稿集』日本 e-Learning 学会	湯山トミ子・武田紀子		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本中国学会							
日本中国語学会							
日本現代中国学会							
中国文化社会学会							
中国語教育学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	教授	氏 名	李 静和	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 第二回アジアダンス会議 2005 年 基調講演「身体—からだ」		2005 年 2 月 7 日	国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター主催				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	求めの政治学	単著	2004 年	岩波書店	李静和		
著書	人文学における学問的アクティビズム	共著	2008 年	みすず書房	G. スピヴァク他		
著書	アジア・政治・アート	共著	2008 年	岩波書店	李静和編		
その他	日本・近代「内面」	共著	2005 年	現代思想社 現代思想 208-237 頁	村岡三郎・李静和		
その他	「教室」の舞台—教科書のある場所	単著	2006 年	京都造形芸術大学 舞台芸術 55-59 頁	李静和		
III 学会等及び社会における主な活動							
政治思想学会							
平和学会							
社会思想学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	飯田 高	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 模擬裁判・交渉シミュレーションを用いた演習		2006年4月～現在	限られた時間内で「法律の使い方」を体得してもらうという目的で、演習科目では以下の方法により授業を実施している。(1)受講者を5～6人の班に分け、各班に原告または被告の役を割り当てた上で模擬裁判(正確には裁判形式のディベート)を行う。(2)3～4人の班に分け、和解交渉や調停のシミュレーションを行う。いずれも、事案は概ね民法の範囲に属するものを用い、「両方の当事者がもっている情報」と「一方の当事者しかもっていない情報」を用意している。法律の単なる適用のみならず、相手の意図や行動を推測・予測しながら的確な解決案を見つけ出すというプロセスの重要性をいささかなりとも伝えることができるのではないかと考えている。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「現代法過程論教材」の作成		2006年9月1日 ～2007年1月31日	担当授業である「現代法過程論」は特殊な科目であり、「法と経済学」と「社会的選択理論」を扱っている。手頃なテキストは存在しないため、独自の教材を作成して受講者全員に配布した。この教材はその後改訂し、現在はウェブサイト上に掲載している。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	<法と経済学>の社会規範論	共著	2004年	勁草書房	飯田高		
著書	個人か集団か? 変わる労働と法	分担執筆	2006年	勁草書房	水町勇一郎編著		
論文	集合的サンクシオンに関する一考察	単著	2006年	法社会学65号 8-21頁	飯田高		
論文	暗黙の差別と法:経済学的アプローチと心理学的アプローチ	単著	2007年	法律時報79巻3号43-47頁	飯田高		
論文	雇用における性差別:法と経済学からのノート	単著	2007年	『雇用・社会保障とジェンダー』(嵩さやか・田中重人編,東北大学出版会)	飯田高		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本法社会学会(関東研究支部事務担当)							
法と経済学会							
Law and Society Association							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	北川 徹	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゲストスピーカーの利用、経済新聞・直近の研究会等の報告レポートや統計資料の活用		2007年9月21日～現在	法制度と現状の実務の問題点との関連を意識した授業の実施				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作レジュメの活用		2007年9月21日～現在	個々の事例の紹介や、実務上の問題点を提示し、法制度が経済主体に与える影響を具体的にイメージさせることによって、履修学生の問題意識を明確にした。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 都立高校への出張講義の実施		2007年11月14日	タイトル「日本のベンチャー企業を考える ―大学生による起業家体験プログラム」 わが国のベンチャー企業の創出と育成をテーマに、所属する大学で実施している大学生のための起業家育成プログラムを紹介し、起業活動の経済的意義や起業に関わる法制度について講義				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	ビジネス法務体系Ⅱ M&A ジョイント・ベンチャー	分担執筆	2007年	日本評論社	◎中野通明・宍戸善一編著 北川徹ほか11名執筆		
その他	新株の有利発行と利益相反取引が株主代表訴訟で争われた事例	単著	2003年	有斐閣・ジュリスト・1245号208頁	北川徹		
その他	閉鎖会社における取締役の経営判断の範囲が争われた事例	単著	2004年	有斐閣・ジュリスト・1270号197頁	北川徹		
その他	フランチャイズ契約の解除の有効性	単著	2005年	有斐閣・ジュリスト・1288号151頁	北川徹		
III 学会等及び社会における主な活動							
独立行政法人経済産業研究所 リサーチアシスタント (2007年10月より企業法研究会委員)							
日本私法学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	佐藤 義明	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 演習でのグループ研究		2007年4月1日 ～2008年3月31日	演習受講生を24名を4人ずつ6班に分け、前期は与えられたテーマに関する発表を、後期はみずから選択したテーマに関する発表をおこなわせた。テーマは2週間前までに参加者全員で共有し、準備期間にメールによる質問などを受け付けて報告の充実化を図った。				
2.作成した教科書、教材、参考書 国際事例集		2007年4月1日	過去3年間の新聞記事・雑誌記事から、国際法上の論点に深く関わる事例を収集した。編集方針はできる限り事実に関する争いが少なく、国際法上の基本的な論点を漏らすことなく取り上げられることである。この教材の使用により、問題解決型の法的思考を涵養することが可能となった。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「学会展望：Jordan J. Paust et al., International Law and Litigation in the U.S. (West, 2000, xxxx+1038pp.)」 国家学会雑誌116巻5・6号208-212頁(2003)。		2003年	合衆国において利用されている国際法のケース・ブックの包括的なサーヴェイをすることにより、国際法教育における教材の在り方に関する考察をおこなった。日本における伝統的な講義に加えて、ソクラティック・メソッドを利用する利点やその方法に関する1つの見方を示した。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 「生きた」国際法を体感する教育の提案		2005年4月1日～現在	国際法教育における伝統的な体系的講義に加えて、演習におけるケース・スタディやプロブレム・メソッドなどの合衆国で用いられている教育手法を導入したり、回顧録を通して政治家や外交官が具体的事例の解決のために国際法を利用し・無視したりして、国際法の「生きた」姿を受講生に体感させる手法を開発してきた。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	国法としての国際法と憲法：公共空間の融合する時代における『法の支配』の実現	単著	2005年	東京大学社会科学研究所・社会科学研究 56巻5・6号・139-163頁			
論文	NAFTAの合衆国憲法適合性：法化における“precision”と“delegation”	単著	2006年	東京大学社会科学研究所・ISS Joint Research Project Discussion Paper CREP Seminar9：国家主権と地域主義・1-8頁			
論文	国際法へのコモン・ロー法律家的なアプローチと9.11後のアラカルト多国間主義	単著	2006年	日米法学会・アメリカ法2006年2号・213-231頁			
論文	コスモポリタン法としてのEU立法：国際組織法の第3の法源	単著	2007年	聖学院大学出版会・多層的ヨーロッパ統合と法・544-564頁	大木雅夫・中村民雄編		
論文	Draft Charter of the East Asian Community: An Academic Proposal, Organisations, Community Policies	共著	2008年	Institute of Social Science, University of Tokyo・ISS Research Series No.28: Future East Asian Regionalism・pp.25-39	Tamio Nakamura, Takao Suami and Yoshiaki Sato		
III 学会等及び社会における主な活動							
国際法学会							
キリスト教文化学会							
日米法学会							
World Society of Mixed Jurisdiction Jurists							
International Law Association Japan Branch							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	高安 健将	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	「政党政治と執政政治の間 - 首相の日英比較」『日本政治を比較する』(日本比較政治学会年報第7号)	共著	2005年	早稲田大学出版会	日本比較政治学会編		
著書	「執政府に対する監視とコントロール - プレア政権下の議会・政権党・司法の役割」『EU/西欧政治論』	共著	近刊	ミネルヴァ書房	押村高・小久保康之編		
論文	「戦後日本政治と首相の権力」	単著	2007年	創文, 第495号	高安健将		
論文	「安倍政権は『官邸主導』か?」	単著	2007年	『世界』7月号	高安健将		
論文	「英国労働党の現代化戦略 - 政策転換・政策刷新・積極的メディア対策」	単著	2007年	『成蹊法学』第65号	高安健将		
III 学会等及び社会における主な活動							
Political Studies Association (PSA)							
American Political Science Association (APSA)							
日本比較政治学会							
日本政治学会							
日本選挙学会 (編集委員・幹事)							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	中島 雅	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 民法Ⅲ発展講義での判例研究・問題演習		2007年10月1日 ～2008年1月31日	民法学に関する専門知識を身につけ始めた2年生を対象として、その知識を実際に活かす技術を身につけさせるために、主要な最高裁判決に触れる機会や、法科大学院の入試問題を用いた問題演習を行う機会を設けた。				
2.作成した教科書、教材、参考書 民法ⅠB レジюме		2007年10月1日 ～2008年1月31日	民法ⅠBのクラスが7クラスから3クラスに減少したのに伴い、それまで使用していた各クラス共通のレジюмеを使用することができなくなったため、大人数の講義に合わせたレジюмеを作成した。また、公益法人制度の大改正に伴い、従来の教科書に記載されていないことを学生に説明することや、従来の法人制度と新たな法人制度とを比較検討することが必要となったために、それに対応するためのレジюмеを作成した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	名誉・プライバシー	単著	2007年	『民法の争点』304-305頁	内田貴・大村敦志編		
論文	不法行為法における名誉概念の変遷 (一)・(二)	単著	2007年	法学協会雑誌124巻9・10号			
III 学会等及び社会における主な活動							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	原 昌 登	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 複数学年による演習の開講・運営		2005年度～現在	従来、学年別でのみ開講されていた法律学科の演習を、複数学年の合併開講形式(例：演習 III+演習 IV)で行った。これにより複数の学年が協力しながら1つのゼミナールに参加することになり、相互に学び合う・教え合うといったゼミナールならではの高い学習効果が実現できたと考えている。また、他の教員が合併開講を選択する先駆けとなったこと、演習参加者から好評を得ていることも付言しておく。				
2.作成した教科書、教材、参考書 自作教材(講義レジュメ)の作成・配付		2004年度～現在	担当する「労働法」等の科目において、各自が講義を理解する助けとなる教材(講義レジュメ)を毎年作成している。レジュメには重要ポイント・最新の法改正等をもらさず盛り込むとともに、知的関心を持たせるための問いかけ・具体的事例や、時には応用的・発展的な内容も紹介するなど、構成を工夫している。学生が講義内容の基本をまとめる際にも、各自で発展的な学習を進める際にも利用できる教材と位置づけており、授業アンケートによると受講者からも好評を得ている。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	望ましい就業規則	共著	2005年	社会経済生産性本部生産性労働情報センター	大内伸哉, 中山慈夫他		
論文	高齢者雇用—継続雇用制度にみる政策理念	単著	2006年	季刊労働法213号27頁	原昌登		
論文	探求・労働法の現代的課題(第10回) 就業規則・労使協定—周知・協定締結要件と拘束力(労働法学の立場から)	単著	2006年	ジュリスト1315号96頁	原昌登		
論文	内部告発を理由とする不利益取扱いの可否—トナミ運輸事件—	単著	2006年	法学教室305号8頁	原昌登		
論文	深夜割増賃金の支払い方法と複数契約における時間外労働—千代田ビル管財事件—	単著	2007年	ジュリスト1336号137号	原昌登		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本労働法学会							
日本社会保障法学会							
東京都多摩労働カレッジ(市民向け労働法講座) 講師							
東京都労働相談情報センター 労働法セミナー 講師							
財務省財務総合政策研究所 研修部 講師							

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	坂野 由紀子	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 「言語と文化 (英語圏)」		2007年4月1日 ～8月1日	1年生を対象に、英語という言語やその背景にある文化について、ぜひとも知っておいてほしいことを紹介する授業。毎回の授業の終わりに「授業レポート」を提出させ、回収、コメントをつけて返却し、受講者(約50名)の学習進度を的確に把握することができた。また、毎回課題を出し、次回の授業の冒頭で回収、コメントをつけて返却し、自主的な学習を促した。課題への取り組みを通じて、アカデミック・レポートの書き方を身につけられるように配慮した結果、受講者は本人の意見と参考文献からの引用との区別を明確にすべきことや、参考とする資料の信憑性について考える必要があることなどを認識するようになった。				
2.作成した教科書、教材、参考書 「英語特殊演習」の音声ファイルとプリント		2007年4月1日 ～8月1日	テキストに登場するさまざまな英語のフレーズの中でも、特に応用のきくものを選び出し、それらのフレーズが自然と口をついて出る(スラスラと書ける)ようになるまで徹底的に定着させるための教材を作成した。具体的には、CALL 教室において集中的なディクテーションと発音練習を実施するための音声ファイルと、対応するプリント教材。受講者は、この教材を使って、指定された文を何度も発音、録音し、それを WAV ファイル形式で提出した。その結果、受講生のリスニング力、作文力、発音が向上した。				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「英語教材としての文学の使い方」英文学東京若手の会第六回にて発表		2006年4月22日	成蹊大学で実施している、文学的な英語教材を活用した教授法を紹介した。日本経団連の調査によれば、企業が新卒採用者に求めるものの第一位は「コミュニケーション力」であるという。大学の英語教育においても、この「コミュニケーション力」を伸ばすことが重視されている。それと同時に、旧来の「訳読式」授業への反発からか、英語学習の教材に文学作品を用いることは避けるべきだとの方針を打ち出す大学が増えている。しかし、「コミュニケーション力」とはいわばストーリーをわかりやすく伝える言語運用能力のことであり、そもそもストーリーとはなにかを理解するためには、文学「的」なものとはなにかを知る必要があることを、あわせて述べた。				
4.その他教育活動上特記すべき事項 「ケンブリッジ大学短期留学事前講義」		2007年2月7日	2004年度のケンブリッジ大学短期留学プログラムの引率教員を担当した経験を生かし、2007年度に短期留学にむかう学生を対象に、イギリス美術入門の講義をおこなった。プレゼンテーションソフトと写真管理ソフトを活用して視覚的にうたえる講義となるよう工夫し、また、図版をふんだんに使用した専用のウェブサイトを作成し、講義が終わった後や、さらには留学先からでも自由に見られるように工夫した。この結果、受講者からは留学先での美術にかんする講義や、美術館での作品鑑賞に役立ったとの感想が寄せられた。				
II 研究活動							
著書・論文等の別	名 称	単著・共著等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	イギリス文学辞典	項目担当	2004年	研究社	上田和夫編		
翻訳	危機言語の音声記録-録音、表記、分析を含む知識データベース構築-(ベアリ・バスカララーオ著)		2004年	日本音響学会誌第60巻7号 377-385			
翻訳	ぼくの不思議なダドリーおじさん(バリ・ユアグロー著)		2004年	白水社			
翻訳	権力、政治、文化:エドワード・W・サイード発言集成(上,下巻)(エドワード・W・サイード著)	共訳	2007年	太田出版			
その他	ロングマン英和辞典	執筆協力	2007年	桐原書店	ジェフリー・リーチ、池上嘉彦ほか監修		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本英文学会(会員)							
日本英文学会関東支部(事務局スタッフ)							
東大英文学会(会員)							
The W. H. Auden Society							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	東 雪見	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) ゼミの運営方式		2007年4月1日 ～2008年3月31日	1年次生については、グループで一定の事項について調査させ報告・議論を行わせた。報告・議論の際には、ソクラテスメソッド的な方法をとることによって、議論の組み立て方を体験できるような工夫した。 2・3年次生については、各々が選択したテーマにつき単独で調べ、授業において報告し、その後の議論においても司会を務めることにより、学生がそれぞれ議論をオーガナイズする能力をつけることができるようにすることをねらいとした。また、課題を出し、それについて文章を書かせ答えさせ、さらにそれをもう一度検討する機会をつくることにより、論理的で、よりよい文章を書くにはどのようにするのがよいかということへの気づきを促した。				
2.作成した教科書、教材、参考書 刑法II レジュメ		2007年4月1日 ～8月1日	刑法IIの講義をするにあたり、学生の理解を助けるための補助教材				
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項 武蔵野地域自由大学寄附講座「現代を生きる：生命倫理の諸相」1回担当		2005年	生命倫理の諸相について、刑事法研究者の視点から講義した。				
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	法益主体の危険の弓受(一)(二)	単著	2004年	上智大学法学会・上智法学論集・47巻2号69頁以下・3号77頁以下	東雪見		
論文	心神喪失者等医療観察法における「医療を受ける義務」	単著	2004年	有斐閣・ジュリスト増刊「精神医療と心神喪失者等医療観察法」154頁以下	町野朔編		
論文	「Winny」を開発し、提供した行為に対する著作権侵害罪の成否について	単著	2005年	成蹊大学法学会・成蹊法学62号	東雪見		
その他	窃盗被害者を相手方とした盗品等有償処分あっせん罪の成否	単著	2003年	上智大学法学会・上智法学論集・44巻2号149頁以下	東雪見		
その他	公園のベンチに置き忘れられたポシェットを領得した行為と窃盗罪	単著	2006年	有斐閣・ジュリスト1323号191頁以下	東雪見		
III 学会等及び社会における主な活動							
刑法学会第85回大会・ワークショップ「尊厳死と終末期医療」にて、コメンテーターとして報告							
精神保健指定研修会「更新」講師							
骨髄移植財団 データ・資料管理委員会・委員							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	淵 史彦	大学院における 研究指導担当資 格の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
<u>1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</u>							
<u>2.作成した教科書, 教材, 参考書</u>							
<u>3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</u>							
<u>4.その他教育活動上特記すべき事項</u>							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
著書	ケース・スタディ生命倫理と法	共著	2004年	有斐閣	樋口範雄(編)		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本私法学会							

所 属	法学部	職 名	准教授	氏 名	横山 裕人	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) 初習フランス語の授業における文法習得の活性化		2003年4月1日～現在	フランス語の初習者の授業では、学習者相互で応答する口頭練習を工夫し、コミュニケーション形式をとって文法事項が学習できるようにしている。また、プリント学習とゲームなども含めた多様な口頭練習を交互にやることで退屈させない工夫を考案している。				
2.作成した教科書、教材、参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
III 学会等及び社会における主な活動							
日本フランス語フランス文学会							
史学会							

専任教員の教育・研究業績

(表 24)

所 属	法学部	職 名	講 師	氏 名	北島 周作	大学院における 研究指導担当資 格の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要				
1.教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2.作成した教科書, 教材, 参考書							
3.教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4.その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書・論文 等の別	名 称	単著・共著 等の別	発行等年	発行所・掲載誌(書)・ページ数等	編者・著者名		
論文	「Privatization とアカウンタビリティ 構造の再構成」	単著	2004 年	『公的領域の多元化と行政に関する調査研究 報告書(平成15年度)』67 頁	総務省官房企画課		
論文	「学界展望<行政法>Dawn Oliver, Common Values and the Public-Private Divide」	単著	2006 年	国家学会雑誌119 卷9=10 号700 頁			
論文	「行政法における主体・活動・規範」	単著	2007 年	東京大学博士学位論文			
III 学会等及び社会における主な活動							
公法研究会							
公法判例研究会							
行政判例研究会							